

第268図 弥生時代中期の遺構（1）（S=1/50）

溝

SD-109C（第268図、写真図版166）

本溝は調査区西端で、再掘削溝のSD-109Bによって上面を削平された状態で検出した。本溝は、底面から東肩への立ち上がり部分のみを検出しており、南南西-北北東に走行すると考えられる。西肩を含むその大半は西調査区外にある。このため、幅は不明である。断面は、高さがわずか0.3mほど残存した東肩の形状から逆台形と想定される。底面の標高は45.90mであるが、その掘り込み面についてはSD-109Bによって東肩を削平されているため、本来の深さを知ることはできない。仮に再掘削溝であるSD-109Bの検出面を基準とするならば、深さ約1.7mを測ることになる。

堆積土は、緑灰色粘土と黒灰色粘土のよく締まったブロック土である。遺物は、数片の弥生土器が出土したのみである。その締まった粘土及び遺物をほとんど含まない状況は、第75次調査SD-101Cと類似する。本溝と第75次SD-101Cは、位置、溝の方向的にも一連とすることに問題がなく、繋がって弥生時代中期前葉の環濠になると考えられる。

河跡

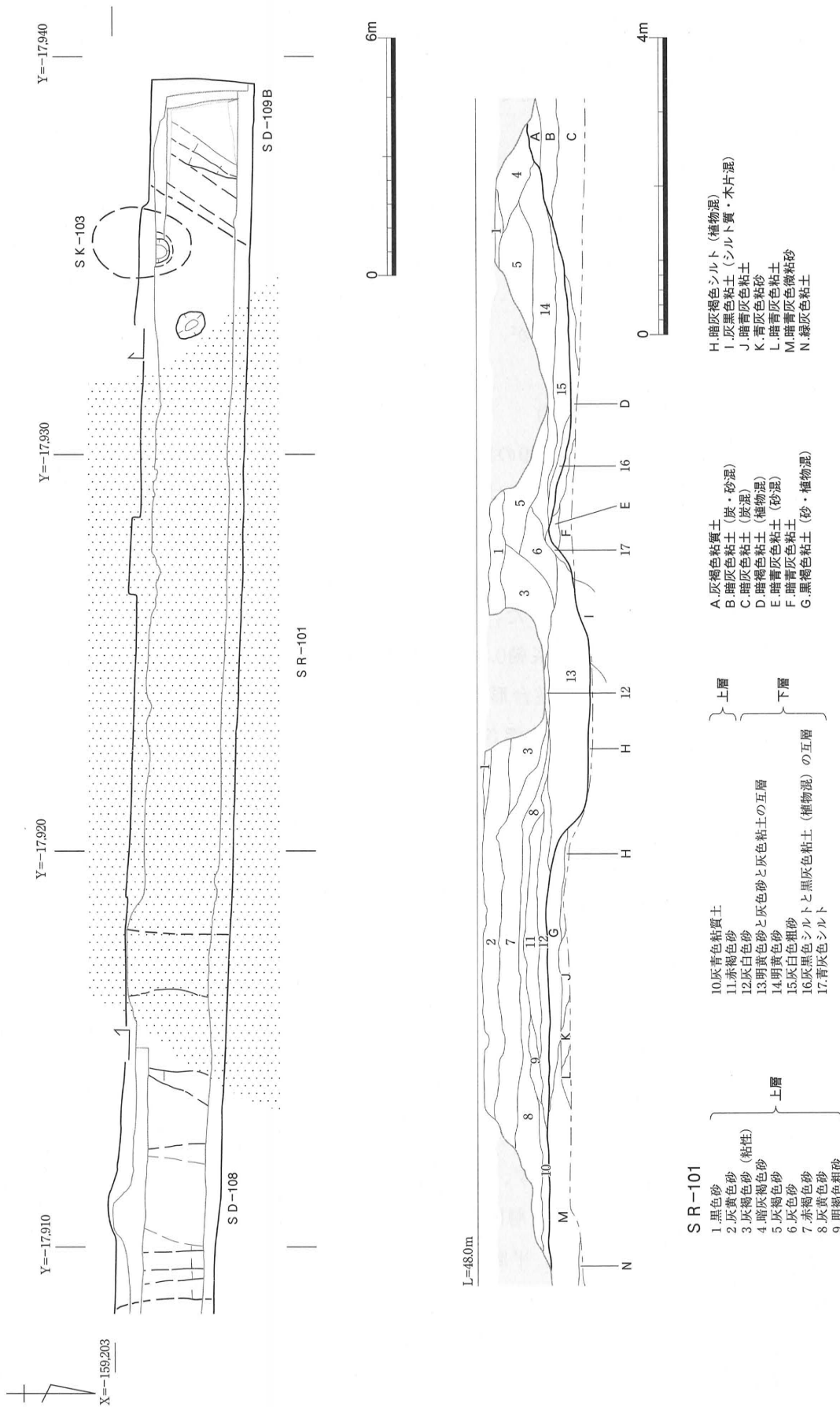
S R - 101 (第269図、写真図版167)

S R - 101は調査区西側、弥生時代の環濠と考えられる S D - 109と S D - 108の間で検出した河跡である。上面には中世以降の性格不明な遺構 S K - 101・S X - 101が掘り込まれている。平面における砂層の拡がり、東端を S D - 108に、西端を古墳時代の S D - 101に切られるためその正確な幅は不明であるが、現状で16.00m以上を測る。深さについては、砂層堆積であり深掘りをすれば壁の崩壊は必至であるため、南排水溝及び S D - 108の西肩部分の北排水溝でのみ調査終了間際に深掘りをおこない確認した。南壁土層断面によれば、西側は検出面から深さ約0.8mの標高47.20m前後で平坦な底面が続くが、中央の Y = -17.922mから Y = -17.926mにおいて標高46.70mまで逆台形に落ち込んでおり、ここでの深さは1.40mである。

本河跡の砂層は、異なる色調と砂粒の複雑な互層堆積であるが、大きくは上層の褐色系砂と下層の白色系粗砂に2分できる。また、最下層となる中央底面の落ち込み部分は、明黄色砂と灰色砂と灰色粘土が互層堆積するが、灰色粘土はベースを削ることによって含まれたもので、水流の強い本流部分であったと考えられる。これ以外の砂層は、ほぼ水平な堆積状況を示し、その砂粒は下層のものは粗く、上層のものは細くなる傾向にある。そして、本河跡の堆積物は純粹に砂のみであり、粘土層や植物層などの間層を挟まない。これは、この砂層が短期間に形成されたことを示すものといえよう。なお、上層が褐色の色調を呈するのは、鉄分の沈着によるものと考えられる。

本河跡が切り込んだベースは、粘砂やシルトの安定しない堆積土であり、それ自体が大きな落ち込み内であると考えられる。微高地末端部の土層堆積として示した Y = -19.935m付近の第 X 層：暗灰色粘土（炭混）は、本河跡の底面では暗青灰色粘土となり、この河跡の底面が落ち込む Y = -17.925m付近では対応して途切れ、その部分は植物を含んだ暗灰褐色シルトが切り込むように堆積している。また、北壁の S D - 108の西肩では、白色砂が西側に向かって落ち込んでおり、その上層に本河跡の床面となる黒色粘砂が堆積していた。本河跡よりも古い河跡であることがうかがえよう。黒色粘砂からは、弥生時代前期の土器が出土する。これらのことから、本河跡は弥生時代前期あるいはそれ以前からの谷地形の低い部分に流れ込んだものと想定される。

本河跡は、上層から弥生時代中期後葉の土器が出土し、その東肩には弥生時代後期初頭の大溝である S D - 108が掘削されることから、弥生時代中期に流水し弥生時代後期初頭までには埋没していたと考えられる。さらに、その砂層は、洪水などによって短期間で形成された可能性が高い。ただし、ベース自体が、弥生時代前期あるいはそれ以前からの谷地形の堆積層であり、微高地の落ち際にあって低い地形であったことを示している。この谷地形の埋没過程において弥生時代中期後葉に流れ込んだ洪水が本河跡であろう。この状況は、第75次調査で検出した S R - 101とよく類似し、本河跡と一連のものであり、遺跡東縁辺部を南西 - 北東へ流水していたと考えられる。



第269図 弥生時代中期の遺構 (2) (平面図：S = 1/150、断面図：S = 1/80)

(2) 弥生時代後期初頭の遺構 (第267図、写真図版165)

弥生時代後期初頭の遺構は、土坑2基、南北方向の大溝3条、溝3条を検出した。土坑2基については、SD-101とSD-109との間で近接して検出している。これら大型遺構が近接することにより土坑の堆積土と認識できず、遺物包含層として本来の検出面から0.4mほど掘り下げてようやくその輪郭を確認した。大溝は東から西に向かって、SD-106・108・109の順となる。集落東端部を画する環濠の可能性が高い。SD-109Bは、弥生時代中期前葉に掘削されたSD-109Cの再掘削溝である。これら大溝とは他に、不定形な溝をSD-106と108の間で3条検出している。西から東に向かって、SD-103・104・105の順となる。いずれも収束部をもつ浅い溝で方向に統一性をもたないが、規模及びその堆積状況に共通点がある。

土坑

SK-102 (第270図、写真図版168・169)

本坑は調査区の西端において、SD-109の東肩から約2.0m東で検出した。また、両者の間には、同時期のSK-103が位置する。本坑は、古墳時代後期のSD-101の西肩に切られ、両者の堆積土の区別がつかなかったため、上面をかなり掘り下げて検出している。本来の検出面は、標高47.60mの第Ⅷ層：灰色粘質土（茶斑）上面と考えられるが、これを0.4mほど掘り下げた標高47.20mが調査上の検出面となった。

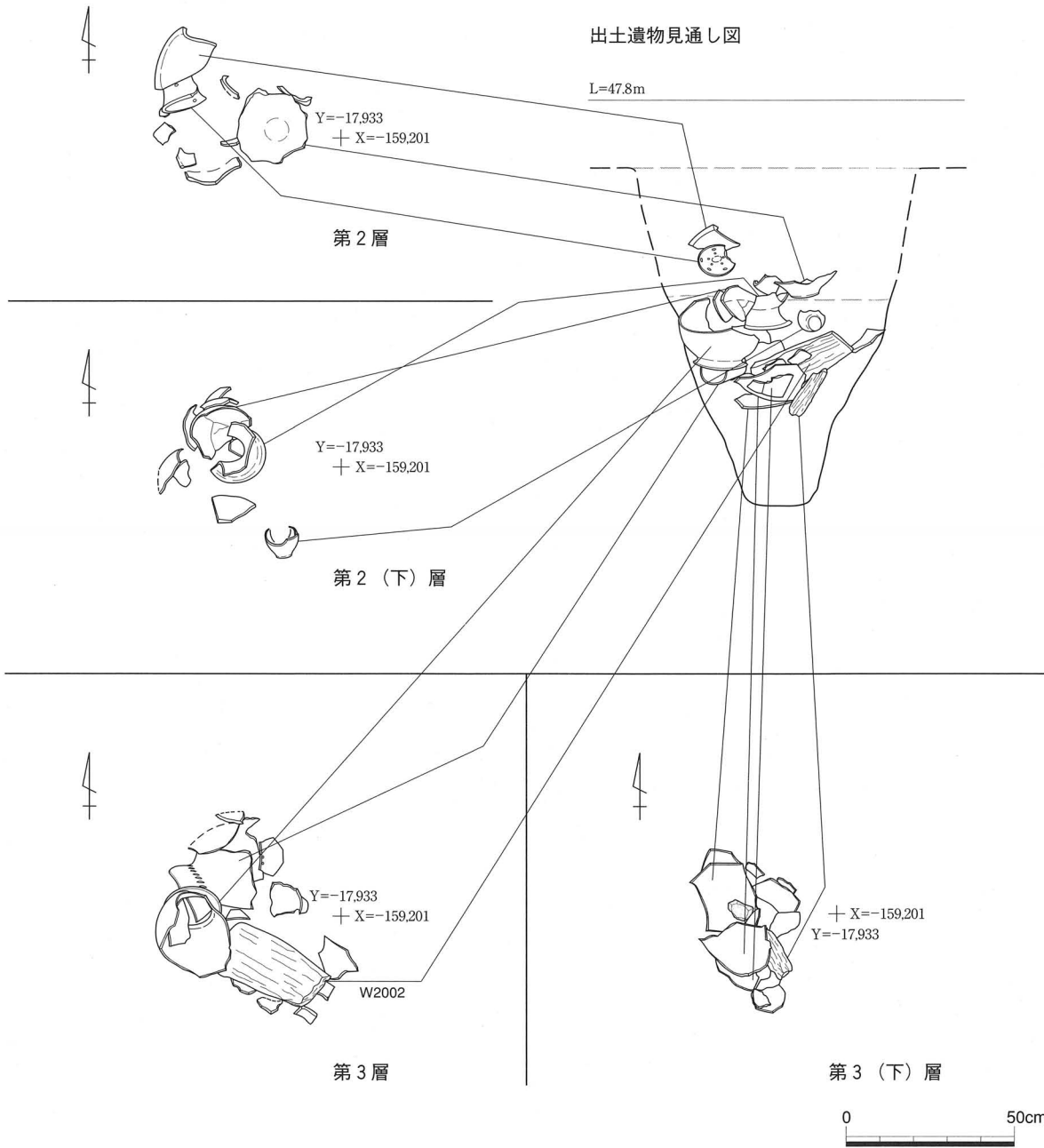
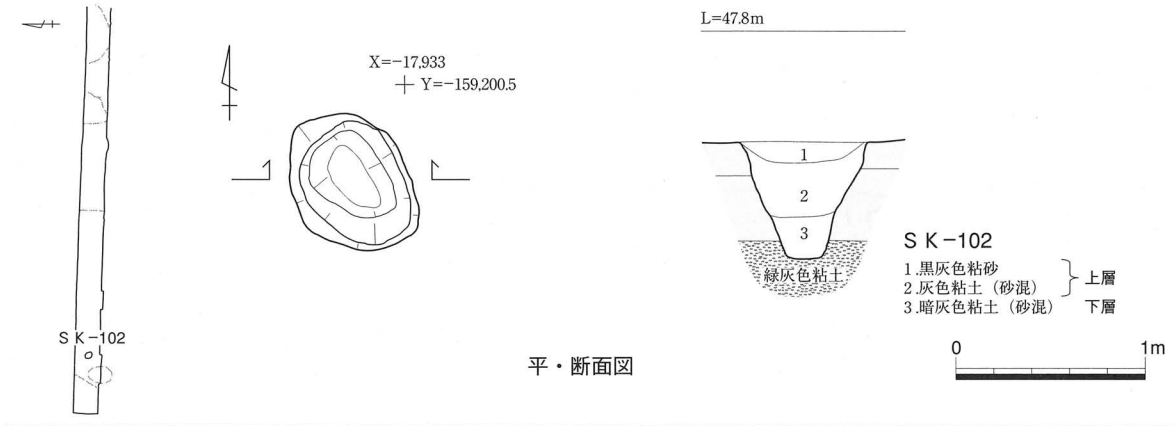
検出面における平面は楕円形を呈し、長軸0.80m、短軸0.60mであるが、本来は二回りほどの大きさがあったと考えられる。断面は逆台形で、中央部がさらに一段くぼむ。検出面からの深さは0.60mを測るが、本来は1.0mほどの深さがあったと考えられる。底面は、標高46.60mで第Ⅺ層：緑灰色粘土に達し、湧水がある。

検出面からの堆積土は3層であるが、上部を厚さ0.4mほど掘削していることを考慮するならば、1～2層分の堆積土があったと想定される。堆積土は、第1層：不明、第2層：黒灰色粘砂、第3層：灰色粘土（砂混）、第3（下）層：暗灰色粘土（砂混）である。大きくは、第2層、第3層の上層と、第3（下）層の下層に2分できる。第2層から第3層にかけて、壺や甕の上半部を含んだ比較的大きめの土器片とともに、その下層において平鉢未成品（W2002）が出土した。第3（下）層は、断面形に対応し一段くぼんだ部分に堆積するが、遺物はほとんど含まなかった。時期は、大和第V-1様式である。機能は、井戸と考えられる。

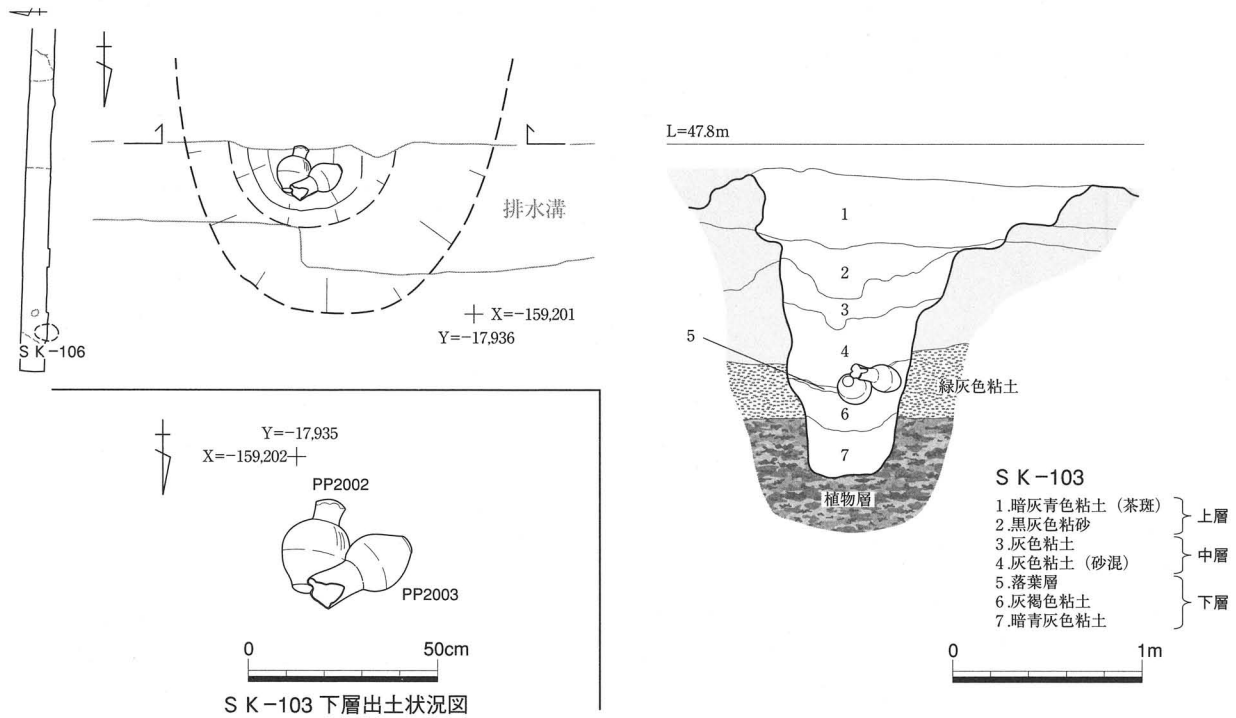
SK-103 (第271図、写真図版169)

本坑は、SD-109とSK-102の中間に位置し、調査区の南排水溝で北半部のみを検出した。南排水溝に重なっていたため認識できず、遺構検出面を掘り下げたことにより北肩の大半を失った。本来の検出面については南壁土層断面の検討から、標高47.68mの第Ⅷ層：灰色粘質土（茶斑）上面であることを確認した。平面は上記の理由により不明であるが、径1.80mを前後とする円あるいは楕円形が想定される。断面は円筒状で上部が開き、深さは1.64mを測る。底面は標高46.04mで、第Ⅻ層：黒褐色粘土（植物層）に達し、湧水がある。

堆積土は、第1層：暗灰青色粘土（茶斑）、第2層：黒灰色粘砂、第3層：灰色粘土、第4



第270図 弥生時代後期初頭の遺構(1)(平・断面図：S=1/40、出土状況図：S=1/20)



第271図 弥生時代後期初頭の遺構（2）（平・断面図：S = 1/40、出土状況図：S = 1/20）

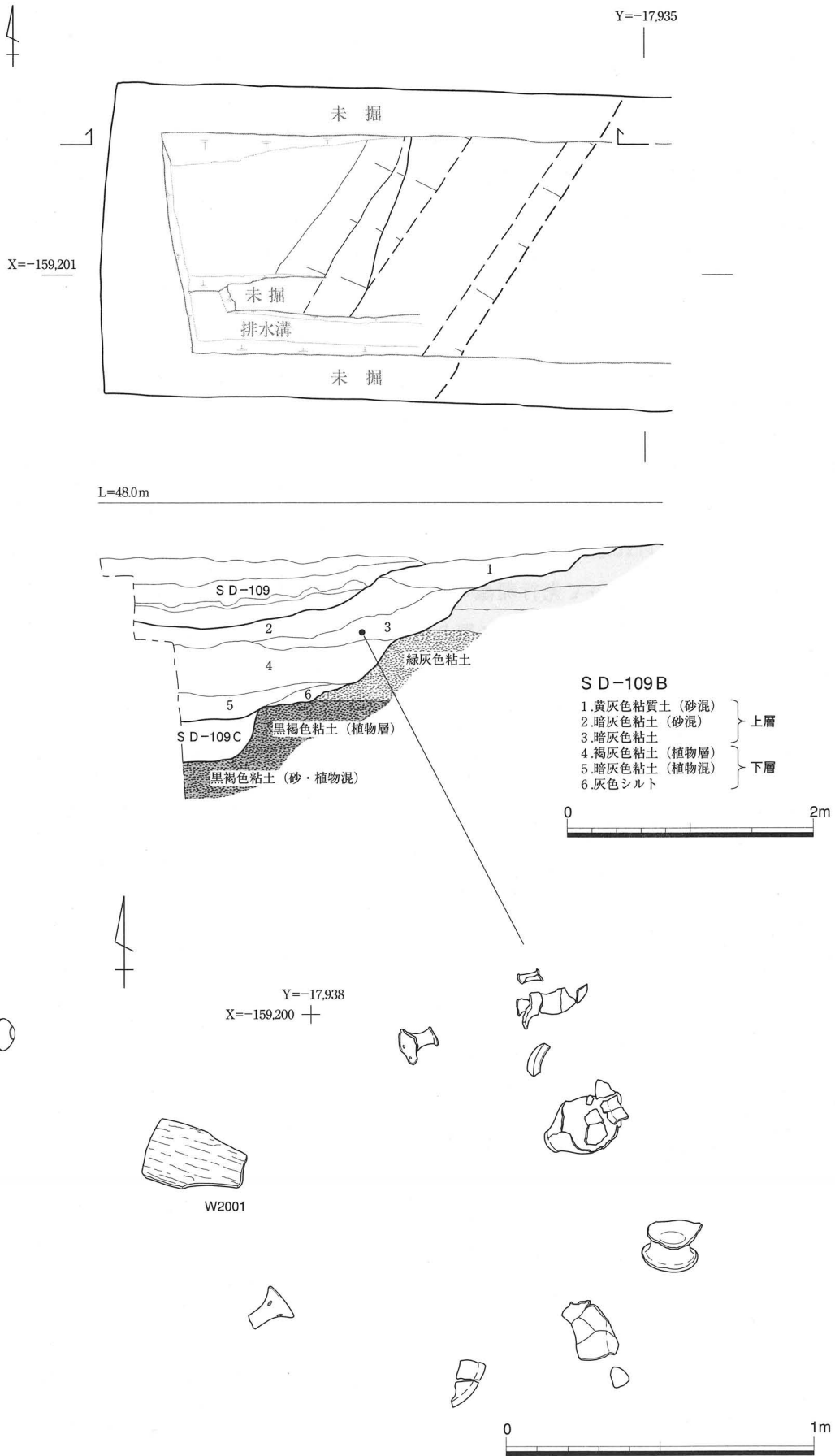
層：灰色粘土（砂混）、第5層：灰褐色粘土、第6層：暗灰色粘土の6層である。大きくは、第1・2層の上層、第3・4層の中層、第5・6層の下層に3分できる。中層と下層の境には、薄い落葉層が挟まれていた。この落葉層の上面から、完形の短頸壺（PP2002）と長頸壺（PP2003）が出土した。時期は、大和第V-2様式である。機能は、井戸と考えられる。

溝

SD-109B（第272図、写真図版170）

本溝は調査区西端で、再々掘削溝であるSD-109に上面を切られた状態で検出した。本溝は、先行する弥生時代中期前葉のSD-109Cが埋没した後、その走行方向の南南西-北北東に沿って再掘削された大溝である。西肩が西調査区外にあるため溝幅は不明であるが、現状で3.00m以上である。断面は、東肩の状況から2段の逆台形と考えられる。底面の標高は46.24mで、深さは約1.3mを測る。

堆積土は大きく2層に分かれ、上層は暗灰色粘土、下層は褐色系粘土の植物層である。上層については、本来は中層であり、さらに上部堆積があったものと考えられるがSD-109が再掘削されているため削平されて不明である。溝東肩部の上層下位からは多数の大和第V様式土器が、溝中央の上層下位からは、平鋏未成品（W2001）が出土した。下層の植物層は厚さが0.60mに及ぶが、あまり遺物を含まない。その溝方向及び堆積状況、あるいは弥生時代中期前葉の先行溝や布留期の再掘削溝の存在から、第75次調査SD-101Bに繋がると考えられる。弥生時代後期初頭の環濠である。



第272図 弥生時代後期初頭の遺構(3) (平・断面図: S=1/50、出土状況図: S=1/20)

S D-108 (第273図、写真図版171)

本溝は、調査区やや中央寄りの西半で検出した南-北に走行する大溝である。上面には、ほぼその輪郭に対応した、古墳時代後期のS D-102が掘削されている。また、本溝の西肩はS R-101の砂層堆積を切って掘り込まれている。このため、東肩は青灰色シルト上の安定した暗褐色粘質土から掘り込まれて切り立つのに対し、砂層に掘り込まれた西肩は緩慢である。また、西肩となる砂層には乱れがあり、幾度かの溝浚えによって、現在の形状となった可能性が考えられよう。

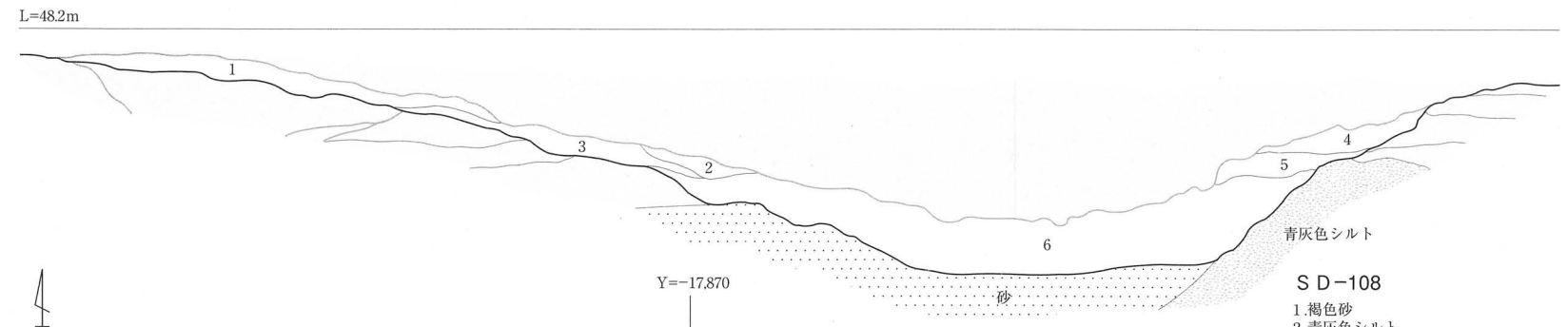
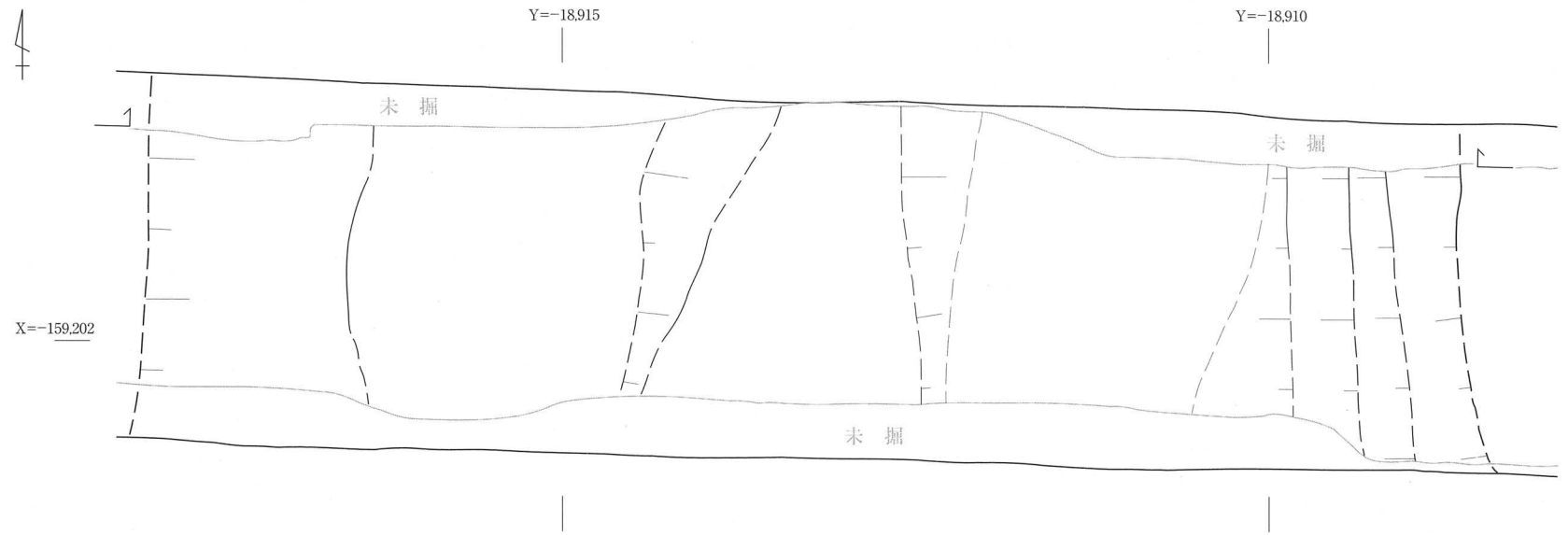
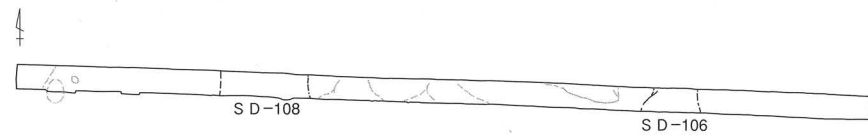
本溝は、検出面の上面幅で約10.0mである。断面は西斜辺が緩やかな逆台形で、深さは約1.4mを測る。堆積土は、S D-102の掘削により最下層の植物層と、両肩のシルト層がわずかに残る程度である。遺物は、用途不明木製品(W2004)や口頸部を欠いた短頸壺とともに原木が出土している。原木は、溝方向に並行しており、その両端は幅2mの調査区を越えて外側へと延びるため長さは不明であるが、径30cmを測る。おそらく、この原木は柱材として貯木されていたものと考えられる。時期は、大和第V様式である。本溝の機能として、環濠になると考えられるが、下層において先行環濠の存在は確認できなかった。S R-101による弥生時代中期砂層堆積が完了した後に、新たに掘り込まれたものと考えられる。

S D-106 (第273図、写真図版172)

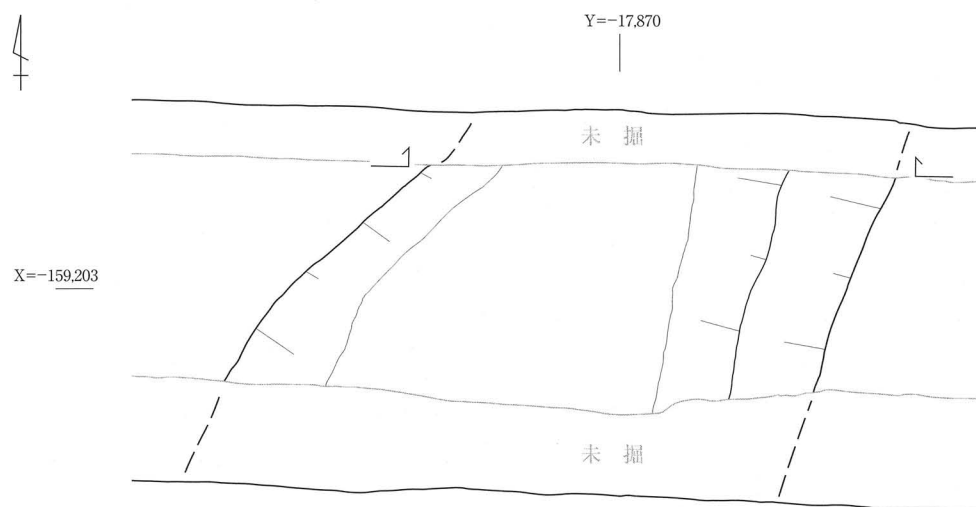
本溝は、調査区の東半で検出した南-北に走行する大溝である。幅は南から北に向かってすぼまるため一定しないが、南壁断面で7.00m、北壁断面で4.80mである。断面は西肩が2段の逆台形で、深さは1.40mを測る。堆積土は、砂層のため複雑であるが、大きく上・下2層に分けることが可能である。上層は、上部が粘砂層で、下部が植物層である。下層は、植物を含んだ褐色系粘土あるいは砂を含んだ粘質土である。肩及び下層上部には砂が流れ込む。このうち、下層上部が灰色砂層で上層下部が植物層のためその境は明瞭であり、上層を再掘削溝に伴う堆積土と考えることも可能である。

上層部分を再掘削溝とした場合には、その幅は南壁断面で4.60m、北壁断面で4.40mを測る。断面は逆台形で、深さは南壁断面で0.72m、北壁断面で0.54mを測る。深さが示すように溝底面は、北壁の標高が47.30m、南壁の標高が47.00mと北から南に向かって傾斜していることになり、周囲地形の南から北への傾斜とは反対である。下層の不安定な堆積状態が、そのまま上層部分の底面に反映されているのであろう。たしかに下層上部の砂層と上層下部の植物層の境は明瞭であるが、これは単純に流水と滞水による層形成の違いとも考えられる。また、出土土器が上・下層ともに第V様式であり、時期差は認められなかった。このため、上層部分を再掘削溝とは積極的に判断できず、その平面を図示することに止めた。上層下部からは、完形の甕が1点出土している。

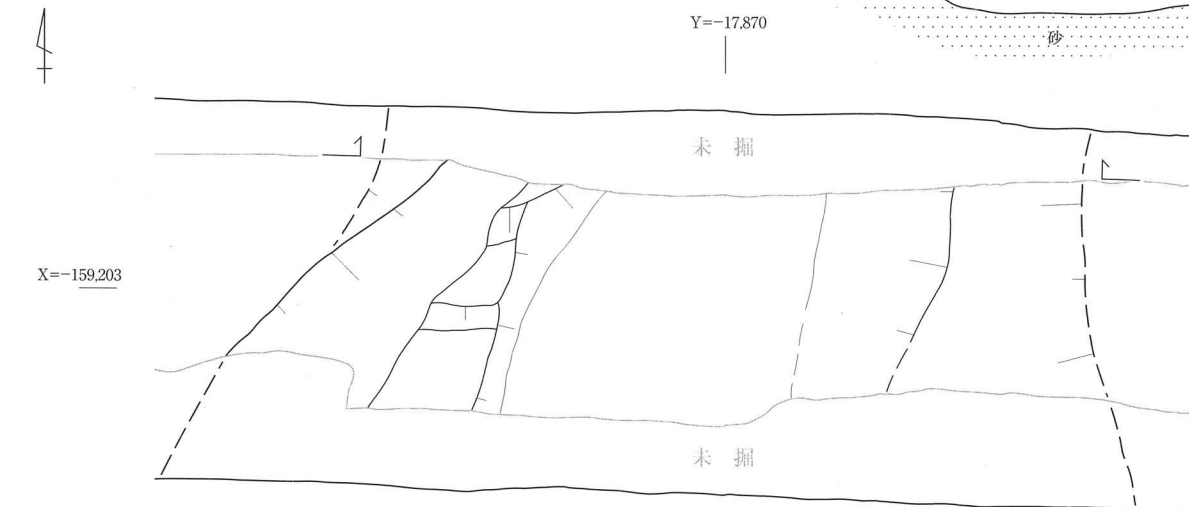
なお、本溝の底面で、ベースが砂層に変化し、西側へと落ち込むのを確認した。砂層の上がりには、本溝の東側で確認したが、西側への拡がりには不明である。弥生時代中期の河跡であろう。本溝は、それが埋没後した弥生時代後期初頭に、その東肩に掘り込まれたと考えられる。



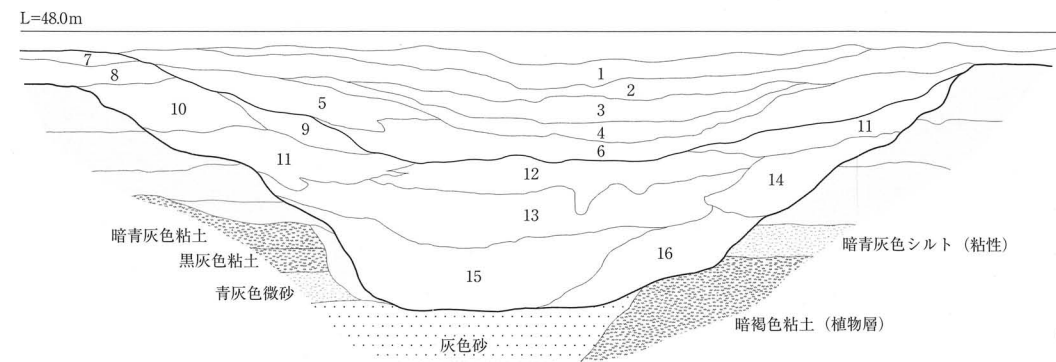
- SD-108
1. 褐色砂
 2. 青灰色シルト
 3. 暗灰色シルト (砂混)
 4. 暗青灰色シルト
 5. 緑灰色粘土
 6. 灰色粘土 (植物層)



SD-106上層



SD-106下層



- SD-106
1. 灰褐色粘質 (砂混)
 2. 褐色粗砂
 3. 暗灰色粘砂
 4. 暗褐色粘土 (植物層)
 5. 暗灰色粘土 (褐色砂混)
 6. 暗灰色粘土 (植物・緑色粘土混)
 7. 暗灰色粘質土 (砂混)
 8. 暗褐色粘質土 (砂多)
 9. 黒色粘砂
 10. 暗褐色粘質土 (砂多)
 11. 黒灰色粘砂
 12. 灰色砂 (黒灰色粘砂混)
 13. 暗灰色粘土 (植物混)
 14. 灰色砂と青灰色粘砂の互層
 15. 暗褐色粘質土 (砂・植物混)
 16. 暗灰色砂
- 上層
下層



第273図 弥生時代後期初頭の遺構 (4) (S = 1/50)

S D-103 (第274図、写真図版173)

本溝は調査区の中央やや西寄り、S D-108の東肩に隣接して検出した。本溝は南-北に走り、東西に長い調査区とは直交するため、検出長は1.60mであるが、南北両端とも調査区外へと延びている。その幅は、北壁断面で3.50m、南壁断面で6.20mである。断面は皿状で、深さは北壁断面で0.30m、南壁断面で0.40mを測る。溝の全形は不明であるが、幅・深さともに南から北に向かって縮小しており、北側で収束していた可能性が高い。

堆積土は3層からなり、第1層：灰黒色粘質土、第2層：植物層、第3層：暗灰色粘土である。このうち、第3層：暗灰色粘土はやや青味があつてきめ細かく、滞水状態で堆積したような土層である。その上面の第2層：植物層もまた、同様な状態で落ち葉が集積し、腐食したものと考えられる。第1層：灰黒色粘質土は、微砂粒を含んでおり、下の2層とは形成要因が異なるのであろう。さらに第1層の上には、部分的に暗灰青色粘土が堆積する。

本溝は、これら3層を遺構の堆積土と解釈し、周囲シルト層をその肩として識別することによって検出したものである。しかし、その境において両者は極めて不明瞭となり、S D-103はあたかも周囲シルト層の埋没過程における最終堆積層のような状況といえる。また、底面のベースとした青灰色粘土についても、上部堆積土との境は明瞭であり一見するとこれまで弥生時代以前の無遺物層としてきたものと類似するが、色調は若干暗く微妙に異なっている。さらに、この青灰色粘土は、水平堆積ではなく西側に向かって傾斜する。こうしたベースの堆積状況は、S D-103の下層にさらに大きな落ち込みのある可能性を示すものといえよう。この点に関し、南排水溝を深掘りする予定であったが、軟弱な地盤と湧水のため南壁が崩壊し、これを確認することはできなかった。本溝の第3層からは、台付無頸壺など大和第V様式の土器が出土している。

S D-104 (第274図、写真図版173)

本溝は調査区の中央、規模や堆積状況が類似するS D-103とS D-105の間で検出した。本溝は東南東-西北西に走行し、幅は東南東から西北西に向かってすぼまるため一定しないが、3.00m以上である。断面は逆台形で、深さは最も深い南壁断面で0.70mを測る。本溝は、幅・深さともに、東南東から西北西に向かって縮小している。一段落ち込んだ底面は西北西で収束するが、上面堆積土は調査区外の北側へと延びている。溝は直線的でなく、不定形な落ち込み状を呈するものと想定される。

堆積土は細分できるが大きくは4層に分かれ、最上層は暗灰褐色粘質土、上層は灰黒色粘砂、中層は植物層、下層は暗灰色粘土(植物層)である。この堆積状況は、S D-103と類似する。ただし、本溝では、下層の暗灰色粘土(植物層)の堆積は厚く0.30mを測るが、東肩から濁った緑灰色粘土が流れ込んでおり、これをもってより有機質を含んだ上位の暗灰褐色粘土を分離することが可能で、2細分することができる。上層と中層の堆積は0.10m前後であり、下層に比して薄い。上層の灰黒色粘砂は、中層の植物を浸食し、部分的には下層の暗灰色粘土(植物層)に及んでいた。

本溝もまた、S D - 103と同様にその堆積土と肩ベースの境が明瞭ではない。底面のベースは暗青灰色粘土で、上部堆積土との境は明瞭である。南壁側では暗青灰色粘土のS D - 103底面より0.10m下で青灰色シルトを検出したが、軟弱な地盤と湧水のため南壁が崩壊し、これらベースが弥生時代以前か以後であるかの確認はおこなえなかった。本溝からは、下層において大和第Ⅴ様式の土器が出土した。なお、上層の灰黒色粘砂からは、タガの突出が高く外面に赤色顔料を塗布した古手の円筒埴輪片が出土している。これは、本溝が大和第Ⅴ様式に埋没を開始するが、上部は古墳時代前期まで開口していたことを示している。

S D - 105 (第274図、写真図版173)

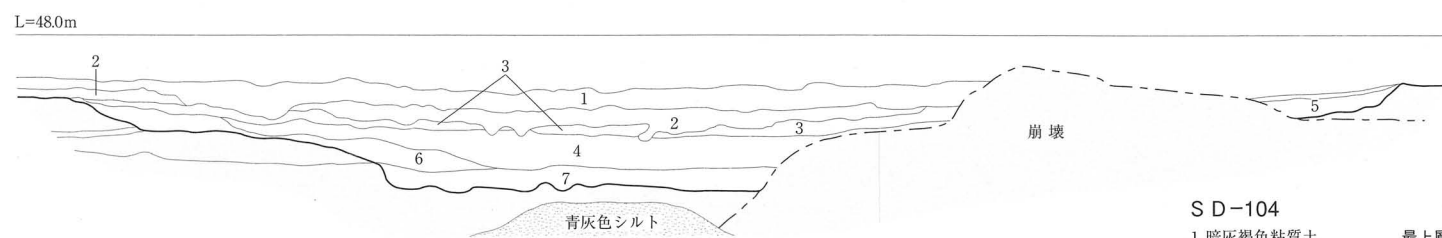
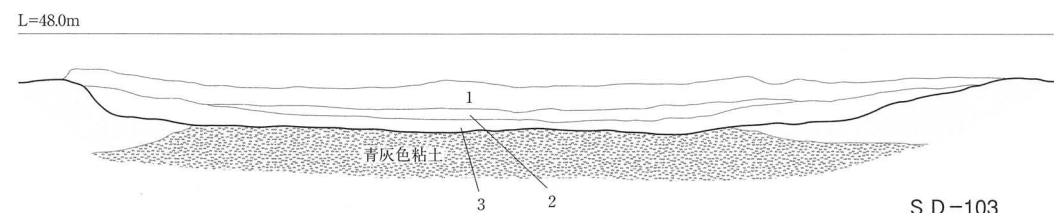
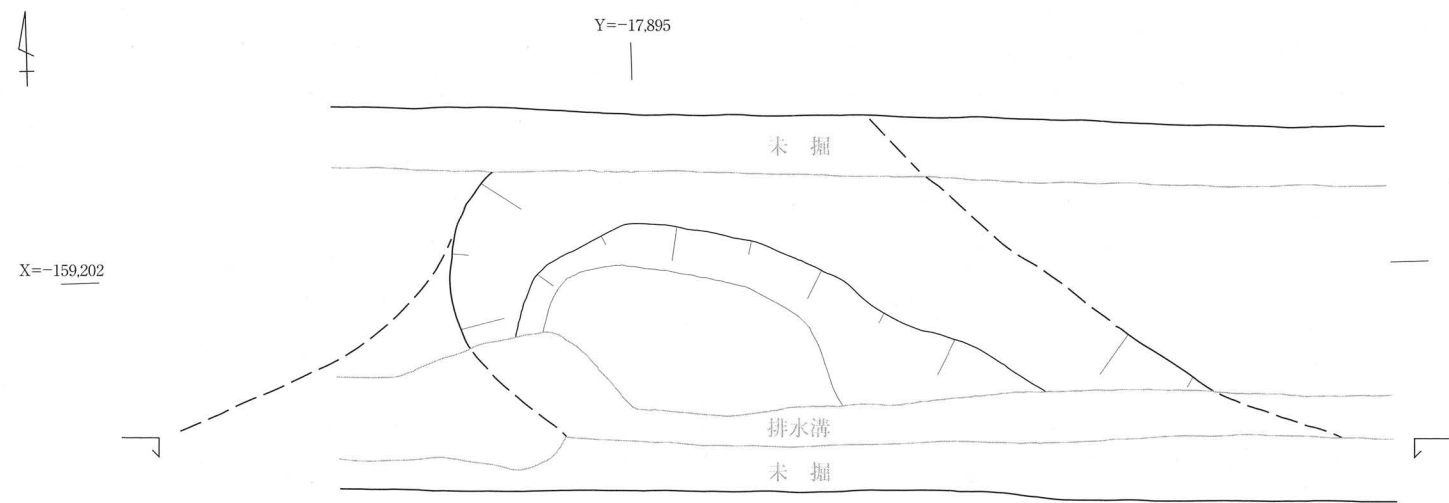
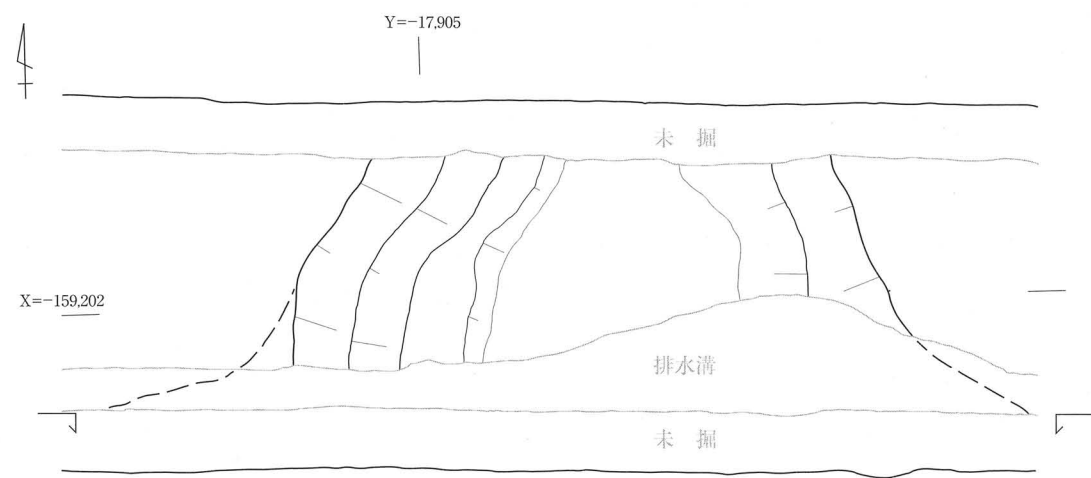
本溝は、調査区の中央やや東寄り、S D - 106の西肩に隣接して検出した。本溝は東南東 - 西北西に走行するが、東端は収束する。北側は調査区外へと延びており、全形は不明である。その幅は、3.00m以上である。断面は浅い逆台形で、深さは0.50mを測る。本溝とS D - 104は、収束方向を違えるが約6.0mの間隔をもって並行する。

堆積土は、両肩部のシルトによる流れ込みを除くと、中央部分は3層からなり、第1層：黒灰色粘砂、第2層：植物層、第3層：暗灰色粘土（植物混）である。この堆積状況は、S D - 103・104に類似する。第3層上面からは、甕・壺などの器形が把握できる大きさの破片で、大和第Ⅴ様式の土器が出土している。

本溝もまた、S D - 103・104と同様にその堆積土とベースの境が明瞭でない。西肩部分については、堆積土とベースがともにシルトであり、色調から識別している。しかし、西肩堆積土は、徐々にこのベースに溶け込んでいるようにも見える。本溝の西側においてこのシルトが切れ安定した粘質土堆積となるのは、西肩から約5.0m離れたY = - 17.888m付近であるが、これを本来の肩と考えることも可能である。一方、底面は緑灰色粘土をもってベースとしている。この緑灰色粘土は濁りがなく一見無遺物層のようであるが、本溝の北排水溝における東肩部分の深掘りから、大和第Ⅳ様式の高坏を含んだ灰色砂上に堆積していることを確認した。緑灰色粘土は、弥生時代中期後葉以降に形成されたものである。この緑灰色粘土を切り込んだ青灰色粘砂の上層堆積が灰褐色シルトであり、先述の西肩堆積層を形成している。このことから、S D - 105の下層にはさらに大きな落ち込みのあることが予想される。S D - 105は、弥生時代中期後葉の砂層で埋没した大きな落ち込みにおいて、弥生時代後期初頭に形成された最終埋没層である可能性が高い。

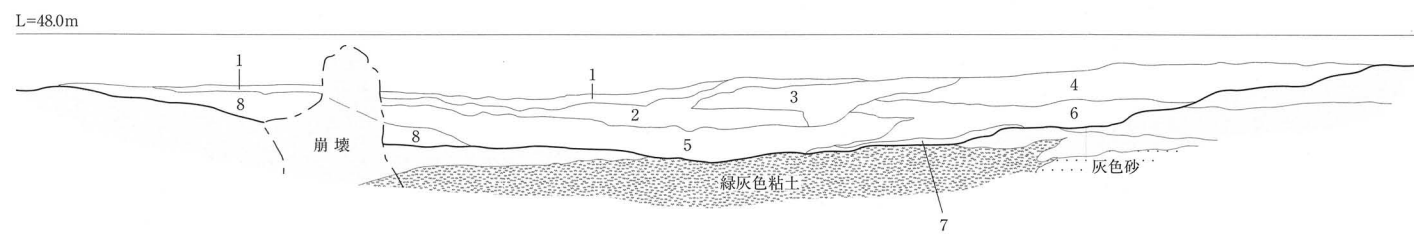
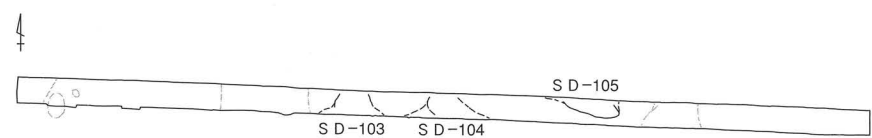
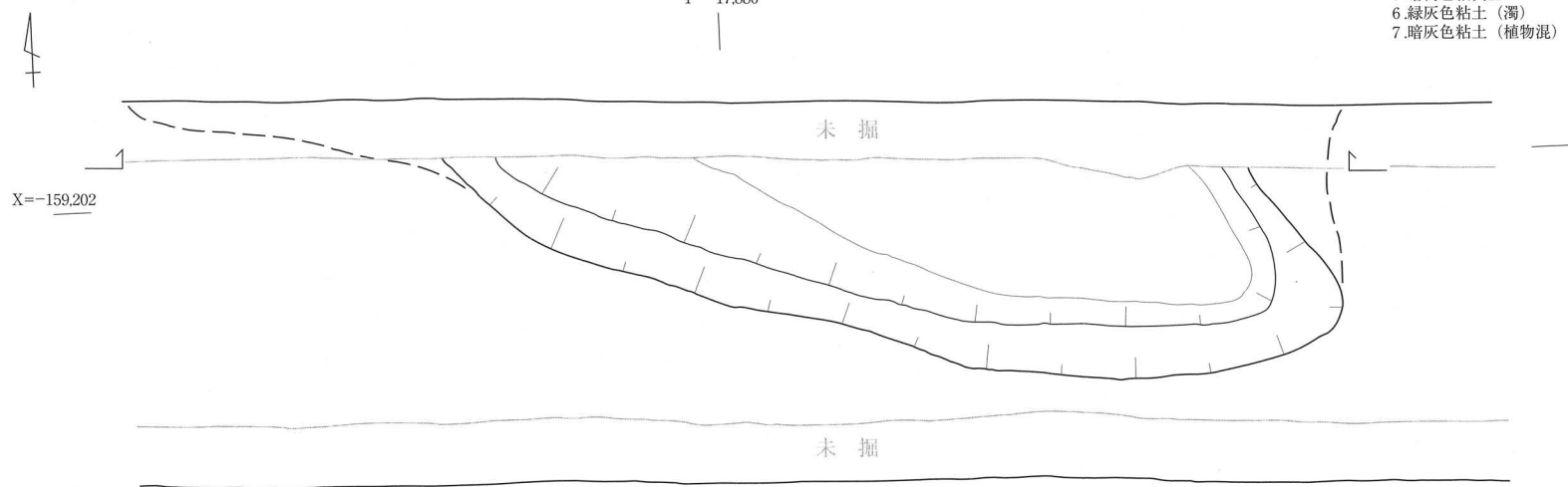
(3) 弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺構 (第267図)

古墳時代初頭の遺構は、溝1条を検出した。調査区の西端で検出したS D - 109は、弥生時代中期前葉に掘削されたS D - 109Cの再々掘削溝である。幅、深さともに、先行溝である弥生時代後期初頭のS D - 109Bより縮小しているが、明確な掘形をもつ。これ以外にこの時期の遺構は検出できなかった。なお、遺構及び遺物包含層から古墳時代前期と考えられる埴輪片が出土しており、付近に前期古墳の埋没が予想される。

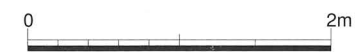


- SD-103**
1. 灰黒色粘質土
 2. 植物層
 3. 暗灰色粘土

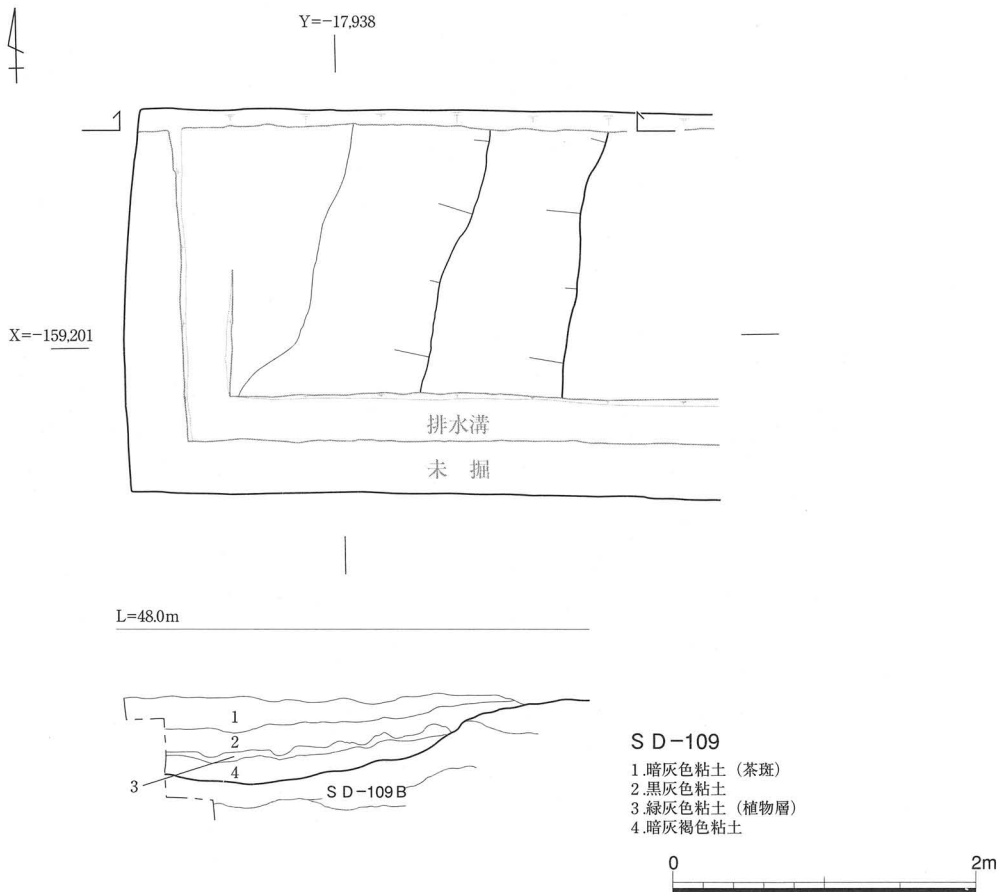
- SD-104**
- | | |
|----------------|-----|
| 1. 暗灰褐色粘質土 | 最上層 |
| 2. 灰黒色粘砂 | |
| 3. 植物層 | 上層 |
| 4. 暗褐色粘土 (植物混) | 中層 |
| 5. 暗褐色粘質土 | |
| 6. 緑灰色粘土 (濁) | |
| 7. 暗灰色粘土 (植物混) | |
| | 下層 |



- SD-105**
1. 黒灰色粘砂
 2. 植物層
 3. 黒灰色粘砂
 4. 褐色シルト
 5. 暗灰色粘土 (植物混)
 6. 青灰色シルト
 7. 灰色砂
 8. 暗灰色シルト



第274図 弥生時代後期初頭の遺構 (5) (S = 1/50)



第275図 弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺構 (S = 1/50)

溝

SD-109 (第275図、写真図版174)

本溝は、調査区の西端で検出した。本溝は、先行する弥生時代後期初頭のSD-109Bが埋没した後、その走行方向の北北東-南南西に沿って再掘削されたと考えられる。その幅は、西肩が調査区外にあるため不明であるが、現状で3.00m以上と考えられる。この点について、溝底面で西肩への立ち上がりを確認しており、それから想定される溝中央で折り返すならば、幅は約4.0mとなる。断面は浅い逆台形で、東肩は緩やかである。深さは0.60mを測る。

堆積土は4層からなり、第1層：暗灰色粘土（茶斑）、第2層：黒灰色粘土、第3層：緑灰色粘土（植物層）、第4層：暗灰褐色粘土である。第3層：緑灰色粘土（植物層）を間層として、大きく上・下の2層に分けることができる。また、この上面を古墳時代の遺物包含層である第Ⅶ層：暗褐色粘質土が覆っていた。

遺物は、上層から布留0式土器が出土した。下層は、大半が大和第Ⅴ様式土器であるがこれは再掘削に伴い混入したものであり、弥生時代後期後葉の土器をわずかに含む。このことから、溝埋没については布留0式期であるが、掘削については弥生時代後期後葉に遡るものと考えられる。本溝は位置や出土土器から、第75次調査SD-101に繋がると考えられる。

(4) 古墳時代後期の遺構 (第267図、写真図版165)

本調査区の西半では、古墳時代後期のSD-101・102の溝2条を検出した。両溝からは、長脚2段透かしの高坏や完形の提瓶などの須恵器が出土した。この2条の溝は、15mほど離れた微かな弧をもって向かい合うことから、円墳の周溝となる可能性も考えられる。

溝

SD-101 (第276図、写真図版174)

本溝は調査区の西半、SD-109の東側で検出した。本溝はやや東湾しながら南南西-北北東に走行し、幅は3.40~4.60mである。断面は逆台形で、深さは0.50mを測る。堆積土は4層からなり、第1層：暗褐色砂質土、第2層：暗褐色砂、第3層：緑灰色粘土、第4層：灰黒色粘質土(植物混・砂多)である。長脚2段透かしの高坏や提瓶などの須恵器が出土した。

SD-102 (第276図、写真図版174)

本溝は、弥生時代後期初頭の大溝SD-108の上面で検出した。本溝は南-北に走行し、幅は北壁断面で幅8.80m、南壁断面で幅7.50mである。断面は逆台形で、深さは1.00mを測る。堆積土は大きく3層に分かれ、上層は明褐色砂質土、中層は黒灰色粘土、下層は茶灰色粘土(植物混)である。中層の黒灰色粘土層において長脚2段透かしの高坏などの須恵器が、下層の茶灰色粘土(植物混)からは埴輪片が出土した。

(5) その他の時期の遺構

弥生、古墳時代遺構の他に、中・近世素掘小溝に切られた土坑を2基検出している。土坑2基は、SR-101の堆積土上に掘り込まれ隣接する。SK-101とSX-101として表記するが、「SX」を冠したのは検出時に性格不明の大型遺構であったからで、完掘の結果、両者が同様な堆積の土坑と判明した。

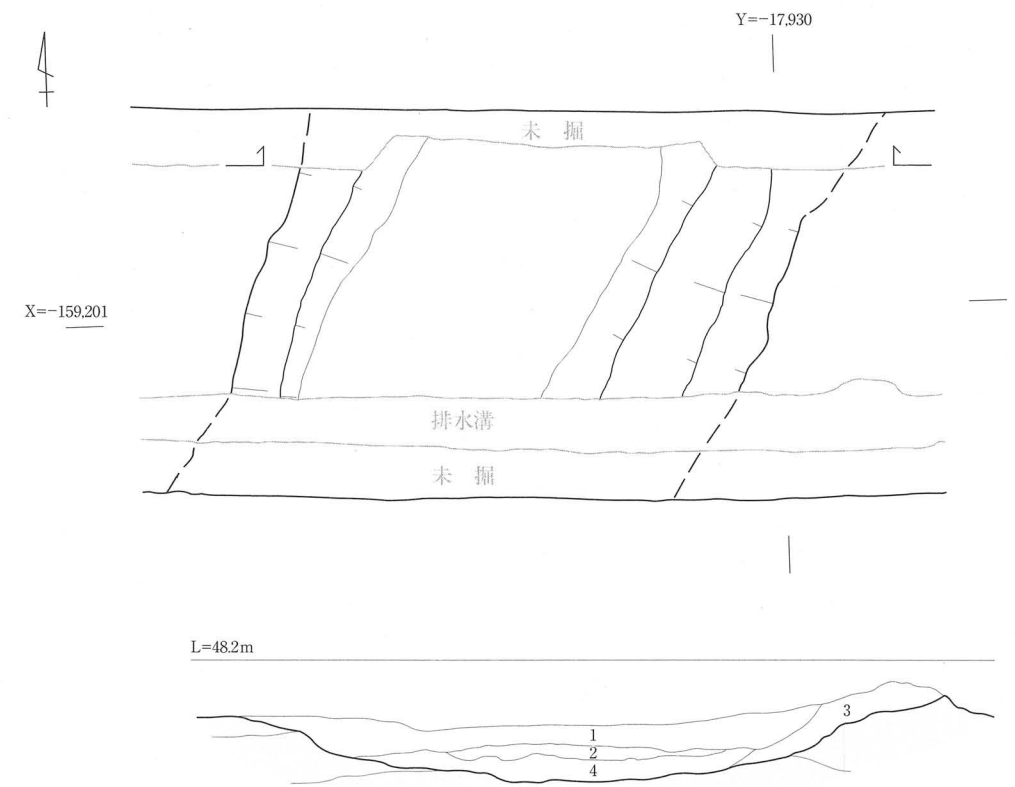
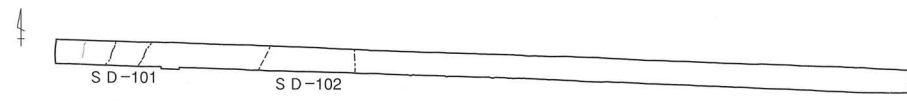
土坑

SK-101

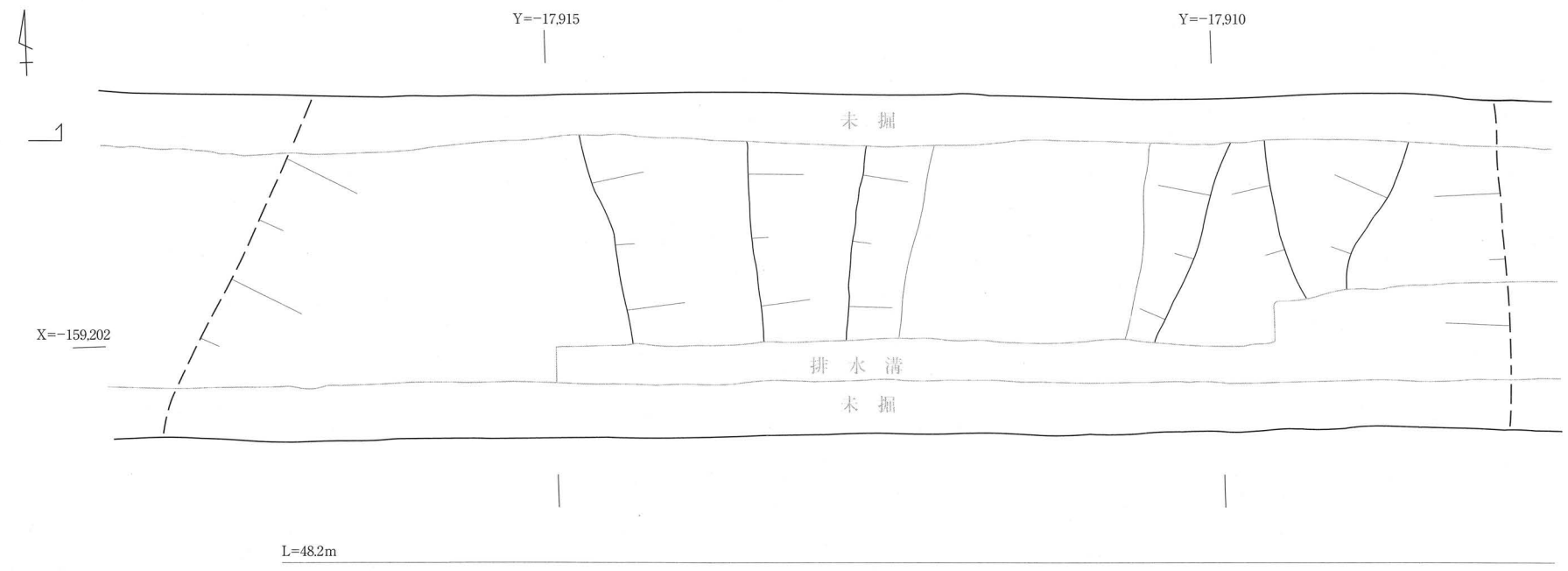
本坑は調査区の西半、SD-101とSX-101に挟まれた状態で検出した。その南北両端は調査区外にある。平面は径3.80m前後の不整形円形を呈するが、これはSR-101の砂層に掘り込まれているため変形した可能性がある。断面は逆台形で、深さ0.74mを測る。堆積土は大きく2分され、上層は灰褐色粘質土(砂ブロック)、下層は灰色粘微砂と黒色粘土のブロック土である。須恵器や埴輪片とともに瓦器破片が出土した。

SX-101

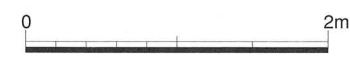
本坑は、SK-101の東側に接して検出した。その南北両端は調査区外にある。平面は排水溝によって不明瞭となってしまったが、長軸2.60m、短軸2.40mの隅丸方形に復原できる。断面は逆台形で、深さは0.80mを測る。堆積土は大きく2層に分かれ、上層は灰褐色粘土と砂ブロック、下層は灰褐色砂と黒色砂ブロックである。下層から須恵器短頸壺片が出土した。



- S D-101**
1. 暗褐色砂
 2. 緑灰色粘土
 3. 黒色砂質土
 4. 灰黒色粘質土 (植物・砂混)



- S D-102**
1. 明褐色砂質土
 2. 黒灰色粘土
 3. 茶灰色粘質土
 4. 明褐色砂
 5. 黄灰色粘質土 (砂混)
 6. 暗灰色粘土 (植物層)
 7. 灰色粘質土
 8. 暗灰色粘土 (植物・砂混)
- 上層
- 中層
- 下層



第276図 古墳時代後期の遺構 (S = 1/50)

5. まとめ

平成11年度の範囲（内容）確認調査は、第75・78次をあわせておこなうことにより、唐古・鍵弥生集落における東端の様相をかなり具体的に示したといえる。弥生時代中期における最も東端の環濠及び、その外側にあって並行する河跡を両調査で確認したことから、総延長約150mに及ぶ集落端が明らかとなり、集落範囲復原への手がかりを得た。また、第78次調査は、環濠及び河跡よりも東側へと調査区が延びており、集落縁辺部での情報を得ることができた。

地形

本調査区における弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構検出面は、標高約47.50～48.00mである。調査区の大半は、砂やシルトが互層となり、安定した堆積状況ではない。わずかに、調査区の西端でSD-109に切られているが、粘土層の安定した堆積が確認できる。これらは、西側の微高地末端から東側の谷地形までの堆積状況を示すものであろう。そして、北側に隣接する第75次調査区と同様、微高地と谷地形の境には環濠（SD-109）が掘削されている。第78次調査では、第75次調査で検出した河跡からさらに外側、集落縁辺の状況も明らかにした。ここでは、弥生時代中期後葉段階に著しい堆積作用が生じたものと考えられる。おそらく、弥生時代中期前葉と後期初頭では、遺跡縁辺の景観は相当異なっていた可能性が強い。特に、弥生時代中期後葉の段階に遺跡東端の微高地縁辺部を流れていた河川がその流れをより東側に移すためか堆積作用が著しく、弥生時代後期初頭の遺構面は0.2～0.3mほど高くなっている。

遺構

弥生時代中期前葉 調査区の西端で大溝のSD-109Cを検出した。SD-109Cは、出土遺物が少なく時期決定の手がかりを欠くが、その方向・位置・堆積土・再掘削の状況から第75次調査のSD-101Cとは一連のもので、弥生時代中期前葉に遡ると考えられた。これらは微高地末端に掘り込まれており、遺跡東端を区画した環濠になるのであろう。今回の範囲（内容）確認調査によって、遺跡東側には弥生時代中期前葉の環濠がめぐっていたことは確実となった。本溝は、弥生時代後期初頭・後期後葉の再掘削を経て、古墳時代初頭まで継続する。

弥生時代中期中葉～中期後葉 弥生時代中期中葉～中期後葉の遺構は確認できず、河跡のSR-101のみ検出した。SR-101の砂層は、上層の出土土器から弥生時代中期後葉の年代が与えられるが、そのベース層は安定しておらず弥生時代前期の土器が出土することから、前期あるいはそれ以前からの谷地形に流れ込んだ洪水によって形成されたと考えられる。また、その状況から第75次調査SR-101とは一連であり、遺跡東端部の弥生時代中期における景観として、微高地縁辺を切った環濠、その外側に並行する谷地形が想定されよう。さらに、弥生時代中期後葉にこの谷地形に沿って流れ、大量の灰白色砂で埋没させる河川は、遺跡北縁辺部を流れた北方砂層と同一の流れとなる可能性がある。

弥生時代後期初頭 弥生時代後期初頭の遺構として、土坑2基、大溝3条、溝3条を検出した。大溝3条のうち、最も西側のSD-109Bは、先行環濠のSD-109Cを再掘削したもの

である。これは、第75次調査区のSD-101Bへと繋がる。SD-109Bの東側には、SD-108、そしてSD-106が続く。SD-106・108はともに先行溝はなく、この段階で初めて掘削された大溝である。おそらく、遺跡縁辺部が安定していく後期初頭において、環濠が外側へと拡張されていったものと考えられる。あるいは、SD-108はSR-101の東肩に、SD-106は河川と考えられる砂層の落ち込みに掘り込まれることから、堆積作用によって生じた滞水を排水した水路の役目も考えられる。

SD-103・104・105は、上記の大溝3条とは明らかに性格が異なる。あたかも、くぼ地の最終堆積とでもいふべき土層の状況である。この点に関して、後におこなった第91次調査によって得た知見であるが、先行遺構の痕跡の可能性が考えられる。本調査区の南西約100mでおこなわれた第91次調査では、今回のSD-109に繋がると考えられる環濠のSD-101を検出したが、その外側にさらに環濠のSD-104があり、この環濠間において弥生時代中期前葉の方形周溝墓を検出している。方形周溝墓の周溝は、弥生時代中期中葉の砂層で埋没するが、部分的にくぼ地となって残っていたらしく、布留期には土坑として再利用されていた。この堆積状況が、きわめて今回検出の3条の溝と類似している。また、ベースが一見無遺物層にみえるのも、同様である。方形周溝墓域の拡がりを想定するわけではないが、著しく土砂が堆積する遺跡縁辺部ではより深い位置に弥生時代中期前葉遺構が埋没している可能性を考慮する必要がある。

また、SD-109の東側で弥生時代後期初頭の土坑を2基検出したことも、注目される。土坑の性格としては、井戸が考えられ、SD-109を越えてその生活域が拡大したものと考えられる。弥生時代後期初頭には、集落の東側への拡張がうかがえる。

弥生時代後期後葉～古墳時代初頭 SD-109は、弥生時代後期初頭の環濠SD-109Bを再掘削している。本溝は、第75次調査のSD-101とは一連であると考えられ、規模は縮小するものの環濠としての機能は有していたと考えられる。本溝の東側からは、この時期の遺構は検出できなかった。なお、遺構には伴わないが、古墳時代前期の埴輪が散見できる。前期古墳の分布も想定されよう。

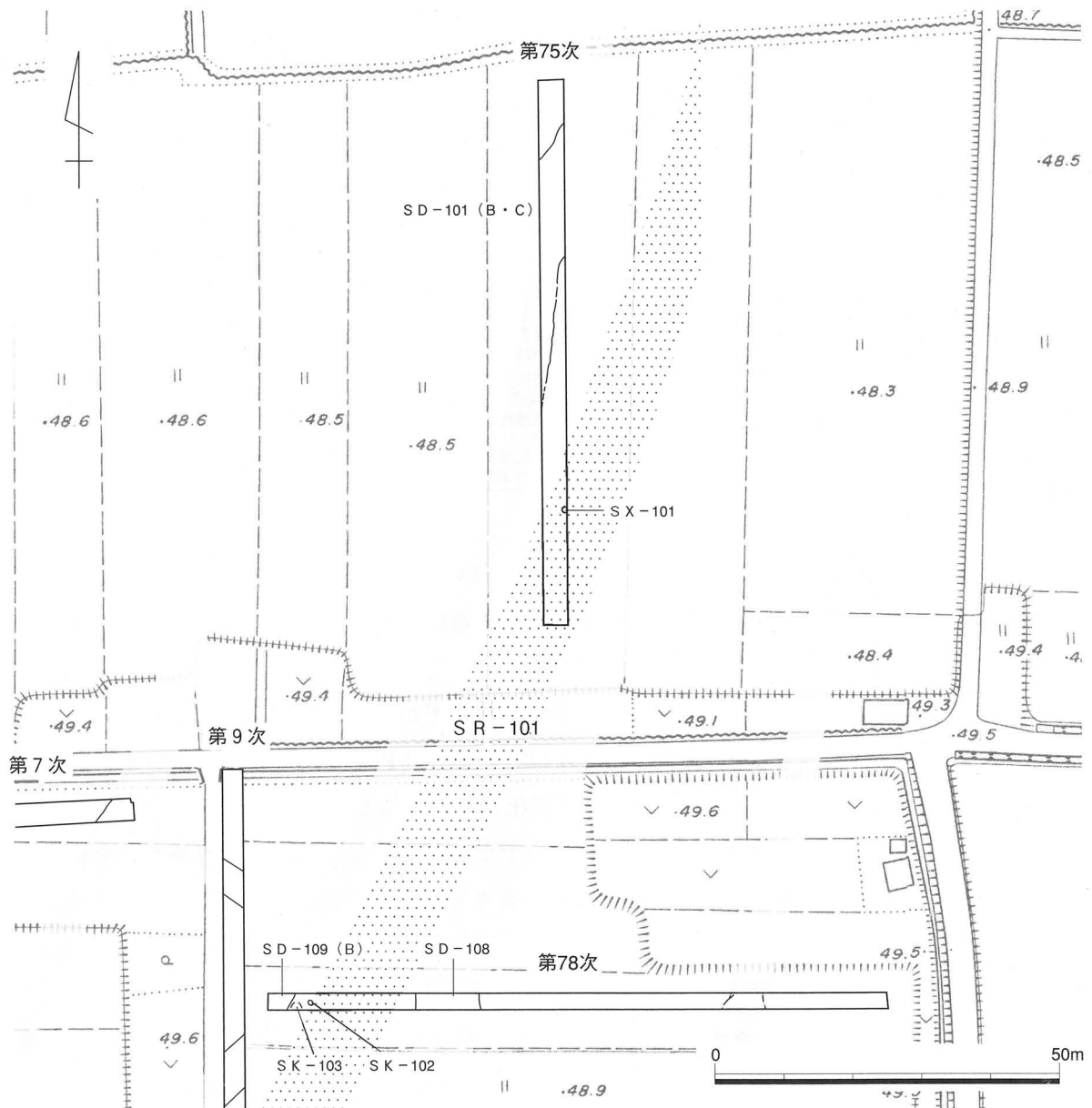
古墳時代後期後葉 本調査区の西半において、古墳時代後期の古墳周濠と考えられる2条の溝（SD-101・102）を検出した。両溝の間隔から、直径15m強の円墳になると考えられる。溝からは、須恵器の高坏や提瓶が出土した。ただし、SD-101と102には規模の違いがあり、同一円墳の周溝と断定するにはやや情報を欠いている。

第4節 東環濠の出土遺物

1. 土器

(1) 第75次調査

第75次調査区では調査終了時に、出土遺物コンテナ（巾340×奥540×高150^{mm}）総数は36箱を数えたが、洗浄の後、土器を収納したコンテナ数は27箱となった。洗浄及び石器、木製品を省き詰めて収納すると、2割5分減である。また、調査面積320^mであるから、1^mあたり0.08箱の土器出土量ということになる。土器コンテナ27箱の内訳は、遺物包含層・中世素掘小溝3箱（11.1%）、弥生時代溝24箱（88.9%）となった。そして、そのうちSD-101・101B



第277図 東環濠の主要遺構 (S = 1/1,000)

遺物番号 写真番号	器種	調査 回数	遺構名	層位 (取上)	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P 2001 図版320-1	壺	75次	SD-101C	第7層	胴径 23.9 底径 7.8	(外) 胴部上半に擬似流水文(8本/1.15cm)。胴部下半は横位ミガキ。 (内) 胴部は横位ミガキ。		Ⅱ-3-b
P 2002 図版320-2	無頸壺	75次	SD-101C	第8層	器高 15.3 口径 7.6 胴径 17.0 底径 6.4	(外) 胴部上半に櫛描直線文(11本/1.4cm)5帯。胴部下半は底部付近の縦位ハケと胴部の横位ハケ後、横位ミガキ。 (内) 横位ミガキ。胴部上半に、指頭圧痕。	半完形品	Ⅱ-3-b
P 2003 図版320-3	広口壺	75次	SD-101B	第6層	器高 32.8 口径 15.5 胴径 23.6 底径 3.8	(外) 頸部及び胴部上半は縦位ハケ後、縦位ミガキ。胴部下半は縦位ケズリ後、縦位ミガキ。 (内) 横位ハケ後、ナデ。	底部磨滅 胴部穿孔 完形品(一部欠)	V-1
P 2004 図版320-4	短頸壺	75次	SD-101B	第6層	器高 23.3 口径 11.4 胴径 18.0 底径 6.8	(外) 頸部は縦位ハケ後、ナデ。胴部上半は左上がりハケ後、ナデ。胴部下半は縦位ミガキ。肩部に茎状工具刺突による記号文。 (内) 胴部下半はナデ。胴部上半は縦位ハケ。頸部はナデ。	記号文 底部穿孔 完形品(一部欠)	V-1
P 2005 図版321-1	長頸壺	75次	SD-101B	第6層	器高 25.4 口径 10.2 胴径 18.6 底径 4.6	(外) 口縁部はヨコナデ。頸部は縦位ハケ後、ナデ。胴部上半は横位ハケ後、ナデ。胴部下半は縦位ハケ後、ナデ。 (内) 胴部は横位ハケ後、ナデ。頸部は横位ハケ。	完形品	V-1
P 2006 図版321-2	長頸壺	75次	SD-101B	第5層	器高 20.7 口径 8.2 胴径 14.5 底径 4.0	(外) 口縁部はヨコナデ。頸部及び胴部は縦位ミガキ。その後、胴部最大径付近を横位ミガキ。 (内) 頸部は縦位ミガキ。	完形品	V-1
P 2007 図版321-3	無頸壺	75次	SD-101B	第5層	器高 12.3 口径 10.1 胴径 15.6 底径 5.9	(外) 口縁部に2孔一対の紐孔。胴部上半は縦位ミガキ。胴部下半は縦位ケズリ後、ナデ。磨滅。 (内) ナデ。	底部穿孔 完形品(一部欠)	V-1
P 2008 図版320-5	水差形土器	75次	SD-101B	第6層	器高 23.4 口径 10.7 胴径 16.1 底径 4.8	(外) 胴部下半は縦位ケズリ後、ナデ。 (内) 胴部下半は縦位ハケ。	外面に煤付着 胴部穿孔か 完形品(把手欠)	V-1
P 2009 図版321-4	甕	75次	SD-101B	第5層	器高 19.2 口径 14.2 胴径 16.1 底径 5.2	(外) 胴部は右上がりタタキ後、ナデ。 (内) 胴部上半は縦位ハケ。胴部下半は左上がりハケ。	胴部下半に煤付着 完形品(底部欠)	V-1
P 2010 図版321-5	高坏	75次	SD-101B	第6層	器高 12.8 口径 14.0 底径 6.1	(外) 坏部は下半を左上がりミガキ後、上半を横位ミガキ。脚柱部は縦位ミガキ。 (内) 坏部は下半を縦位ミガキ後、上半を横位ミガキ。脚柱部は回りのケズリ。	完形品(一部欠)	V-1
P 2011 図版322-1	器台	75次	SD-101B	第6層	器高 28.7 口径 27.9 底径 24.0	(外) 口縁部に凹線文2条、体部中央に凹線文8条、脚端部に凹線文1条。体部下半の8方向に準状透孔。口縁部と透孔間に円形文の赤色塗彩。 (内) 口縁部に櫛描き簾状文1帯、櫛描き波状文1帯(6本/1.05cm)。	赤色塗彩 完形品	V-1

の出土土器で85.1%を占めており、設定された調査区の半分がSD-101内にあったことを反映している。また、遺物包含層が11.1%であるのも、遺跡縁辺部ということを示している。

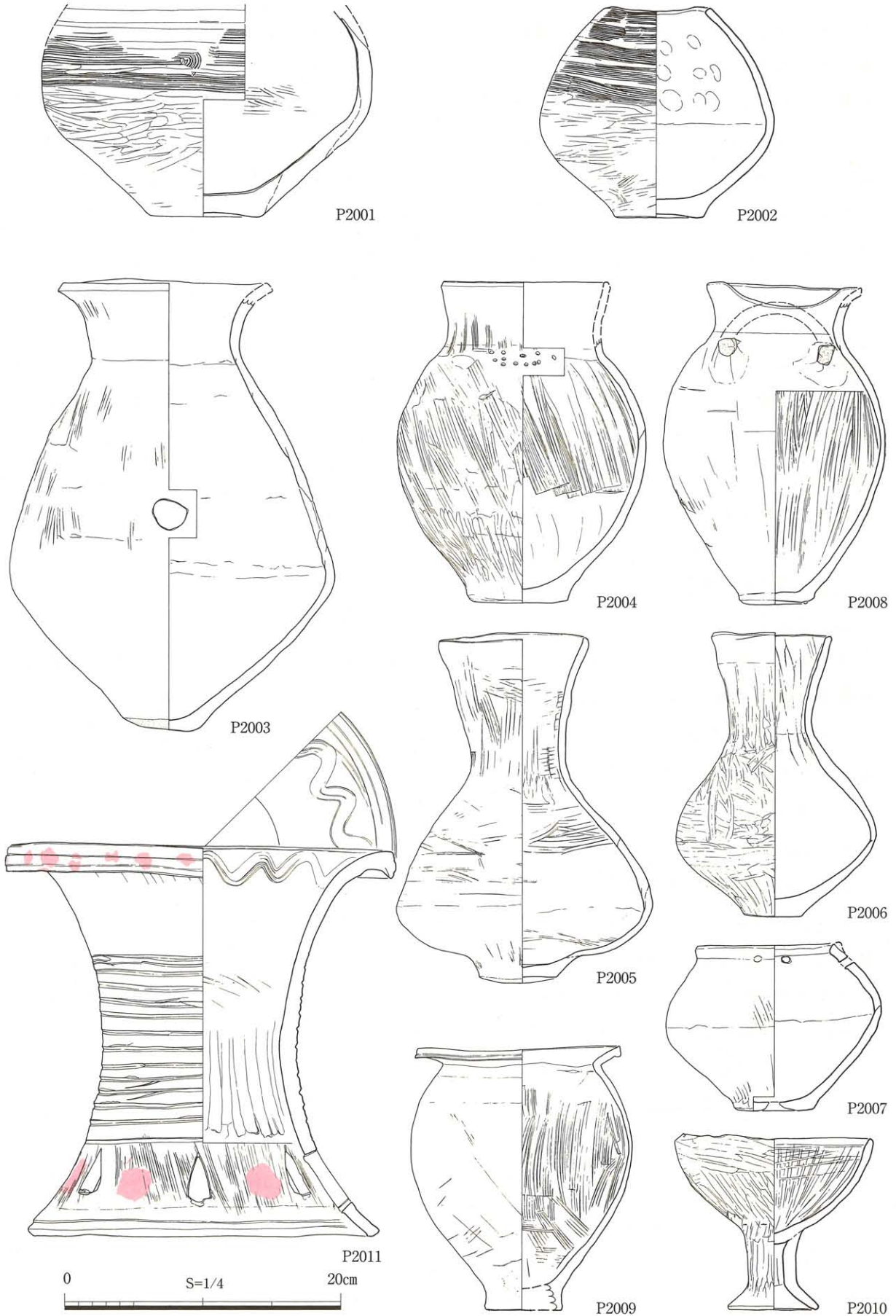
SD-101C出土土器 (第278図、写真図版320)

SD-101Cから出土した土器片は極めて少なく、わずか13片に過ぎない。このうち、8片が接合して壺胴部下半(P2001)、2片が接合して無頸壺(P2002)となった。つまり、SD-101C出土土器について、可能なものは全て図化していることになる。

P2001・2002ともに、文様帯は櫛描き直線文(P2001については向かい合う扇形文を施し擬似流水文とする)で構成され、胴部下半は横位ミガキである。この特徴から、大和第Ⅱ-3様式に位置づけられる。

SD-101B出土土器 (第278図、写真図版320~322)

SD-101Bからは、コンテナ12箱(40.7%)の土器が出土している。このうち、中層の暗青灰色粘土からは、上位(第5層)・下位(第6層)に分かれて半・完形土器が出土した。上



第278図 東環濠出土土器

位の半・完形土器は5個体のうち3個体（P2006・2007・2009）を、下位の半・完形土器は8個体のうち6個体（P2003～2005・2008・2010・2011）を図化した。これらの土器群は、検出状況として上下に分かれたが、土器様式としては大和第V-1様式に収まるものである。

P2005・2006のように、無頸壺の形態を彷彿とさせるような胴部下半が下膨れする長頸壺は、未だ定型化していないことを示している。P2008のような無文で長胴の水差形土器は、その最終形態となろう。P2011の器台に施されたアーモンド形の透孔及び円形文の赤色塗彩は、本様式の特徴である。

SX-101出土土器（写真図版322）

SX-101からは、単体で甕（PP2001）が出土している。底部及び胴部下半の1/3を欠く。口径14.0cm、胴径19.8cmである。口縁部上端は、ヨコナデによって上方に突出する。外面は、胴部上半が横位タタキ後右上がりのハケで、胴部下半は縦位ハケである。内面は、胴部上半が縦位ハケで、これを切って底部から胴部中央付近まで縦位ケズリ、その後ナデである。外面胴部の最大径付近に、タタキ工具の木口によると考えられる連続刺突文がめぐらされる。その特徴から、大和第IV-2様式に位置づけられる。

（2）第78次調査

第78次調査区では調査終了時に、出土遺物コンテナ（巾340×奥540×高150^{mm}）総数は29箱を数えたが、洗浄の後、土器を収納したコンテナ数は19箱となった。洗浄及び石器、木製品を省き詰めて収納すると、3割5分減といったところになる。また、調査面積225^m²であるから、1^m²あたり0.08箱の土器出土量ということになる。土器コンテナ19箱の内訳は、遺物包含層・中世素掘小溝5箱（26.3%）、古墳時代溝2箱（10.6%）、弥生時代土坑4箱（21.1%）、弥生時代溝24箱（42.0%）である。

SK-103出土土器（写真図版322）

SK-103からは、壺2個体（PP2002・2003）が出土している。

PP2002は広口壺で、口縁部の一部を欠くが、完形である。器高27.3cm、復原口径10.6cm、胴径19.2cm、底径4.0cmを測る。外面は、頸部は縦位ハケ、胴部上半は横位タタキ、胴部最大径付近は左上がりハケ。底部及び胴部下半は、使用による磨滅が著しい。内面は、胴部下半が丁寧なナデ、胴部上半が左上がりハケ、下半と上半の接合部は横位ハケである。胴部上半には、ヘラ描きによる縦線7本の記号文をもつ。

PP2003は長頸壺で、口縁部の一部を欠くが、完形である。器高27.3cm、復原口径8.8cm、胴径15.6cm、底径4.8cmを測る。外面は、頸部及び胴部上半に縦位ハケが施されるが、その後縦位ミガキによって痕跡となる。内面は、ナデが施されている。口縁部には、3～4条で条間が安定しない工具によって、縦線や横線が施されているが、記号文と考えられる。

2. 木製品

東環濠出土の木製品は、調査があまり及んでいないこともあり、少量である。その内訳は、第75次調査から1点、第78次調査で6点の計7点であり、その半数が用途不明品である。

(1) 農具

平鋏 (W2001・2002) W2001は片側面に樹皮を残す状態の平鋏身未成品である。平面形は頭部から中位に向かってハの字状に広がり、そこから刃部に向かって垂下する。隆起部が最も厚く、刃部に向かって緩やかに薄くなる。上下端には切断痕残存。隆起部から刃部方向への粗い加工痕がみられ、加工具幅は約2.5cmである。(出土状況：写真図版編 図版170-2)

W2002は平面長方形で平鋏身未成品と思われる。一度土中で乾燥しており、保存状態は不良である。頭部と刃部側面に切断痕残存。(出土状況：写真図版編 図版168-3)

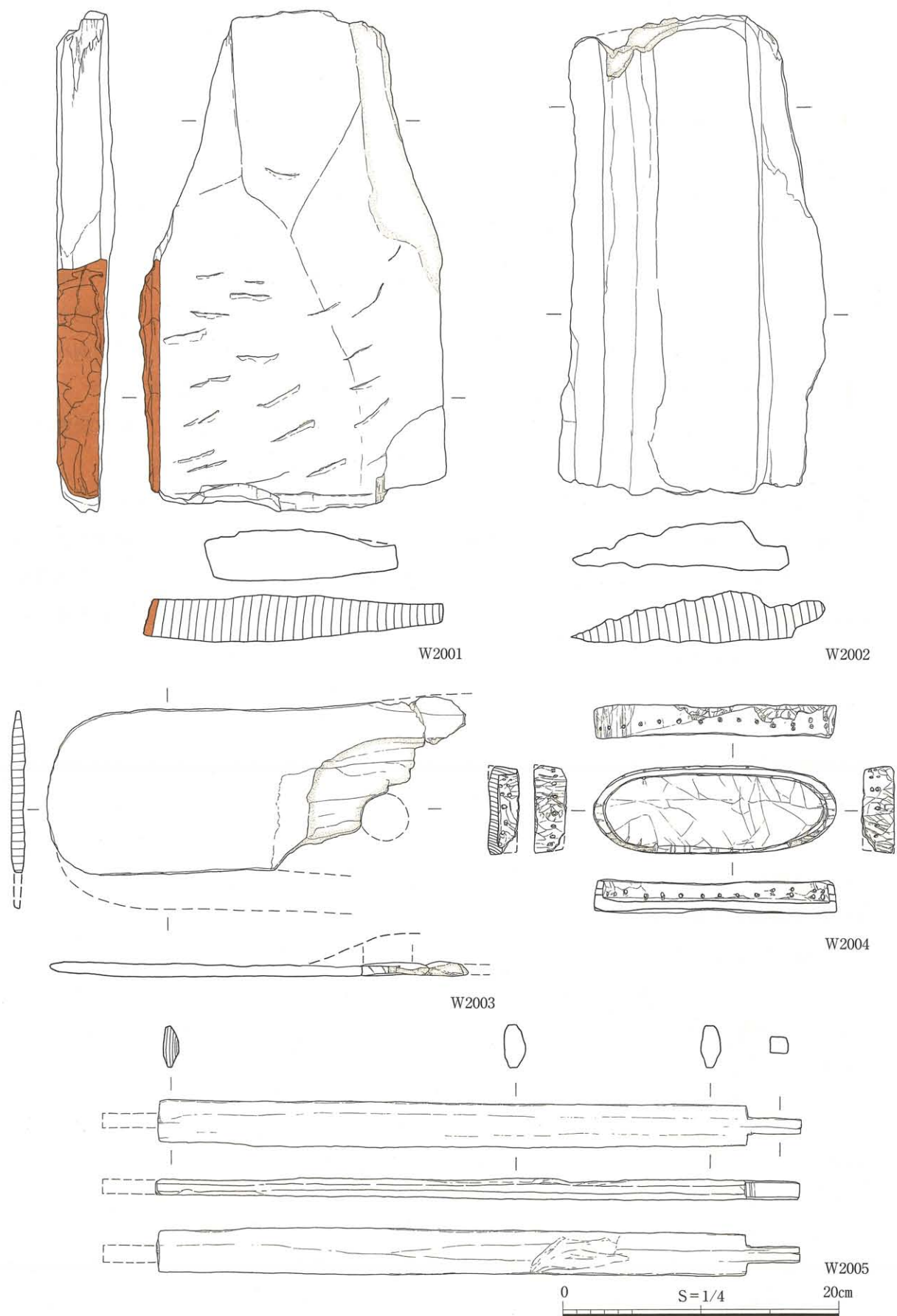
横鋏 (W2003) W2003は薄い板状の製品で、平面形や刃部形態から横鋏の身部と考えられる。隆起部分は欠損しているが、小さな隆起が柄孔周囲に付くものと思われる。側縁刃部は身部と厚さがほとんど変わらず、上下の側縁の方が薄く刃状に削られている。また、下位刃部からの側面観は、隆起側に少し内湾している。柄孔位置から、身部の片側が再加工されたものと考えられる。加工痕は前面に残存しており、加工具幅は約2cmである。

(2) 用途不明品

用途不明品 (W2004・2005) W2004は平面楕円形の用途不明品である。全体形は靴底状で、片側の立ち上がり部分が欠損するが、保存状態は良好で加工痕が明瞭に残存している。周囲の立ち上がりは少し内傾しており、径約0.3cmの小孔を横方向から一段、一部は二段穿っている。小孔の間隔は0.5~1.5cmとばらつきがあり、底面からの高さも0.9~1.3cmと一定ではない。現状で小孔数は32ヶ所認められ、すべて外側からの穿孔である。底面は中央に向かって上方に少し湾曲しており、加工痕が斜め方向に認められる。加工具幅は約0.7cmである。これを底部として、何らかの部材と組み合わせたものと考えられ、その全体形は筒状になると思われる。

W2005は角柱状の建築部材と思われる。片側は欠損するが、両端に一段細い角柱状の突起を作り出したものである。加工は比較的粗雑であり、断面形は整っていない。保存状態は良好で、柄部分の付け根に鉄製工具による加工痕が認められる。

遺物番号	器種	調査回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存処理	樹種	相伴時期 (大和様式)
W2001	平鋏未成品	78次	SD-109B	第4層	長 36.3、幅 22.1、厚 4.1	樹皮残存	ラ	コナラ属	V-1
W2002	平鋏未成品	78次	SK-102	第3層	長 34.7、幅 19.1、厚 3.7		ラ	コナラ属 カガシ亜属	V-1
W2003	横鋏	78次	SD-109B	第4層	長 (12.4)、幅 (30.0)、厚 (1.0)	刃部一部再加工	ラ	コナラ属 カガシ亜属	V-1
W2004	用途不明品	78次	SD-108	第3層	長 6.3、幅 17.5、高 2.3、厚 約0.7	周囲壁面に小孔多数あり	ラ	ヒノキ科	V
W2005	用途不明品	78次	SD-102	第6層	長 (46.5)、幅 3.3、厚 1.5		ラ	ヒノキ	古墳後期?



第279図 東環濠出土木製品

3. 石器

東環濠から出土している打製石器はすべてサヌカイト製で、わずか1.0901kgにすぎない。1㎡あたりの出土量を算出すると約2gとなり、調査面積を考慮しても、出土量の少なさが明白である。第75次調査地から0.52kg、第78次調査地から0.57kg出土しており、1㎡あたりの出土量は、それぞれ約1.6g、2.6gとなる。明確な石器は11点に限られ、欠落している器種も多い。剥片なども少量出土しているが、東環濠の打製石器群はかなり断片的な様相を呈しているといえる。磨製石器の出土も6点にとどまり、出土数の少なさが指摘できる。石製品・礫石器についても同様で、敲石、磨石が確認できる。

今回の調査地に限らず、東環濠にあたる調査地（第24・27・28・34・54次など）は石器の出土量が著しく少ない傾向がある。石器や剥片、石核などが多量に出土する他の地区とは異なり、東環濠付近は、石器の生産や消費との関わりが比較的希薄な地区であった可能性が高い。

(1) 打製石器

石剣 (S 2001・2002) 2点確認している。S 2001は先端部片である。素材の性状は不明である。先端部a面側に残っている自然面によると、石理は基軸に対してほぼ順目である。先端とした部分が調整によって尖頭状に整形されている点を重視し、先端部片と考えたが、自然

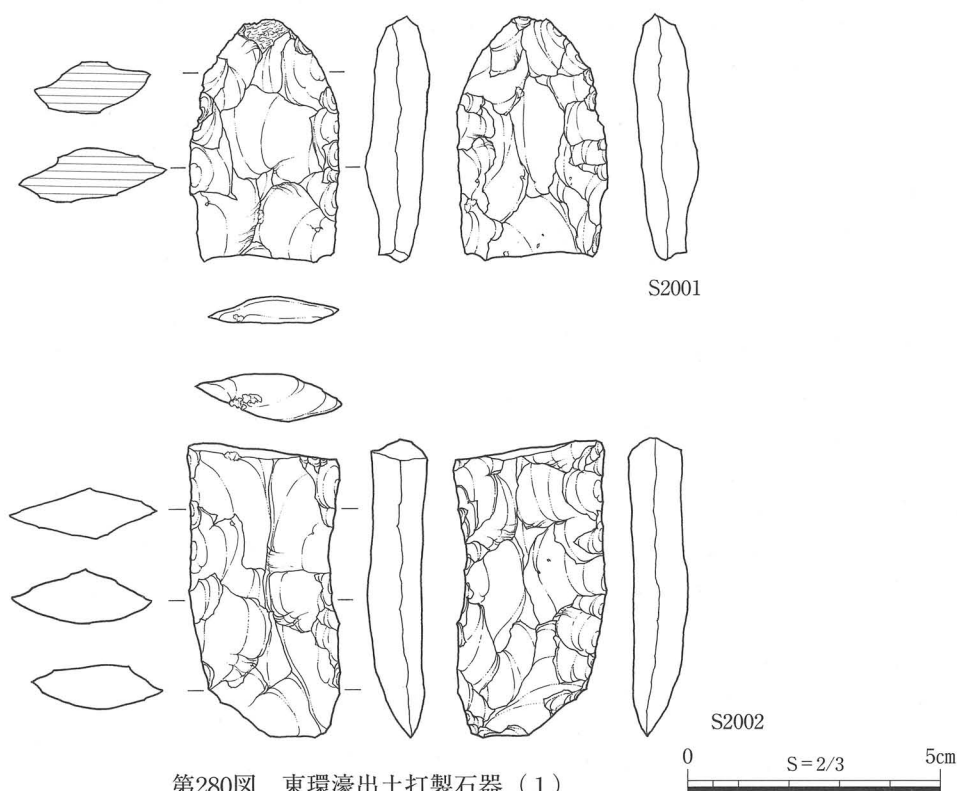
面の残存状態からは、基部片である可能性も残る。器面には不純物が比較的多く観察でき、下端の折損面にも不純物が認められる。S 2002は基部片である。素材の性状は不明である。片方の側辺が内湾しているが、側辺の内湾を生じさせている剥離痕はいずれも対辺からの剥離痕に後続しており、石剣の再加工か製作途中での軌道修正に伴うものと思われる。上端の折損面には不純物が認められ、剥離痕の観察からは再加工の際に折損した可能性も考えられる。

石鎌 (S 2003~2005) 6点確認している。S 2003は有茎式の石鎌である。先端部を折損しているが、厚手で大形のものであったと思われる。a・b両面の中央には、素材面と思われる比較的平らな剥離面がみられる。二次加工は基本的に茎部の作出→基部側辺及び茎部の整形の順序でおこなわれている。茎部は比較的大きなノッチ状の剥離痕によって作出されており、その際の剥離痕はb面側からのものが先行し、a面側からのものがそれに続く。茎部の両縁辺に

第46表 東環濠の石器

種類	器種	75次	78次	合計
打製石器	石剣	1	1	2
	中形尖頭器	0	0	0
	石鎌	4	2	6
	石錐	0	1	1
	石小刀	0	0	0
	石匙	0	0	0
	スクレイパー	1	1	2
	楔形石器	0	0	0
	火打石	0	0	0
	石鏃	0	0	0
	石核	0	0	0
合計		6	5	11
磨製石器	石庖丁	4	2	6
	石庖丁未成品	0	0	0
	大型蛤刃石斧	0	0	0
	柱状片刃石斧	0	0	0
	扁平片刃石斧	0	0	0
	磨製石鎌	0	0	0
	磨製石剣	0	0	0
	磨製石戈	0	0	0
	環状石斧	0	0	0
合計		4	2	6
石製品	石製紡錘車	0	0	0
	石製紡錘車未成品	0	0	0
	石製円板	0	0	0
	垂飾品	0	0	0
	ミニチュア石製品	0	0	0
	用途不明石製品	0	1	1
	石鏹	0	0	0
	石鏹素材	0	0	0
	砥石	0	0	0
合計		0	1	1
礫石器	敲石	2	0	2
	石槌	0	0	0
	磨石	1	1	2
	台石	0	0	0
	石皿	0	0	0
	投弾	0	0	0
合計		3	1	4

註) 打製石器の数値はサヌカイト製の点数、() 内の数値はサヌカイト製以外のものの点数を示す



第280図 東環濠出土打製石器 (1)

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚			
S2001	石剣	78次	SD-109	第2層	(4.9)	2.9	1.1	(16.8)		布留0
S2002	石剣	75次		灰色粘質土	(5.7)	3.0	1.1	(22.2)		弥生~中世
S2003	石鏃	78次		灰色砂質土	(4.8)	2.2	0.9	(6.6)		弥生~中世
S2004	石鏃	75次	SD-101	第1(下)層	(4.1)	1.3	0.5	(2.1)		布留
S2005	石鏃	78次	SX-101	灰色粘質土(黒褐粘ブロック)	5.0	1.4	0.6	3.8		中世
S2006	石錐	78次	SD-109B	第2層	5.0	3.1	1.1	8.9		V-1
S2007	スクレイパー	75次	SD-101	第2層	4.7	2.5	0.8	23.6		布留
S2008	スクレイパー	78次		暗灰色粘土(砂混)	7.5	2.2	0.8	14.0		弥生

は磨耗痕が観察される。S 2004は有茎式の石鏃である。先端部及び基部末端をわずかに欠損している。S 2005は尖基式の石鏃である。先端部はb面左側辺の剥離痕によって、やや不整形になっている。

石錐 (S 2006) 1点のみ確認している。S 2006は長い錐部をもつ。a・b両面に自然面をとどめることから、扁平なサヌカイト原石を素材にしていると考えられる。頭部が丁寧に整形されている点が特徴的である。錐部先端をごくわずかに欠損しているが、錐部に磨耗の痕跡は全く認められない。

スクレイパー (S 2007・2008) 2点確認している。S 2007は蝶番状の末端部をもつ剥片素材である。a面側に観察される自然面はかなり水磨が進んでいる。刃部は両面加工で作出されているが、側面観がややいびつである。S 2008はa面下半にポジティブな剥離面が認められることから、素材剥片は剥片素材の石核から得られたと推察される。自然面を打面とし、石核外縁の自然面を取り込みながら、縦長剥片が剥離されたようである。自然面は黄色の粘土状皮膜をみせる自然面であり、「石マクリ火山岩」⁽¹⁾の可能性がある。刃部は2辺認められるが、a面右側縁の刃部の角度が50~60度前後であるのに対し、左側縁の刃部角は80~90度程度をはかり、刃部の側面観も整っていない。

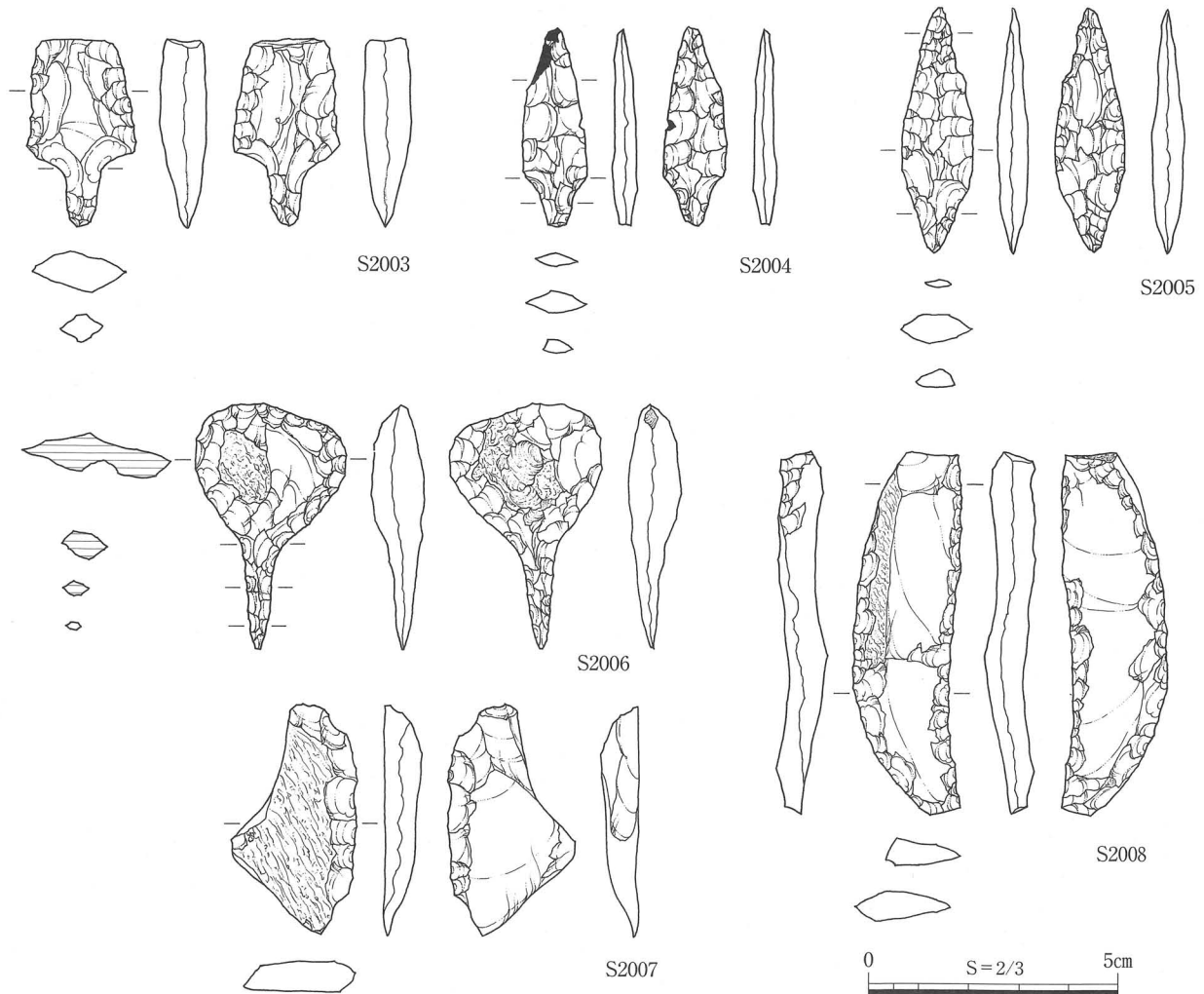
(2) 磨製石器

結晶片岩製石庖丁 (S 2009~2012) 東環濠出土の石庖丁は6点と少なく、完形品は1点である。いずれも穿孔は、a・b両面からの回転穿孔で施されている。S 2009は完形で、刃部の両端に研ぎ減りが確認できる。左右の手で適宜持ちかえながら使用されたか、石庖丁のa・b両面が使用されたと考えられる。S 2010は刃部と背部が一部残っており、直線刃半月形を呈していたことが推定できる。S 2011は欠損が著しく、背部の一部が残存するのみである。S 2012は中央部で折損しており、孔が部分的に残っている。端部から背部にかけて縁をめぐるように研磨されており、磨製石剣等への転用が目指された可能性がある。

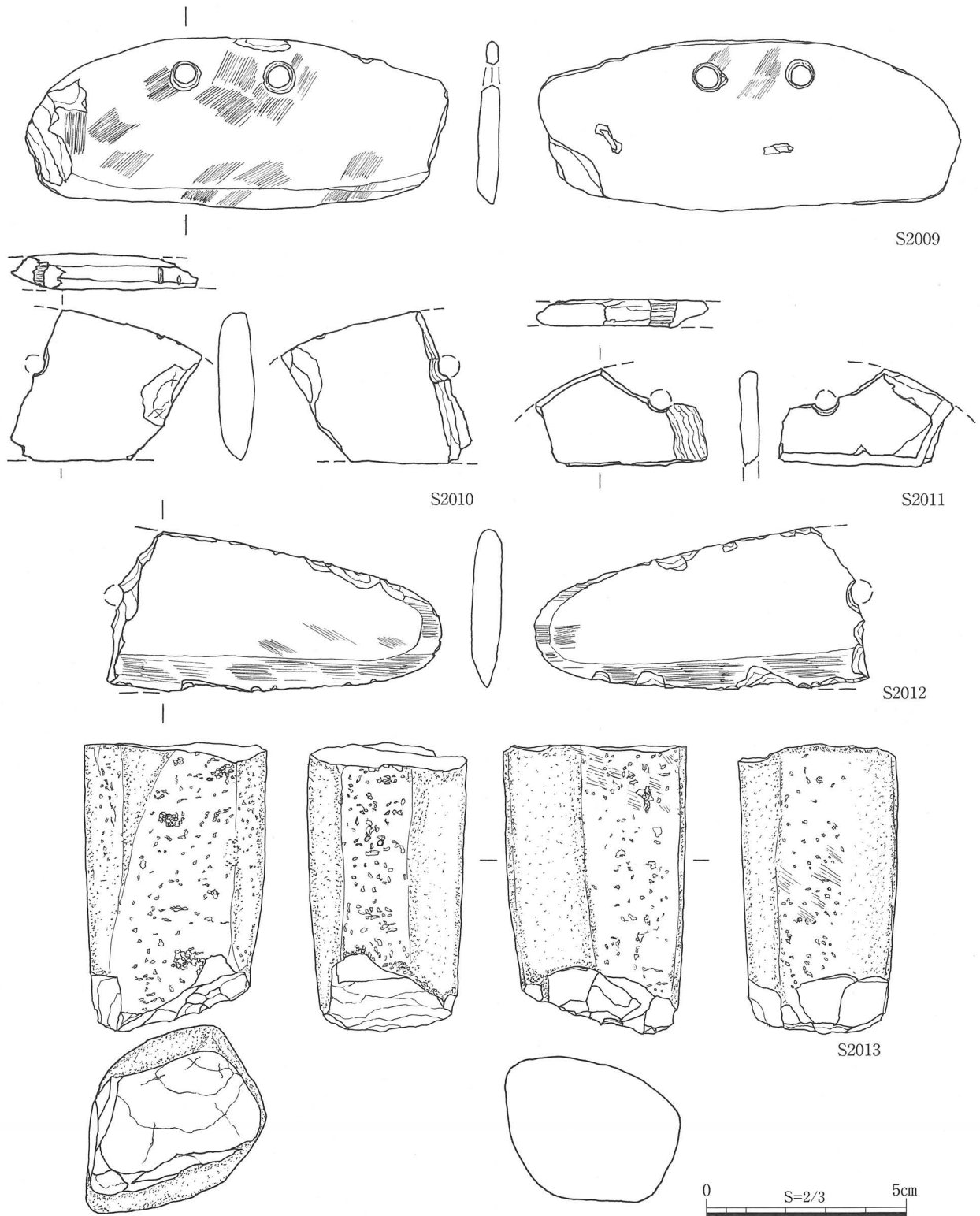
敲石 (S 2013) S 2013は基部を欠損している。表面は細かなくぼみを有しており、製作時の敲打の痕跡と考えられる。さらに敲打痕に後続するかたちで、わずかに研磨痕が残されている。断面形はいびつであり、本資料が別の器種に転用された可能性も否定できない。

註

(1) 佐藤良二「サヌカイト」『季刊考古学』第99号 雄山閣出版 pp.22-25、2007年。



第281図 東環濠出土打製石器 (2)



第282図 東環濠出土磨製石器

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S2009	石庖丁	78次		暗褐色粘質土	10.5	4.4	0.5	37.4	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩A		-
S2010	石庖丁	75次	SD-101	第2層	(4.6)	3.8	0.7	(19.1)	玄武岩質凝灰岩質片岩A		布留0
S2011	石庖丁	75次	SD-101	第2層	(4.3)	(2.4)	0.6	(8.8)	玄武岩質凝灰岩質片岩A		布留0
S2012	石庖丁	78次	SD-109	第1層	(8.4)	4.0	0.8	(42.0)	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩A		布留0
S2013	敲石	78次		灰青色粘土	(7.3)	4.9	4.1	(209.5)	安山岩C		V?

第5節 まとめ

1. 地形

東環濠では、弥生時代中期前葉に最初の環濠が掘削されるが、その環濠の内と外では地形が大きく異なる。第75次S D-101Cと第78次S D-109Cは繋がり弥生時代中期前葉の環濠になるが、その西側は微高地と考えられる安定した粘土層堆積に対し、その東側は河川による砂やシルトが互層堆積している。弥生時代中期前葉の環濠から東側は谷地形であり、その下層からは前期弥生土器が出土した。谷地形は、第75次S R-101、第78次S R-101の灰色粗砂を最終堆積として埋没する。その灰色粗砂中からは、弥生時代中期の土器が出土する。また、弥生時代後期初頭の環濠である第78次S D-108が灰色粗砂を切ることから、それまでには埋没していたと考えられる。そして、第75次調査区から東約50mの第56次調査区では、弥生時代後期初頭の河跡であるS R-103Eを検出していることから、河はより東側へと流れを変えていったことがわかる。この河の移動と、環濠の東側への拡大は一致するものと考えている。

2. 遺構変遷

(1) 弥生時代前期～中期前葉 (第283図)

弥生時代前期については、第78次調査区でS R-101の下層から谷地形を検出し、そこで前期弥生土器が出土している。おそらく、弥生時代前期の遺構は、この谷地形より西側の弥生時代中期前葉に環濠がめぐらされるその内側に、分布しているものと考えられる。ただし、第91次調査区では位置的に弥生時代中期前葉の環濠の外側となる第2調査区で、弥生時代前期の溝1条、土坑5基を検出している。必ずしも、弥生時代前期と弥生時代中期の遺構分布が一致するものではないことを、示す一例である。

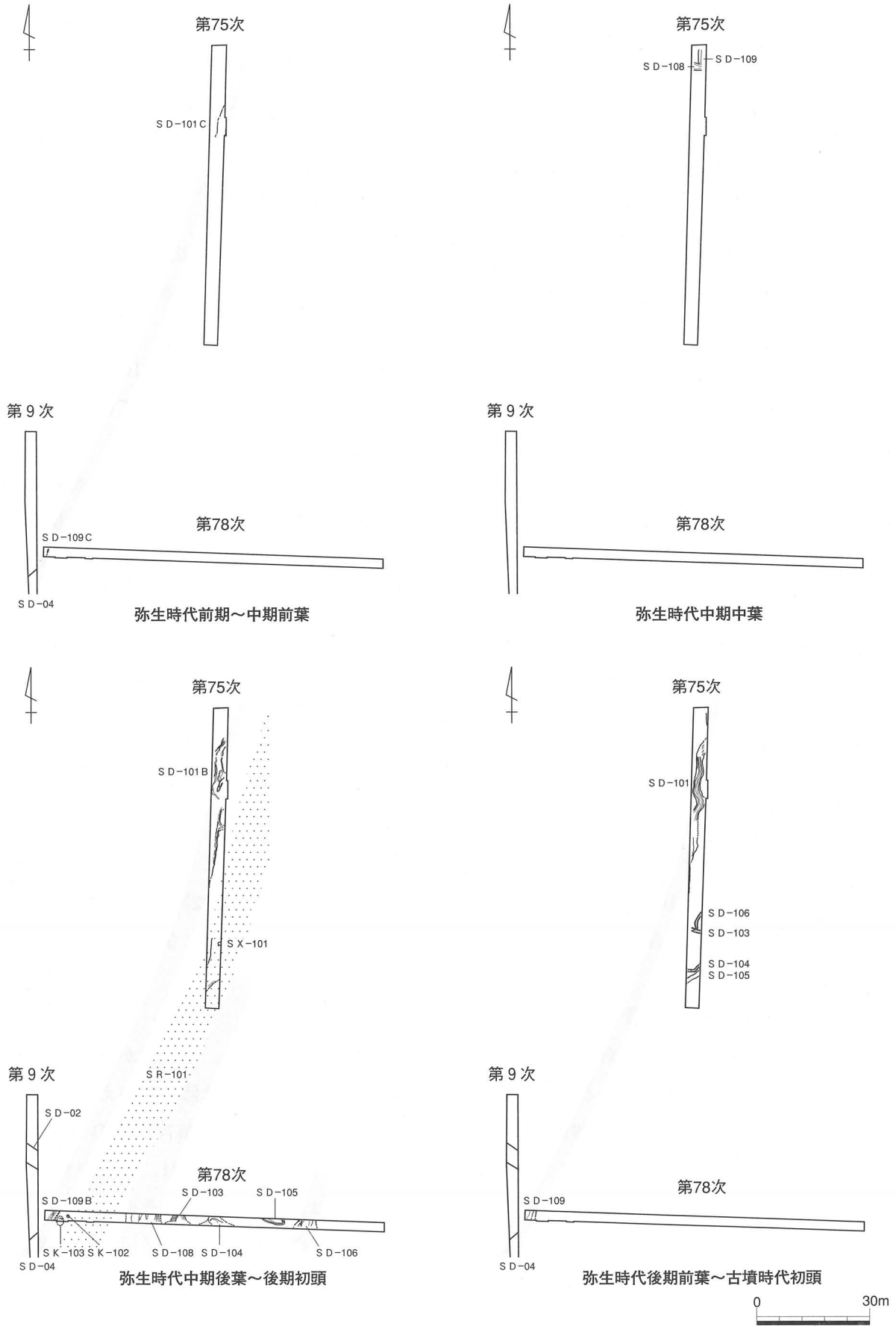
弥生時代中期前葉には、第75次S D-101C、第78次S D-109Cが掘削される。これらは一連の環濠であり、第91次S D-101Dへと繋がる。第91次S D-101Dは、南地区の第40次S D-102Bと第47次S D-2102Bを介して第3次S D-02に繋がることが想定されており、その総延長約350mにわたって遺跡南東部を画する環濠である。時期的には、第33次S D-110・第69次S D-1110とも同時期であり、これらに繋がることも想定されよう。その場合、弥生時代中期前葉の段階で唐古・鍵遺跡の東から南にかけて、環濠がめぐっていたことになる。なお、弥生時代中期中葉の大環濠と想定される北地区の第24次S D-201は、第34次S D-202、第48次S D-C・201として検出されており、ほぼその推定ラインの復原が可能であるが、それによれば第75次S D-101C、第78次S D-109Cの内側をめぐることになる。つまり、大環濠は、遺跡北西部では弥生時代中期前葉環濠の外側へと付け替えられるが、遺跡

第47表 東環濠 範囲（内容）確認調査の遺構・遺物変遷表

時期	土器様式	調査 回数	遺構	番号	木製品	石器	特殊遺物	
前期	I	75次	SK	—				
			SD	—				
		78次	SK	—				
			SD	—				
中期初頭	II-1	75次	SK	—				
			SD	—				
		78次	SK	—				
			SD	—				
中期前葉	II-2・3	75次	SK	—				
			SD	101C				
		78次	SK	—				
			SD	109C				
中期中葉	III	75次	SK	—				
			SD	107・108・109				
		78次	SK	—				
			SD	—				
中期後葉	IV	75次	SK	—				
			SD	—				
			SX	101				
			SR	101				
		78次	SK	—				
			SD	—				
			SR	101				
後期初頭	IV・V	75次	SK	—				
			SD	—				
		78次	SK	—				
			SD	—				
	V	75次	SK	—				
			SD	101B・102B			101B〔絵画土器(P5081)、土器片円板(D5152)〕	
		78次	SK	102・103	102〔平鍛未成品(W2002)〕			
			SD	103・104・105・106・108・109B	108〔用途不明品(W2004)〕 109B〔平鍛未成品(W2001)、横鍛(W2003)〕	109B〔石錐(S2006)〕	108〔絵画土器(P5074)、土器片円板(D5145)〕	
後期	VI	75次	SK	—				
			SD	—				
		78次	SK	—				
			SD	—				
古墳初頭	庄内・布留	75次	SK	—				
			SD	101・103・104・105・106			101〔石鏃(S2004)、スクレイパー(S2007)、石庖丁(S2010・2011)〕	
		78次	SK	—				
			SD	109			109〔石剣(S2001)、石庖丁(S2012)〕	

南東部ではその内側に付け替えられたことになる。今後の検討を必要としよう。

また、第91次調査区で検出したSD-104Dは、弥生時代中期前葉環濠よりも外側であって、弥生時代中期初頭に遡る大溝である。弥生時代中期前葉環濠であるSD-101Dに並行しており、環濠の可能性はある。この第91次調査区のSD-104DとSD-101D間において、弥生時代中期前葉の方形周溝墓2(3?)基と土器棺墓1基を検出している。この点に関連して、第78次調査区では弥生時代後期初頭の輪郭が不明瞭なSD-103・104・105を検出しているが、その堆積状況が第91次調査区で検出した方形周溝墓における周溝の最終堆積状況と類似しており注意を要する。第91次調査区の方形周溝墓は、集落外縁部であって幾度かの洪水の影響により、周溝上層が青灰色シルトによって埋没するが、弥生時代後期初頭～古墳時代初頭



第283図 東環濠 範囲(内容)確認調査の遺構分布図 (S=1/1,500)

は痕跡としてくぼみを残している。このくぼみに、最終堆積として植物腐食土層が形成されている。これが第78次SD-103・104・105の堆積状況と類似する。第78次SD-103・104・105は、弥生時代中期前葉環濠であるSD-109Cよりも外側にあつて、集落外縁に位置することを考えるならば、方形周溝墓周溝の最終堆積となる可能性は想定しておく必要がある。その場合、遺跡東部外縁に、弥生時代中期前葉の方形周溝墓域が広がるということになる。

(2) 弥生時代中期中葉 (第283図)

弥生時代中期中葉に関しては、第75次調査区でSD-107・108・109を検出するに止まった。また、これらの溝についても、遺物は少なく、河による乱流痕の可能性もある。

(3) 弥生時代中期後葉～後期初頭 (第283図)

弥生時代中期後葉には、灰色粗砂によって第75次SR-101、第78次SR-101が埋没し、弥生時代中期前葉環濠より外側での人的活動が活発化する。この灰色粗砂については、北地区で検出された北方砂層と同一である可能性も想定している。

弥生時代中期前葉環濠である第75次SD-101C、第78次SD-109Cは、再掘削を受ける。その再掘削環濠である第75次SD-101B、第78次SD-109Bは、下層に植物層が堆積し、直上に弥生時代後期初頭の完形土器群が廃棄されている。このことから、その再掘削は弥生時代後期初頭以前となるが、植物層からは遺物が出土せず詳細な時期は不明であり、おおよそ弥生時代中期後葉～後期初頭の幅で考えられよう。この外側で、弥生時代後期初頭の大溝である第78次SD-108、SD-106を検出している。最も外側となるSD-106は判断できないが、SD-108が第75次SD-101B・第78次SD-109Bに並行する環濠の可能性は極めて高い。弥生時代後期初頭における環濠の外側への多重化が、東環濠でも認められることになる。また、第78次SD-109BとSD-108の間では、弥生時代後期初頭の土坑であるSK-102・103を検出した。SK-102は木器貯蔵穴で、SK-103は井戸と考えられる。これを居住域の拡大とみなせるかはともかく、弥生時代後期初頭の活動域は広がったといえよう。

特に、第78次SD-109B、SK-102からは平鍬未成品(W2001・2002)が出土しており、SD-108下層の原木も合わせて考えるならば、付近で木製品の製作がおこなわれていた可能性が想定しうる。

(4) 弥生時代後期前葉～古墳時代初頭 (第283図)

東環濠では、弥生時代後期前葉の遺構を確認することはできなかった。環濠内からは弥生時代後期前葉の土器が出土することから、空白ではないのであろうが活動は低調といえる。弥生時代後期後葉には弥生時代後期初頭の環濠であった第75次SD-101B、第78次SD-109Bを、第75次SD-101、第78次SD-109が再掘削している。第75次SD-101、第78次SD-109は幅が狭く浅いため、環濠としての機能を有していたかは疑問であるが、その延長にある第83次SD-1105、第91次SD-101、第40次SD-102、第47次SD-2102は同様に再掘削を受けており、区画という意識はあったものと考えられる。これらは、古墳時代初頭の土器を含んで埋没している。

第Ⅳ章 西地区の調査

第1節 既往の調査と成果

唐古・鍵遺跡における西地区とは、第8次調査以降に認識された、国道24号線沿いの遺構集中区のことである。第8次調査までは、遺跡範囲の西側について調査がおこなわれておらず、その実態については不明な地区であった。田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所では、集落の西縁を明らかにすべく、昭和54年度第8次、昭和55年度第11次の範囲確認調査をおこなった。その結果、弥生時代前期の土坑群に代表される多数の遺構を検出し、第1次調査の唐古池と同様な状況であることが明らかとなった。弥生時代前期という集落形成初期の遺構集中は、土地の安定を示すものとして、そこに微高地が想定された。

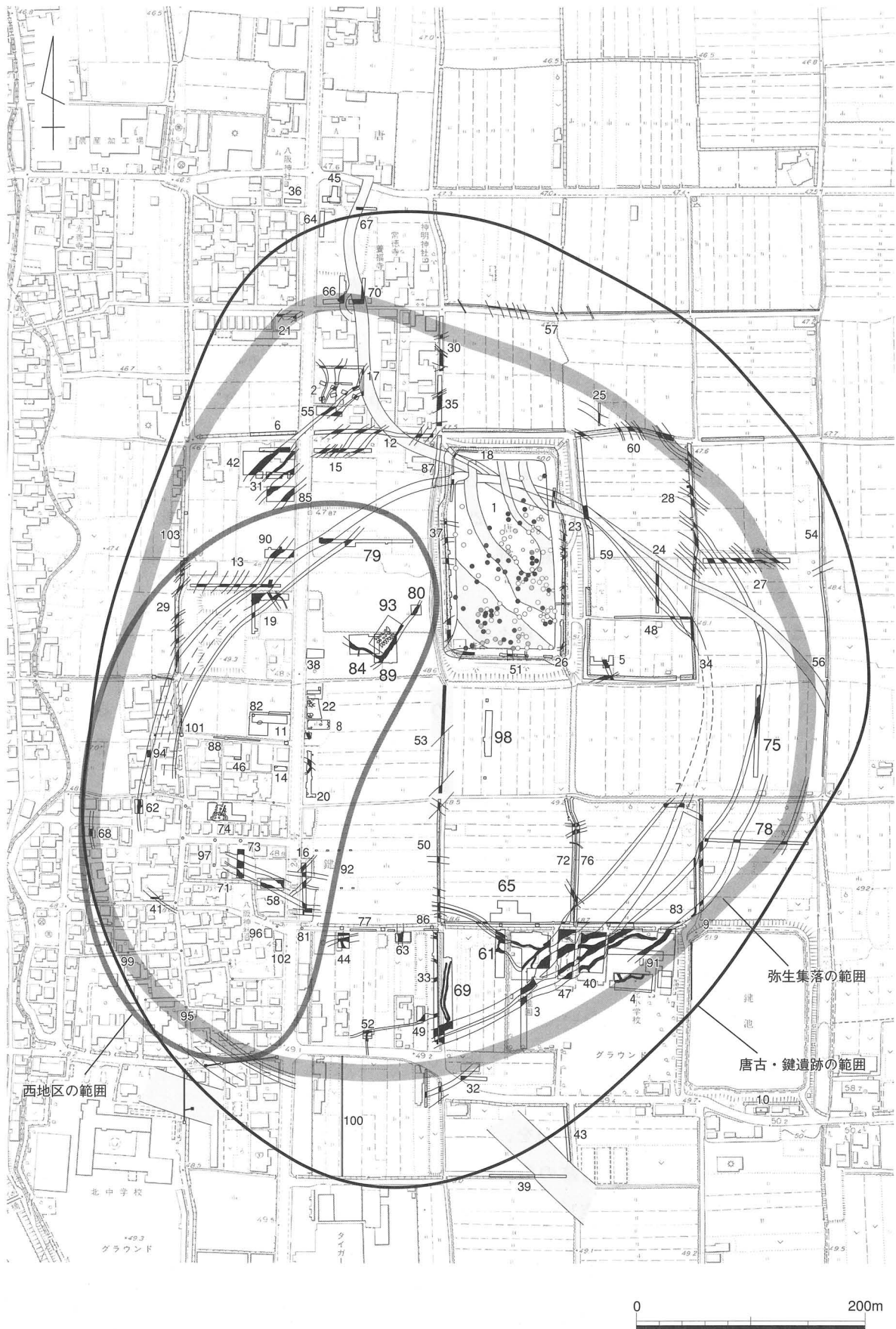
その後、国道沿いということもあって、開発に伴う発掘調査の件数が増加するとともに、その重要度も増していった。国道西側の第13・19次調査では、居住域の北西部を画したと考えられる環濠とともに、多量の土器・石器・木製品が出土した。特に、第13次は田原本町に専門職員が配属された最初の調査となるが、北北東－南南西に並走する4条の大溝を検出した意義は大きい。これら大溝は、弥生時代中期に掘削され弥生時代後期まで継続しており、遺跡西側を囲んだ環濠と考えられた。この調査により、遺跡西側の範囲が押さえられたのである。第19次調査は、第13次調査区の南隣接地でおこなわれ、第13次調査区の最も東側で検出していた大環濠の南延長を検出するとともに、それより内側で並行する弥生時代中期前葉の先行環濠や柱穴・小溝等を検出した。

居住域となる国道東側の第20次調査では、弥生時代中期中葉の井戸と考えられるSX-101の中層から、完形土器やト骨など祭祀遺物が出土した。また、同じく弥生時代中期中葉の井戸と考えられるSK-107からは、壺の中に入れられたト骨が出土した。これまでも、第11次調査では弥生時代後期の鶏頭形土製品や第13次調査ではイノシシ下顎骨7個体の集積、第14次調査では青銅素文鏡等が出土していたことから、遺跡西地区は唐古・鍵遺跡のなかでも特殊な地区として目されるようになった。唐古・鍵遺跡における西地区のイメージは、国道24号線沿いでの開発が集中した1980年代の前半に形成されたものといえよう。

その後、国道24号線沿いの開発は、一旦の落ち着きを取り戻し、西地区では中央部よりも縁辺部の調査が増えていった。そのなかにあつて、平成11年度第74次調査では、弥生時代中期前葉の大型建物跡を検出し、西地区の重要性を再認識させられることになった。また、平成8年度から始まった遺跡範囲（内容）確認調査では、唐古池の西側でおこなった第79・80次調査によって、調査前は北地区と考えていたが、西地区の微高地が延びてきていることが判明し

第48表 西地区の調査一覧表

次数	調査地	原因	調査期間	調査面積	調査担当者	文献
第8次	鍵308-1	範囲確認	1980.2.15~4.4	200㎡	寺澤 薫	『昭和54年度 唐古・鍵遺跡 第6・7・8・9次発掘調査概報』1980年
第11次	鍵309-1、310-1	範囲確認	1981.1.27~3.28	210㎡	寺澤	『昭和55年度 唐古・鍵遺跡 第10・11次発掘調査概報』1981年
第13次	唐古60-1	駐車場建設	1982.7.20~10.5	215㎡	藤田 三郎	『田原本町埋蔵文化財調査概要』1 1983年
第14次	鍵306	貸店舗建設	1982.11.16~12.25	50㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査概要』1 1983年
第16次	鍵280-1、282-2	造成工事	1983.4.18~6.24	155㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査概要』2 1984年
第19次	唐古57-2、59	造成工事	1983.2.6~5.2	315㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査概要』2 1984年
第20次	鍵302-1、307-1	造成に伴う擁壁	1984.11.28~1985.4.8	150㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査概要』3 1986年
第22次	鍵308-1	宅地造成	1985.9.3~11.28	250㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査概要』4 1986年
第29次	鍵36他	下水道改修工事	1987.3.4~4.6	260㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査概要』9 1987年
第38次	唐古51-1、54-1、55-1	資材置場	1989.10.14~10.31	72㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査年報』1 1990年
第41次	鍵374	個人住宅	1990.6.4~6.14	20㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査年報』2 1991年
第46次	鍵315-1	農家住宅	1991.9.12~9.21	10㎡	北野 隆亮	『田原本町埋蔵文化財調査年報』3 1992年
第58次	鍵281-1	店舗・賃貸住宅	1995.8.17~9.28	138㎡	藤田・清水 琢哉	『田原本町埋蔵文化財調査年報』5 1996年
第62次	鍵379	個人住宅	1997.2.19~3.27	80㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査年報』6 1997年
第68次	鍵356-34	個人住宅	1998.6.4~6.8	18㎡	豆谷 和之	『田原本町埋蔵文化財調査年報』8 1999年
第71次	鍵283-5	個人住宅	1998.11.12~11.13	16㎡	豆谷	『田原本町埋蔵文化財調査年報』8 1999年
第73次	鍵283-6	分譲住宅	1999.4.12~4.28	120㎡	豆谷	『田原本町埋蔵文化財調査年報』9 2000年
第74次	鍵297、298-1、298-2、299	個人住宅	1999.7.14~12.25	368㎡	豆谷・清水	『田原本町埋蔵文化財調査年報』9 2000年
第79次	唐古106、107-1	範囲(内容)確認	2000.8.16~12.21	276㎡	豆谷	本報告
第80次	唐古116-1、117-1、118	範囲(内容)確認	2000.10.16~2001.1.24	72㎡	豆谷	本報告
第81次	鍵271-1 北側道路	下水道工事	2000.10.30~11.6	3㎡	清水	『田原本町埋蔵文化財調査年報』10 2001年
第82次	鍵309-1	店舗建築	2000.11.13~2001.1.31	237㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査年報』10 2001年
第84次	唐古121-1	範囲(内容)確認	2001.5.18~11.10	424㎡	豆谷・藤田 慎一	本報告
第88次	鍵305 北側道路	下水道工事	2002.7.1~7.24	51.23㎡	豆谷 奥谷 知日朗	『田原本町埋蔵文化財調査年報』12 2003年
第89次	唐古121-1	範囲(内容)確認	2002.7.30~12.11	500㎡	豆谷・奥谷	本報告
第90次	唐古62-1	事務所の建築	2002.9.11~10.29	70㎡	清水	『田原本町埋蔵文化財調査年報』12 2003年
第93次	唐古117-1、118、121-1	範囲(内容)確認	2003.5.19~12.11	480㎡	豆谷・奥谷	本報告
第94次	鍵384-1	個人住宅	2003.7.2~7.14	18㎡	清水	『田原本町埋蔵文化財調査年報』13 2004年
第95次	鍵349他 東側道路	下水道工事	2003.8.4~8.11	12㎡	清水	『田原本町埋蔵文化財調査年報』13 2004年
第96次	鍵278	防火水槽の設置	2003.8.19~9.9	45㎡	奥谷	『田原本町埋蔵文化財調査年報』13 2004年
第97次	鍵283-4他 南側道路	下水道工事	2003.11.21~12.2	17㎡	奥谷	『田原本町埋蔵文化財調査年報』13 2004年
第99次	鍵279-1他	下水道工事	2004.7.17~9.18	26㎡	奥谷	『田原本町埋蔵文化財調査年報』14 2006年
第101次	鍵312 西側道路	下水道工事	2005.7.27~10.22	27㎡	奥谷	『田原本町埋蔵文化財調査年報』15 2006年
第102次	鍵271-5	集会所の建築	2006.1.16~2.6	45㎡	奥谷	『田原本町埋蔵文化財調査年報』15 2006年



第284図 西地区の位置 (S = 1/5,000)

た。西地区は、遺跡範囲が北側へと拡大するとともに、池西側と国道沿いで居住域を二分する必要も考えられた。続いて唐古池の西側でおこなった第84・89・93次調査では、弥生時代中期中葉の大型建物跡を検出し、西地区において2棟目の大型建物跡が明らかとなった。

なお、西地区では上述のような華々しい成果を上げる発掘調査の一方で、現鍵集落が位置することから、下水道工事に伴う小規模で地味な発掘調査が続けられていたことも付記しておかなければならない。第81・88・95・97・99・101次は、下水道工事に伴う開削及びマンホール部分での発掘調査である。限られた面積での調査ではあったが、結果的にこれまで不明であった現鍵集落内に多数の試掘坑を設置したこととなり、遺跡南西部におけるおおよその環濠帯部分と居住域が把握できるようになった。

このように、唐古・鍵遺跡の西地区とは、発掘調査によって明らかになった遺跡範囲西側における弥生時代前期から古墳時代初頭に及ぶ遺構の集中区のことであり、微高地という地形に形成要因が考えられている。西地区の範囲として、南北は北の第79次調査区から南の第16次調査区までの約350m、東西は東の第8次調査区から西の第62次調査区までの約200mの居住域が想定される。その周囲を、第13・19・29次調査区の北西環濠帯や、第16・58・73次調査区の南側区画溝群（南地区の北側区画溝群と一連のものと想定）といった、大溝群がめぐっていたと考えられる。

西地区は広大であり、地点によって様々な様相をみせている。このため、既往の調査の報告にあたっては、調査次数の順番に並べるよりも、近接する調査区をまとめて遺構のつながりが把握できるように考慮した。そして、検出遺構の内容から西地区を大きく4区分することとした。また、現鍵集落内でおこなわれた下水道マンホール部分の調査については、小規模で点在することから、便宜的に「その他」としてまとめた。

1. 居住域 : 第8・11・14・20・22・38・46・74・82・88次
2. 区画溝域 : 第16・58・71・73・81・96・102次
3. 西環濠帯 : 第41・62・68・94次
4. 北西環濠帯 : 第13・19・29・90・101次
5. その他 : 第95・97・99次

このうち、「1. 居住域」については、既往の調査分は居住域の南側に偏り、その北側のもは範囲（内容）確認調査分の第79・80・84・89・93次調査であり、第2節以下に詳細を報告している。

なお、本章においては西地区の範囲を、南側区画溝群を越えてその南側も含めている。これは、第IV章「第1節 唐古・鍵遺跡の集落構造と変遷」で、南側区画溝群の以南を南地区とする設定とは異なっている。この点については、鍵集落内でおこなわれた下水道工事が居住域から南側区画溝群、さらにはその南側へと及んだため、本章では報告形式として便宜的に西地区に含めている。実際のところ、南側区画溝群から南側の面的な調査はおこなわれておらず、これを南と西どちらの地区に含めるべきか判断材料はなく、極めて流動的な場所である。

1. 居住域

第8・22次調査

a. 第8次調査

調査区 第8次調査区は、国道24号線の東隣接地に位置する。範囲確認として、田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査をおこなった。調査区は、東西19m、南北8mの長方形の第1トレンチと、それより北へ26m離れて、補足のため全長14m、幅2.5mのL字形の第2トレンチを設定した。

遺構検出面 本調査区では、中世、弥生時代中・後期、弥生時代前期の3面の遺構検出面を確認した。中

世の遺構検出面は、庄内期の包含層と考えられる第IV層：褐色土の上面で、標高46.90mである。弥生時代中・後期の遺構検出面は、第V層：黄灰色土または灰褐色砂礫の上面で、標高46.80mである。弥生時代前期の遺構検出面は、第VI層：青灰色シルトの上面で、標高46.70mである。

検出遺構 弥生時代前期は、木器貯蔵穴と考えられる大型土坑が集中する。弥生時代中期は前葉の小溝群が集中する。弥生時代中期後葉～後期前葉、庄内期の遺構は確認できず、弥生時代後期の遺構はいずれも後葉の井戸と考えられる。中世は、屋敷地を囲んだと考えられる大溝を検出している。

弥生時代前期 : 土坑12基

弥生時代中期 : 土坑8基、溝10条

弥生時代後期 : 土坑3基

弥生時代の柱穴 : 39基

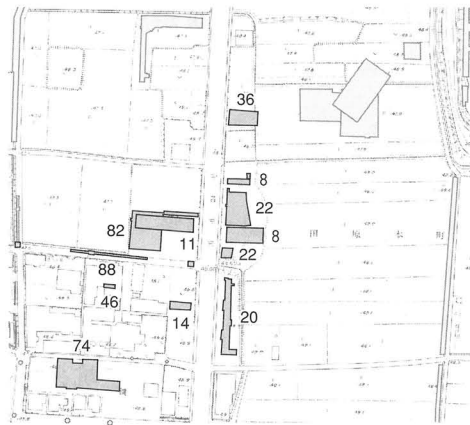
中世 : 土坑4基、井戸1基、大溝1条、溝2条

備考 弥生時代前期のSK-01・11・16・17からは、彩文土器が出土した。弥生時代中期の小溝であるSD-11からは、管玉が出土している。弥生時代後期のSK-02・03・05からは、多量の完形土器が出土している。

b. 第22次調査

調査区 第22調査区は、国道24号線の東隣接地に位置し、その一部は範囲確認として第8次調査がおこなわれている。宅地造成に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査は、南北18mで東西10m（北辺）～14m（南辺）の台形にちかい第1トレンチと、第8次調査の第1トレンチを挟んだ6×5mの方形の第2トレンチを設定している。

遺構検出面 本調査区の遺構検出面は、中世素掘小溝の検出面がやや上位となるものの、弥生時代前期～中世は、第IV層：黄褐色粘質土あるいは黄褐色砂質土の上面一面のみで、標高46.90mを前後とする。



第285図 居住域調査区の位置 (S = 1/4,000)

検出遺構 弥生時代前期は、第8次調査区と同様に木器貯蔵穴と考えられる大型土坑が集中する。また、弥生時代前期前葉と考えられる掘立柱建物跡を検出している。弥生時代中期は井戸と考えられる大型土坑が点在する。弥生時代後期の遺構は確認できなかった。中世は、第8次調査と一連で屋敷地を囲んだと考えられる大溝を検出しており、東西方向に分岐することが判明した。

弥生時代前期 : 土坑7基、大溝1条、掘立柱建物跡1棟、大型柱穴1基

弥生時代中期初頭～前葉 : 土坑5基

弥生時代中期中葉 : 土坑3基

弥生時代中期後葉 : 土坑1基

弥生時代時期不明 : 土坑3基

中世 : 土坑2基、井戸1基、大溝2条、溝4条

備考 木器貯蔵穴と考えられる大型土坑は、弥生時代前期後葉～中期初頭のものである。中世のSK-51から出土した独鈷石や内傾口縁土器は、本来こうした時期の遺構に伴う遺物であろう。特筆すべき遺物として、大型絵画土器がある。その破片は第8・38次調査区まで散在していたもので、1片のみ本調査区SK-101の上層から出土している。大和第IV様式短頸壺の肩部に、鹿・建物・人物をパノラマ状に描いている。

第11・82・88次調査

a. 第11次調査

調査区 第11次調査区は、第8次調査区と国道24号線を挟んで向かい合ったその西側に位置する。範囲確認として、田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査をおこなった。調査区は、東西30m、南北7mの長方形トレンチを設定した。

遺構検出面 本調査区では、中世、弥生時代中・後期～古墳時代後期、弥生時代前期の3面の遺構検出面を確認した。中世の遺構検出面は、第Ⅲ層：黒褐色土の上面で、標高47.96mである。弥生時代中・後期～古墳時代後期の遺構検出面は、第Ⅳ層：黄灰色土または灰褐色砂の上面で、標高46.80mである。弥生時代前期の遺構検出面は、第Ⅴ層：青灰色シルトの上面で、標高46.46mである。

検出遺構 道路を挟んだ第8次調査区と同様に、弥生時代前期の大型土坑が分布する。弥生時代中期には住居跡と考えられる小溝・柱穴があるが、弥生時代中期後葉の遺構は検出されていない。弥生時代後期後葉～布留期の土坑が検出された。また、本調査時において、古墳周溝の可能性を想定しつつ性格不明とされた落ち込みは、第82次調査の結果、古墳周溝であることが判明している。

弥生時代前期 : 土坑20基

弥生時代中期 : 土坑5基、住居跡1棟、柱穴群

弥生時代後期 : 土坑3基

古墳時代：土坑3基、古墳1基

中世：土坑7基、井戸1基、大溝2条

備考 弥生時代前期の大型土坑には、ドングリを集積したものが1基あった。この他、弥生時代前期遺構からは、稲の穂束や縄文時代晩期後半の凸帯文土器が出土している。古墳時代前期の土坑も検出しており、本調査区が長期にわたる居住域であったと考えられる。また、古墳時代後期の方墳や中世遺構の検出は、本調査区が微高地であることを示すものといえよう。なお、弥生時代後期の土坑から出土した鶏頭形土製品は特筆できる。

b.第82次調査

調査区 第82次調査区は、第11次調査区の西側を含んだ店舗新築部分の南北20m、東西17mと、北側擁壁部分の東西20m、南北2mである。このうち、第11次調査区部分の約100㎡については、調査済みのため除外した。発掘調査は田原本町教育委員会がおこなった。

遺構検出面 本調査区では、中世～近世の素掘小溝による削平が著しい。特に調査区南側では、素掘小溝の切り合いが著しく、その堆積土を上面として検出面は2面（第Ⅲ層上面、第Ⅳ層上面）に及んだ。この直下の標高46.70mが、弥生時代前期～中世の遺構検出面となる。これに対し、調査区北側では、水田床土直下の標高47.00mが弥生時代前期～中世の遺構検出面（第Ⅴ層上面）となる。北側と南側における弥生時代前期～中世の遺構検出面の比高差は0.30mである。

検出遺構 第11次調査区と同様に弥生時代前期の大型土坑が分布する。これらから出土する前期弥生土器は本遺跡においては古相の一群である。弥生時代中期の遺構は、上面を中近世素掘小溝により著しい削平を受けていたが、並行する2条の小溝を検出した。この小溝は、第8次調査区の小溝群に繋がるものであろう。第11次調査区では確認出来なかった弥生時代中期後半～後期初頭にかけての遺構として、井戸のSK-106がある。この他、第11次調査区で検出していたものに加え、新たにもう1基の古墳周溝を検出した。

弥生時代前期：土坑多数

弥生時代中期前葉：土坑1基、小土坑

弥生時代中期中葉前半：小溝3条

弥生時代中期中葉後半：土坑2基

弥生時代中期後葉：土坑1基

弥生時代後期後葉：土坑2基

古墳時代：小土坑1基、方墳2基

中世：土坑1基、大溝3条、柱穴

備考 本調査区における弥生時代遺構の検出標高は47.00mであるが、これらの遺構が上面を削平されていることを勘案するならば、旧地表面はより高く、微高地であったことを示している。そして、本調査区には、前期弥生土器でも古相のものが集中し、弥生時代中期の井戸が継続して掘削されている。このことから、安定した居住域であったと考えられる。

c.第88次調査

調査区 第88次調査区は、第11・82次調査区と第14次調査区に挟まれた東西道路部分に位置する。下水道管の埋設に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査は開削部分の延長40mと、立坑3ヶ所が対象となった。生活道路のため即日埋め戻しが要求され、弥生時代遺構検出面まで機械力をもって除去した。

遺構検出面 本調査区における弥生時代遺構検出面は、標高47.00m前後である。

検出遺構 本調査区では、弥生時代前期の木器貯蔵穴と考えられる土坑、布留期の井戸、古墳周溝を検出しており、北側に隣接する第11・82次調査区の内容と類似する。

弥生時代前期：土坑5基

弥生時代中期：土坑5基、小溝1条

弥生時代後期：土坑2基

古墳時代初頭：土坑1基

古墳時代後期：方墳1基

中世：井戸1基、大溝3条、素掘小溝3条

備考 弥生時代前期の土坑は、いずれも平面が楕円あるいは隅丸方形を呈するもので、北接する第11・82次調査区から続く木器貯蔵穴群と考えられる。弥生時代中期前葉のSK-2104は、径1.00m、深さ0.80m以上で井戸と考えられる。本坑からは、搬入品と考えられる壺が出土した。古墳時代初頭のSK-2106は、径0.80m、深さ1.10mで井戸と考えられ、壺や布留甕が出土した。本調査区は、安定した居住域であったと考えられよう。

第14次調査

調査区 第14次調査区は、第11次調査区から南へ約40mの地点にあって、第20次調査区とは国道24号線を挟んだその西側に位置する。田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は東西に長い長方形で、東西12m、南北4mである。

遺構検出面 本調査区では、中世、弥生時代後期、弥生時代前期の3面の遺構検出面を確認した。中世の遺構検出面は、第V層：黒褐色土の上面で標高47.60mである。弥生時代後期遺構検出面は、第VI層：暗黄褐色土の上面で、標高47.40mである。弥生時代前期遺構検出面は、第VII層：暗黄褐色粘土層の上面で、標高47.10mである。

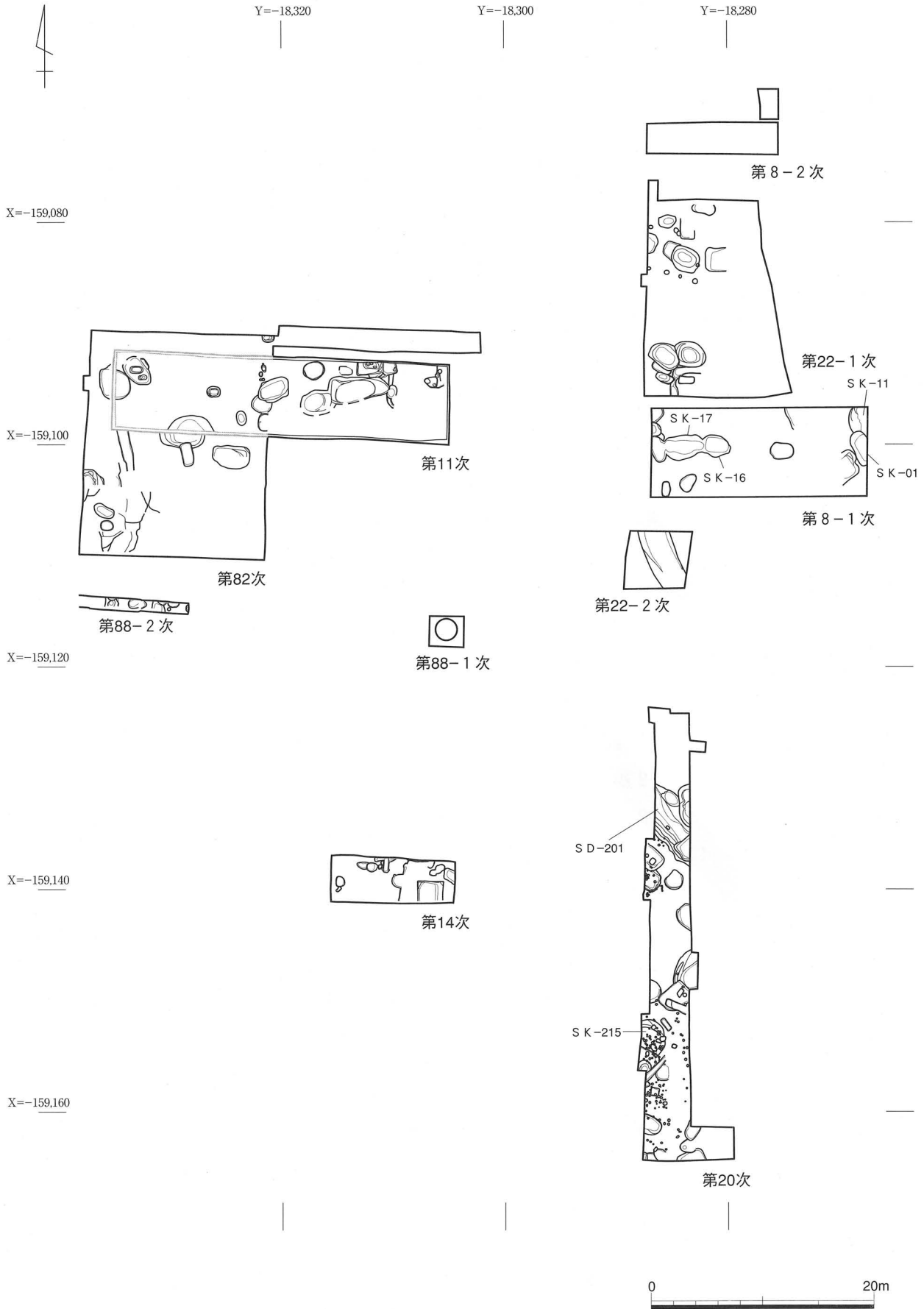
検出遺構 検出した遺構は、弥生時代前期の大型土坑と、弥生時代後期の井戸を検出している。その他は、550基に及ぶ柱穴である。柱穴の埋土は大きく3色に分かれ、切り合い関係がある。この他、中世の掘立柱建物跡を検出している。

弥生時代前期：土坑10基

弥生時代後期：土坑11基、柱穴約550基

中世：土坑8基、溝3条、掘立柱建物跡2棟

備考 本調査区では、古相の前期弥生土器が出土する。本調査区から第8・11次調査区にか



第286図 居住域① 弥生時代前期遺構配置図 (S = 1/500)

けて、この時期の遺構が集中することは注目されよう。これに対し、弥生時代中期及び後期初頭の遺構は認められない。この点については、小面積であるため評価はしにくい。特筆すべき遺物として、青銅製の素文鏡や送風管、弧帯文を有する土器片などが出土した。

第20次調査

調査区 第20次調査区は、第8次調査区の南側にあたり、第14次調査区とは国道24号線を挟んで東へ約20mに位置する。造成工事に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は南北に主軸をもったL字形で、長さ35mで幅3.0～4.5m、その南端を東方向に4m拡張した。

遺構検出面 本調査区では、弥生時代中・後期～中世、弥生時代前期の2面の遺構検出面を確認した。弥生時代中・後期～中世の遺構検出面は、第Ⅲ'層：暗茶灰色粘質土の上面で、標高47.30mである。弥生時代前期の遺構検出面は、第Ⅳ層：暗黄褐色粘質土の上面で、標高47.15mである。

検出遺構 弥生時代前期は、木器貯蔵穴と考えられる土坑を多数検出している。弥生時代中期には、調査区南半が柱穴の集中区となり、炭灰土坑も検出されることから、竪穴住居跡の切り合いが予想される。これに対し、調査区北半には井戸と考えられる大型土坑が多い。弥生時代中期後葉及び弥生時代後期後葉の遺構は希薄である。

弥生時代前期 ：土坑13基、大溝1条、溝2条

弥生時代中期前葉：土坑3基、溝2条

弥生時代中期中葉：土坑7基、溝3条

弥生時代中期後葉：土坑2基、溝1条

弥生時代後期初頭：土坑2基

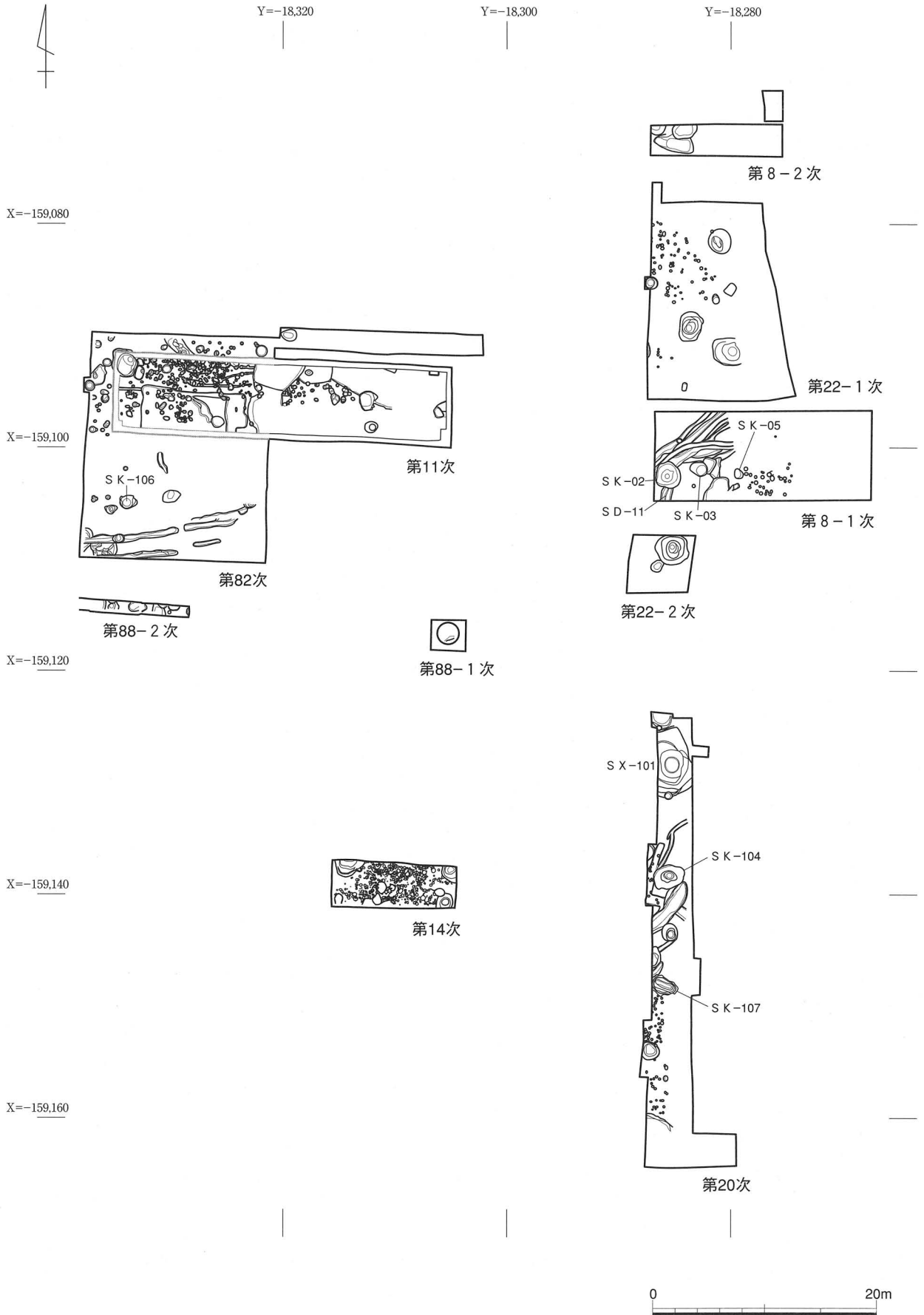
古墳時代 ：古墳？1基

中世 ：大溝1条、溝1条

備考 弥生時代前期のSK-215は、中層から炭化米、焼土塊とともに多量の前期弥生土器が出土した。これらの下面には、土製投弾9点がまとまっていた。下層からは、2点の縦斧柄未成品と柱材1点が出土した。弥生時代中期中葉のSX-101は、規模が長径約6.5m、短径推定約5.0mに及び、深さは2.40mを測る巨大な井戸である。中層からは卜骨や完形土器等が出土している。また、SK-107からは、卜骨が壺に入って出土した。その他、大型の大和型甕を枠に使用した集水施設を検出している。弥生時代後期初頭のSK-104は井戸と考えられるが、中層から完形の短頸壺と穿孔したイノシシの下顎骨が出土した。上層には多量の土器が廃棄されていた。

第46次調査

調査区 第46次調査区は、第11次調査区から南へ約40mの地点、第14次調査区から西へ約30m



第287図 居住域① 弥生時代中・後期遺構配置図 (S = 1/500)

に位置する。農家住宅の新築に伴う発掘調査であるが、建物部分の基礎は遺構検出面に達しないため浄化槽部分についてのみ、田原本町教育委員会がおこなった。調査区は東西に長く、長さ6m、幅1.8mである。

遺構検出面 本調査区の大半は、南北方向の中世大溝内であり、調査区西端で検出した西肩に中世以前の堆積が残存していた。近世、中世、弥生時代前・中期の3面の遺構検出面を確認した。近世の遺構検出面は、中世大溝の堆積土上面で、標高47.40mである。中世の遺構検出面は、第IV層：黒褐色粘質土の上面で、標高47.30mである。弥生時代前・中期の遺構検出面は、第VI層：黒褐色粘土層の上面で、標高46.90mである。

検出遺構 本調査区では、調査区の大半を中世大溝が占め、その西肩の一部で弥生時代中期初頭の落ち込みが残存していた。

弥生時代中期初頭：落ち込み1条

中世：大溝1条

近世：井戸1基

備考 弥生時代中期初頭の落ち込みについては、その輪郭を検出することができず、性格は不明である。本遺構からは、武器形木製品が出土している。また、その堆積土上面からは、弥生時代と考えられる複数の遺構が切り合っているように北壁断面において観察できるが、詳細な時期は不明である。

第38次調査

調査区 第38次調査区は、第19次調査区と国道24号線を挟んで向かい合ったその東側において、第22次調査区からは北へ約40mに位置する。資材置場の造成に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は東西に長い長方形で、東西12m、南北6mである。

遺構検出面 本調査区では、弥生時代中期～中世、弥生時代前期の2面の遺構検出面を確認した。弥生時代中期～中世の遺構検出面は、第IV層：淡黒褐色土の上面で、標高46.80mである。弥生時代前期の遺構検出面は、第VII層：黄灰色粘質土の上面で、標高46.60mである。

検出遺構 本調査区では、弥生時代前期～中期初頭の木器貯蔵穴と考えられる土坑群を検出した。また、古墳時代初頭の井戸と考えられる土坑も検出している。

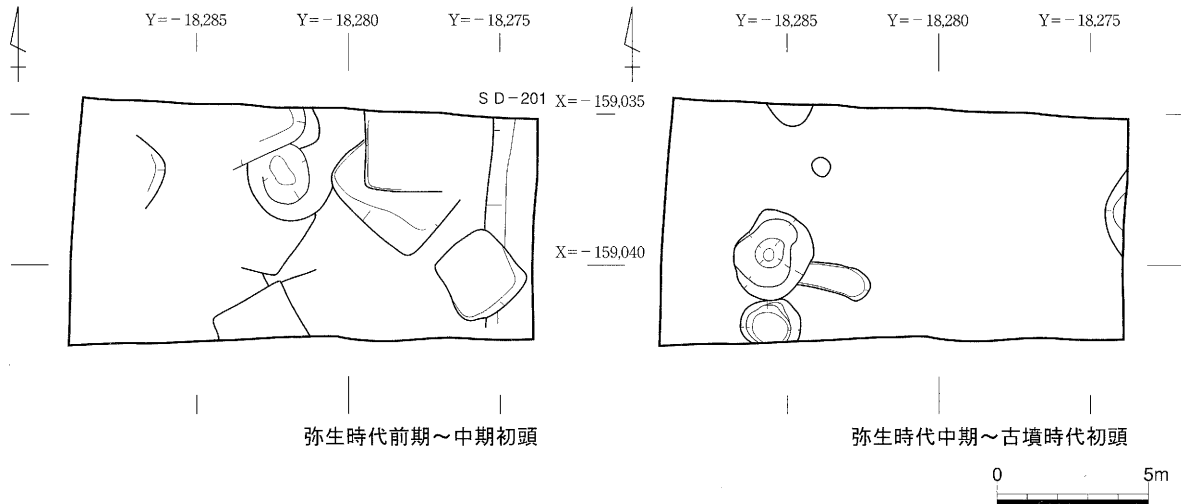
弥生時代前期～中期初頭：土坑9基、大溝1条

弥生時代中期：土坑3基

古墳時代初頭：土坑1基

中世：大溝2条、素掘小溝

備考 弥生時代前期の土坑群からは、広鉢や高杯の未成品、竪杵等の木製品が出土し、木器貯蔵穴と考えられる。また、SD-201は幅1.10m以上、深さ0.90mを測り、木製品や獣骨、土器などが多量に出土した。なお、中世大溝からは、第22次調査で出土した大型絵画土器と接合する破片や子持ち勾玉が出土している。



第288図 第38次調査区 遺構配置図 (S = 1/250)

第74次調査

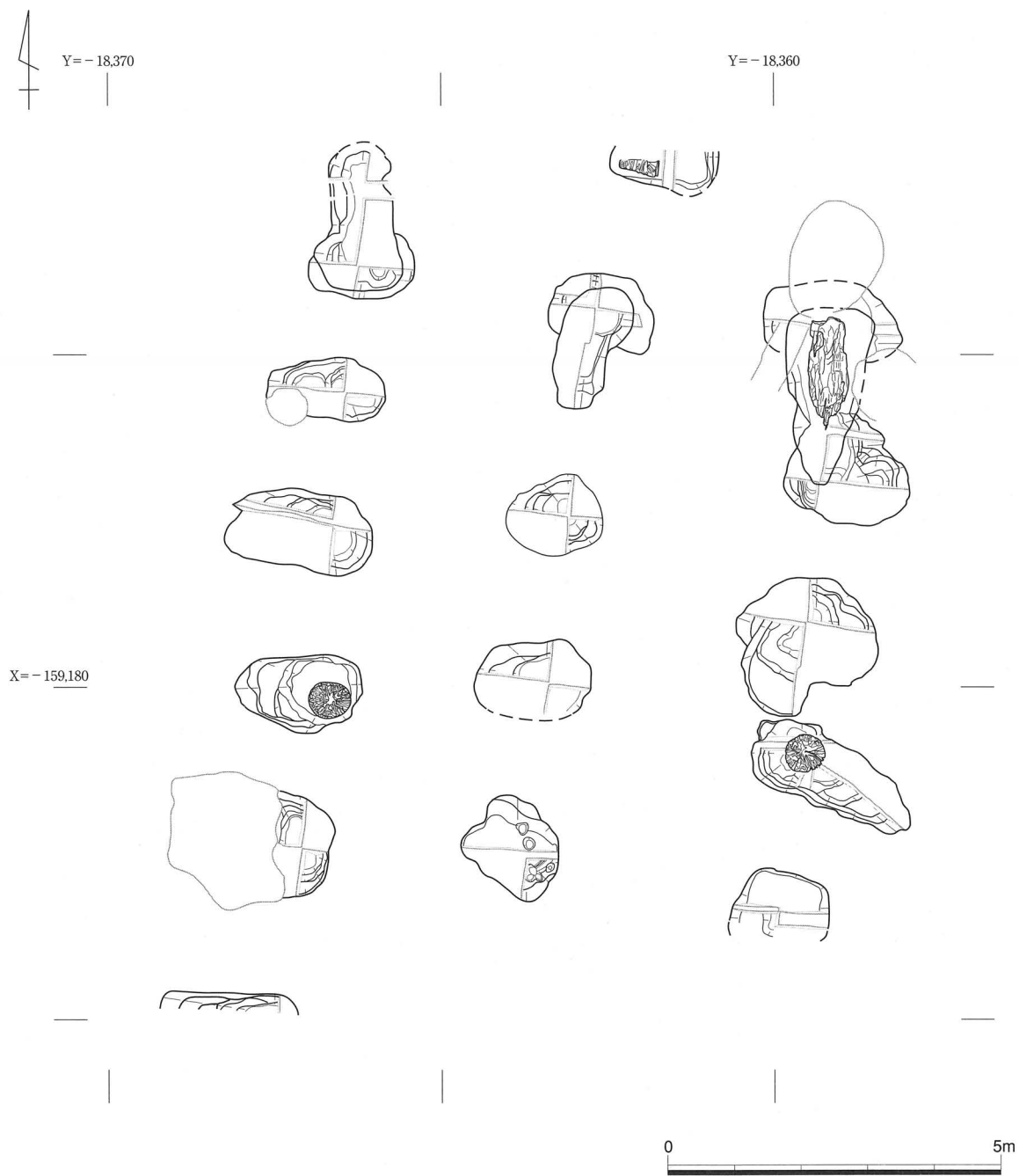
調査区 第74次調査区は、第73次調査区から北へ約15mに位置する。個人住宅の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。当初、重要遺跡の内容確認調査として、長さ25m、幅5mの東西トレンチを設定したが、期せずして大型建物跡の柱根を検出し、これを中心として調査区西側を南北15m、東西22mに拡張した。

遺構検出面 本調査区では、水田床土の直下が弥生時代～中世の遺構検出面となる。弥生時代～中世の遺構検出面は、第Ⅳ層：明緑（黄）灰色シルトの上面で、標高46.80mである。

検出遺構 検出した遺構は、弥生時代前期から中世にわたる。このうち、特筆されるのは、弥生時代中期前葉の大型建物跡である。また、庄内期の方形周溝状遺構は、墓の可能性が想定される。

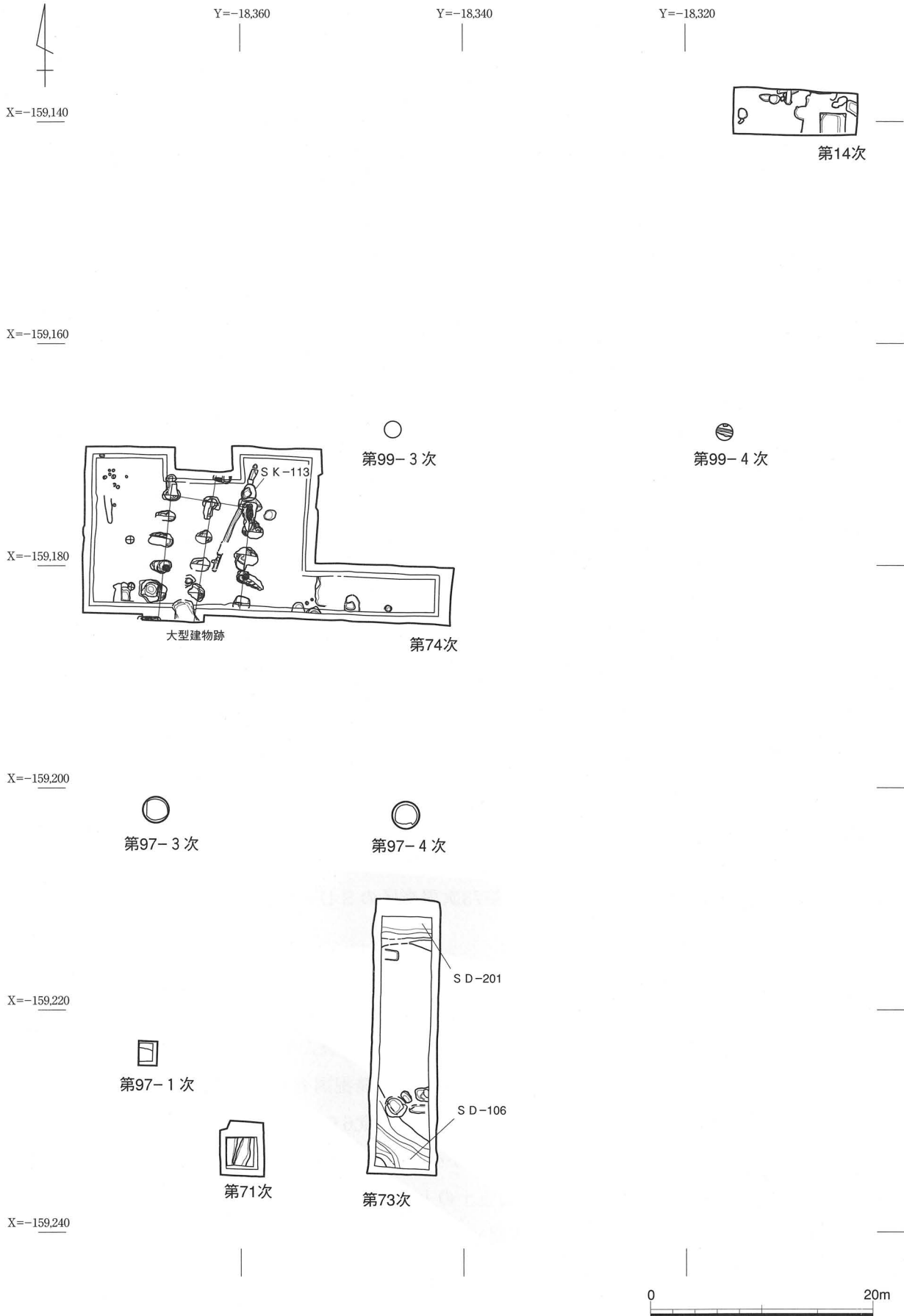
- | | |
|-------------|-----------------|
| 弥生時代前期～中期初頭 | ：土坑4基、溝1条 |
| 弥生時代中期前葉 | ：土坑1基、大型建物跡1棟 |
| 弥生時代中期中葉 | ：土坑4基、溝1条 |
| 弥生時代中期後葉 | ：土坑2基 |
| 弥生時代後期 | ：土坑4基 |
| 古墳時代初頭 | ：土坑1基、方形周溝状遺構1基 |
| 中世 | ：大溝1条 |

備考 本調査区で検出した弥生時代前期～中期初頭の土坑は、いずれも木器貯蔵穴である。大型建物跡の北東隅柱を切った大和第Ⅲ-2様式のSK-113からは、戈形木製品や鹿角製間接具付膝柄横斧が出土している。弥生時代後期～古墳時代初頭の土坑は、いずれも井戸である。このうち、SK-119の中・下層からは、大和第Ⅵ-3様式の半・完形品が15点出土している。



第289図 第74次調査区 大型建物跡平面図 (S = 1/100)

弥生時代中期前葉の大型建物跡は、南-北に主軸をもつ総柱型の掘立柱建物で北妻側に独立棟持柱を確認している。規模は、梁間2間の7.00m、桁行5間以上の11.40m以上で、南側妻部を確認しておらず桁が南に延びる可能性もある。北独立棟持柱、北東隅柱、東側柱と西側柱の北から4番目には、柱根が残存していた。柱材は、北独立棟持柱はヤマグワ、その他はケヤキであった。柱穴掘形内から出土する土器は、大和第Ⅱ-2様式である。



第290図 居住域② 弥生時代中期遺構配置図 (S = 1/500)

2. 区画溝域

第16次調査

調査区 第16次調査区は、第8・11次調査区から南へ約150mに位置する。造成工事に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は南北に主軸をもったL字形で、長さ43mで幅3.2m、その南端を東に5m屈曲させている。

遺構検出面 本調査区では、中世素掘小溝、中世大溝、弥生時代前・中期の3面の遺構検出面を確認した。弥生時代の遺構検出面は、第V層：黄灰色微砂の上面で標高47.10mである。

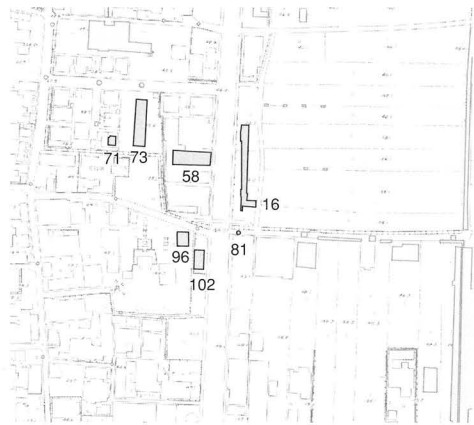
検出遺構 本調査区では、弥生時代前期～中期の遺構を検出した。弥生時代後期及び古墳時代初頭の遺構は確認できなかった。

弥生時代前期：土坑2基、大溝3条

弥生時代中期：土坑1基、大溝3条、柱穴多数

中世：大溝1条

備考 弥生時代前期の大溝であるSD-105・106は、約7.0mの間隔をもって並走しており、この時期に西地区の東側を画していた環濠となる可能性がある。また、SD-105を中心とする周辺の遺構からは流紋岩製石庖丁の未成品や剥片等が多量に出土しており、付近で製作されていたことが想定される。SX-103は、底部と胴部上半を打ち欠いた大型壺胴部片を砂層に据えた弥生時代前期の集水施設である。調査区南端で検出した大溝のSD-102は、第58次調査区のSD-106、第73次調査区のSD-106へと繋がるものであろう。また、弥生時代中期後葉の大溝であるSD-101についても、第73次調査区のSD-102・103へ繋がることが想定される。



第291図 区画溝域調査区の位置 (S=1/4,000)

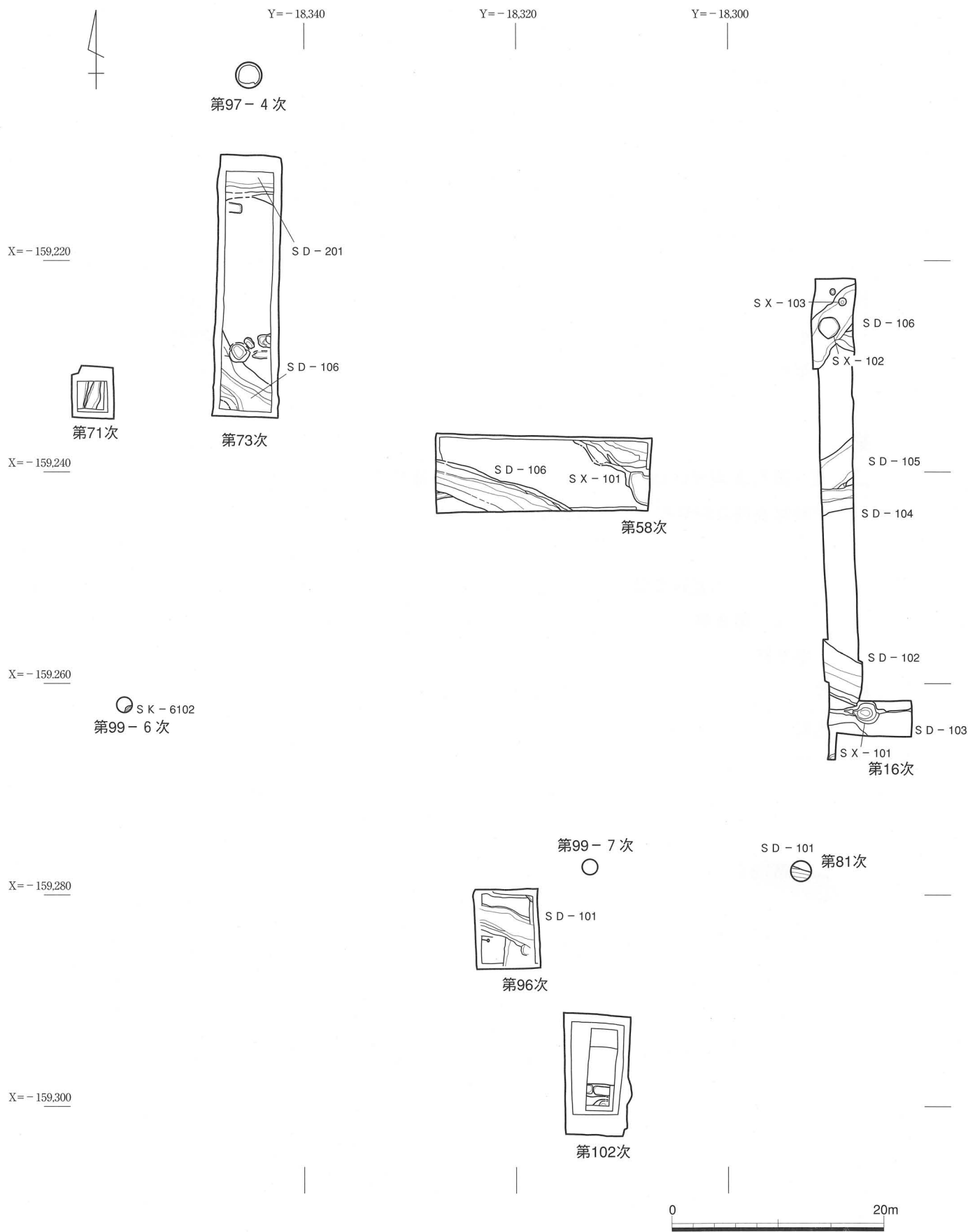
第58次調査

調査区 第58次調査区は、第16次調査区とは国道24号線を挟んで向かい合ったその西側に位置する。店舗付住宅建築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、東西に長い長方形であるが西側にやや開き、東西20m、南北6.6～7.6mである。

遺構検出面 本調査区では、水田床土の直下が弥生時代～中世の遺構検出面となる。弥生時代～中世の遺構検出面は、第Ⅲ層：暗黄褐色土の上面で標高47.30mである。

検出遺構 検出した遺構は、弥生時代前期～中期、中世のもので、弥生時代後期～古墳時代初頭は確認できない。

弥生時代前期：土坑2基、大溝1条、柱穴



第292図 区画溝域 弥生時代前期～中期中葉遺構配置図 (S = 1/500)

弥生時代中期前葉：大溝1条、落ち込み1条

弥生時代中期中葉：土坑1基、小溝5条

弥生時代中期後葉：土坑2基

弥生時代後期初頭：土坑2基

中世：土坑4基、大溝1条

備考 弥生時代前期のSK-201は、木器貯蔵穴と考えられ、古相の前期弥生土器が出土する。弥生時代中期前葉の大溝であるSD-106は、第16次調査区のSD-102に繋がるものと考えられる。また、この下層からは、同一方向に走行する弥生時代前期の大溝であるSD-201が検出された。弥生時代中期中葉以降には、本調査区の大溝は埋没しており、井戸と考えられる土坑や小溝が検出されることから居住域となっていたことが考えられる。弥生時代後期後葉の遺構は認められなかった。

第71次調査

調査区 第71次調査区は、第73次調査区の西隣接地に位置する。個人住宅の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。住宅建築予定地の南東端に、4×4mの正方形の調査区を設定した。

遺構検出面 本調査区では、近世、弥生時代中期の2面の遺構検出面を確認した。近世の遺構検出面は、第Ⅲ層：茶褐色粘質土の上面で、標高47.40mである。弥生時代中期の遺構検出面は、第Ⅴ層：黄灰色砂質土の上面で、標高47.00mである。

検出遺構 検出した遺構は、弥生時代中期と近世の大きく2時期に分かれる。

弥生時代中期以前：土坑2基

弥生時代中期：溝2条

近世：大溝1条

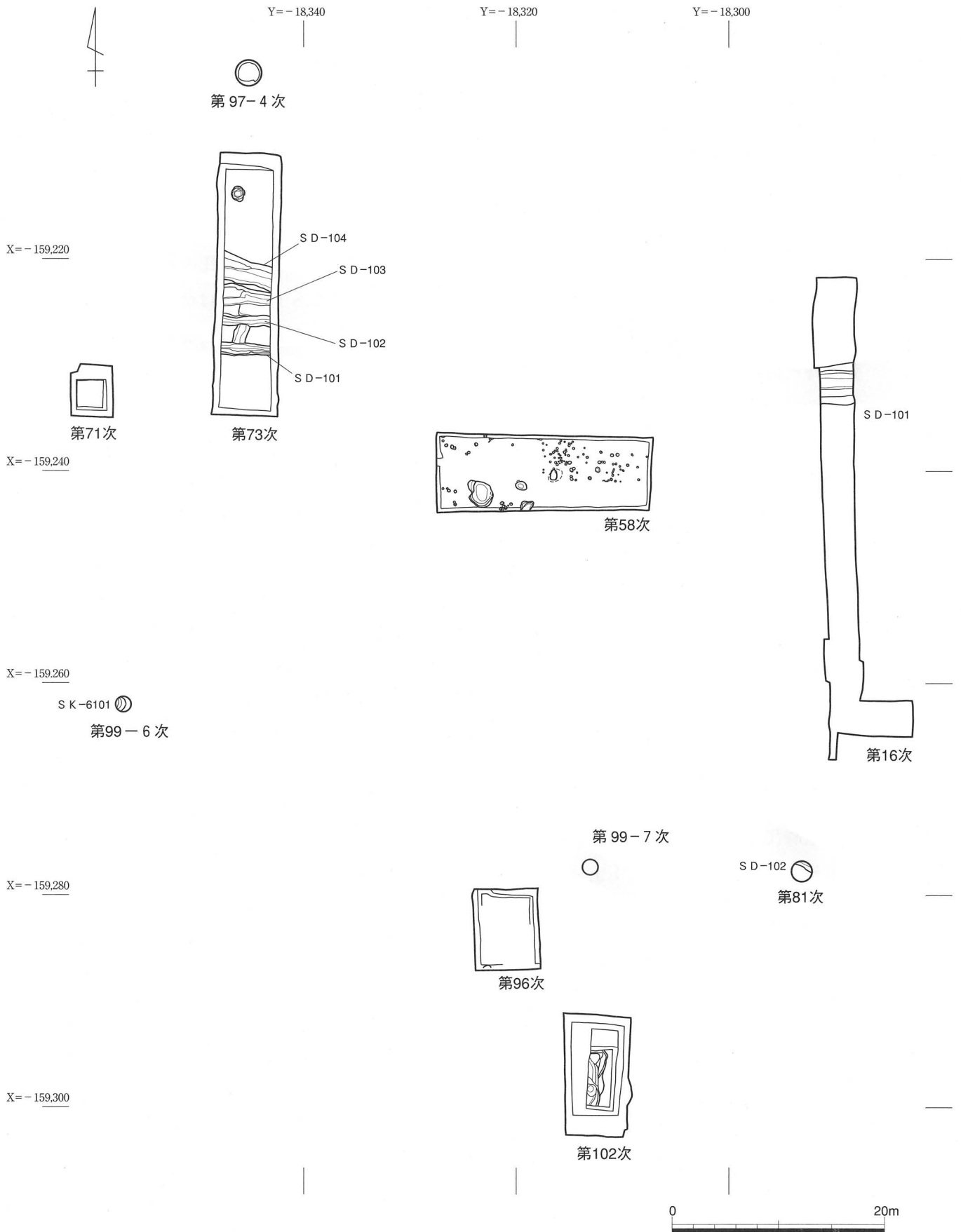
備考 弥生時代中期前葉～中葉の遺構として、南-北に並走する小溝2条を検出した。位置的には、第73次調査区で検出した大溝群の南に位置し、これらが取り付いていた可能性が考えられる。

第73次調査

調査区 第73次調査区は、第58次調査区の西隣接地に位置する。分譲住宅の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、分譲地の道路部分で設定したため南北に長い長方形となり、南北23m、東西4.5mである。

遺構検出面 本調査区では、水田床土の直下が弥生時代遺構検出面となる。弥生時代遺構検出面は、第Ⅳ層：灰色系砂の上面で、標高47.00mである。

検出遺構 検出した遺構は、弥生時代前期から弥生時代後期後葉にわたる。弥生時代前期の遺構からは、古相の土器が出土し、第8・11・14次調査区における前期遺構集中区の縁辺にあ



第293図 区画溝域 弥生時代中期後葉～後期遺構配置図 (S = 1/500)

たるものと考えられる。弥生時代中期前葉には大溝群が掘削され、一部は弥生時代中期中葉まで継続する。弥生時代中期後葉～後期の遺構分布密度は低いものと考えられる。

弥生時代前期 : 土坑1基、溝1条、落ち込み1条

弥生時代中期前葉 : 土坑5基、大溝4条

弥生時代中期後葉 : 溝3条

弥生時代後期 : 土坑1基

備考 本調査区では、弥生時代中期前葉～中葉にかけて集落内部を画した大溝群が明らかとなった。このうち、調査区北端のSD-201と南端のSD-106は弥生時代中期前葉で埋没するが、これらが埋没する頃に掘削されたSD-103・104のうちSD-103は弥生時代中期中葉に再掘削されている。弥生時代中期後葉には2条の小溝群へと変化する。なお、本調査区の弥生時代前期遺構より出土する土器は古相のものである

第81次調査

調査区 第81次調査区は、第16次調査区から南へ約10mに位置する。国道24号線に沿って設置された下水本管から分枝する支管への発信立坑の設置に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。直径2m弱の立坑部分がそのまま調査区となった。

遺構検出面 本調査区の面積は狭小で、ほとんどが遺構堆積土内となっている。このため、遺構堆積土上面をもって、遺構検出面とする。中・近世、弥生時代の2面の遺構検出面を確認した。中・近世の遺構検出面は、中世溝堆積土の灰褐色粘土の上面で、標高47.10mである。弥生時代の遺構検出面は、溝堆積土である黒灰色粘質土の上面で、標高46.80mである。

検出遺構 検出した遺構は、弥生時代中期中葉～後期と、中世、近世の大きく3時期に分かれる。

弥生時代中期中葉 : 溝1条

弥生時代中期後葉～後期 : 溝1条

中世 : 土坑3基、溝1条、素掘小溝

近世 : 素掘小溝

備考 弥生時代中期の溝2条は、おおよそ東-西に走行すると考えられ、南地区から続く谷地形に掘り込まれたものであろう。

第96次調査

調査区 第96次調査区は、現鍵集落内でおこなった調査では最も南側にあたり、第58次調査区から南へ約35mに位置する。防火水槽の設置に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は南北にやや長い方形で、南北7.5m、東西6.0mである。

遺構検出面 本調査区では中・近世、弥生時代中期前葉の2面の遺構検出面を確認した。近世の遺構検出面は、中世大溝堆積土の暗褐色粘質土の上面で、標高47.80mである。弥生時代

中期初頭の遺構検出面は、第Ⅵ層：茶灰色微砂の上面で、標高47.40mである。

検出遺構 本調査区の全体が、中・近世大溝の堆積土内であり、これを除去して弥生時代遺構を検出している。さらに、調査区北半は、弥生時代中期初頭の大溝堆積土内である。大型遺構の切り合いが激しい。

- 弥生時代前期　　：溝1条
- 弥生時代中期初頭：土坑1基、大溝1条
- 弥生時代中期中葉：土坑1基
- 中世　　　　　　：土坑3基、大溝1条、溝2条
- 近世～現代　　　：土坑1基、大溝1条

備考 本調査区の北半において検出した大溝のSD-101は、西北西－東南東に走行する。幅は4.0m以上と考えられ、深さは1.40mである。下層から大和第Ⅱ-1様式、上層から大和第Ⅲ-1様式の土器が出土する。なお、本溝の北肩は、南肩ほど立ち上がりず調査区の北東隅で再び落ち込んでいる。第61・65次調査区で検出した弥生時代中期前葉の大溝群のような、谷地形に掘り込まれた大溝群が想定できよう。

第102次調査

調査区 第102次調査区は、第96次調査区の東側に位置する。自治会集会所の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は南北に長い長方形で、南北11.5m、東西6.0mに設定したが、造成土が厚く安全の為周囲に犬走りを確保したことにより、旧地表面以下の調査区は南北9.0m、東西5.0mとなった。

遺構検出面 本調査区では弥生時代中期中葉～中世、弥生時代前期～中期初頭の2面の遺構検出面を確認した。中世の遺構検出面は、弥生時代中期中葉に形成された落ち込み堆積土の黒褐色土の上面で、標高47.40mである。弥生時代前期～中期初頭遺構検出面は、第Ⅴ層：青灰色シルトの上面で、標高47.00mである。

検出遺構 弥生時代の遺構については、弥生時代中期中葉の落ち込みの堆積土上面で検出されるものと、その堆積土を除去して検出されるものがある。

- 弥生時代前期？　：土坑1基
- 弥生時代中期初頭：土坑1基
- 弥生時代中期中葉：土坑1基、溝1条、落ち込み1条
- 中世　　　　　　：素掘小溝
- 近世～現代　　　：大溝1条

備考 弥生時代中期中葉以前の土坑3基からは、直柄縦斧柄・膝柄斧柄など木製品の未成品が出土している。小型の土坑ではあるが木器貯蔵穴と考えられる。この上層に形状された弥生時代中期中葉の落ち込みは厚さが0.50mあり、本調査区周辺がその段階の谷地形となっていた可能性も想定されよう。

3. 西環濠帯

第41次調査

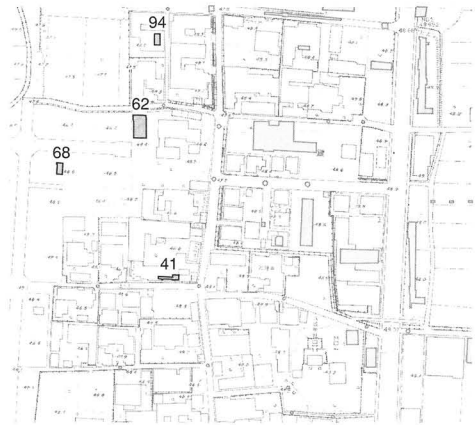
調査区 第41次調査区は、遺跡範囲のかなり西側にあたり、第62次調査区からは南へ約80mに位置する。個人住宅の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、東西7.5m、幅1.5mのトレンチと、その東端で3.2×2.6mの方形部を設定した。

遺構検出面 本調査区では、近世、中世、弥生時代中・後期、弥生時代前期の4面の遺構検出面を確認した。近世の遺構検出面は、第Ⅱ層：暗茶灰色粘質土の上面で、標高47.90mである。中世の遺構検出面は、第Ⅲ層：黒褐色土の上面で、標高47.50mである。弥生時代中・後期の遺構検出面は、第Ⅳ層：黒褐色土（やや黄斑含）の上面で、標高47.40mである。弥生時代前期の遺構検出面は、第Ⅵ層：灰黒色粘土（炭灰含）の上面で、標高47.00mである。

検出遺構 本調査区では、弥生時代中期初頭の大溝を検出した。

- 弥生時代中期初頭：大溝1条
- 弥生時代中期：土坑2基
- 中世：柱穴？
- 近世：井戸2基、素掘小溝2条

備考 本調査区では、東南東－西北西に走行する弥生時代中期初頭の大溝であるSD-101を検出した。規模は推定幅5.0m、深さ1.40mを測るが、二段掘りで下段の幅は1.50mとなり急に深く掘削されている。遺物は多量の弥生時代中期初頭の土器とともに、長さ100cm、径10cm弱の杭が横になった状態で約25本出土した。この杭は先端を尖らせただけで、他の部分には樹皮が残っている。本溝に関しては、弥生時代中期中葉の大環濠が成立する以前に西地区の南端を画していた環濠と考えられる。

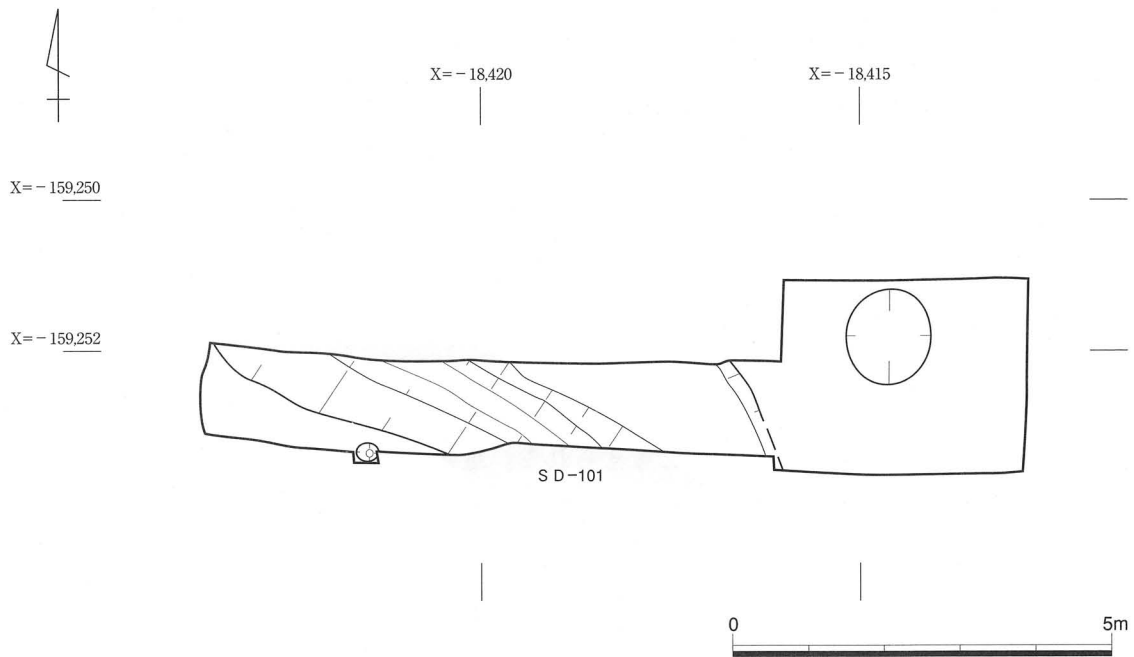


第294図 西環濠帯調査区の位置 (S=1/4,000)

第62次調査

調査区 第62次調査区は、遺跡範囲の西側にあたり、第74次調査区から西へ約50mに位置する。個人住宅の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は南北に長い長方形で、南北12m、東西6.5mである。

遺構検出面 本調査区では、近世、弥生時代中期～中世の2面の遺構検出面を確認した。近世の遺構検出面は、第Ⅲ層：茶灰色土の上面で、標高47.30mである。弥生時代中期～中世の遺構検出面は、第Ⅳ層：暗黄灰色土・灰褐色土の上面で、標高46.90mである。なお、第Ⅳ層からべ



第295図 第41次調査区 遺構配置図 (S = 1/100)

ースの第Ⅶ層：青灰色粘土の上面標高46.20mまでの間に2層を挟むが、これらは弥生時代前期～中期の遺物包含層であり、それらの上面に遺構検出面を想定できるが未検出である。

検出遺構 本調査区では、弥生時代中期～中世の遺構検出面が同一面であり、中世に削平を受けたと考えられる。このうち、弥生時代中期の遺構については、後世の遺構に破壊され露出したものについて調査をおこなっている。完掘したSD-101は、弥生時代後期初頭に掘削され、弥生時代後期後葉に埋没する大溝である。なお、その西肩に沿って弥生時代中期の大溝があり、先行環濠になると考えられる。

弥生時代中期初頭：土坑2基、小溝1条

弥生時代中期中葉：大溝1条？

弥生時代後期：大溝1条

中世：大溝2条、礎石を伴う柱穴

近世：土坑1基、井戸1基

備考 本調査区で検出した弥生時代後期のSD-101は、幅2.60m、深さ1.40mを測る。中層と上層からは、多量の土器が出土している。本溝は遺跡西環濠帯の一部と考えられ、規模はさほど大きくはないが、遺物を多く含むことから居住域にちかく、弥生時代中期中葉にめぐらされた大環濠よりも一つ外側のものと考えられる。第94次調査区で検出したSD-101に繋がるものが想定される。

第68次調査

調査区 第68次調査区は、遺跡範囲においては最も西端となり、第62次調査区から西へ約40mに位置する。個人住宅の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は南北に長い長方形で、南北6m、東西3mである。

遺構検出面 本調査区の大半が弥生時代の大溝内であり、その堆積土上面には、第V層：暗灰色砂質土の中世遺物包含層が堆積する。弥生時代の大溝は、調査区西端で西肩を検出した。第VI層：明褐色土（ハード）を検出面としており、その上面標高は46.40mである。

検出遺構 本調査区の大半が、弥生時代中期の大溝であるSD-101の堆積土内であった。

弥生時代中期：大溝1条

備考 本調査区では、大溝のSD-101を検出した。本溝は南-北に走行し、規模は幅2.00m以上、深さ1.00mを測る。環濠になると考えられる。遺物は少ないが、弥生時代中期に掘削されたと考えられる。堆積土は大きく上・下2層に分かれ、上層には弥生時代後期の土器が含まれることから再掘削を示している可能性もある。

第94次調査

調査区 第94次調査区は、遺跡範囲の西側にあたり、第62次調査区から北へ約40mに位置する。個人住宅の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は南北に長い長方形で、南北6m、東西3mである。

遺構検出面 本調査区の大半が弥生時代の大溝内であり、その堆積土上面において中・近世の遺構を検出している。弥生時代の大溝は、調査区北西端において一部肩を検出した。第V層：明褐色粗砂をベースとしており、その上面標高は46.70mである。

検出遺構 本調査区の大半が、弥生時代の大溝であるSD-101の堆積土内であった。SD-101は、弥生時代後期から古墳時代初頭まで最低2回の再掘削を受けている。

弥生時代中期：大溝1条

弥生時代後期初頭：大溝1条

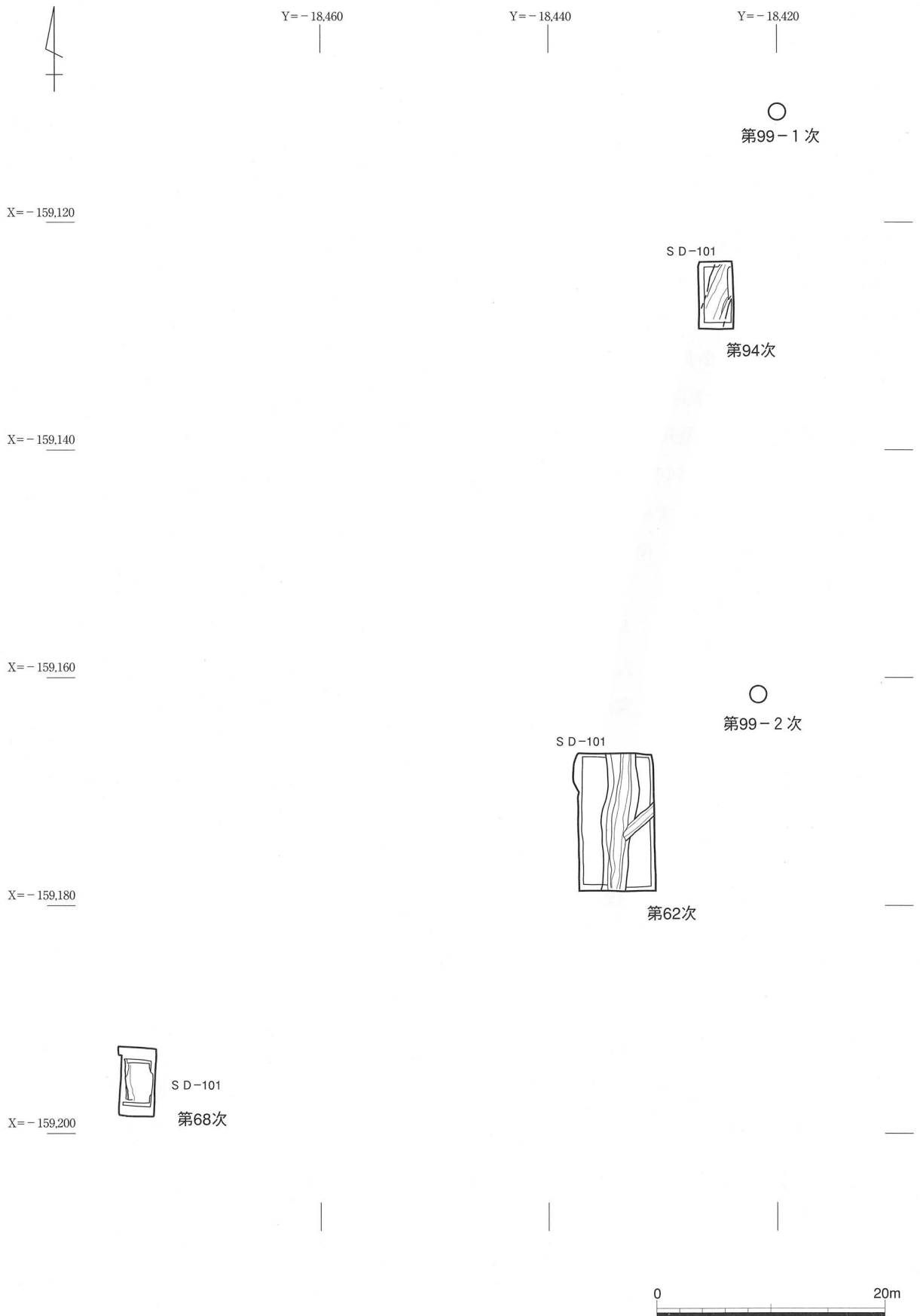
弥生時代後期後葉：大溝1条（再掘削）

古墳時代初頭：大溝1条（再掘削）

中世：建物跡1棟

近世：土坑4基

備考 本調査区では、弥生時代後期初頭の大溝であるSD-101Cを検出した。規模は幅4.00m、深さ1.40mを測る。木製品の槽、原木や加工途中の板材が出土している。本溝は、弥生時代後期後葉（101B）と庄内期（101A）に再掘削を受ける。第62次調査区のSD-101に繋がり、環濠になると考えられる。なお、SD-101Cに先行する大溝として、SD-101Dの堆積を確認している。本溝は、SD-101Cとほぼ重なり合うが、東肩は調査区外へと延びる。遺物も少なく、時期は弥生時代中期と考えられるが詳細は不明である。



第296図 西環濠帯 弥生時代中期～後期遺構配置図 (S = 1/500)

4. 北西環濠帯

第13次調査

調査区 第13次調査区は、南に第19次調査区が隣接する。駐車場建設に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は東西に長く、長さ80m、幅2.5mである。

遺構検出面 本調査区では、中世、弥生時代後期～古墳時代初頭、弥生時代前期～中期の3面の遺構検出面を確認した。中世の遺構検出面は、第4層：暗茶褐色土の上面で標高46.65mである。弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構検出面は、第5層：明茶褐色粘質土の上面で標高46.60mである。弥生時代前期～中期の遺構検出面は、第7層：灰黄色微砂の上面で標高46.25mである。



第297図 北西環濠帯調査区の位置 (S=1/4,000)

検出遺構 本調査区では、南南西－北北東で並走する大溝5条を検出した。

弥生時代前期：溝1条

弥生時代中期：土坑1基、大溝4条、小溝3条、土器棺墓1基

弥生時代後期：土坑2基、大溝5条（内4条は再掘削）

古墳時代初頭：土坑1基、大溝2条（内2条は再掘削）

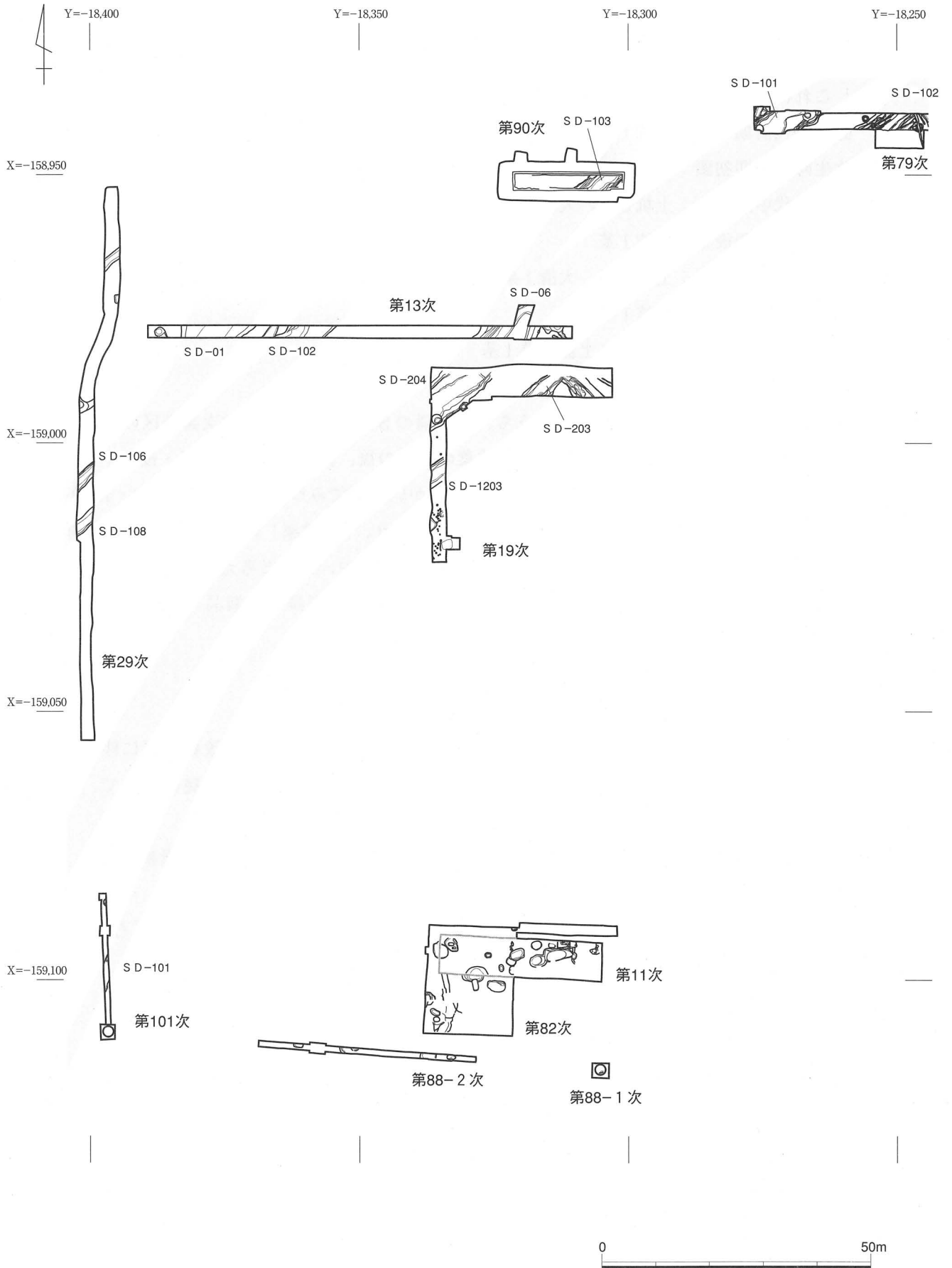
中世：素掘小溝

備考 並行する大溝5条は、集落北西部を囲む環濠であろう。本調査区で最も東側のSD-06は、幅10.50m、深さ1.60mと極めて大きく、大和第Ⅱ-3-b様式の掘削である。弥生時代中期の居住域を囲んだ「大環濠」と考えられる。この「大環濠」より西へ順にSD-05・04・02・01が並ぶ。弥生時代後期初頭に掘削されたSD-04を除いて、他の大溝は弥生時代中期後葉の掘削であり、弥生時代後期初頭の再掘削を経て弥生時代後期後葉に埋没する。SD-05・06は、庄内期の再掘削を受ける。

第19次調査

調査区 第19次調査区は、第13次調査区の南隣接地に位置する。造成工事に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区はL字状を呈する申請地に沿ったもので、東西に長い34×6mと、その西端から南へ南北に長い30×3mで設定した。

遺構検出面 本調査区では、古墳時代～中世、弥生時代中期～後期、弥生時代前期～中期の3面の遺構検出面を検出した。古墳時代～中世の遺構検出面は、第4層：灰褐色土の上面で標高46.70mである。弥生時代中期～後期の遺構検出面は、第5層：暗灰褐色土の上面で標高46.60mである。弥生時代前期～中期の遺構検出面は、第6層：暗黄褐色土、第7層：黄褐色微砂の



第298図 北西環濠帯 弥生時代前期～中期遺構配置図 (S = 1/1,000)

上面で、標高46.50mである。

検出遺構 本調査区の北西隅において、南南西－北北東に走行する大溝1条を検出した。また、これに先行する大溝がその東側で並行する。

弥生時代前期 : 土坑1基

弥生時代中期初頭 : 土坑2基、大溝1条

弥生時代中期中葉 : 土坑5基、大溝2条、小溝1条、集水施設1基

弥生時代中期後葉 : 土坑1基

弥生時代後期初頭 : 土坑1基、大溝1条（再掘削）

弥生時代後期中葉 : 土坑1基

古墳時代初頭 : 溝1条、土器棺墓1基

中世 : 大溝2条

備考 本調査区で並行する大溝2条のうち、北西隅のSD-204は、第13次調査区のSD-06に繋がる「大環濠」である。弥生時代中期前葉の掘削の後、弥生時代後期初頭・後期中葉に再掘削を受ける。また、この大溝よりも居住域にちかい東側でみつかったSD-203・1203は、北で第79次SD-102、南で第101次SD-101に繋がり、「大環濠」に先行する弥生時代中期前葉の環濠となろう。居住域側では、環濠に取り付く小溝や、井戸と考えられる土坑を検出した。SD-204の大和第Ⅳ様式土器を含んだ粗砂層からは、銅鐸形土製品・イノシシ形土製品・硬玉製玉が出土している。

第29次調査

調査区 第29次調査区は、第13次調査区の西隣接地に位置する。下水路改修工事に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、南北に長い擁壁基礎に沿って、長さ105m、幅2～3mに設定した。

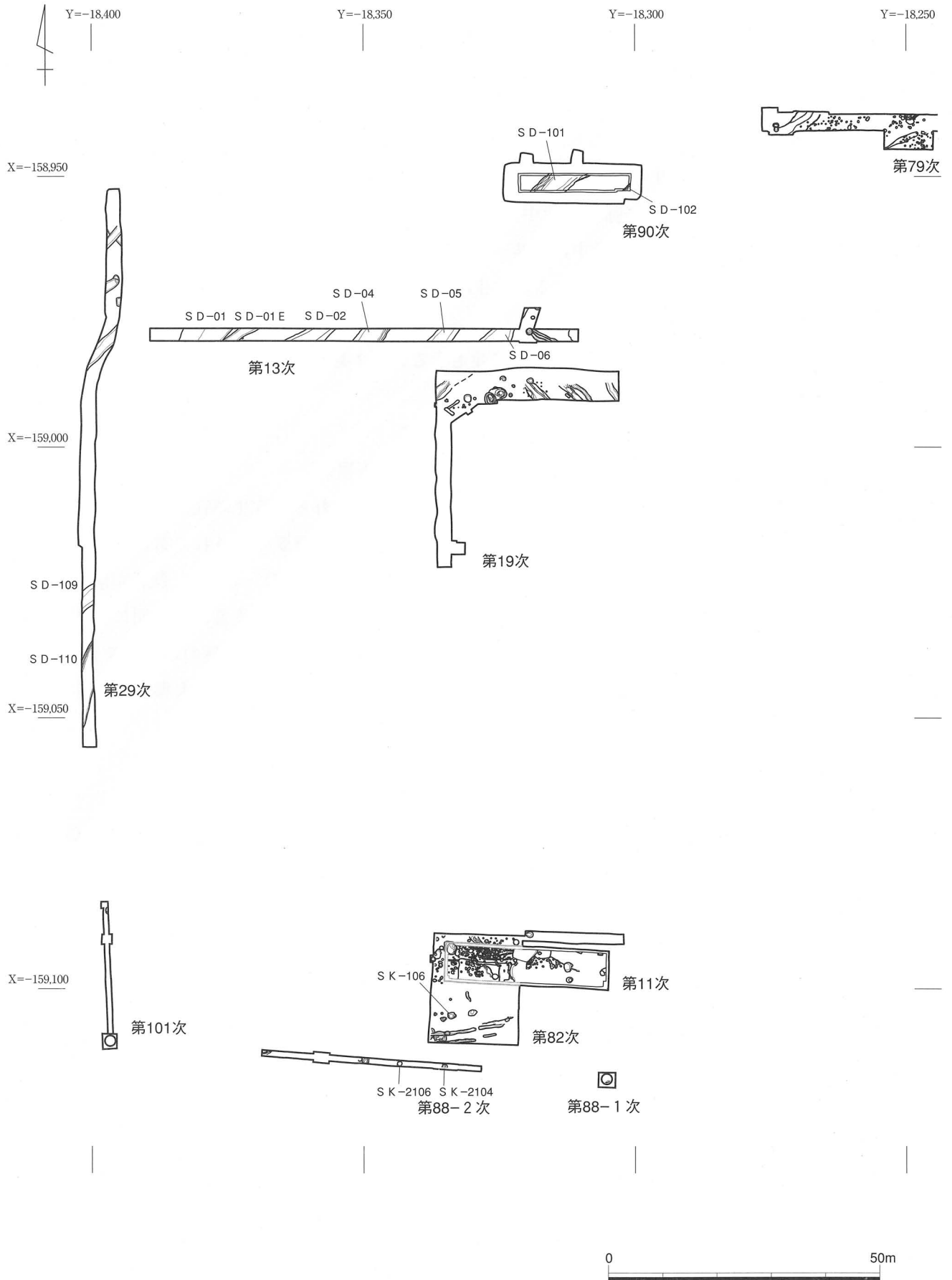
遺構検出面 本調査区では、弥生時代～中世の遺構を1面で確認した。その遺構検出面は、第Ⅲ層：暗褐色微砂質土の上面で、標高46.10～46.20mである。

検出遺構 本調査区では、南西－北東で並走する弥生時代の大溝・溝9条を検出した。また、北端ではこれらとは方向を違えた南東－北西の大溝1条がある。

弥生時代中期～後期 : 大溝・溝10条

中世 : 大溝2条

備考 本調査区で検出した弥生時代の大溝・溝すべてが、遺跡北西部を囲む環濠になるとは、考え難いが、それでも集落縁辺部における溝の集中は注目すべきものがある。このうち、調査区南端で検出したSD-109・110は、弥生時代後期後葉の再掘削を受けており、継続的に管理された環濠と判断してよからう。SD-110については、第101次調査に付随した工事立会においてその南延長を検出し、その位置と方向から第94次調査区のSD-101に繋がることほぼ確実となった。



第299図 北西環濠帯 弥生時代中期後葉～後期遺構配置図 (S = 1/1,000)

第90次調査

調査区 第90次調査区は、第13次調査区から北へ約25mにあつて、第79次調査区とは国道24号線を挟んだその西側に位置する。事務所の建築に伴い田原本町教育委員会が発掘調査をおこなつた。調査区は東西に長い長方形で、東西25.5m、南北7.5mに設定したが、盛土が1.1mと厚く周囲にのり面と犬走りを幅2mで設定したため、実質は東西21m、南北3.5mとなつた。

遺構検出面 本調査区では、弥生時代中期後葉～古墳時代初頭、弥生時代中期中葉の2面の遺構検出面を確認した。弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の遺構検出面は、第Ⅳ層：明褐色土（ハード）の上面で、標高46.60mである。弥生時代中期中葉の遺構検出面は第Ⅴ層：黒色粘土（砂混）の上面で、標高46.30mである。

検出遺構 本調査区では、南南西－北北東で並走する大溝3条を検出した。

弥生時代中期中葉 ：大溝1条

弥生時代中期後葉～後期初頭 ：大溝1条、溝1条

弥生時代後期後葉～古墳時代初頭：大溝2条（うち1条再掘削）

備考 本調査区で検出した並行する3条の大溝は環濠と考えられる。弥生時代中期中葉のSD-103は北東－南西に走行し、幅5.00m、深さ1.50mを測る。「大環濠」とされる第13次調査区のSD-06から分流したものと考えられる。その西側に並行するSD-101は、幅7.00m、深さ1.60mを測る。本溝は、弥生時代後期初頭に掘削され、弥生時代後期後葉、庄内期に再掘削を受ける。第13次調査区のSD-05に繋がると考えられる。着柄鋤の身と柄の未成品を含む、多数の木製品が出土した。また、本調査区南東隅で検出したSD-102は、「大環濠」の弥生時代後期再掘削溝と考えられる。

第101次調査

調査区 第101次調査区は、第29次調査区の南延長道路に位置する。下水道管の埋設に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなつた。調査区は南北道路に沿つて、長さ26.0m、幅1.0mに設定した。

遺構検出面 本調査区では、中世、弥生時代の2面の遺構検出面を確認した。中世の遺構検出面は、第Ⅶ層：暗褐色粘質土の上面で、標高46.80mである。弥生時代の遺構検出面は、第Ⅷ層：黄灰色砂質土の上面で、標高46.70mである。

検出遺構 本調査区では、弥生時代中期前葉の大溝1条を検出した。

弥生時代前期 ：土坑1基

弥生時代中期前葉：大溝1条

中世 ：土坑2基、大溝2条、素掘小溝1条

備考 本調査区で検出した弥生時代中期前葉のSD-101は、北北東－南南西に走行し幅2.20m、深さ1.10mを測る。本溝は、第19次調査区のSD-203・1203に繋がると考えられ、弥生時代中期前葉の居住域を画した環濠である。

5. その他

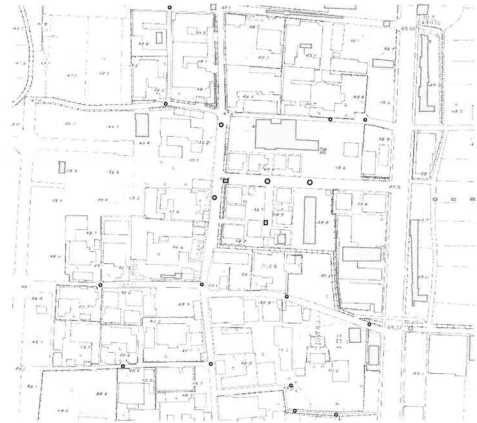
第95次調査

調査区 第95次調査は、現鍵集落内の南北道路に沿った下水道管の埋設に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査は、管路部分が推進工事のため対象外の他は、人坑部分5ヶ所を発掘、2ヶ所を立会で対応した。調査区は、北から南へ順に第1～5トレンチとした。第1トレンチの北側でおこなった立会2ヶ所は、第6・7トレンチとした。

検出遺構 第1～3・6・7トレンチは近世水路の削平によって弥生時代の遺構は残っていない。第4

トレンチで弥生時代中期初頭の土坑を、第5トレンチで弥生時代中期初頭の溝を検出した。

備考 第4トレンチで検出した土坑は、木器貯蔵穴の可能性がある。第5トレンチで検出した溝は、北西－南東に走行し、環濠となる可能性がある。



第300図 その他調査区的位置 (S=1/4,000)

第97次調査

調査区 第97次調査は、第73次調査区と第74次調査区との間の東西道路に沿った下水道管の埋設に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査は、管路部分が推進工事のため対象外となったが、人坑部分4ヶ所を発掘をおこなった。発掘調査区は、南側のものを第1トレンチ、東西道路の3ヶ所を西から東へ順に第2～4トレンチとした。

検出遺構 第1トレンチで、弥生時代中期中葉の大溝の北肩を検出した。

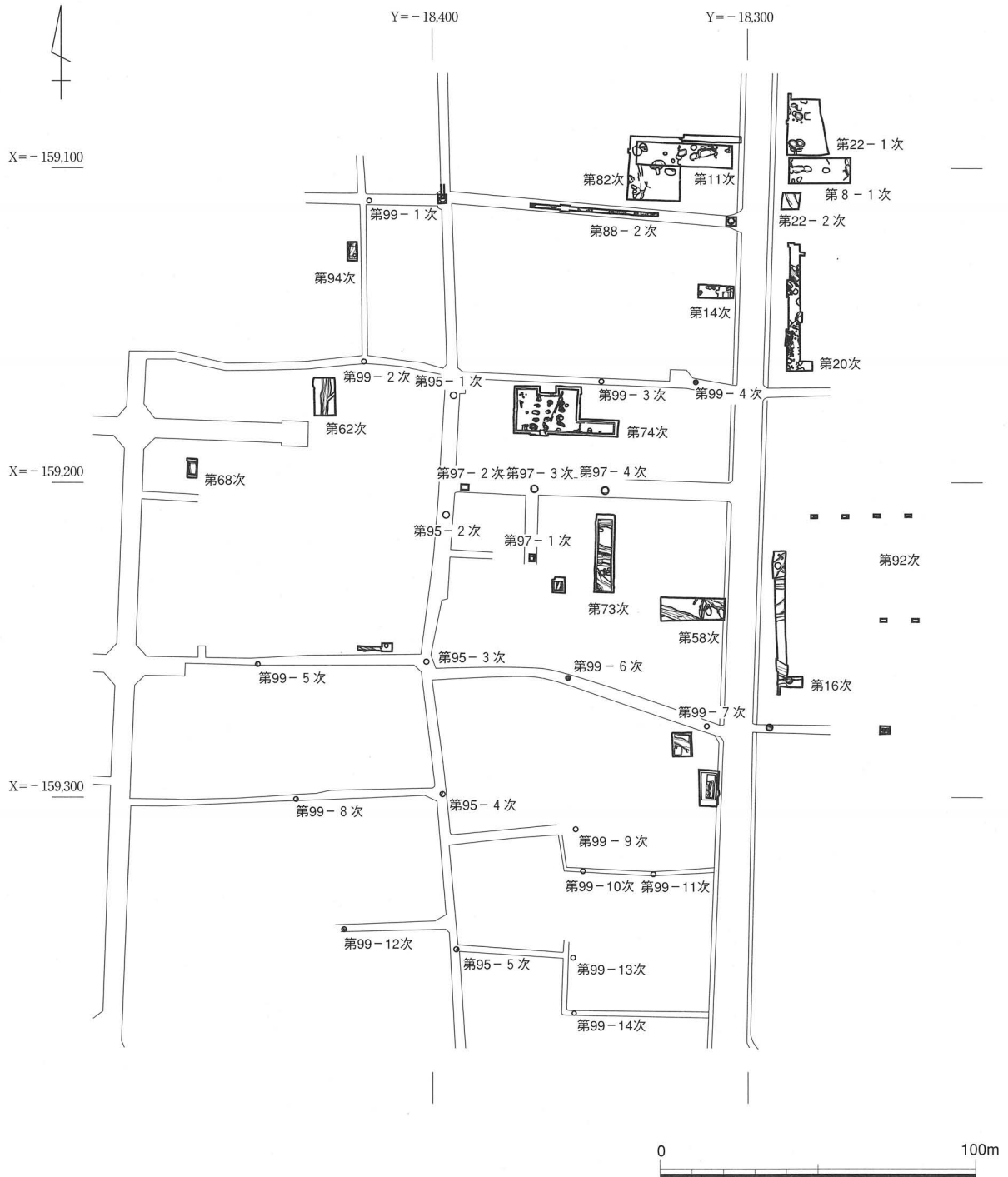
備考 第1トレンチで検出した大溝は、第73次調査区のSD-103に繋がると考えられる。

第99次調査

調査区 第99次調査は、現鍵集落内において南北道路の下水道本管から分枝する部分での調査であり、人坑部分14ヶ所で田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。

検出遺構 トレンチ毎に、検出遺構を報告する。なお、中・近世の遺構については割愛した。

- | | | |
|--------|-----------------|-------|
| 第1トレンチ | 弥生時代後期初頭～古墳時代初頭 | ：大溝1条 |
| 第4トレンチ | 弥生時代中期中葉 | ：小溝1条 |
| 第5トレンチ | 弥生時代後期 | ：溝1条 |
| 第6トレンチ | 弥生時代中期中葉以前 | ：土坑1基 |
| | 弥生時代中期中葉 | ：土坑1基 |
| | 弥生時代中期後葉 | ：土坑1基 |
| 第7トレンチ | 弥生時代中期中葉～後期初頭 | ：大溝1条 |



第301図 第95・97・99次調査区の位置 (S = 1/2,000)

第8トレンチ 弥生時代後期後葉：大溝1条

第12トレンチ 弥生時代後期：溝1条

備考 第5・8・12トレンチといった現集落西側での調査において、弥生時代の溝を検出したことは示唆的である。また、大溝群の南側となる第6トレンチで弥生時代中期の土坑を検出したことによって、ここまで弥生時代中期居住域の拡がりを想定することができよう。

第2節 第79次調査報告

1. 調査の経緯

平成12年度は、唐古・鍵遺跡において10ヶ年計画でおこなわれてきた範囲（内容）確認調査の折り返しとなる5年目である。唐古・鍵遺跡ではこれに加え、年間数件の開発に伴う緊急調査も併せおこなっており、前年度におこなった個人住宅の新築に伴う第74次調査では大型建物跡を検出していた。これらの成果は集落实態を明らかにするとともに新たな課題を生じさせた。発掘調査以外にも、唐古池周辺約10ヘクタールが平成11年1月27日に史跡指定された。

このように平成12年度は数字的にも内容的にも節目であり、範囲（内容）確認調査の中期的展望を必要とする段階にきていた。事務局の田原本町教育委員会は、平成12年6月の調査検討委員会で今後の範囲（内容）確認調査の課題として4案を提案した。

1. 東環濠の時期的変遷と北方砂層（洪水層）との関係 [第75・78次の成果を受けて]
2. 遺跡中央部の構造把握（未調査） [史跡整備との関係]
3. 西地区検出の大型建物跡周辺の構造把握 [第74次の成果を受けて]
4. 北地区（微高地）の構造把握 [史跡整備との関係]

このうち、第3案については周辺が住宅地のため、実質的に調査をおこなうことは不可能で



第302図 第79次調査区の位置 (S = 1/2,000)

あった。委員からは、史跡指定地内での範囲（内容）確認調査が可能であることを前提として、整備前にある程度の集落内部構造（建物配置）を把握しておくことが必要との意見があった。これに該当するのは第2案と第4案であったが、第2案の遺跡中央部については低地のため建物は希薄と想定されるので、第4案が委員の意見を満たすものといえた。

上記の意見をもとに調査地を検討したところ、唐古池の西側がその適所と考えられた。唐古池の西側は、唐古池の西堤内側でおこなわれた第37次調査から、遺跡北地区の微高地の拡がりとともに居住域が予想されていた。唐古池西側の現状は、遺跡駐車場、休耕田、造成地などであった。このうち、遺跡駐車場は供用中であり、広い面積を有する造成地は旧地表面から1m以上の客土がなされていた。発掘調査地として好条件をもつものは、遺跡駐車場と造成地に挟まれた東西に長い休耕田のみであった。

田原本町教育委員会では、この休耕田で平成12年度範囲（内容）確認の第79次調査をおこなうことを決定した。また、造成地でも、補足のため小規模な第80次調査を計画した。この検討結果を調査検討委員に書面で伝えるとともに、史跡指定地内であるので直ちに現状変更の手続きをおこなった。

2. 調査の方法

調査区は唐古池の西に隣接する唐古106番、107番1の休耕田で、東西に長く長さ80m、幅3mの面積240㎡に設定した（第302図）。この設定は、西側で微高地末端にめぐる環濠を確認し、東側の微高地上で建物跡を検出することが目的であった。調査の過程において、西端で検出した大溝の西肩までは確認できないことが明らかとなり、調査区の西端部を西に幅1m分拡張した。さらに、その大溝の西肩において切り合う土坑を明らかにするため、西端部の北側を3×1mで拡張した。また、調査区中央やや西寄りにおいて、竪穴住居跡状の痕跡がうかがえたため、3.4×9m南側に拡張した。この他、SK-120やSX-101の全形を確認するため、小規模な拡張をおこなっている。最終的な調査面積は、約276㎡である。

なお、本調査区は、弥生時代中期中葉から中世までの遺構検出面が同一であった。範囲（内容）確認という調査の性格上、それより下層遺構の調査はおこなっていない。

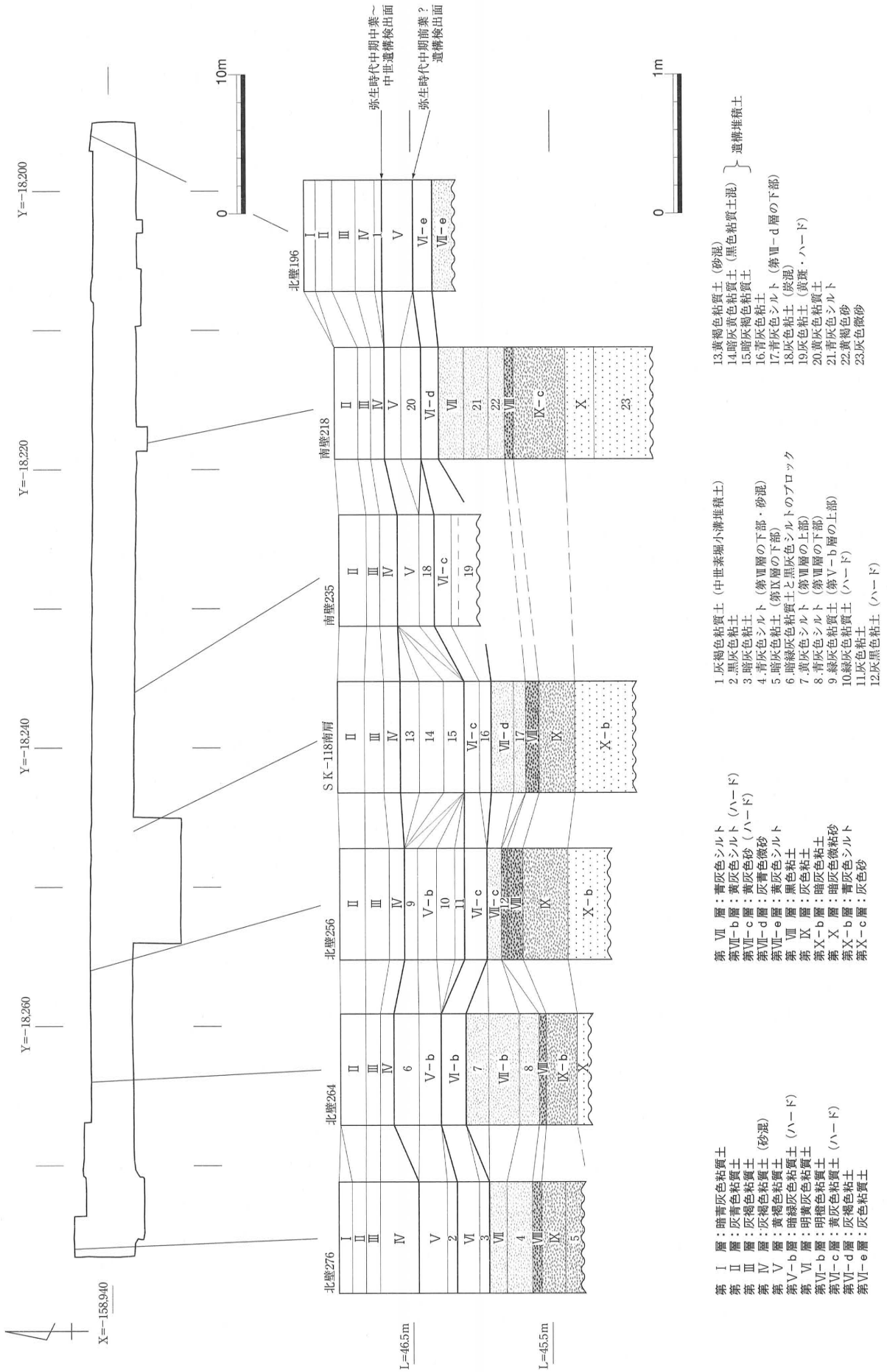
調査期間は、平成12(2000)年8月16日から12月21日までで、実働日数は80日間である。遺物総数は、コンテナ230箱である。

3. 層序

本調査区の土層堆積は安定している。基本層序は以下の通りである（第303図）。

第Ⅰ層：暗青灰色粘質土　〔表土、　　厚さ約0.1m　　：上面標高47.00～47.30m〕

第Ⅱ層：灰青色粘質土　〔水田耕土、　厚さ約0.1m　　：上面標高46.90～47.20m〕



第303図 第79次調査区配置図と基本土層図 (トレンチ枠：S = 1/400、柱状図：S = 1/40)

- 第Ⅲ層：灰褐色粘質土 〔水田床土1、厚さ約0.1m ：上面標高46.80～47.10m〕
- 第Ⅳ層：灰褐色粘質土（砂混）〔水田床土2、厚さ0.10～0.20m：上面標高46.70～46.90m〕
- 第Ⅴ層：黄褐色粘質土（ハード）〔弥生時代中期中葉～中世遺構検出面、
厚さ0.15m ：上面標高46.50～46.70m〕
- 第Ⅵ層：明黄灰色粘質土 〔弥生時代中期前葉遺構検出面？
厚さ約0.2m ：上面標高46.10～46.50m〕
- 第Ⅶ層：青灰色シルト 〔ベース、厚さ0.10～0.20m：上面標高46.00～46.40m〕
- 第Ⅷ層：黒色粘土 〔ベース、厚さ0.10～0.20m：上面標高45.60～45.80m〕
- 第Ⅸ層：灰色粘土 〔ベース、厚さ0.10～0.20m：上面標高45.60～45.80m〕
- 第Ⅹ層：青灰色シルト 〔ベース、厚さ0.10～0.20m：上面標高45.30～45.40m〕

本調査区の現地表面（第Ⅰ層：暗青灰色粘質土の上面）は、調査区の東端から西へ20mほどのY = -18,215m付近において、地番の境と対応した著しい段差があり、西側が低くなっている。これは、ベースである第Ⅶ層：青灰色シルトも同じ状態を示し、東側の上面標高が46.30mであるのに対し、西側の上面標高は46.00mであった。微高地における東側から西側への傾斜が、現地形に反映されたものといえよう。

本調査区は第Ⅰ～Ⅳ層までが水田耕土・床土であり、その直下が第Ⅴ層：黄褐色粘質土（ハード）の上面となる。本調査区において、遺物包含層は削平を受けたものと考えられ、溝や遺構の集中部分において、黒褐色粘質土の落ち込み状を呈して残存していた。第Ⅴ層：黄褐色粘質土（ハード）の上面では、基本的に弥生時代中期中葉から中世までの遺構を同一面上において検出することができる。この第Ⅴ層もまた、東側の上面標高が46.70mであるのに対し、西側の上面標高は46.50mであり西側への傾斜を示している。なお、Y = -18,210m付近では床土層直下において弥生時代中期前葉の遺構（SK-125・127、SD-118）を検出しており、ここにおいては地形が高く一面下位の第Ⅵ層：明黄灰色粘質土の上面が露出していた可能性が考えられる。

第Ⅴ層以下の土層については、範囲（内容）確認調査という性格上、面として掘り下げることとはなかったが、排水溝あるいは深く切れ込んだ遺構の断面によって確認している。第Ⅵ層：明黄灰色粘質土及び対応層の上面が、おそらく弥生時代中期前葉（弥生時代前期？）の遺構検出面になると考えられる。本調査区は微高地であるため堆積も薄く、弥生時代の遺構検出面は第Ⅴ層上面と第Ⅵ層上面の2面だけという可能性も考えられる。

第Ⅶ層：青灰色シルト及び対応層以下が、ベースとなる。第Ⅶ層と第Ⅹ層のシルトは河川堆積による形成と考えられ、所々で粒子が粗くなり砂層へと変化するが、これが本流部分であろう。すなわち、SD-101D底面の標高45.30mで検出した灰色砂層は第Ⅹ層を形成した本流であり、SD-103底面の標高46.30mで検出した灰色砂は第Ⅶ層を形成した本流と考えられる。第Ⅸ層：灰色粘土は、第Ⅹ層の上部に堆積した粘土層であり、起伏が激しい。第Ⅷ層：黒色粘土はこの第Ⅸ層の上部が、土壌化したものと考えられる。

4. 遺構

当初より本調査区は、唐古池西堤周辺に予想される微高地中央から国道24号線付近の微高地西末端まで、東西に横断するように設定した。これは、弥生集落の居住域から大環濠まで検

第49表 土坑一覧表

土坑番号	平面形態	断面形態	坑底土層	規模(m)			坑底 標高(m)	時期 (大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
SK-101	不整形円形	円筒状 (上部開く)	青灰色シルト	1.18	—	1.42	45.13	Ⅲ-4	完形広口壺2 木製穂摘具	井戸
SK-102	円形	円筒状 (上部開く)	黒色粘微砂 (植物層)	1.60	—	1.25	45.40	V-2		井戸
SK-103	不整形	皿状	暗灰色粘質土 (黄斑)	1.60	(0.60)	0.22	46.32	後期?		落ち込みか
SK-104	楕円形	円筒状	暗灰色粘土	1.10	(0.80)	0.84	45.48	V-1		
SK-105	長楕円形	円筒状	灰色シルト	0.80	0.50	(1.70)	44.81	IV-4	膝柄横斧柄未成品	井戸
SK-106	楕円形? (隅丸方形か)	逆台形二段?	灰色砂	(0.70)	(0.50)	(0.45)	45.67	V-1		
SK-107	楕円形	方形	—	(0.52)	0.58	0.42	46.04	Ⅲ-2		
SK-108	円形	方形	黄色砂 (ハード)	0.70	—	0.42	46.12	庄内	搬入土器(伊勢)	
SK-109	円形	方形	灰黄色砂 (ハード)	0.80	—	0.43	46.11	庄内	搬入土器(伊勢)	
SK-110	不整形円形	皿状	—	0.90	—	0.18	46.27	Ⅲ		SB-103灰穴炉?
SK-111	溝状	逆台形	灰色粘土	(2.50)	2.00	1.10	45.40	IV-1	みかん割り原材	木器貯蔵穴?
SK-112	楕円形	皿状	—	(1.40)	(0.28)	0.15	46.35	—		落ち込みか
SK-113	隅丸方形?	方形?	明灰黄色砂	(1.20)	(0.55)	0.60	45.80	Ⅲ-1	雑穀入鉢	
SK-114	楕円形	円筒状、 東肩テラス	黒色粘土	1.25	0.52	0.87	45.58	Ⅲ-2?		
SK-115	—	半円形	暗緑灰色粘 質土(ハード)	0.70	—	0.24	46.34	Ⅲ?		SB-101灰穴炉?
SK-116	楕円形	皿状	—	(0.80)	0.70	0.20	46.36	Ⅲ-2		
SK-117	不整形	逆台形	黄灰色シルト	(2.00)	(0.80)	0.44	46.20	Ⅲ-1		SB-105灰穴炉?
SK-118	円形	円筒状 (上部開く)	灰色砂	1.60	—	1.59	44.96	Ⅱ-3-b ~Ⅲ-1	物入土器(ベンガラ) 笊	井戸
SK-119	不整形円形	皿状	灰色粘土	1.16	1.00	0.14	46.40	Ⅲ-1		SB-106灰穴炉?
SK-120	不整形円形	円筒状	灰色微砂	1.40	1.15	1.96	44.78	Ⅵ-2	完形長頸壺7 絵画土器(鹿)	井戸
SK-121	不整形	皿状	—	(1.28)	(0.38)	0.12	46.40	Ⅲ前半		SB-104灰穴炉?
SK-122	楕円形	逆台形	灰色微砂	※0.86	0.75	0.54	45.90	Ⅲ-2		
SK-123	円形	逆台形	—	1.30	—	0.46	46.24	Ⅲ-3		SB-108灰穴炉?
SK-124										Pit-2132に変更・欠番
SK-125	長楕円形	逆台形	黄灰色粘質土	1.04	0.32	0.20	46.40	Ⅱ-2?		
SK-126	不整形	逆台形	灰色粘土 (炭混)	2.40	(1.08)	0.42	46.32	Ⅲ-3		SB-110灰穴炉?
SK-127	方形	逆台形	青灰色シルト	(2.20)	2.50	0.96	45.78	Ⅱ-2?		
SK-128	不整形	逆台形?	—	(1.40)	(1.14)	—	—	中期?		下層遺構の上面堆積か
SK-129	楕円形	逆台形	暗灰色粘土 (植物混)	0.74	0.58	0.34	46.00	IV-1?		
SK-130	長方形?	逆台形?	黒色粘土	(2.00)	(1.50)	(0.70)	45.70	IV-1	広楕・泥除未成品	木器貯蔵穴
SK-131	隅丸方形?	逆台形	暗灰色粘質土 (微砂混)	(1.04)	1.50	0.54	46.02	IV-1?		
SK-132	隅丸方形	方形	黒灰色粘土	2.00	1.65	0.67	45.78	Ⅲ-1	搬入土器(伊賀)	
SK-133	隅丸方形?	逆台形	暗灰色粘土	(2.30)	(2.50)	1.17	45.28	Ⅲ-2		
SK-134	不整形円形	皿状	—	1.30	—	0.11	46.49	Ⅲ		SB-109灰穴炉?
SK-135	—	逆台形	灰色粘土(炭混)	(1.36)	—	0.46	46.30	Ⅲ?		北排水溝断面
SK-136	不整形	逆台形	灰色粘土(炭混)	(2.00)	(0.80)	0.42	46.36	Ⅲ?	石小刀	SB-107灰穴炉?
SK-137	楕円形	皿状	—	1.52	1.12	0.14	46.10	Ⅲ?		SB-102灰穴炉?
SK-201	—	—	—	(1.30)	—	(0.44)	—	I?		北排水溝断面
SK-202	—	—	砂	—	—	0.42	—	I?		北排水溝断面
SX-101	円形	半円形	灰色砂	※0.66	—	(0.32)	45.82	Ⅲ-3	大型鉢	集水施設

※は復原値、()は残存値

第50表 溝一覽表

溝番号	規模(m)		溝底標高(m) (最小-大)	走行方向 (高-低)	出土土器の時期(大和様式)												主要遺物	備考・重複関係	
	幅 (最小-大)	深度 (最小-大)			I		II		III		IV		V		VI				柱布
					1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2			
SD-101		3.20	0.40-0.52	46.08-46.14	西南西-東北東													石製垂飾品	
	B	4.30	0.80-1.10	45.48-45.75	西南西-東北東													木製品、ト骨	大環濠
	C	6.80	1.16-1.22	45.35-45.44	西南西-東北東														大環濠
	D	※7.00	1.34-1.44	45.20-45.26	西南西-東北東														大環濠
SD-102		※3.60	1.38-1.46	45.12-45.14	西南西-東北東													搬入土器(伊勢) 木製品蓋	環濠
	E	0.80-1.20	0.70-0.75	45.77-45.82	西南西-東北東 (収束)														
SD-103		1.80-4.00	0.58-0.82	-	南南東-北北西													物入土器(漆) 搬入土器(大和南 部、伊賀、伊勢) 用途不明土製品	
	B	0.40-0.50	0.16-0.48	46.14-46.20	南南東-北北西														
	C	0.16-0.40	0.36-0.52	46.04	南南東-北北西														
SD-104		2.40-2.80	0.32-0.44	46.18-46.39	南南西-北北東														
SD-105~110																			欠番
SD-111		0.48	0.30-0.38	46.20	東南東-北北西														
SD-112		0.20-0.70	0.20	46.36-46.50	南南東-北北西														
SD-113		0.30-0.60	0.28	46.30-46.50	南南東-北北西														
SD-114																			欠番
SD-115		0.25	0.15	46.32	東-西														
SD-116		0.54	0.04-0.07	46.60	東-西														
SD-117		0.24-1.10	0.10-0.15	46.31-46.44	西南西-東北東													銅鏃	
SD-118		0.32-0.60	0.20	46.54	南-北														
SD-119		※0.40	0.20	46.38	南西-北東														
SD-120		0.44-0.60	0.40-0.68	45.90-46.24	南西-北東														
SD-121		0.30	0.06-0.11	46.33-46.42	北西-南東 (収束)														
SD-122		0.12	0.05	46.29-46.31	南西-北東														
SD-123		0.08	0.07-0.08	46.28	南西-北東														

第51表 性格不明遺構一覽表

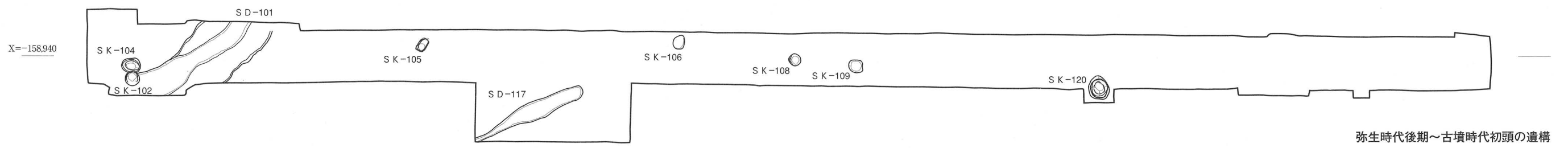
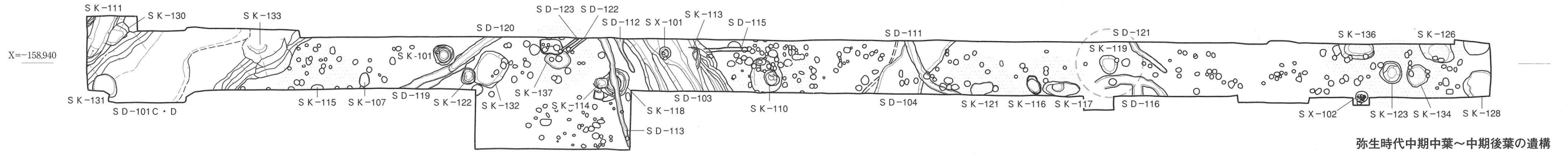
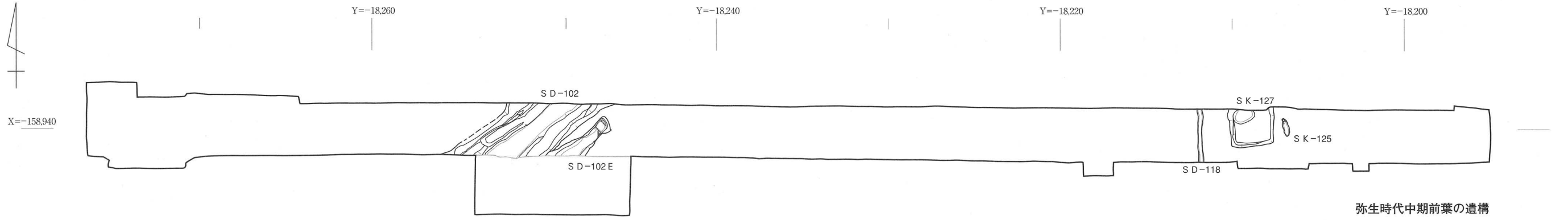
遺構番号	平面形態	断面形態	坑底土層	規模(m)			坑底標高(m)	時期(大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
SX-102	円形	逆台形	暗灰色粘質土	※0.70	-	0.68	46.42	Ⅲ-2	大型甕	土器棺墓?

※は復原値、()は残存値

出することを意図したためである。結果、調査区西半において時期の異なる2条の大溝と、東半において竪穴住居跡の痕跡と考えられる炭灰を含んだ土坑と柱穴群を検出した。

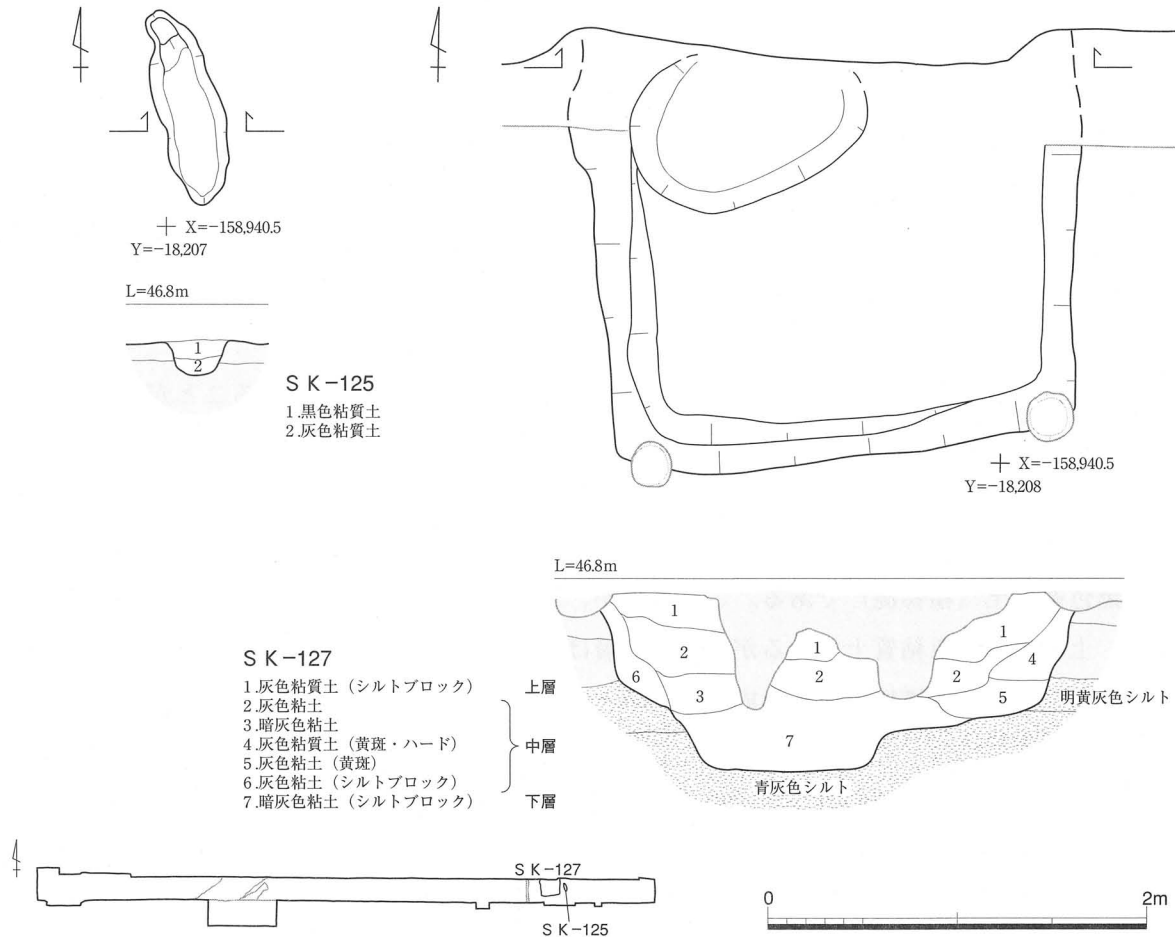
(1) 弥生時代中期前葉の遺構 (第304図、写真図版176)

大環濠成立以前の環濠と考えられる大溝SD-102と、この東肩に並行するSD-102Eを検出した。また、調査区東半においては、木器貯蔵穴と考えられるSK-127と、この側辺に並行するSK-125、SD-118を検出した。SD-102・102Eについては、第V層：黄褐色粘質土(ハード)を一段下げることによってその輪郭を検出している。これに対し、SK-125・127とSD-118は、座標Y=-18,210m付近において第V層上面で検出した。基本的に、第V層上面は弥生時代中期中葉以降の遺構検出面であるが、地形の高い調査区東半では部分的に弥生時代中期前葉の遺構検出面となる第VI層が露出していた可能性がある。



第304図 調査区遺構配置図 (S = 1/250)





第305図 弥生時代中期前葉の遺構 (1) (S = 1/40)

土坑

SK-125 (第305図、写真図版177)

本坑は、調査区東半のSK-127の東側で、柱穴群とともに検出した。平面は長楕円形を呈し、長軸1.04m、短軸0.32mである。断面は逆台形で、深さ0.20mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：黒色粘質土、第2層：灰色粘質土である。時期は、出土した甕の下半部から大和第II-2様式と推定されるが確実ではない。切り合った柱穴群の可能性もある。

SK-127 (第305図、写真図版177)

本坑は、調査区東半で検出した。その周辺で、弥生時代中期前葉の遺構と考えられるSK-125・SD-102を検出している。平面は2隅を確認したことから方形と考えられるが、北辺は調査区外へと延びている。規模は長軸2.20m以上、短軸2.50mである。断面は肩の切り立った方形であるが、北西隅が平面楕円形に一段落ち込み、その最深部で0.96mを測る。

堆積土は大きく3層に分かれ、上層が灰色粘質土(シルトブロック)、中層が灰色粘土、下層が暗灰色粘土(シルトブロック)である。このうち、上層の灰色粘質土(シルトブロック)は、人為的に埋め戻した可能性がある。遺物はほとんど出土しなかったが、時期は、大和第II-2様式か。機能は、木器貯蔵穴と考えられる。

溝

SD-102 (第306図、写真図版178・179)

本溝は、調査区中央やや西寄りで見出した。本溝は西南西-東北東に走行し、上面検出幅で約3.6mである。断面は、両肩にテラスをもつ2段掘りの逆台形で、深さは約1.4mを測る。両肩のテラス部分、特に西肩は小溝状にくぼんでいるが、土層の堆積状況から判断して、再掘削に伴うものではなく掘削当初のものであろう。その目的及び機能は不明であるが、テラス部分を掘削足場としたことによるベースの攪乱とも考え得る。

堆積土は大きく、上・中・下の3層に区分できる。下層はさらに2分することができ、上位が暗灰色粘土(植物混)、下位が黒褐色粘土(植物混)である。この中央堆積土とは別に、両肩には砂を含んだ暗灰色系粘土が堆積する。中央堆積土を、再掘削に伴うものとも考えることも可能であろう。なお、この中央堆積土の上位からは、伐採痕をもつ樹木が出土している。中層は、黒色系粘土(植物混)である。ここまでの、環濠として機能していたことを示す堆積であろう。上層は暗灰色粘質土であるが、その上層は鉄分の沈着が激しく黄褐色粘質土となり、弥生時代中期後葉の遺構検出面を形成する。出土遺物は少ないが、土器から大和第Ⅱ-2様式に掘削され、大和第Ⅲ-1様式には埋没していたと考えられる。

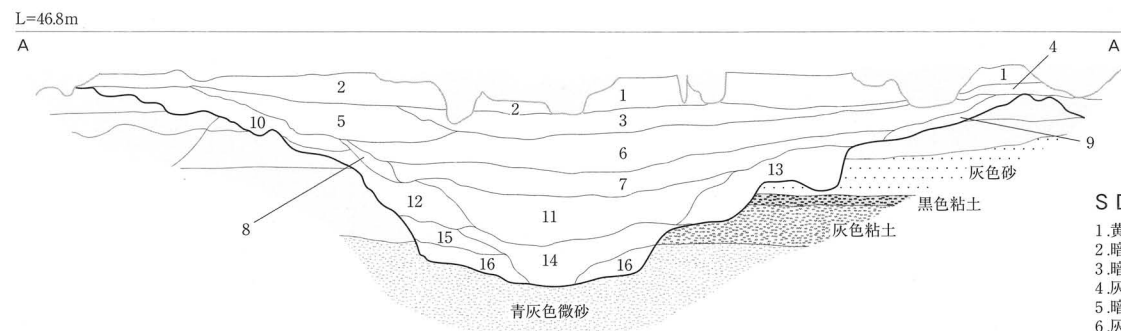
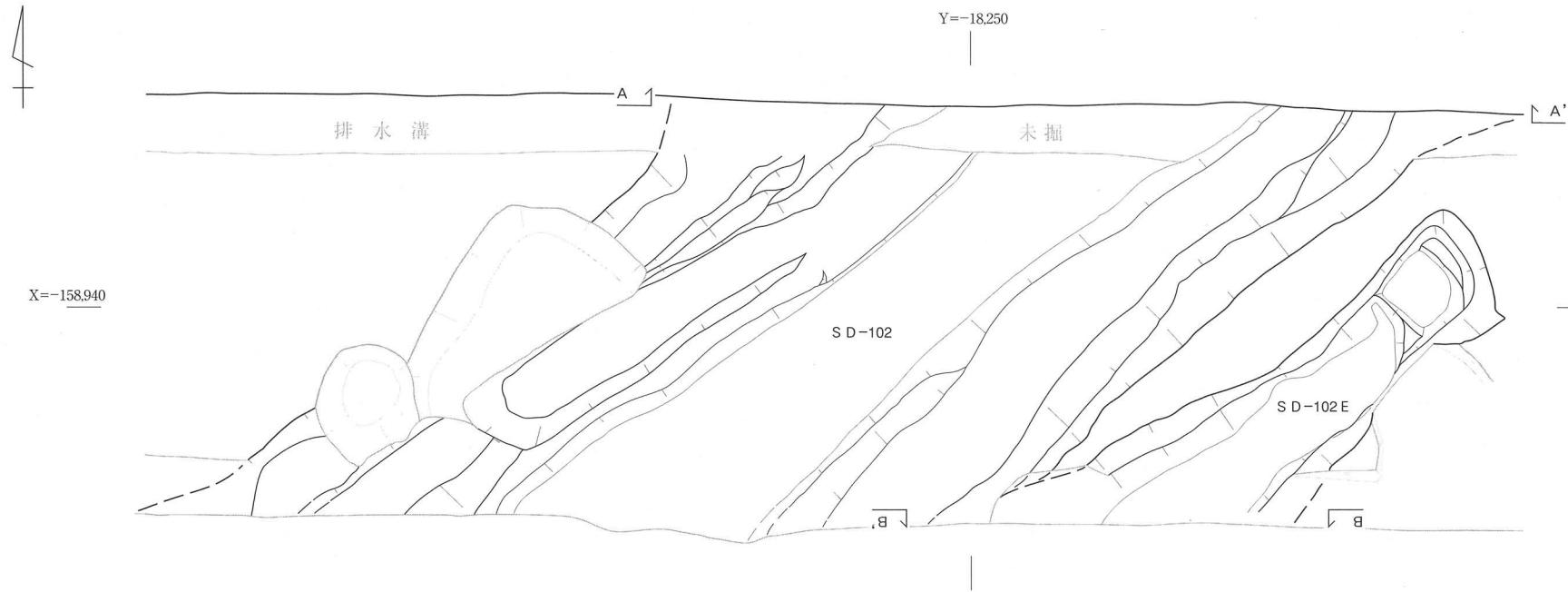
本溝は、調査区西端で見出した弥生時代中期中葉の大環濠SD-101Dと走行方向が並行する。国道24号線を挟んで本調査区の南西位置にあたる第19次調査区では、大環濠に並行するその内側で大溝SD-203を見出している。この大溝は、大環濠に先行する弥生時代中期前葉の環濠と考えられている。おそらく、本溝は、第19次SD-203と一連のものであり、大環濠掘削以前の環濠と考えられる。

SD-102E (第306図、写真図版179)

本溝は、調査区中央やや西寄り、SD-102の東肩で並行して見出した。検出過程において、弥生時代中期中葉～中世遺構検出面で確認できる土層の濁り全体をSD-102として掘り下げたところ、東側で溝方向に沿ったもうひとつのベースの盛り上がり(102の東肩と102Eの西肩)を確認した。このため、西側をSD-102、東側をSD-102Eに分離した。南壁断面によれば、SD-102Eの西肩がSD-102の上層堆積土を切っている。本溝は西南西-東北東に走行し、北端が収束する。その上面幅は、0.80~1.20mである。断面は逆台形で、深さは約0.7mを測る。なお、収束部手前で底面が一旦盛り上がり、収束部底面は一辺0.70mの方形土坑状を呈する。堆積土は4層からなるが、大きくは上・下2層に分かれ、上層は褐色粘質土、下層は黒色系粘土である。時期は、大和第Ⅱ-3様式である。

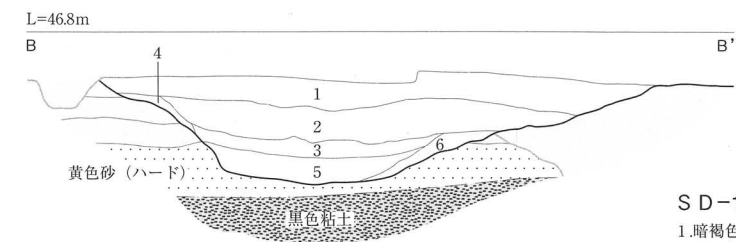
SD-118 (第304図、写真図版177)

本溝は、調査区東半でSK-127の西辺に並行して見出した。本溝は南-北に走行し、幅0.32~0.60mである。断面は逆台形で、深さは0.20mを測る。堆積土は、黒褐色粘質土の単層である。底面に接して、半完形の甕が1点出土した。時期は、大和第Ⅱ-2様式である。同時期の方形土坑であるSK-127の西辺に沿っており、何らかの関連が想定される。



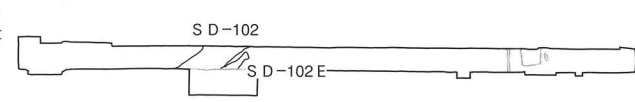
- SD-102**
1. 黄褐色粘質土 (ハード)
 2. 暗褐色粘質土 (黄斑)
 3. 暗灰色粘質土 (黄斑・炭混)
 4. 灰褐色粘質土
 5. 暗褐色粘土
 6. 灰黒色粘土 (植物混)
 7. 黒灰色粘土 (植物混)
 8. 黒灰色粘微砂
 9. 灰黒色砂質土
 10. 暗褐色粘質土 (黄斑)
 11. 暗灰色粘土 (植物混)
 12. 暗灰色粘土 (白斑)
 13. 暗灰色粘土 (砂混)
 14. 黒褐色粘土 (植物混)
 15. 灰色粘土と微砂の互層
 16. 灰褐色粘土

上層
中層
下層



- SD-102 E**
1. 暗褐色粘質土 (黄斑)
 2. 暗灰色粘質土 (黄斑)
 3. 暗灰色粘土
 4. 暗灰色粘質土 (砂混)
 5. 黒灰色粘土 (植物混)
 6. 暗青灰色粘土 (微砂混)

上層
下層



第306図 弥生時代中期前葉の遺構 (2) (S = 1/50)

(2) 弥生時代中期中葉の遺構 (第304図、写真図版176)

第V層：黄褐色粘質土の上面では弥生時代中期中葉～中世の遺構を検出するが、なかでも主体となるのがこの弥生時代中期中葉の遺構である。調査区の西端において、弥生時代中期中葉のSD-101Dを検出している。この大溝は、唐古・鍵遺跡の弥生時代中期居住域を囲んだ大環濠である。これより東側の微高地には居住域が拡がり、竪穴住居の痕跡と考えられる炭灰土坑や柱穴を多数検出している。住居は、柱穴からの出土土器が細片で少なく時期決定の手掛かりを欠くが、炭灰土坑からの出土土器は弥生時代中期中葉であり、概ね当時期のものと考えられる。また、調査区の中央で検出したSD-103は、住居からの排水とともに居住域の内部を区画した溝であり、その北西端はSD-101Dに連結すると考えられる。この他には、井戸と考えられるSK-101・114・118の3基を検出している。弥生時代中期中葉の唐古・鍵遺跡における居住域の様相について、その一端を示すといえよう。

土坑

SK-101 (第307図、写真図版180)

本坑は、弥生時代中期前葉の環濠であるSD-102の西側で検出した。平面は不整形を呈し、径1.18mである。断面は、上方が開いた円筒状であるが、中位は崩壊により外側に大きく膨らみ、深さは1.42mを測る。なお、平面において北西部がやや張り出しているが、その位置の断面中位付近には足置き場状の小さなテラスがある。これは崩壊によるものではなく、水汲みなどによって生じた痕跡と考えられる。

堆積土は大きく、上・中・下の3層に分かれる。上層は、上位が黒色粘質土、下位が暗灰褐色粘質土で、この間には炭灰層を挟む。中層は、暗灰色系粘土であるが、上位は周囲の崩壊によりベース層ブロックを含む。下位からは、櫛描き文をめぐらせた完形の広口壺(P3004)が上部で、底部を打ち欠いた無文の広口壺(P3005)が下部から出土した。下層は暗灰色粘砂である。底面は青灰色シルトに達し、湧水がある。掘削当初の機能は井戸であり、中層の埋没後廃棄坑になったと考えられる。時期は、大和第Ⅲ-4様式である。

SK-113 (第307図、写真図版181)

本坑は、調査区中央にあるSD-103の東肩で検出した。本坑はSD-103Cを切っている。一方で、SD-103の再掘削溝にその上面を、弥生時代後期初頭のSK-106にその西半を切られるため、その西半1/2及び上層の堆積土は不明である。平面は大半を欠くが、残存する北東隅にコーナーをもつことから長軸1.2mほどの隅丸方形であったと想定される。断面は方形で、深さは0.50mを測る。なお、底面の北東隅から東肩沿いに平面楕円形の落ち込みがあり、平坦な底面から0.1mほどくぼみ、そこでは深さが0.60mとなる。底面のベースは、明灰黄色砂である。

堆積土はSD-103に切られ上層を欠くが、第1層：炭灰層、第2層：黒色粘粗砂の2層が残存した。東肩沿いの落ち込み床直上からは、自然木や棒材とともに内面に炭化物が著しく付着した鉢(P3008)が出土した。時期は、大和第Ⅲ-1様式である。本坑の機能は不明である。

SK-114 (第307図、写真図版181)

本坑は、調査区中央のSD-103の西側で、拡張前の調査区南排水溝によって南半を削平した状態で検出した。その東肩は、弥生時代中期後葉のSD-113に切られ、弥生時代中期中葉のSK-118の西肩を切っている。平面は、南半を調査区南排水溝によって削平し、北半は誤って掘り過ぎているが、楕円形を呈し長軸1.25m、短軸0.52mである。断面は円筒状であるが、東肩の下部に一段のテラスを有し、深さは0.87mを測る。

堆積土は8層からなるが、大きく上・中・下の3層に分かれる。上層は黒灰色粘質土であるが、その上位は鉄分によって黄褐色粘質土となる。中層は上位が暗灰色粘質土で、下位が黄灰色砂である。下層は黒灰色粘土で、底面直上はシルトのブロック土を含んだ暗灰色粘土となる。底面は、黒色粘土層に達する。黒色粘土層は湧水点ではなく、本坑の機能として井戸の可能性は低いように思われる。ただし、本坑とSK-118については、その切り合いが不明瞭である。本坑が、SK-118の埋没過程において掘り込まれたとするならば、SK-118からの伏流水を得ていたと考えることもできる。時期は、大和第Ⅲ-2様式か。

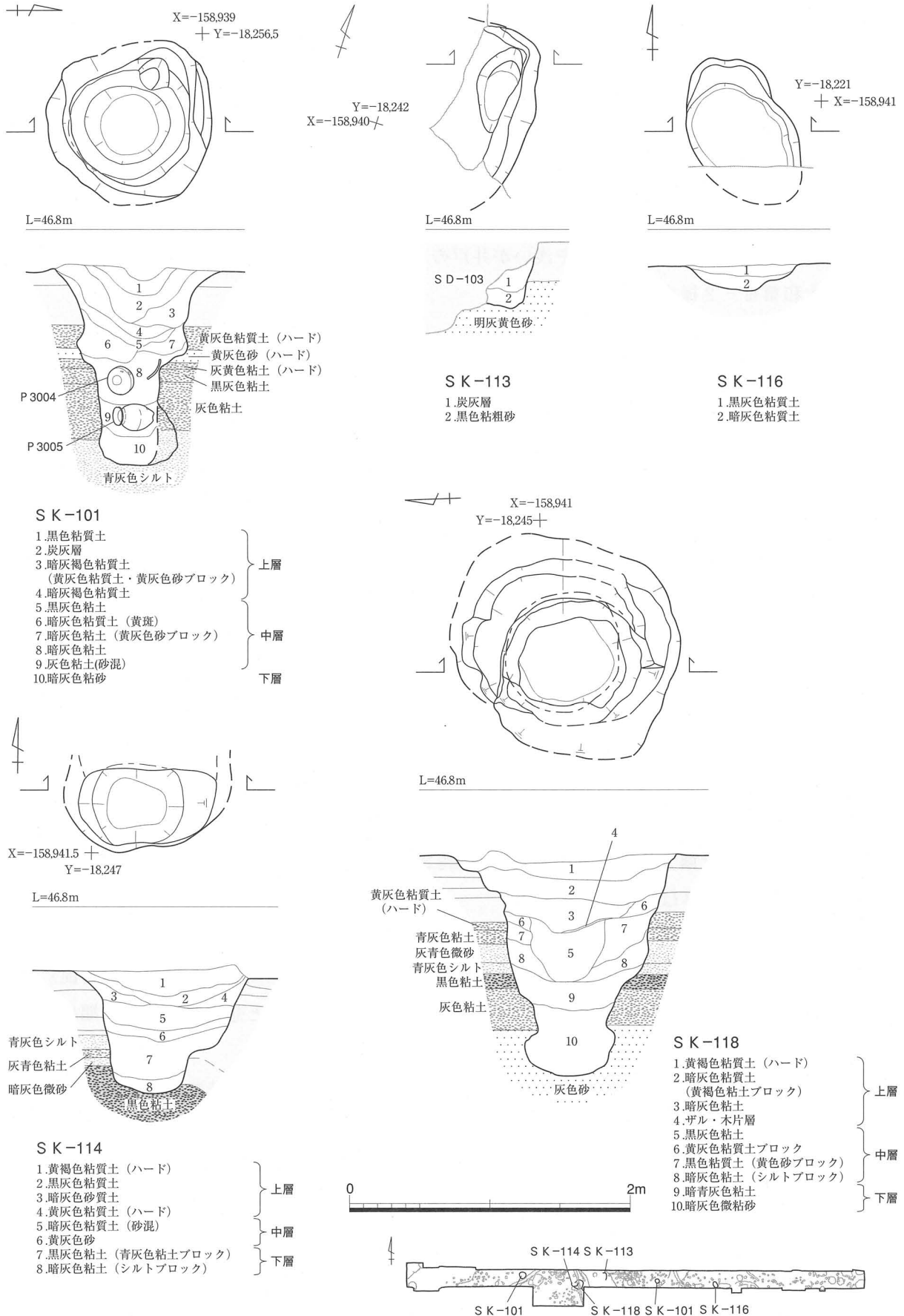
SK-116 (第307図)

本坑は、調査区東半で、SK-117の西側に隣接して検出した。南排水溝によって、南半のほとんどを欠損する。平面は楕円形を呈し、長軸0.80m以上、短軸0.70mである。断面は皿状で、深さは0.20mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：黒灰色粘質土、第2層：暗灰色粘質土である。時期は、大和第Ⅲ-2様式である。

SK-118 (第307図、写真図版182)

本坑は、調査区中央のSD-103の西側で、拡張前の調査区南排水溝が中央にあって分断された状態で検出した。西肩を、SK-114に切られる。平面は円形を呈し、径1.60mである。断面は上部の開いた円筒状で、深さは1.59mを測る。なお断面は、下位のベースが粘性の強い灰色粘土のため坑底に向かってすぼまっていくが、ベースの灰色粘土の直下は灰色砂層であるため、底部側面は大きくえぐれる。このえぐれは、発掘中に崩壊したもので、当初の形態ではない。

堆積土は大きく上・中・下の3層に分かれる。上層は、下位に暗灰色粘土が堆積し、上位は暗灰色粘質土であるが、最上層は鉄分の沈着により黄褐色粘質土となる。上層のうち、中層直上に堆積した下位の暗灰色粘土からは、内面にベンガラが付着した直口鉢(P3003、大和第Ⅲ-1様式)とともに筴などが出土した。中層の堆積状況は複雑で、壁周囲の崩落によるベースのブロック土とその中央に生じたくぼみに堆積した黒灰色粘土からなる。あるいは、中央の黒灰色粘土を再掘削によるものと捉え、先の上層における直口鉢・筴もまたこの再掘削坑に伴うものとも考えることも可能である。下層は青味のかかった灰色系粘土である。底面付近では、ベースの灰色砂が混じる。櫛描き直線文を施した直口の大型鉢及び広口壺(P3001・3002、大和第Ⅱ-3-b様式)が出土した。底面は灰色砂に達し、湧水がある。掘削当初の機能は井戸であるが、上層は廃棄坑として使用されたと考えられる。



第307図 弥生時代中期中葉の遺構 (1) (S = 1/40)

SK-122 (第308図、写真図版182)

本坑は、調査区西半のSD-102の西側で検出した。本坑は、大和第Ⅲ-1様式のSK-132の南西肩を切り、調査区南排水溝にその南端を切られる。平面は楕円形を呈し、復原長軸0.86m、短軸0.75mである。断面は逆台形で、深さは0.54mを測る。

堆積土は3層からなり、第1層：灰色粘質土（黄灰色粘質土ブロック）、第2層：暗灰色粘質土（黄灰色粘質土ブロック）、第3層：黒灰色粘土（微砂ブロック）である。底面のベースは、灰色微砂である。機能は、やや浅いが井戸の可能性はある。時期は、限定できる遺物を欠くが、大和第Ⅲ-2様式か。

SK-132 (第308図、写真図版183)

本坑は、調査区西半でSD-102の西肩及び堆積土を切った状態で検出した。本坑の南西肩はSK-122に切られ、南東肩は調査区南排水溝によって切られる。平面は隅丸方形を呈し、長軸2.00m、短軸1.65mである。断面は方形で、深さは0.67mを測る。

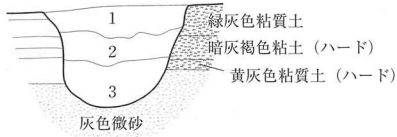
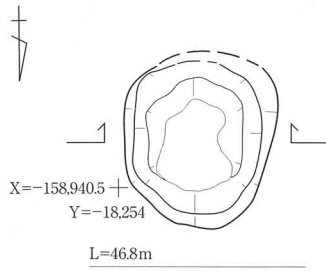
堆積土は7層からなるが、大きくは上・中・下の3層に分かれる。上層は灰色粘質土であるが、鉄分の沈着による黄斑の濃淡をもって二分することができる。中層は間に薄い植物層を挟んで、上位の黒灰色粘土と下位の灰黒色粘土に二分される。下層は粘層である。下層の粘層と坑底の間には、灰色粘微砂が薄く堆積する。粘層内からは、容器などの木製品が出土した。底面のベースは、無遺物層の黒灰色粘土及びSD-102の堆積土の黒灰色粘土（シルトブロック）である。時期は、大和第Ⅲ-1様式である。伊賀からの搬入（P5485）と考えられる縄文を施文した土器が出土した。

SK-133 (第308図、写真図版183)

本坑は、調査区西端でSD-101Cの東肩及び堆積土を切った状態で検出した。西半の大部分をSD-101Cとして掘り下げた後に認識したため、その形態及び堆積土、出土遺物に不明な点を残す。平面は隅丸方形と考えられ、長軸2.30m以上、短軸2.50m以上である。断面は逆台形と考えられ、深さは1.17mを測る。

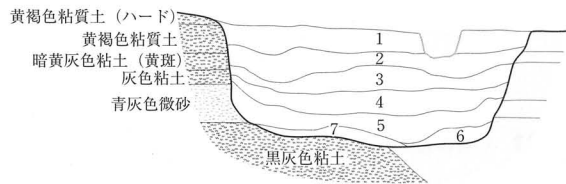
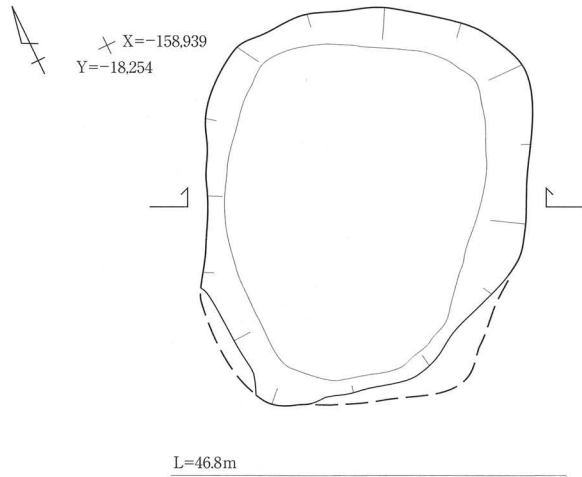
堆積土は11層からなるが、大きく上・中・下の3層に分かれ、上層は灰色系粘質土のブロック土、中層は暗灰色系粘土、下層は間に青灰色シルトを挟んで上位が黒色粘土（植物混）で下位が暗灰色粘土（シルトブロック）である。機能は、木器貯蔵穴と想定される。時期は、大和第Ⅲ-2様式である。

本坑と大環濠であるSD-101との前後関係は、出土土器と調査区東壁断面によればSD-101D、本坑、SD-101Cの順となる。また、SD-101Cの東肩に沿って並ぶ大和第Ⅲ-3様式の土器群が、本坑の上面にあっても途切れないことは、その前後関係が正しいことを示すものといえよう。つまり、本坑は大和第Ⅲ-1様式に掘削されたSD-101Dの東肩に掘り込まれた土坑であり、大和第Ⅲ-3様式におけるSD-101Cの再掘削時にはその上面を削平されるのである。本坑は木器貯蔵穴として、環濠の肩部に掘り込むことによって、水を取り込んでいたものと考えられる。



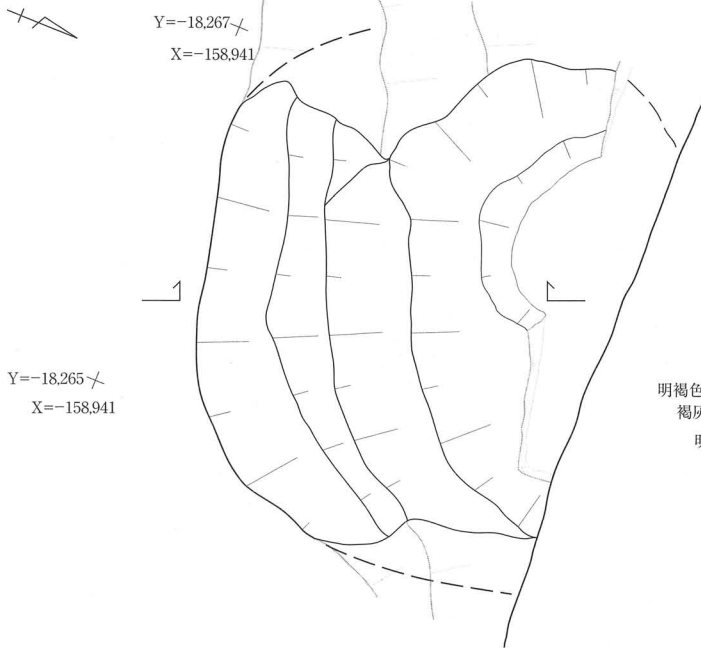
S K-122

1. 灰色粘質土 (黄灰色粘質土ブロック)
2. 暗灰色粘質土 (黄灰色粘質土ブロック)
3. 黒灰色粘土 (微砂ブロック)



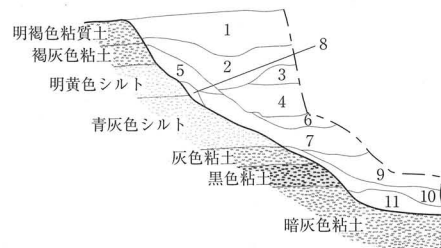
S K-132

1. 暗灰色粘質土 (黄斑ブロック)
 2. 灰色粘質土 (黄斑ブロック)
 3. 黒灰色粘土
 4. 灰黒色粘土
 5. 粉層
 6. 黒灰色粘土 (灰色粘土ブロック)
 7. 灰色微粘砂
- } 上層
} 中層
} 下層



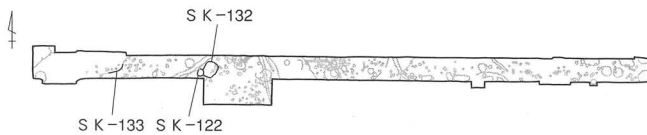
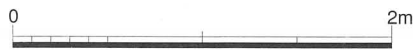
Y=-18,265
X=-158,941

L=46.8m

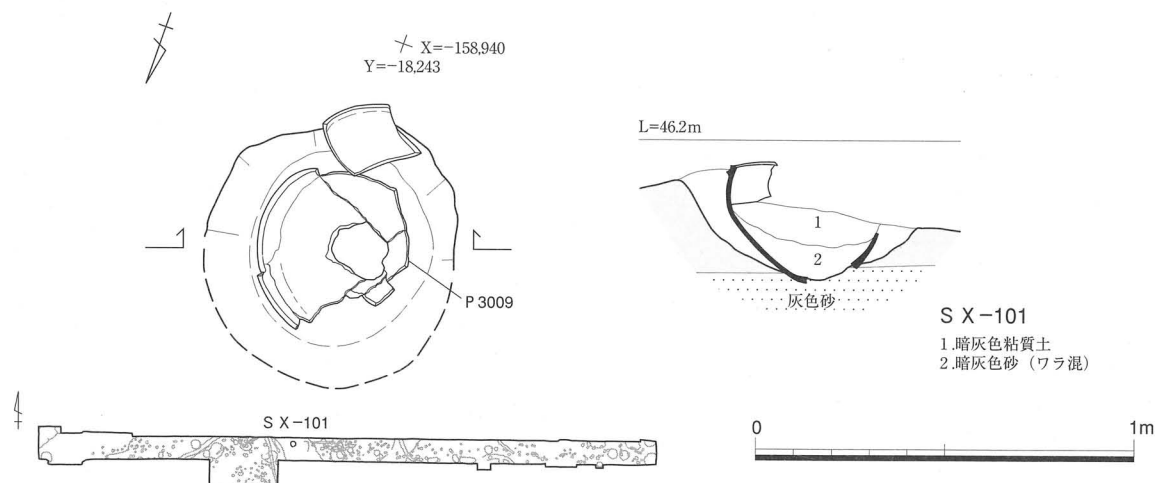


S K-133

1. 暗緑灰色粘質土 (ハード)
 2. 暗緑灰色粘質土 (灰色粘質土ブロック)
 3. 灰色粘土 (ハード)
 4. 灰色粘土と黄灰色粘土のブロック
 5. 暗灰色粘質土 (木片)
 6. 暗灰色粘土
 7. 暗灰色粘土と黒色粘土 (植物混) のブロック
 8. 暗黄灰色粘質土 (ハード)
 9. 黒色粘土 (植物混)
 10. 青灰色シルト
 11. 暗灰色粘土 (シルトブロック)
- } 上層
} 中層
} 下層



第308図 弥生時代中期中葉の遺構 (2) (S = 1/40)



第309図 弥生時代中期中葉の遺構（3）（S = 1/20）

S X - 101（第309図、写真図版190）

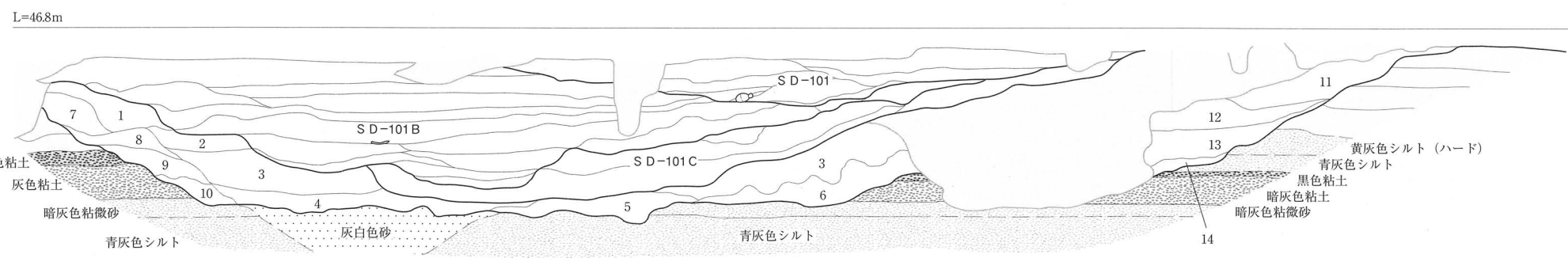
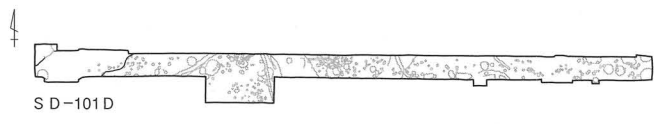
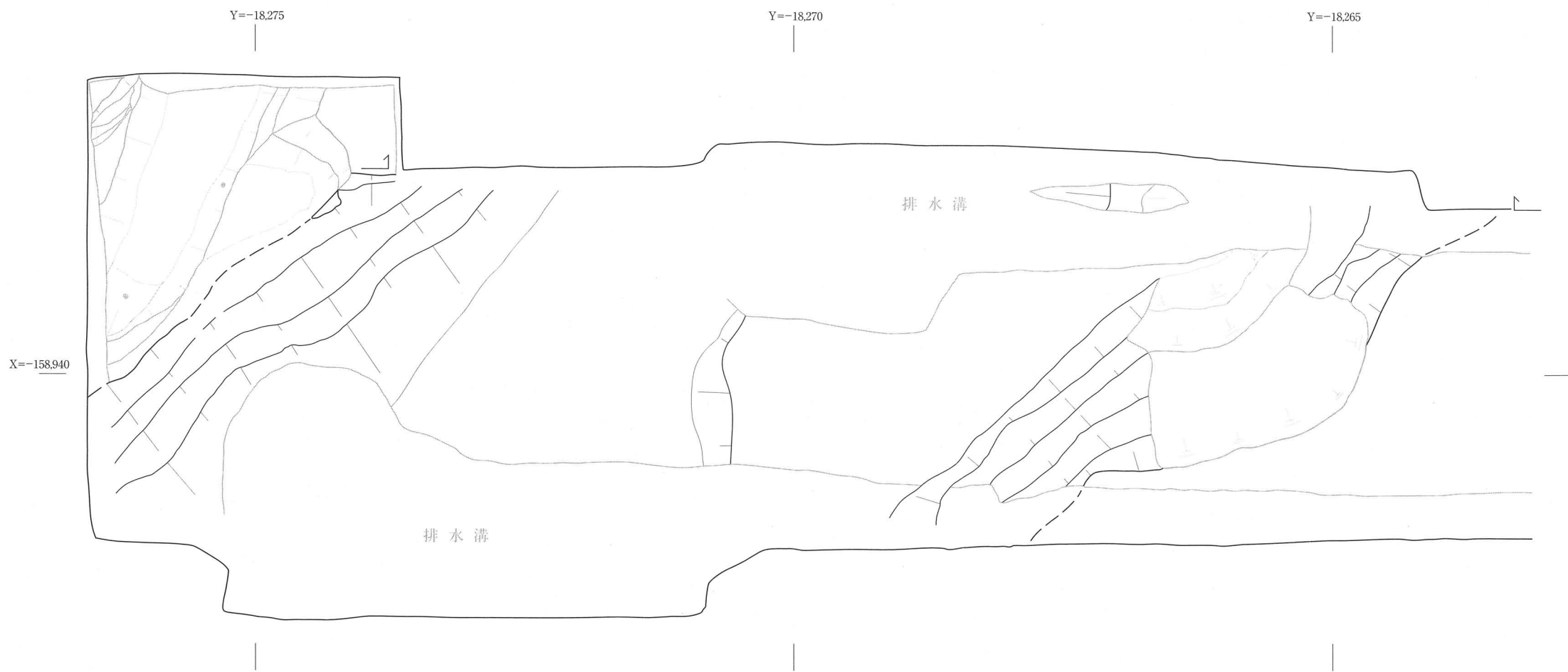
本坑は、調査区中央に位置する S D - 103 に掘り込まれた土坑で、底部を打ち欠いた大型鉢（P 3009、大和第三 - 3 様式）を設置する。調査時には S D - 103 の堆積土として掘削し、大型鉢の全形を検出するまで認識が至らなかったため、その掘形の 1/2 を消失してしまっている。残存部から平面は円形で復原径 0.66m と考えられる。その深さについても、上面のほとんどを削り取ってしまっているが、大型鉢口縁部から底面までの高さで 0.32m を測る。掘形の埋土は黒色粘土（砂混）で、ベースとなる黒色粘砂（S D - 103 の堆積土）とほとんど変わらない。大型鉢内部の堆積土は 2 層に分かれ、第 1 層：暗灰色粘質土、第 2 層：暗灰色砂（ワラ混）である。底面のベースは灰色砂であり、湧水がある。

本坑は、S D - 103 に掘り込まれた大型鉢を枠とする集水施設と考えられる。なお、S D - 103 は S X - 101 が掘り込まれても機能を停止しておらず、再掘削溝が大型鉢の上半部 1/2 を削っている。

溝

S D - 101 D（第310図、写真図版184）

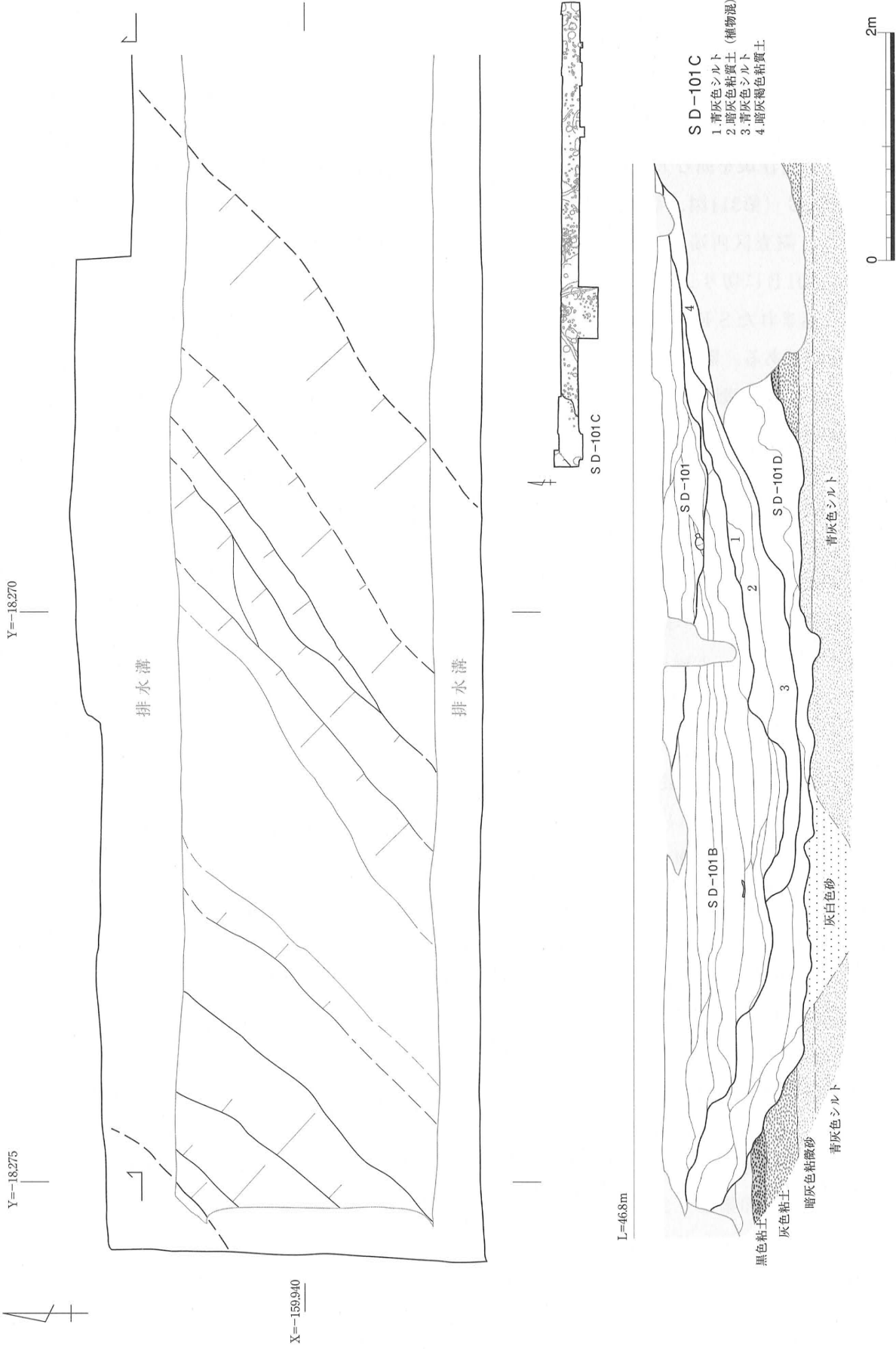
本溝は調査区西端で検出した。その肩部は、東側を弥生時代中期中葉の S K - 133 に、西側を弥生時代中期後葉の S K - 130・131 に切られている。本溝は東北東 - 西南西に走行し、幅約 7.0m を測る。断面は逆台形である。ただし、底面は西肩に沿って 1 段深く、東半側が低く幅の広いテラス状となる。また、東肩部は、南壁断面では強い傾斜であるのに対し北壁断面は傾斜が緩やかで、南から北に向かって開くような状態である。北壁断面では、S K - 133 を境として東側の堆積が異なっている。別遺構の堆積土である可能性も想定できる。深さは、最終埋没である S D - 101 の堆積土上面から約 1.4m を測る。底面は、第 X 層：青灰色シルトとこれを切って南東から北西に走行する灰白色砂に達する。灰白色砂からの湧水が激しく、調査時に最下層はヘドロ状となり、上層遺物との分離がうまくできなかった。



- SD-101D**
- 1 暗灰色粘土 (黄斑)
 - 2 暗灰色粘質土
 - 3 暗灰色粘土 (植物混)
 - 4 黒灰色粘土 (植物混)
 - 5 黒灰色粘土 (植物・暗灰色粘微砂混)
 - 6 灰色粘土 (白斑)
 - 7 暗灰色粘土 (黄斑・ハード)
 - 8 灰黒色粘土
 - 9 灰色粘土 (白斑)
 - 10 暗灰色粘土 (白斑)
 - 11 暗灰色粘土と緑灰色粘質土のブロック
 - 12 暗灰褐色粘土 (黄斑)
 - 13 灰色粘土 (白斑)
 - 14 黒灰色粘土 (植物混)



第310図 弥生時代中期中葉の遺構 (4) (S = 1/50)



第311図 弥生時代中期中葉の遺構(5) (S=1/50)

堆積土は、再掘削溝のSD-101Cによって中央の大半が削平を受け、わずかに最下層が残存するのみであったが、両肩部は当初の堆積を残している。最下層は、植物を含んだ黒色粘土である。肩部には、よく締まった灰色系粘土が堆積する。この大溝は規模・位置・その方向から、本調査区に対して南西の位置にあたる第13次SD-06、第19次SD-204へと繋がり、弥生時代中期居住域を囲む大環濠と考えられる。なお、人骨頭頂部の出土は特筆される。

SD-101C (第311図、写真図版185)

本溝は、調査区西端で検出したSD-101Dの再掘削溝である。その西肩は、再々掘削溝のSD-101Bに切り込まれ、その立ち上がりは不明である。東肩は、SD-101Dの堆積土上に掘り込まれたSK-133の堆積土上面を切っている。本溝は西南西-東北東に走行し、溝幅は6.80mである。断面は逆台形で、深さは東肩の検出面から約1.2mを測る。

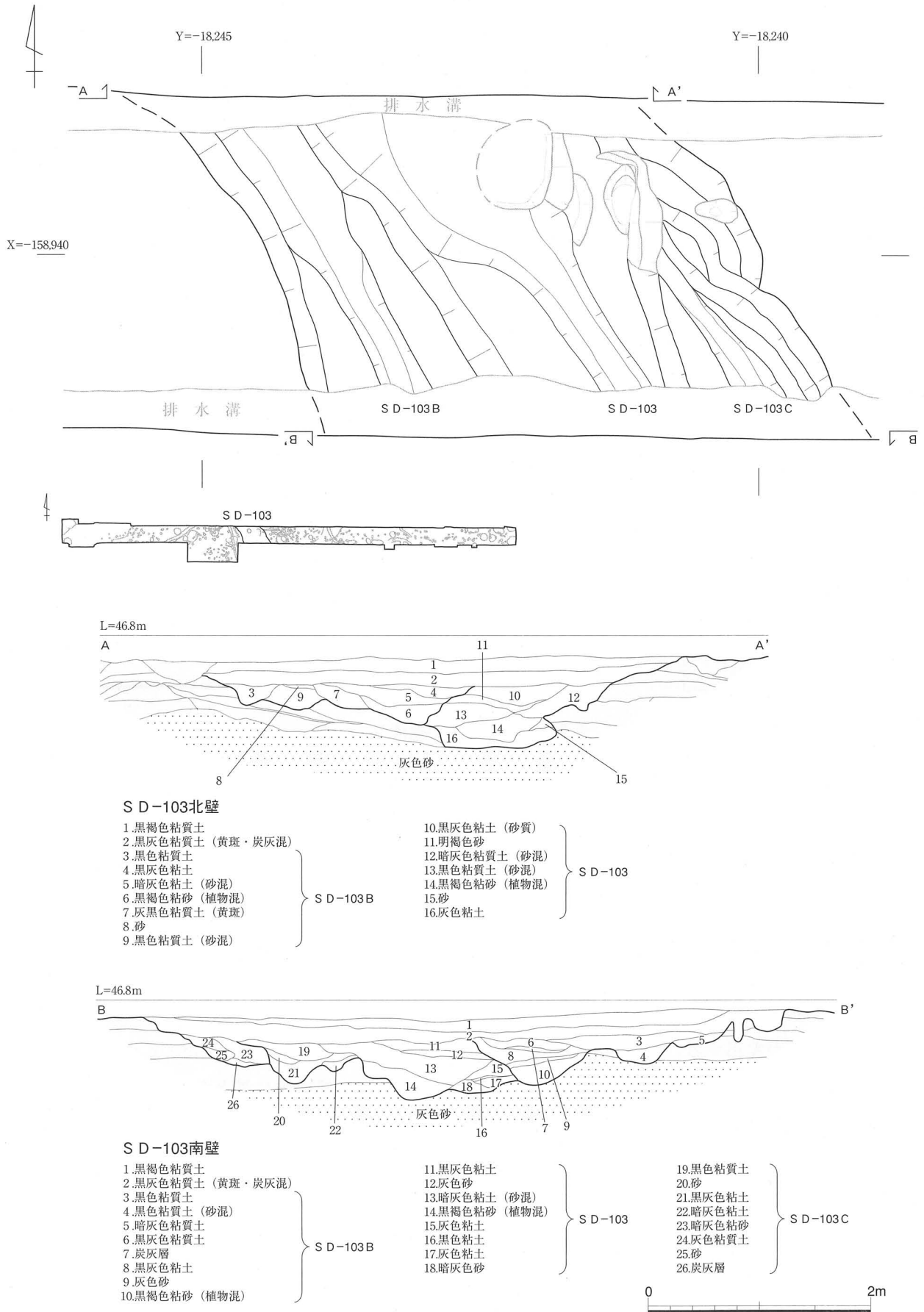
堆積土は、再々掘削溝のSD-101Bによって大半が浚えられてしまっているが、東肩側に残存する。下層に堆積した厚さ約0.2mの青灰色シルトは、掘削間もない段階での洪水堆積を示す可能性がある。その上面には暗灰色粘質土(植物混)が堆積しており、滞水期間があったものと考えられる。東肩の暗灰褐色粘質土層中には、肩に張り付くように大和第三-3様式土器群が並んでいた。

SD-103 (第312図、写真図版186)

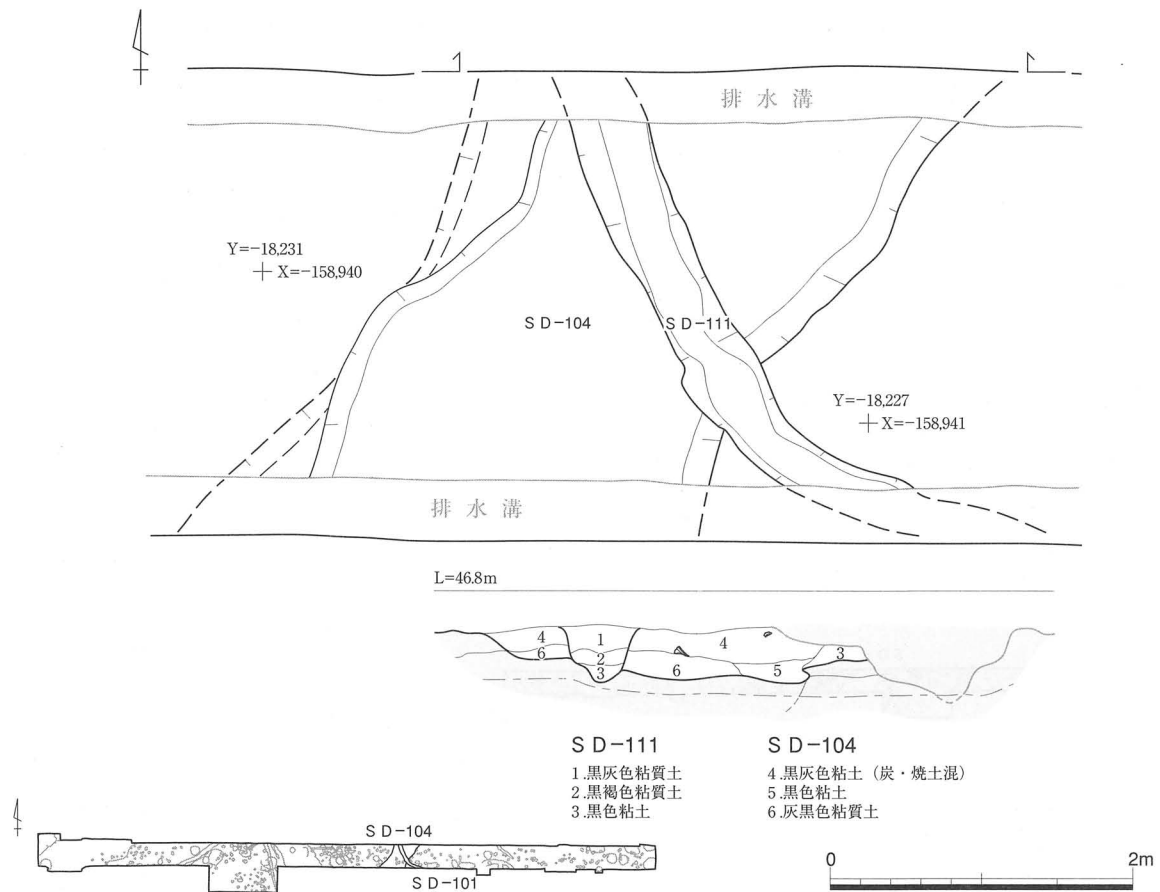
本溝は、調査区中央で検出した南南東-北北西に走行する小溝の集合体である。小溝が切り合うことによって、上面での検出幅は約4.0mの大溝状を呈する。調査技術上、底面ちかくまで掘り下げて検出し得た両肩を有する溝状の落ちから、SD-103・103B・103Cの3条を認識したが、おそらくはそれ以上の小溝の切り合いが想定される。

SD-103は、中央の最も深い落ち込みである。両肩検出状態で、幅1.80mである。両肩にテラスを有するが、これは2段掘りということではなく、切り合う溝の底面となる可能性がある。深さは、遺構検出面から0.82m、両肩検出面から0.58mを測る。堆積土は黒褐色粘砂である。SD-103Bは、西側の落ち込みである。北半は、東肩が不明瞭となる。両肩検出状態で、幅0.40mである。深さは、遺構検出面から0.48m、両肩検出面から0.16mを測る。堆積土は黒色粘質土(砂混)である。SD-103Cは、東側の落ち込みである。北半は、SK-113によって削平を受ける。両肩検出状態で、幅0.16~0.40mである。深さは、遺構検出面から0.52m、両肩検出面から0.36mを測る。堆積土は黒灰色粘土である。

いずれの堆積土からも大和第三-1様式の土器が出土するが、大和第三-1様式の鉢を出土したSK-113に切られるSD-103Cが最も古い可能性がある。また、本体部分のSD-103は度重なる浚渫を受けていたと考えられ、SX-101の集水枠である大型鉢の口縁部が1/2欠損するのも、大和第三-3様式以降に再掘削があったことを示すものであろう。大和第四様式には埋没を始め、弥生時代後期前葉の井戸SK-105が掘削される。最上層には、布留0式土器を含んでいた。機能は、その北西側に向かって水を流していたものと考えられ、居住域を区画するとともに、住居からの汚水を集め大環濠に排水していたのであろう。



第312図 弥生時代中期中葉の遺構 (6) (S = 1/50)



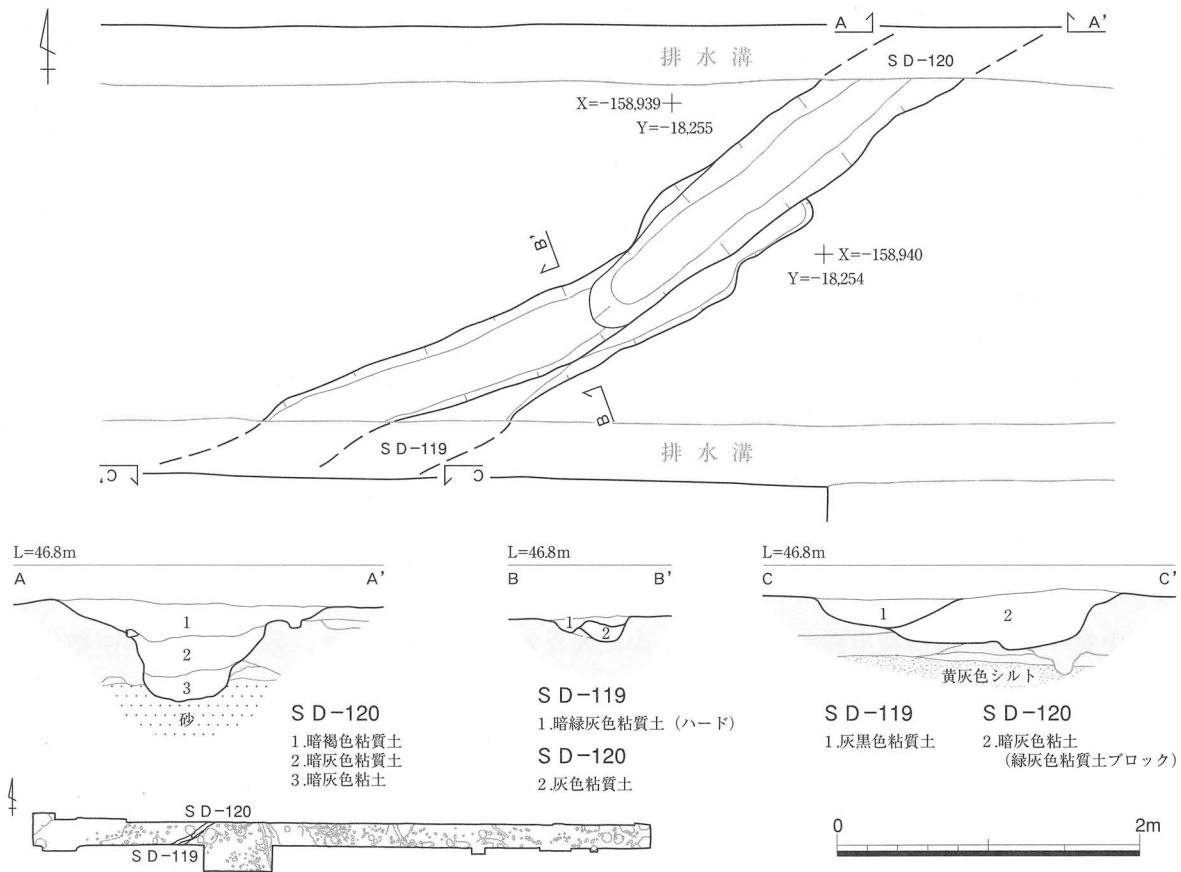
第313図 弥生時代中期中葉の遺構 (7) (S = 1/50)

SD-104 (第313図、写真図版186)

本溝は、調査区中央で検出した。その堆積土の上面をSD-111が切り込んでいる。本溝は南南西-北北東に走行し、幅は最大2.80mである。断面は逆台形で、深さは約0.4mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：黒灰色粘土（炭・焼土混）、第2層：灰黒色粘質土である。第2層からは、大和第Ⅱ-3-b～第Ⅲ-1様式の土器（PP3001）がまとまって出土した。なお、本溝については遺構検出面における溝状の濁りをもって認識したが、明瞭な肩のラインを平面・断面的に確認したわけではない。深さも溝幅の割には浅く、すぐに底面と考えられる黄灰色粘土が露出する。黄灰色粘土上面では、SD-111や柱穴群を検出した。このことから、複数の遺構が切り合うことによって生じた落ち込みを、調査技術的に溝として検出している可能性も考えられる。

SD-111 (第313図、写真図版187)

本溝は、調査区中央で検出した。SD-104の堆積土上面から切り込まれており、当初は両者を識別できずSD-104として掘り下げている。本溝は、東に内湾しながら東南東-北北西に走行し、幅は0.48mである。断面は逆台形で、北壁断面における深さは0.38mを測る。堆積土は、黒灰色粘質土である。時期は、大和第Ⅲ-4様式である。



第314図 弥生時代中期中葉の遺構(8) (S = 1/50)

SD-119 (第314図、写真図版187)

本溝は、調査区西半で、SK-101とSK-122・132の間で検出した。本溝は、先行溝であるSD-120の堆積土上面を再堀削しているが、調査では両者を識別できずに掘り下げた。本溝の底面によって、SD-120の東肩がテラス状となっていたことから、それを認識した。本溝は南西-北東に走行し、幅は0.40mである。北端は北排水溝の手前で収束する。断面は皿状で、南壁断面における深さは0.20mを測る。堆積土は、灰黒色粘質土である。時期は、大和第Ⅲ-2様式である。

SD-120 (第314図、写真図版187)

本溝は、調査区西半で、SD-119に上面を切られた状態で検出した。本溝は南西-北東に走行し、幅は0.44~0.60mである。断面は方形あるいは逆台形となる。調査区中央から北半に向かって一段深く、南壁断面における底面標高が46.20mで深さは0.40mに対し、北壁断面における底面標高が45.90mで深さは0.68mを測る。堆積土は、第1層：暗緑灰色粘質土、第2層：暗灰色粘質土の2層であるが、深い部分では第3層：暗灰色粘土が堆積する。第2層から、細頸壺の胴部上半が出土した。時期は、大和第Ⅲ-2様式である。おそらく、本溝は東側にあるSD-103に取り付く排水溝であったと考えられる。

建物

大環濠 S D - 101 から東側の微高地で、炭灰の堆積した土坑や小溝、多数の柱穴を検出した。これらは、建物それも竪穴住居跡の一部であると考えられる。しかし、遺構の切り合い、あるいは削平が激しいことによるのか、1棟の単位を把握するための掘り込みや周壁溝をつかむことは不可能である。ただ、炭灰の堆積した土坑が竪穴住居の灰穴炉と考えられるので、それを中心として円弧を描く柱穴群をもって、1棟を想定復原することも可能であろう。

炭灰の堆積した土坑は、S K - 110・115・117・119・121・123・126・134・136・137の10基である。このうち、S K - 123・126・134・136の群と S K - 117・119・121の群は、それぞれの土坑が近接しており同時存在は不可能である。位置を変えた建て替えに伴うものであろう。一方、S K - 110付近では、炭灰層が周囲に拡がり、無数の柱穴が同心円状に拡がっている。これは、同一地点での建て替え拡張に伴うものと考えられる。

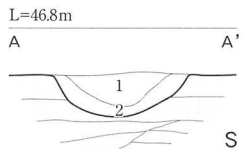
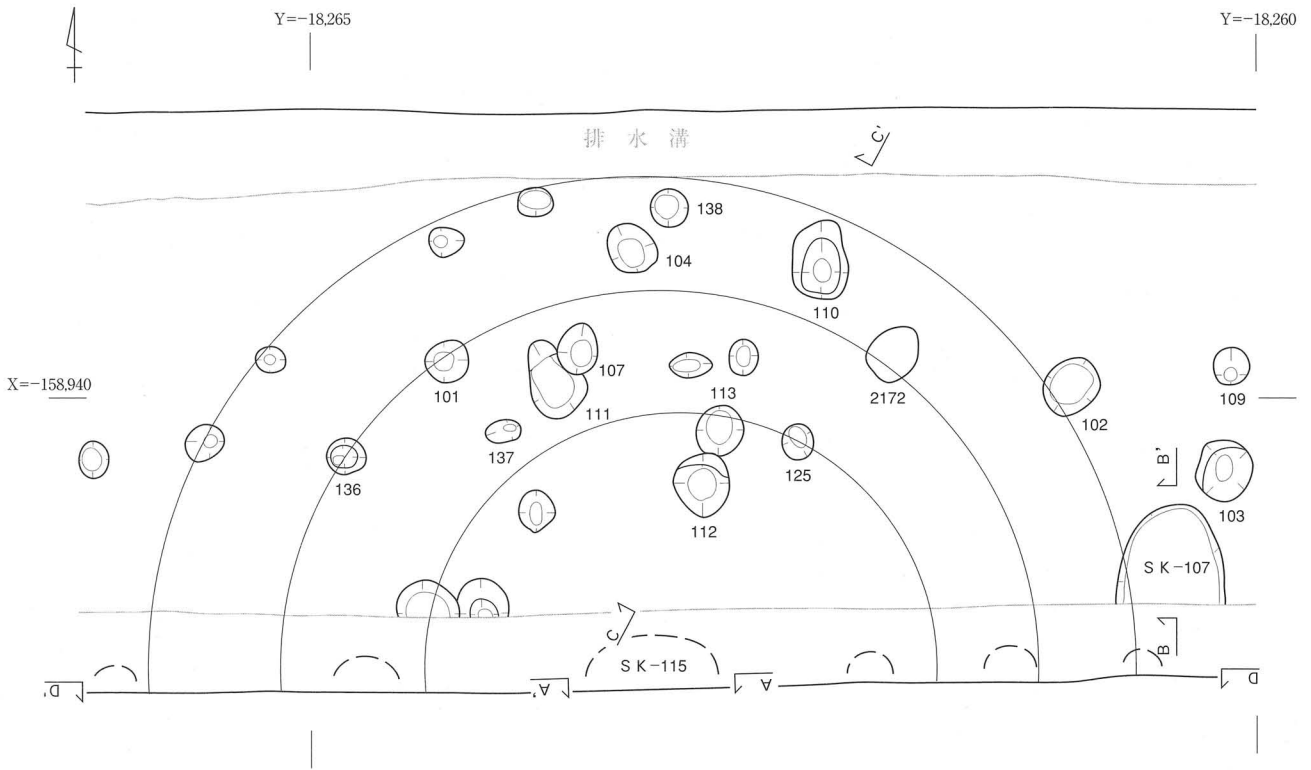
炭灰の堆積した土坑からの出土土器は、そのほとんどが大和第Ⅲ様式の範疇に収まるものであった。これに対し、柱穴については、埋土からの出土遺物が少なく、第Ⅴ層上面が弥生時代中期中葉～中世の遺構検出面であり、明らかに異なる中世埋土を除き、弥生時代中期中葉から古墳時代初頭の埋土を識別することは不可能である。このことから、炭灰土坑を中心とする周辺の柱穴をまとめて、これを弥生時代中期中葉の竪穴住居跡として報告する。なお、土坑番号が調査時における検出順であるのに対し、室内での図面整理によって抽出された住居跡には西から東の順で番号を付けた。

S B - 101 (S K - 115を中心とする柱穴群) (第315図、写真図版188)

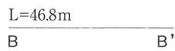
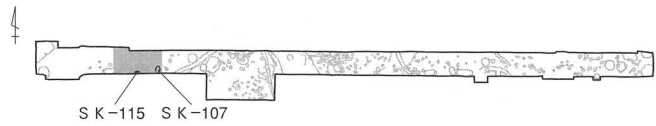
S K - 115は、調査区西半の S D - 101 と S D - 102 の間、南壁において断面を確認した。南排水溝によって、その北半は削平してしまっている。平面は不明であるが、南壁での上面幅 0.70m である。断面は半円形で、深さは 0.24m を測る。堆積土は 2 層からなり、上層は灰色粘質土、下層は炭灰層である。出土遺物は、中期弥生土器小片のみのため、年代を確定することはできなかった。本坑は炭灰土坑であり、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられよう。

この S K - 115 を中心として、半径 1.40m、2.00m、2.60m の同心円状に分布する柱穴から、竪穴住居の痕跡を想定した。なかでも、半径 1.40m 前後に分布する柱穴のうち、Pit - 112、Y = -18,262m 南壁、Y = -18,264m 南排水溝あるいは Y = -18,265m 南壁の 4 基は、平面が直径 0.3m ほどの円形で、検出面から深さ 0.5m ほどの標高 46.10m 前後が底面となる。これら規則性をもつ柱が、竪穴住居における 4 本主柱穴構造の 3 本 (Y = -18,264m 南排水溝と Y = -18,265m 南壁の柱穴は、近接することから建て替えによる重複とみなす) となる可能性は強い。

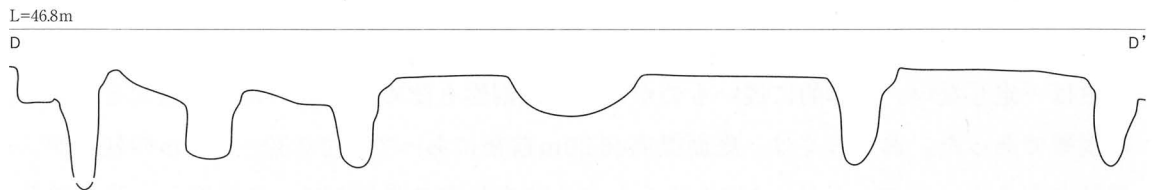
これより外側、S K - 115 から半径 2.00m、2.60m に分布する柱穴についても、住居の建て替え拡張に伴うものと想定している。ただし、半径 2.00m、2.60m に分布する柱穴は、浅く規則性は認められない。また、S K - 115 は単独であり、炭灰土坑の切り合いや炭灰層の拡がり確認できなかった。炭灰土坑の状況は竪穴住居跡の建て替えを示すものではなく、外側の柱穴は無関係となる可能性も考えられよう。



SK-115
1. 灰色粘質土
2. 炭灰層



SK-107
1. 灰褐色粘質土 (炭灰混)
2. 褐色粘質土 (炭灰混)



第315図 弥生時代中期中葉の遺構 (9) (S = 1/40)

S B-102 (S K-137を中心とする柱穴群) (第316図)

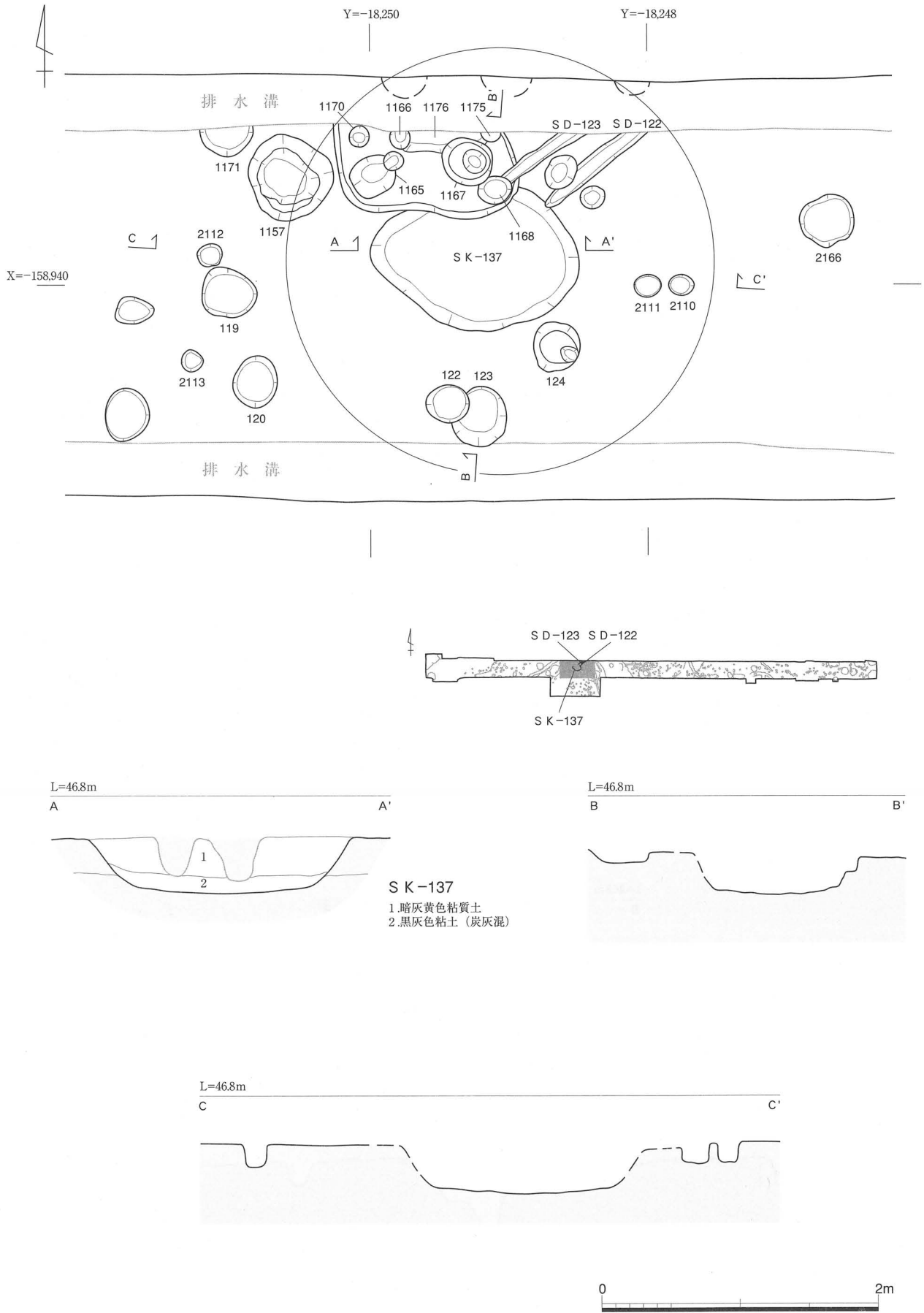
S K-137は調査区中央、S D-102の堆積土上面で検出した。S D-102を検出する過程の掘り下げ時に認識したため、上面を0.2mほど削平してしまっている。検出状況における平面は楕円形で、長軸1.52m、短軸1.12mである。断面は、皿状を呈し検出面からの深さは0.14mを測るが、削平分を加えるならば深さは0.34mとなる。堆積土は、黒灰色粘土(炭灰混)を検出しているが、その上層の削平した暗灰黄色粘質土も加え、2層からなっていたと考えられる。出土遺物は、中期弥生土器小片のみのため、年代を確定することはできなかった。しかし、少なくとも、S D-102埋没以後に掘削されている。本坑は炭灰土坑であり、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられよう。なお、本坑の北西肩には、Pit-1165・1166・1168・1170・1175・1176が切り合って落ち込み状を呈しているが、堆積土は暗灰色粘土(炭灰混)であり、これらもまたひとつの灰穴炉であった可能性が考えられる。

このS K-137を中心として、半径1.40mの円形に柱穴がめぐることから、竪穴住居の痕跡を想定した。柱穴の規模は、平面が径0.20~0.60mとばらつき、深さも一定しない。確実に主柱穴と呼ぶものは、確認できていない。なお、S D-122・123は、S K-137から北東方向に延びる2条の小溝である。どちらも幅0.10m前後、深さ0.05m前後の細く浅い溝であるが、これはS K-137と同様に上面を0.2mほど削平して検出したことによるものであろう。本来は、それなりの幅と深さを備えた溝であったと考えられる。これらはS K-137からの排水溝で、S D-103あるいはS D-113の西肩に取り付いていた可能性が想定される。

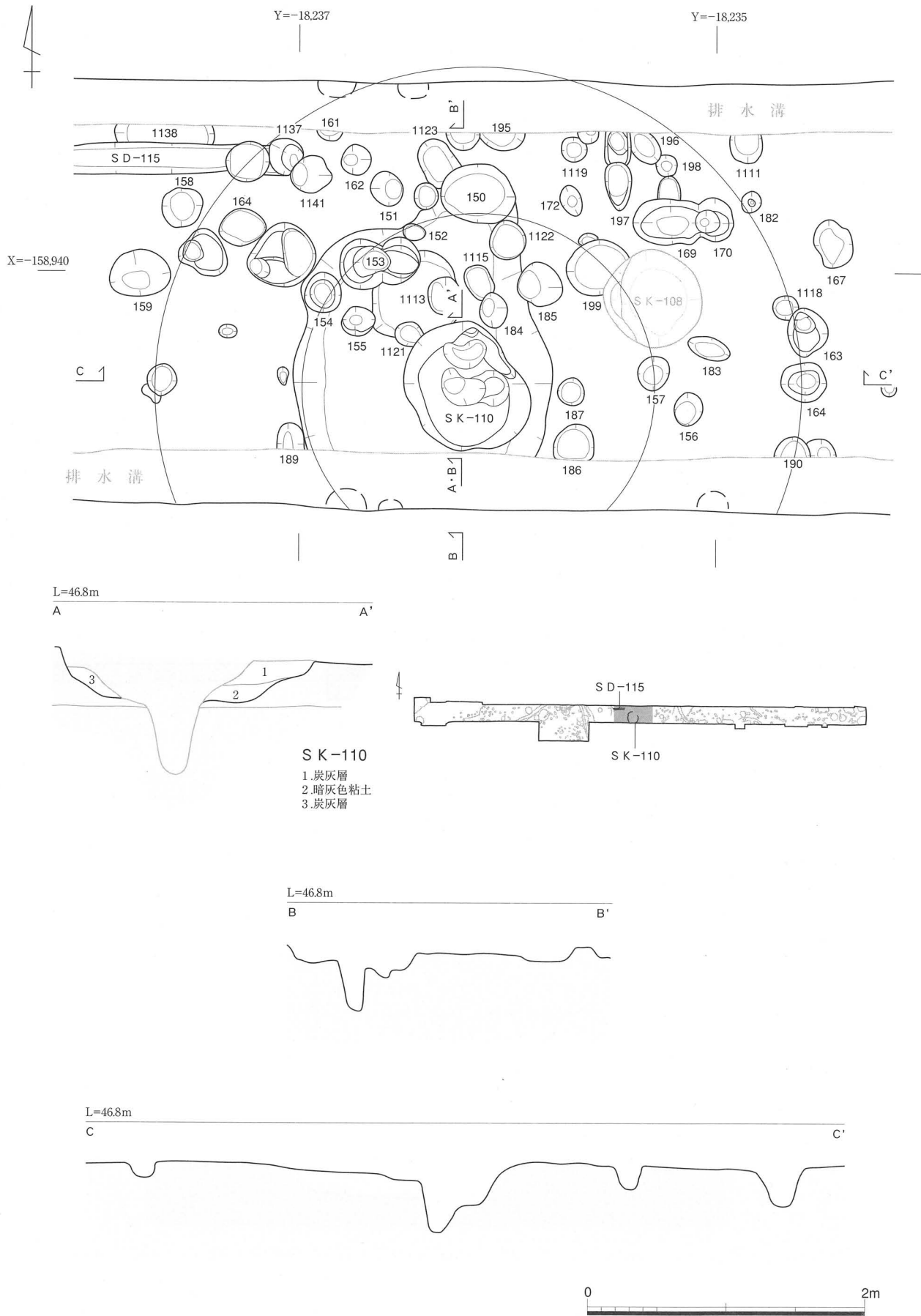
S B-103 (S K-110を中心とする柱穴群) (第317図、写真図版188)

S K-110は調査区中央、S D-103の東側で検出した。検出面において炭灰層が不定形に長軸1.80m以上、短軸1.80mで薄く広がっていたが、その中央やや東寄りが落ち込むことによってS K-110となった。平面は不整円形を呈し、径0.90mである。断面は皿状で、深さは0.18mを測る。底面には柱穴状のくぼみがあり、凹凸が激しい。堆積土は、中央と縁辺で異なる。中央は上層に黒色粘質土、下層に黒灰色粘土、縁辺は炭灰層である。中央で炭灰層を欠くことから、上層からの別遺構の切り込み、あるいは中央が最終堆積層であることが考えられる。本坑からは大和第Ⅲ様式前半の土器が出土しているが、時期を判断するには至らない。本坑は炭灰土坑であり、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられよう。

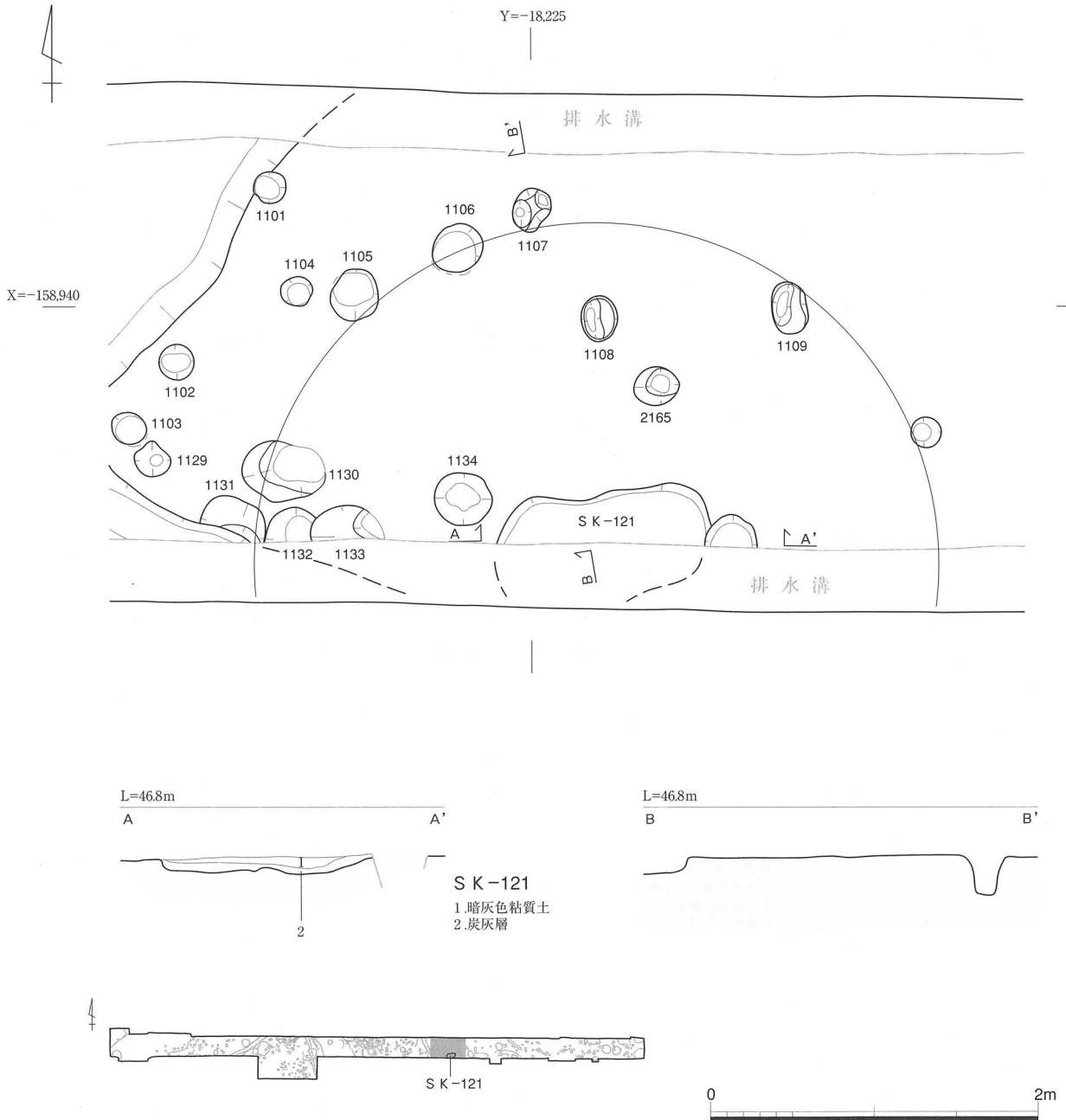
このS K-110及び炭灰層を中心として、半径1.40mと2.36mの同心円状に分布する柱穴から、竪穴住居の痕跡を想定した。著しい炭灰層の拡がり、幾度かの建て替えを想定させ、同心円状の柱穴の分布はこれと対応したものであろう。柱穴の規模は、平面が径0.20~0.40mで、深さは一定しない。全体的に浅いものが多く、規則性も認められないため主柱穴を判断するのは困難であった。おそらくは、底面標高46.20m前後にあって深さ0.30~0.40mの柱穴が、その候補となろう。なお、S K-110を中心とする柱穴分布の半径2.36mの範囲と、弥生時代中期後葉のS D-115の東端が対応している。本竪穴住居跡の年代を下げるか、S D-115の年代を上げることによって、両者の関連を考慮する必要もある。



第316図 弥生時代中期中葉の遺構 (10) (S = 1/40)



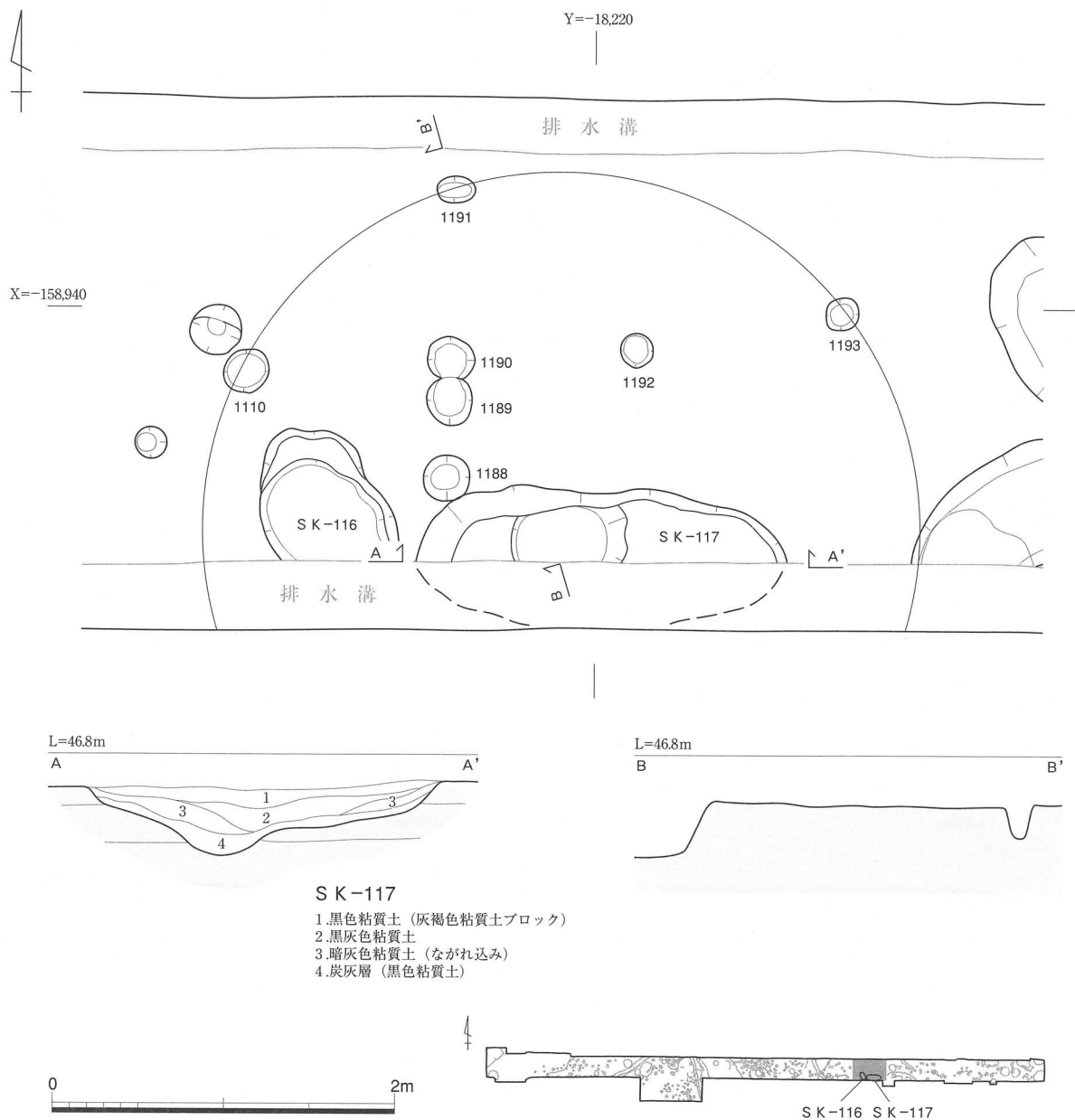
第317図 弥生時代中期中葉の遺構 (11) (S = 1/40)



第318図 弥生時代中期中葉の遺構 (12) (S = 1/40)

SB-104 (SK-121を中心とする柱穴群) (第318図)

SK-121は調査区東半、SD-104の東側で検出した。南排水溝によって、その大半を欠く。平面は不整形を呈し、長軸1.28m以上、短軸0.38m以上である。断面は皿状で、深さは0.12mを測る。堆積土は、上層の暗灰色粘質土、下層の炭灰層の2層からなる。本坑からは大和第Ⅲ様式前半の土器が出土しているが、時期を判断するには至らない。本坑は炭灰土坑であり、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられよう。この炭灰土坑を中心として、半径2.00mで柱穴がめぐることから、竪穴住居の痕跡を想定した。ただし、柱穴は西側に偏在し、規模も一定しない。竪穴住居跡としての断定はできない。



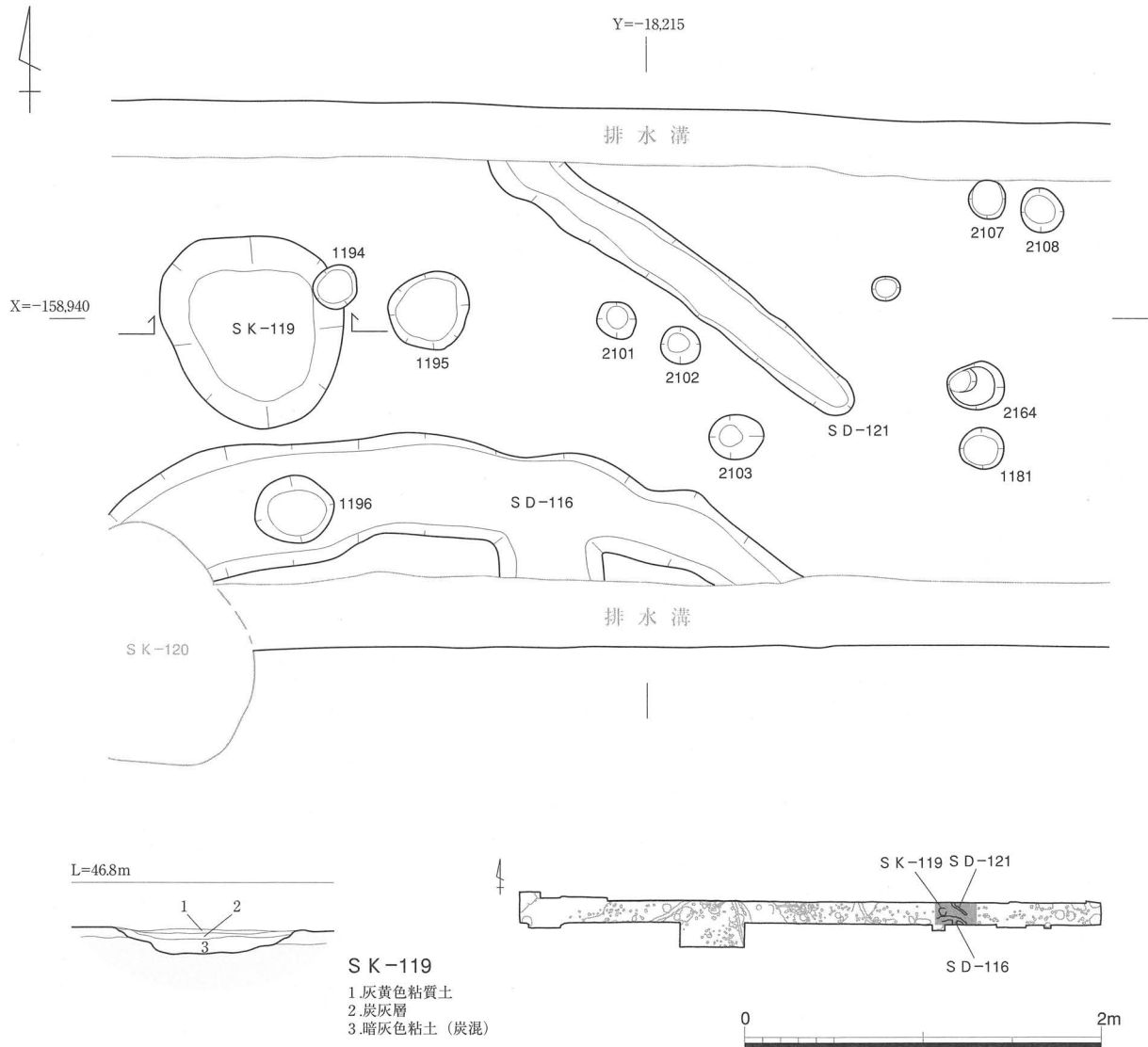
第319図 弥生時代中期中葉の遺構 (13) (S=1/40)

SB-105 (SK-117を中心とする柱穴群) (第319図)

SK-117は調査区東半、SK-121の東側で検出した。南排水溝によって、その大半を欠く。平面は不整形を呈し、長軸2.00m以上、短軸0.80m以上である。断面は逆台形で中央が大きくくぼみ、深さは0.44mを測る。堆積土は大きく上・下2層に分かれ、上層は黒色系粘質土、下層は炭灰層である。本坑からは大和第Ⅲ-1様式の土器が出土している。本坑は炭灰土坑であり、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられよう。この炭灰土坑を中心として半径2.20mの柱穴分布を想定したが、閑散としている。竪穴住居跡としての断定はできない。

SB-106 (SK-119を中心とする柱穴群) (第320図)

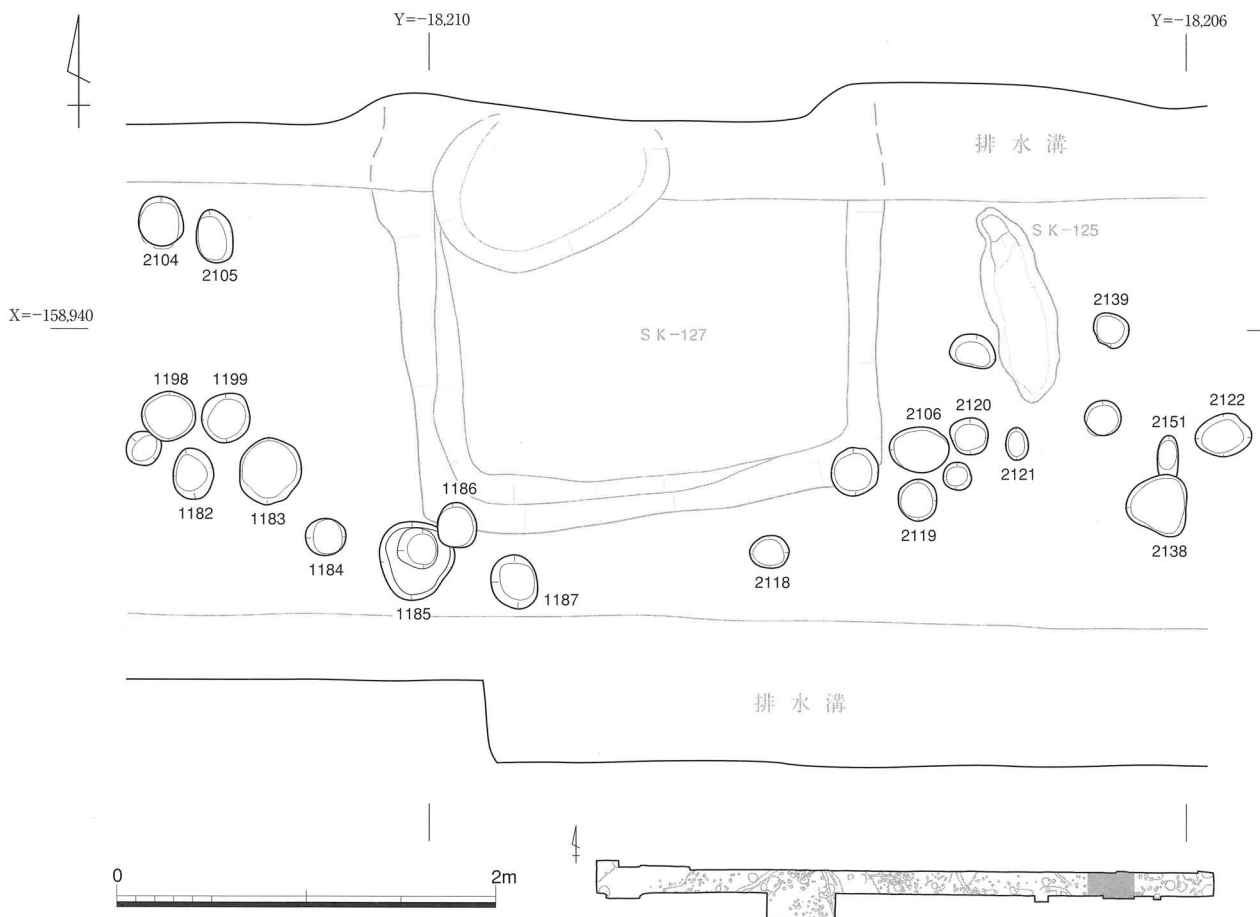
SK-119は調査区東半、SK-117の東側で検出した。平面は不整形を呈し、長軸1.16m、



第320図 弥生時代中期中葉の遺構 (14) (S = 1/40)

短軸1.00mである。断面は皿状で、深さは0.14mを測る。堆積土は3層からなり、中層が炭灰層である。本坑からは大和第三 - 1 様式の土器が出土している。本坑は炭灰土坑であり、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられよう。周辺の柱穴との関連はよくわからない。周辺のSD-116・121は幅0.60m以下、深さ0.10m未満の浅い小溝であるが、SK-119を中心として想定される竪穴住居跡との関連を明らかにすることはできなかった。

なお、本坑から次の竪穴住居跡が想定されるSK-136まで、約10mの間隔(第321図)がある。その間に竪穴住居跡が分布しないのではなく、多数の柱穴を検出しているが、その核となる炭灰土坑を調査区内では検出しておらず、復原していない。ただし、この位置には弥生時代中期前葉のSK-125・127、SD-118が集中しており、弥生時代中期前葉の遺構検出面が露出している可能性がある。これら弥生時代中期前葉遺構の周辺で検出される柱穴の埋土は灰色粘質土であり、その他多数の柱穴埋土が黒色系粘質土であるのとは異なっている。あるいは、弥生時代中期前葉の竪穴住居跡に伴う柱穴の可能性を考える必要もあろう。

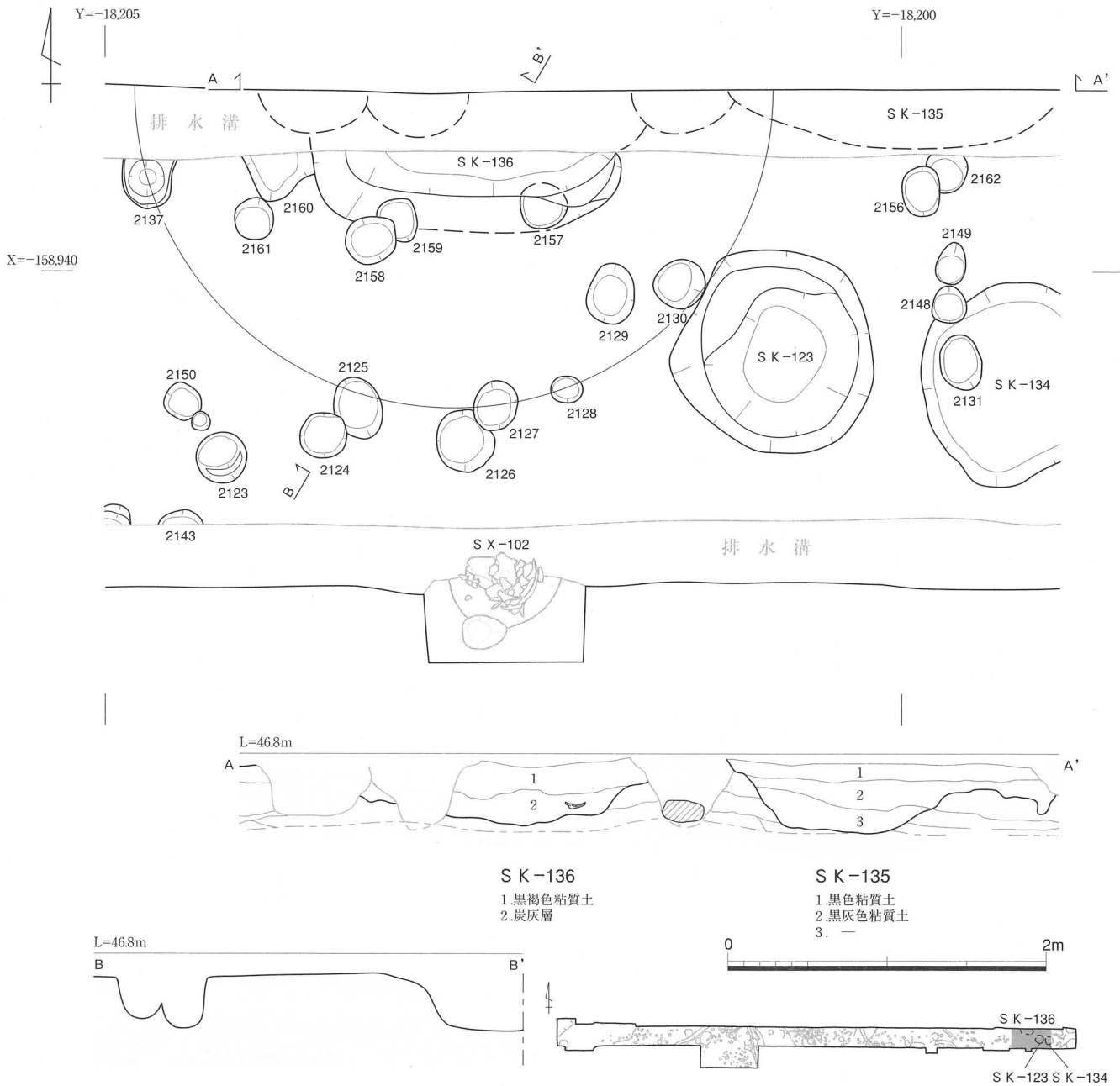


第321図 弥生時代中期中葉の遺構 (15) (S = 1/40)

S B-107 (S K-136を中心とする柱穴群) (第322図)

S K-136は調査区東半、S K-123の北西側で検出した。北排水溝によってその中央は分断され、北半は調査区外にある。柱穴による切り合いも激しい。平面は不整形を呈し、長軸2.00m以上、短軸0.80m以上である。断面は逆台形で、深さは0.42mを測る。堆積土は2層からなり、上層は黒褐色粘質土、下層は炭灰層である。本坑からは弥生時代中期中葉の土器が出土している。本坑は炭灰土坑であり、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられよう。この炭灰土坑を中心として半径2.00mに柱穴分布があり、竪穴住居の痕跡を想定した。

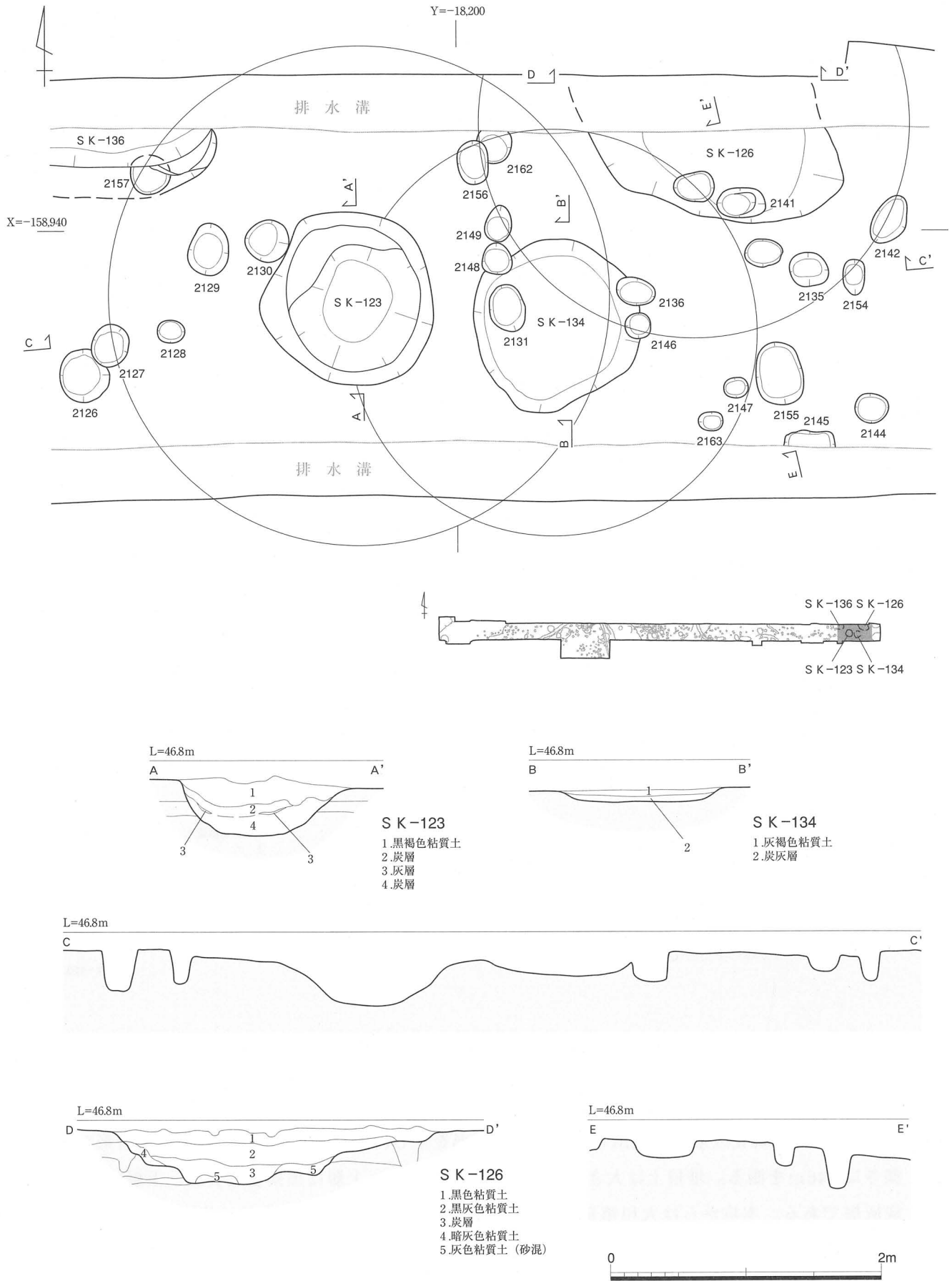
なお、調査区北壁では、本坑の東側に並ぶS K-135を確認している。北排水溝によって削平されており平面を確認することはできない。北壁断面における上面幅は、1.36mである。断面は逆台形を呈し、深さは0.46mを測る。堆積土は3層からなり、第1層：黒色粘質土、第2層：黒灰色粘質土で、第3層については記録がなく不明である。断面形態や規模、周辺の状態からは、灰穴炉の可能性があると考えられる。ただし、S K-135・136の下層には炭を含んだ灰色粘土を堆積土とするより大きい落ち込みがあり、これら土坑がその上部堆積の一部にすぎない可能性もある。



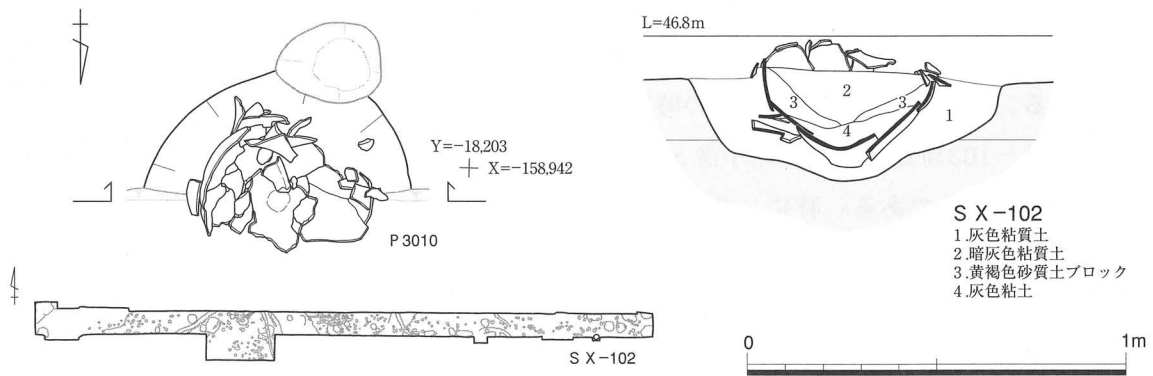
第322図 弥生時代中期中葉の遺構 (16) (S = 1/40)

S B - 108 (S K - 123を中心とする柱穴群) (第323図、写真図版189)

S K - 123は調査区東端で検出した。平面は円形を呈し、径1.30mである。断面は逆台形で、深さは0.46mを測る。堆積土は大きく上・下2層に分かれ、上層は黒褐色粘質土、下層は厚い炭灰層である。本坑からは大和第三 - 3 様式の土器が出土している。本坑は炭灰土坑であり、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられよう。この炭灰土坑を中心として、半径1.80mでいくつかの柱穴が認められることから、竪穴住居の痕跡を想定した。



第323図 弥生時代中期中葉の遺構 (17) (S = 1/40)



第324図 弥生時代中期中葉の遺構 (18) (S = 1/20)

S B - 109 (S K - 134を中心とする柱穴群) (第323図、写真図版189)

S K - 134は調査区東端、S K - 123の東側で検出した。平面は不整円形を呈し、径1.30mである。断面は皿状で、深さは0.11mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：灰褐色粘質土、第2層：炭灰層である。本坑は炭灰土坑であり、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられよう。この炭灰土坑を中心として、半径1.45mでいくつかの柱穴が認められることから、竪穴住居の痕跡を想定した。

S B - 110 (S K - 126を中心とする柱穴群) (第323図、写真図版189・190)

S K - 126は調査区東端、S K - 134の東側で検出した。平面は不整形を呈し、長軸2.40m、短軸1.08m以上である。断面は逆台形で、深さは0.42mを測る。堆積土は4層からなり、第1層：黒色粘質土、第2層：黒灰色粘質土、第3層：炭灰層、第4層：灰色粘質土(砂混)である。本坑からは大和Ⅲ-3様式の土器が出土している。本坑は炭灰土坑であり、竪穴住居跡の灰穴炉と考えられよう。この炭灰土坑を中心として、半径1.60mでいくつかの柱穴が認められることから、竪穴住居の痕跡を想定した。

性格不明遺構**S X - 102** (第324図、写真図版191)

本遺構は、調査区東半で検出した土坑で、大型甕(P 3010)を正立させた状態で設置する。南排水溝によって大型甕の北半部が露出したため、調査区の南側を拡張し全形を検出した。このため、掘形の北半部は、排水溝によって消失している。残存部から平面は円形で径0.70mと考えられる。断面は逆台形で、深さは0.68mを測る。

掘形の埋土は、灰色粘質土である。大型甕はその口縁部の大半を欠くが、これは後世の耕作によるものであり、本来は完形であったと考えられる。甕内部の堆積は3層からなり、第1層：暗灰色粘質土、第2層：黄褐色砂質土ブロック、第3層：灰色粘土である。

検出した当初、完形土器が埋納されていることから、経験的に土器棺墓と判断した。しかし、蓋を伴ったような形跡のないこと、居住域にあることから、他の性格を考える必要もあろう。

(3) 弥生時代中期後葉の遺構(第304図、写真図版176)

弥生時代中期後葉の遺構は、大環濠のSD-101周辺と区画溝のSD-103周辺に分布の偏りをみせる。ただし、柱穴群にはこの時期のものも含まれている可能性は高い。というのも、区画溝SD-103周辺で検出した小溝SD-112・113・115は、いずれも住居跡に伴う排水溝と考えられるからである。特に、SD-103と並行するSD-112・113は、SD-103と同様に微高地から環濠へ向かって排水する役目をもっていたと考えられる。これに対し、居住域外となる環濠SD-101Bの西側で検出したSK-111・130は、木器貯蔵穴である。環濠に取り付き、環濠からの伏流水を得ていたと考えられる。

土坑

SK-111(第325図、写真図版192)

本坑は、調査区北西隅で検出した。本坑は、SK-130の堆積土を切って掘削されているが、調査区外の北側及び西側に肩が広がるため、その全形は不明である。平面は溝状を呈し、長軸2.50m以上、短軸約2.0mである。断面は逆台形で、深さは1.10mを測る。南西端については、底面が高くなることから、収束する可能性がある。なお、底面の南西端と東肩立ち上がり付近では、杭の頂部を確認している。

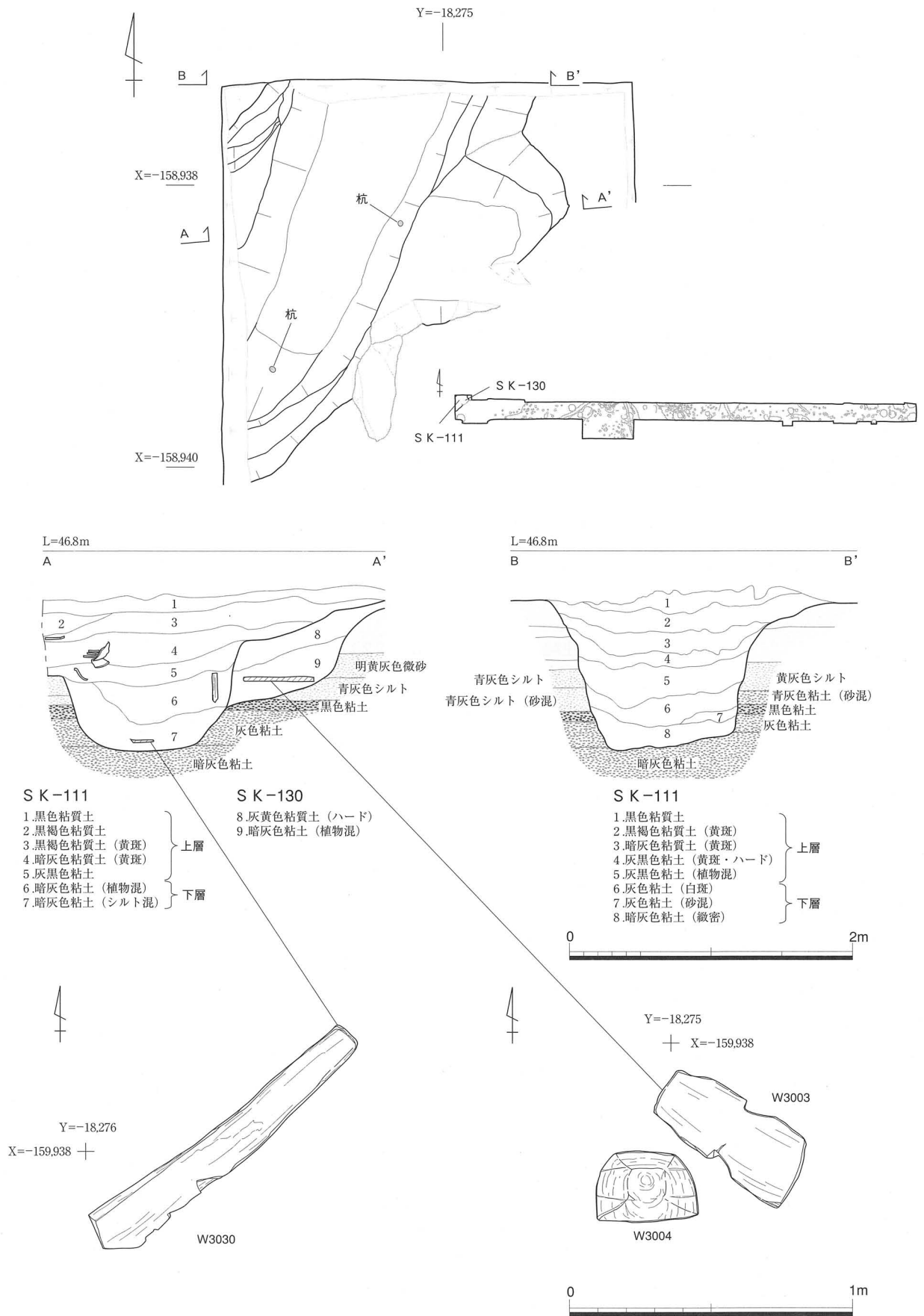
堆積土は、上・下2層に大きく分かれる。上層は、上位が黒色系粘質土で、下位は暗灰色系粘質土である。上層の下位からは棒材とともに大和第IV様式の土器が多数出土した。下層は、暗灰色粘土である。下層からは、みかん割りされた原材(W3030)が出土した。時期は、大和第IV様式である。

なお、上層の堆積土については、本坑だけでなくSK-130の上面にも及んでいる。これは、SK-130が埋没しきらない状態でSK-111が掘削され、これらの切り合いによって大きな落ち込みとなったためであろう。両者の関係は、時間・機能的にちかいものがあつたと想定される。このことから、SK-111はSK-130と同様な機能を有し、木器貯蔵穴と考えられる。本坑において底面の南西端及び東肩立ち上がり付近で検出した杭は、貯木材を固定する施設であろうか。

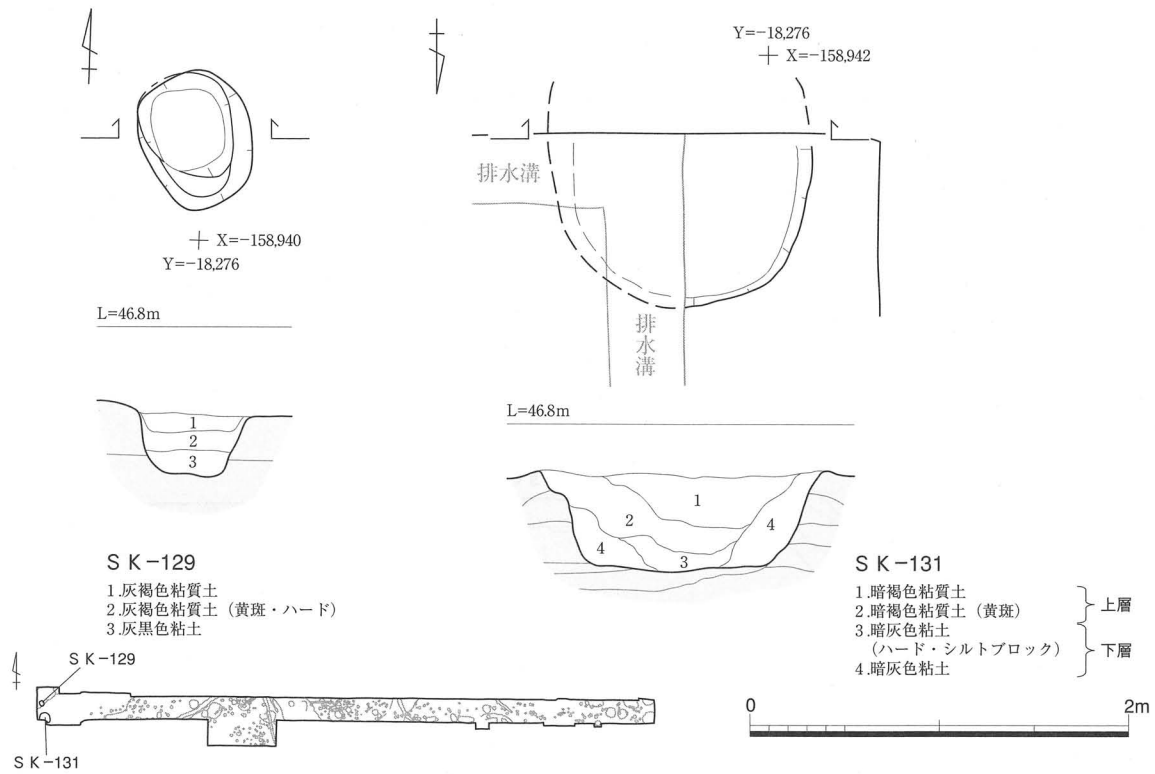
SK-130(第325図、写真図版193)

本坑は、調査区北西隅の北排水溝において泥除と平鉢の未成品を確認したことから、調査区を北側へ1m拡張し検出した。本坑は、SD-101Bの西肩を切るが、SK-111が本坑の主軸と直交するようにその中央に掘り込まれ、分断されている。また、その西肩は調査区外へと延びている。このため、平面形や規模については不明な点が多い。平面は、おそらく長方形で長軸2.00m以上、短軸1.50m以上と考えられる。深さは約0.7mを測る。その底面は、SK-111の底面よりも約0.3m高い。

堆積土は、第1層：灰黄色粘質土(ハード)、第2層：暗灰色粘土(植物混)の2層である。底面に貼り付いて2連の平鉢未成品(W3003)、泥除未成品(W3004)が出土した。SK-111に切られるが時期差はなく、大和第IV様式である。機能は、木器貯蔵穴と考えられる。



第325図 弥生時代中期後葉の遺構 (1) (平・断面図: S = 1/40、出土状況図: S = 1/20)



第326図 弥生時代中期後葉の遺構（2）（S = 1/40）

SK-129（第326図）

本坑は、調査区北西隅で検出した。本坑は、大和第IV様式のSK-111の堆積土を切って掘削されている。平面は楕円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.58mである。断面は逆台形で、深さは0.34mを測る。堆積土は3層からなり、第1層：灰褐色粘質土、第2層：灰褐色粘質土（黄斑・ハード）、第3層：灰黒色粘土である。出土土器は、大和第IV様式のもののみである。しかし、これは下層遺構であるSK-111の土器が混入したとも考えられ、時期は弥生時代後期に降る可能性もある。

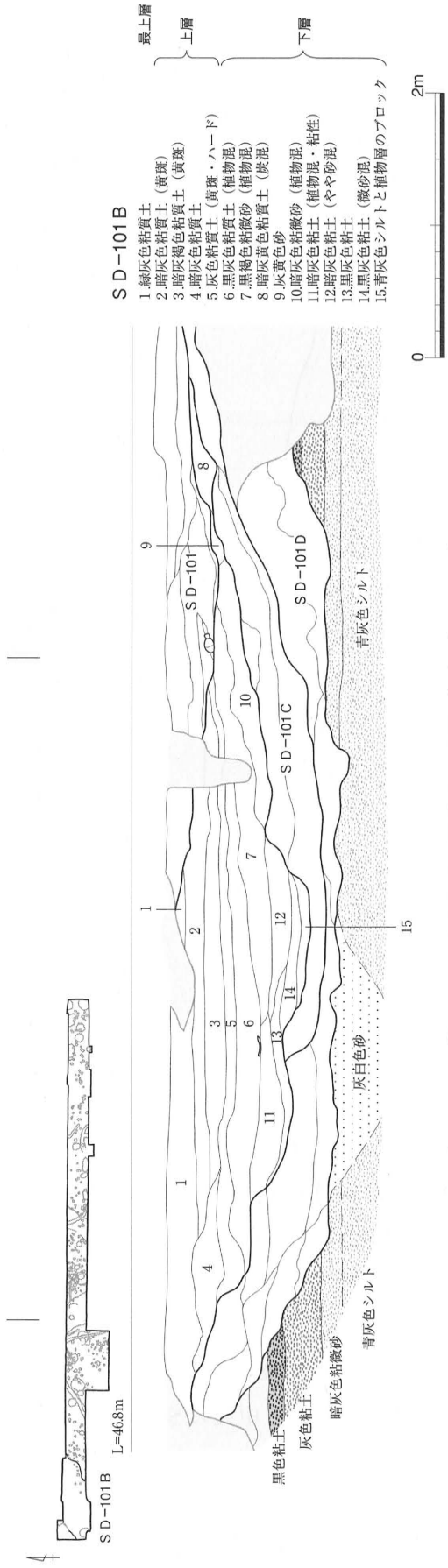
SK-131（第326図）

本坑は、調査区南西隅で検出した。本坑は、SD-101Bの堆積土を切って掘削されている。平面は、調査区南西隅に配した排水溝によって北東側を消失し、南側が調査区外に延びるためその詳細は不明であるが、隅丸方形と想定される。規模は長軸1.04m以上、短軸1.50mである。断面は逆台形で、深さは0.54mを測る。堆積土は大きく上・下2層に分かれる。上層は暗褐色系粘質土で、下層は肩部及び底面直上の暗灰色粘土である。時期は、大和第IV様式と考えられるが、弥生時代後期に降る可能性もある。

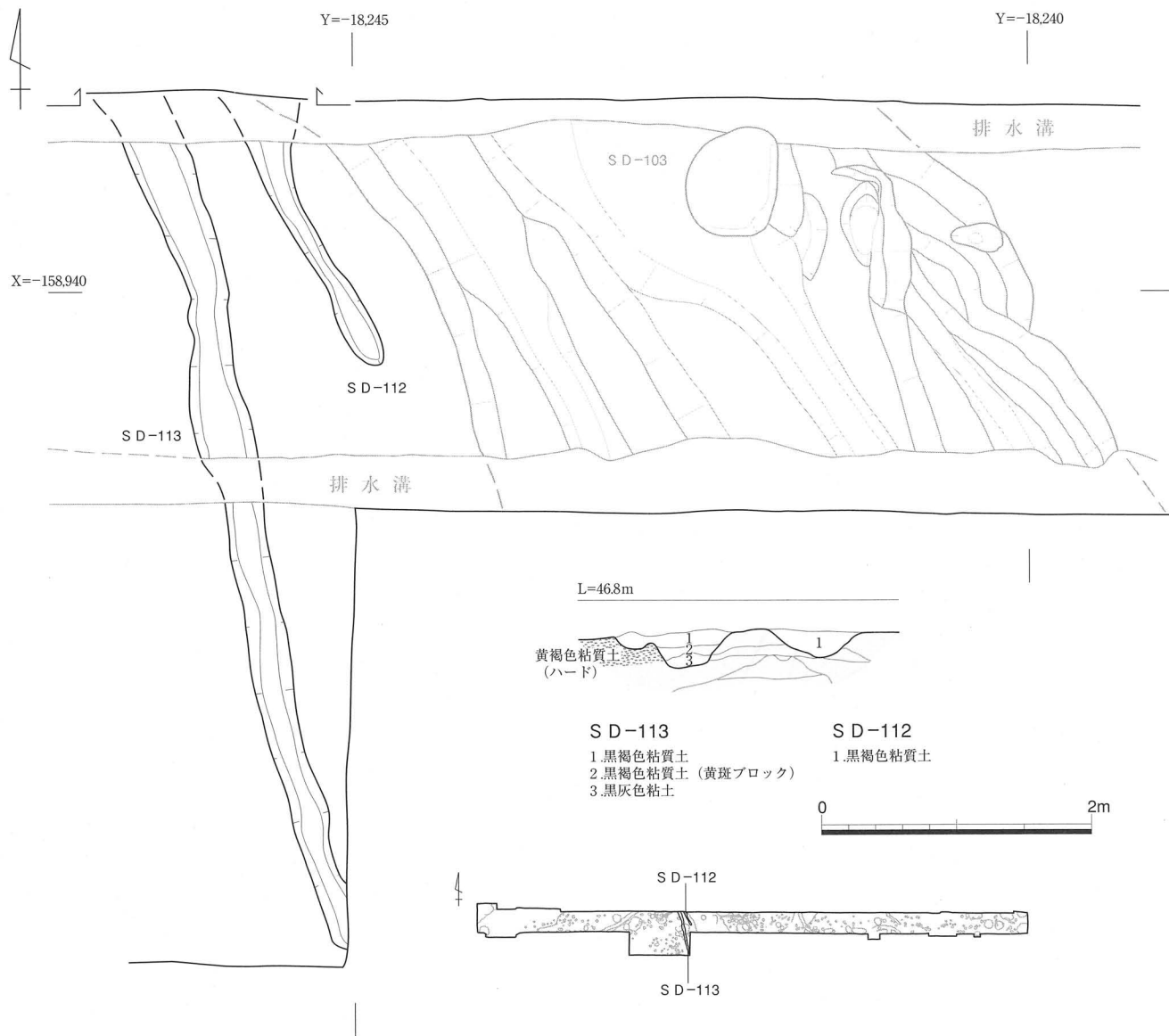
溝

SD-101B（第327図、写真図版194）

本溝は、調査区西端で検出した。SD-101Cの再掘削溝で、その西肩を切り込んで掘削されている。西肩に掘削された大和第IV様式のSK-130、131との切り合いは微妙で、同時期



第327図 弥生時代中期後葉の遺構 (3) (S=1/50)

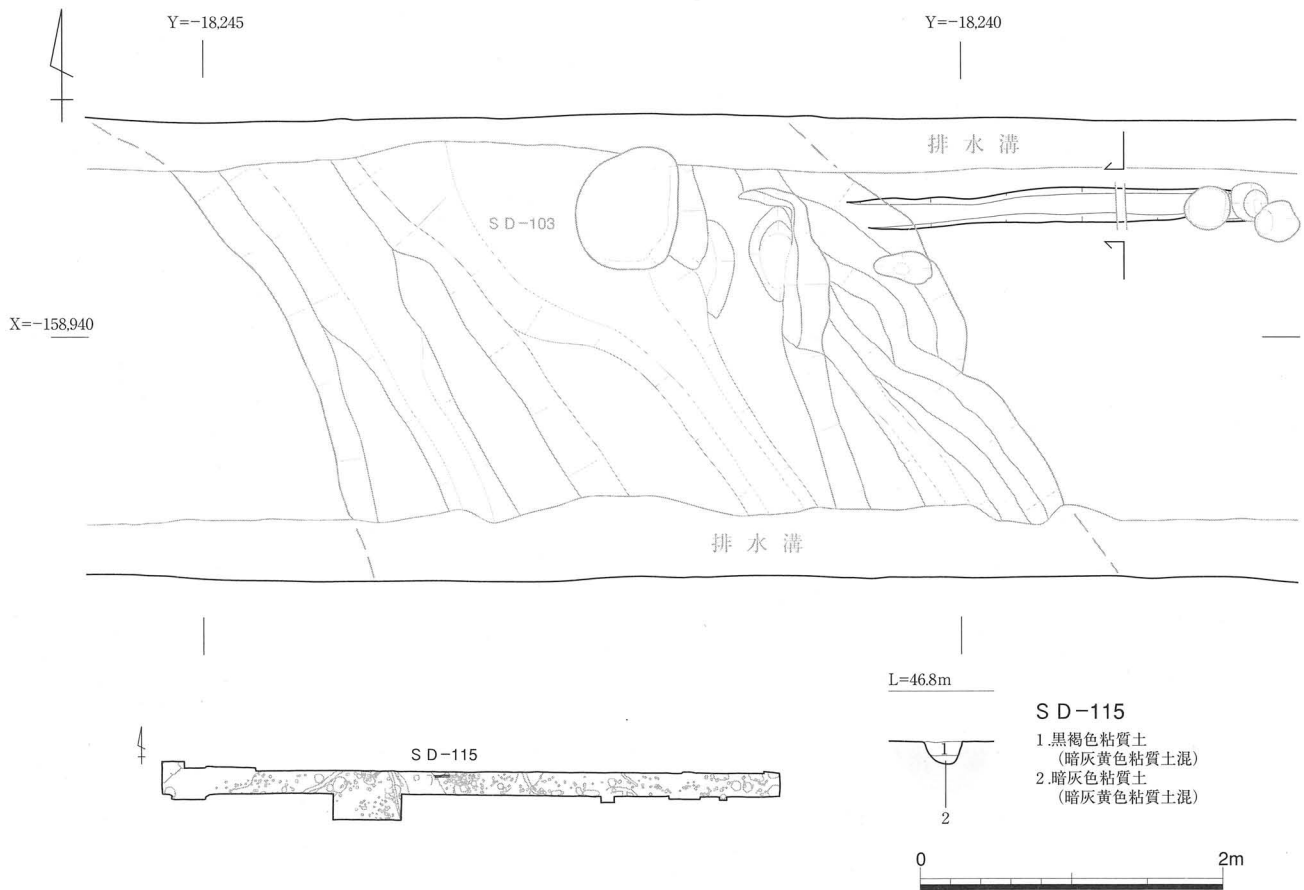


第328図 弥生時代中期後葉の遺構（4）（S=1/50）

併存の可能性が高い。本溝は西南西-東北東に走行し、溝幅は4.30mである。断面は逆台形で、深さは0.80~1.10mを測る。堆積土は複雑な状況を示すが、大きく4層に分けることが可能である。最上層の緑灰色粘質土は、周囲ベースの削平による埋め立てが想定される。上層は、鉄分による黄斑が沈着した粘質土である。下層は、黒色系あるいは暗灰色系の粘土で魚鱗状に堆積する。度重なる溝浚えを示すものであろう。下層からは、大和第IV様式の完形無頸壺（P3006）、高杯（W3019）や合子（W3017）等の木製品が出土した。

SD-112（第328図、写真図版195）

本溝は、調査区中央のSD-103西肩で、それに並行して検出した。本溝は南南東-北北西に走行し、幅は壁断面において最大0.70mであるが、平面的な検出幅は0.20mである。断面は逆台形で、深さは0.20mを測る。堆積土は黒褐色粘質土の単層である。平面的には南側で収束しているが、南壁断面においてその続きを確認している。底面の比高差は、標高46.50mの南壁



第329図 弥生時代中期後葉の遺構（5）（S = 1/50）

断面に対して、標高46.36mと北壁断面が0.14m深い。南から北へ流水していたのであろう。時期は、大和第IV-1様式である。

SD-113（第328図、写真図版195）

本溝は、調査区中央のSD-103西肩で、SD-112に並行してその西側で検出した。本溝は南南東-北北西に走行し、幅は最大0.60mである。断面は逆台形で、深さは0.28mを測る。堆積土は、上層が黒褐色粘質土、下層が黒灰色粘土である。底面の比高差は、標高46.50mの南壁断面に対して、標高46.30mと北壁断面が0.20m深い。南から北へ流水していたのであろう。時期は、大和第IV-1様式である。

SD-115（第329図、写真図版195）

本溝は、調査区中央のSD-103東肩で検出した。本溝は東-西に走行し、西端はSD-103の東肩に取り付き、東端はSK-110を中心とする柱穴群付近で途切れる。その長さは約2.6mで、幅は0.25mである。断面は逆台形で、深さは0.15mを測る。堆積土は、上層が黒褐色粘質土、下層が暗灰色粘質土である。時期は、大和第IV-1様式の土器が出土したが、弥生時代中期中葉の竪穴住居跡であるSB-103との関連から、遡る可能性も考えられる。

(4) 弥生時代後期初頭の遺構 (第304図)

弥生時代後期初頭の遺構は、本調査区の狭い範囲での知見に過ぎないが、かつて大環濠がめぐっていた調査区西端に分布が偏っているように見える。大環濠の堆積土上から掘り込まれたSD-101、この西肩に接したSK-102・104である。SK-106だけが、調査区中央で弥生時代中期中葉溝SD-103の堆積土上に掘り込まれている。SD-101の西肩に近接して掘り込まれたSK-102・104は、104を切って102が掘り込まれ、ともに湧水があり井戸と考えられる。弥生時代中期においてはSD-101B・Cが集落居住域の内部と外部を区画する大環濠としての役目を果たしていたが、この弥生時代後期初頭の細く浅いSD-101が環濠としての機能を有するとは考えられない。また、SD-101の西側で検出したSD-101B堆積土上面の柱穴は、SD-101Bが大和第IV様式の環濠である以上、それ以降に掘削されたものであり弥生時代後期の柱穴となる可能性が高い。これと先の井戸SK-102・104がSD-101よりも西側に掘削されていることを併せて考えるならば、弥生時代後期居住域は弥生時代中期大環濠の領域を越えて、西側に広がったとみるべきであろう。

土坑

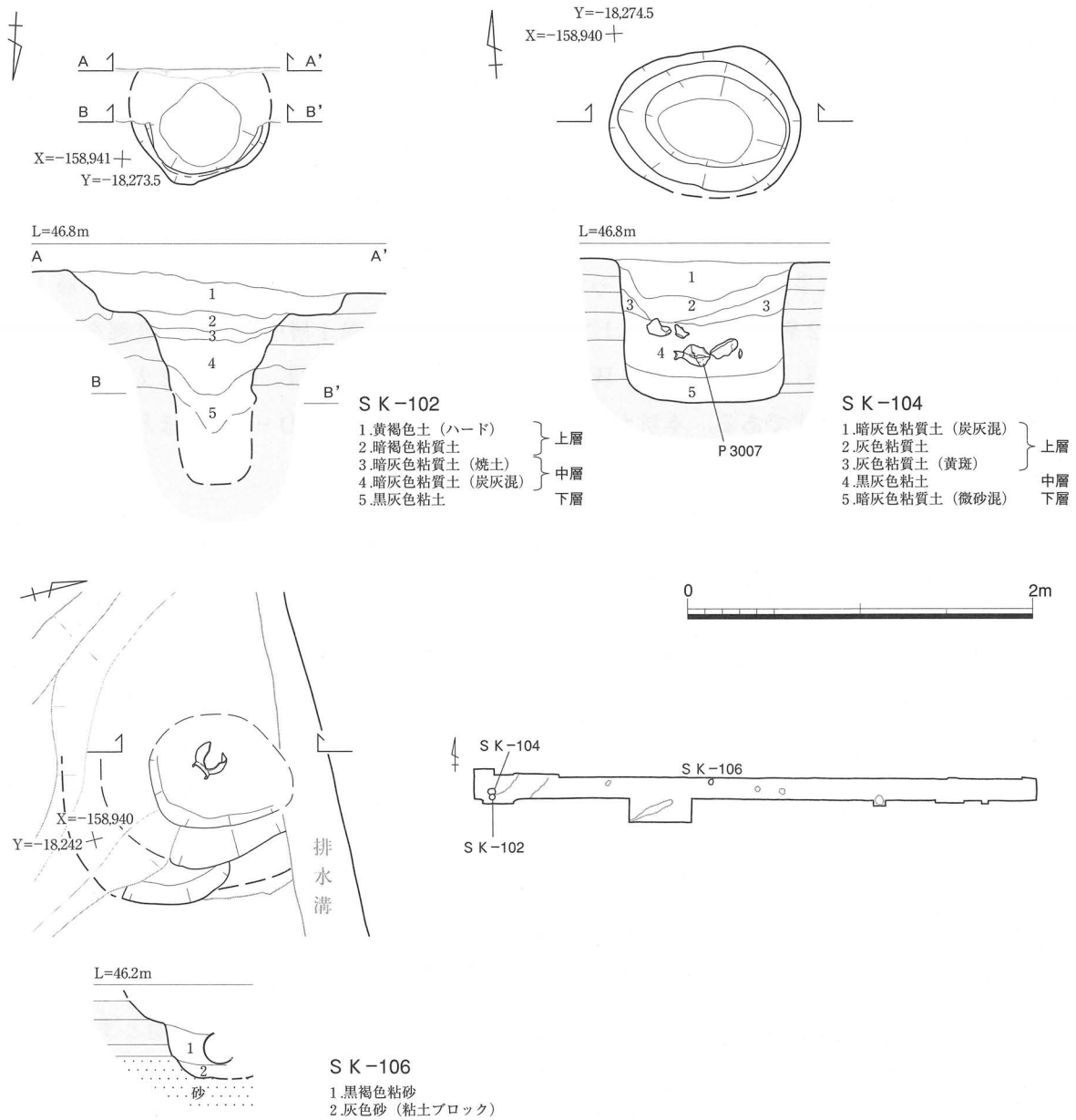
SK-102 (第330図、写真図版196)

本坑は、調査区西端の南排水溝でその南半を削平して検出した。SD-101Bが埋没した後に、再掘削溝であるSD-101の西肩に接して掘り込まれている。弥生時代後期初頭のSD-101の西肩と、SK-104の南肩を切り込んでいる。本坑は、弥生時代中期後葉の環濠であるSD-101Bの堆積土上面を検出面とし、SK-104にも切り込むことからそれと認識できず、本来の検出面から0.2mほど掘り下げて確認することができた。本坑の平面は、その南端部は調査区外であるが、円形を呈すると考えられ検出面では径1.60mである。断面は、南壁によれば上部が大きく開いた円筒状で、深さは1.25mを測る。

堆積土は、5層よりなるが大きくは上・中・下の3層に分かれる。上層は褐色系粘質土で、最上層は鉄分の付着により黄褐色となり固い。上層下位からは、半完形の甕が出土した。中層は暗灰色粘質土で、上位からは長頸壺の頸部のみが、下位からは底面を打ち抜いた鉢が出土した。下層は黒灰色粘土で、口頸部を欠く短頸壺とともに木錘(W3008)が1点出土した。時期は、大和第V-2様式である。本坑の底面は、SD-101Bの堆積土である植物層に達し、湧水がある。また、先行する弥生時代後期初頭のSK-104の南肩を切って掘り込んでおり、こうした例は同時期の井戸でよくみられる。

SK-104 (第330図、写真図版197)

本坑は調査区の西端、SD-101の西肩に接して検出した。その南肩は、弥生時代後期初頭のSK-102に切られている。本坑は、弥生時代中期の環濠であるSD-101Bの堆積土上面を検出面とし、SK-102にも切られることからそれと認識できず、本来の検出面から0.2mほど掘り下げて確認することができた。検出面における本坑の平面は楕円形を呈し、長軸1.10m、短軸0.80m以上である。断面は円筒状で、深さは0.84mを測る。



第330図 弥生時代後期初頭の遺構 (1) (S = 1/40)

本坑の堆積土は5層からなるが、大きくは上・中・下の3層に分かれる。上層は灰色系粘質土で、最上層は炭灰を含んでいる。中層は黒灰色粘土で、土器片や石材・木材とともに無頸壺 (P 3007、大和第V様式) が土圧によって割れた状態で出土した。下層は暗灰色粘質土 (微砂混) である。時期は、大和第V-1様式である。調査時において、S D-101Bの堆積土である暗灰色粘土 (植物混) を、本坑の下層堆積と考え0.5mほど掘り下げている。しかし、検討の結果、暗灰色粘土 (植物混) は、S D-101Bの堆積土であり、その上面が薄い青灰色シルト層で湧水があることから、この位置に本坑の底面を想定した。機能は井戸であろう。

S K - 106 (第330図、写真図版198)

本坑は、調査区中央に位置する S D - 103の堆積土を切り込んでいる。本坑については、平面検出において認識することができず、S D - 103の堆積土を掘削中に半完形の短頸壺が出土したことにより土坑と認識することができた。このため、その北西部2/3及び上面の大半は削平してしまっている。平面については、底部ちかくの立ち上がりにおける南東隅のみの確認ではあるが楕円形あるいは隅丸方形と考えられ、長軸0.70m以上、短軸0.50m以上である。断面は逆台形の2段掘りと考えられ、深さは0.45m以上を測る。

堆積土は、上層の大半を削平してしまっているが残存する下層が2層に分かれ、第1層：黒褐色粘砂(植物)、第2層：灰色砂(粘土ブロック)である。第1層中からは、底部を欠いた半完形の短頸壺が出土した。ベースは、灰色砂で湧水がある。機能は、井戸と考えられる。時期は、大和第V-1様式である。本坑が掘り込まれる段階には、S D - 103はほとんど埋没していたものと考えられる。

溝

S D - 101 (第331図、写真図版198)

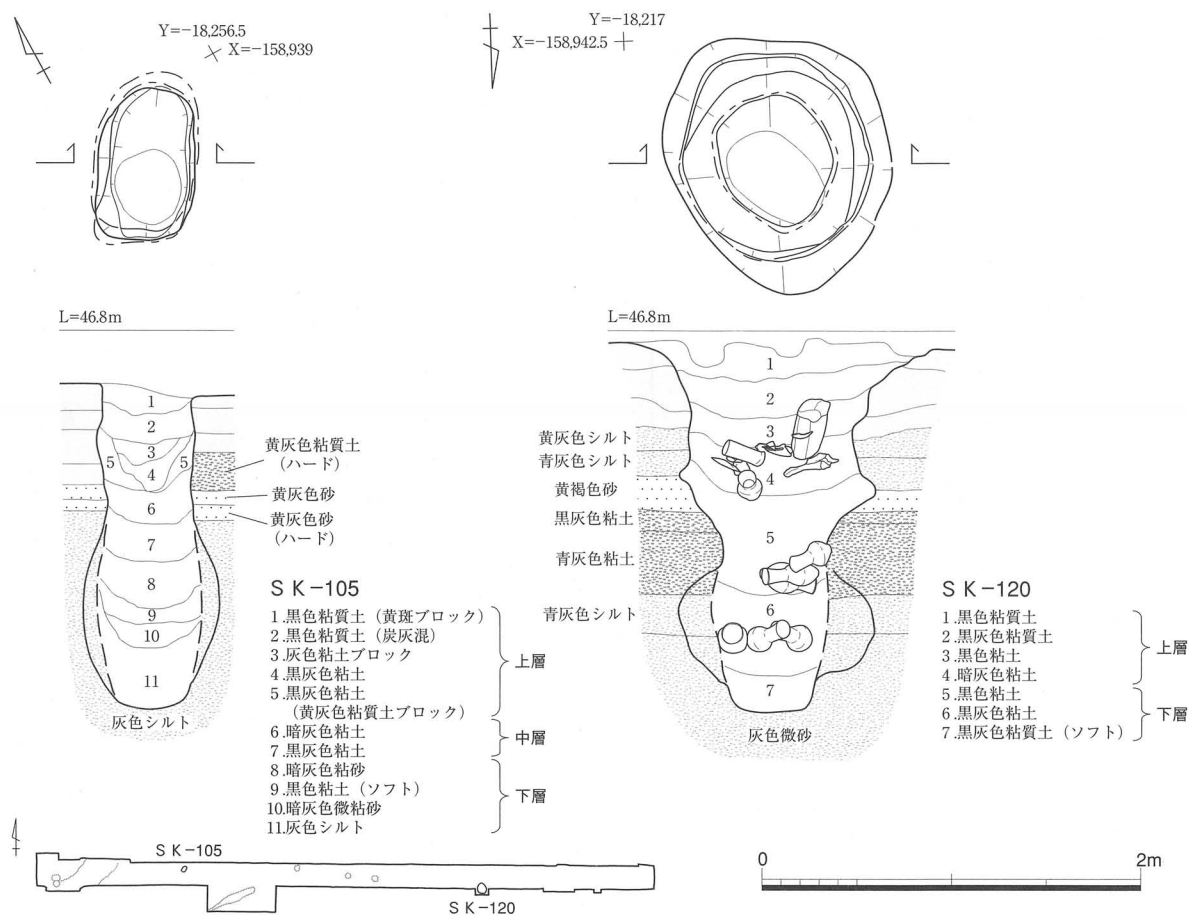
本溝は、調査区西端の S D - 101 Bの堆積土上面で検出した。西肩は、調査区の南端において、弥生時代後期初頭の S K - 102に切られている。また、その堆積土上面からは、柱穴が掘り込まれている。本溝は、西南西-東北東に走行し、幅は3.20mを測る。断面は皿状であるが、北壁断面ではその中央部が一段くぼんでいる。これは、本溝が東西両肩にテラスを有する平面に対応したものである。なお、南側では中央部のくぼみが西肩へと寄り、テラスは東肩のみとなる。深さは0.40~0.52mである。

本溝の堆積土は、南北両壁において下層の暗灰色系粘質土は共通するが、上層は異なっている。上層堆積土は、北壁断面では黒色系粘質土が東肩に偏在するのに対し、南壁断面では暗褐色系粘質土が上面を覆っている。この黒色系粘質土と暗褐色系粘質土については、両者は同一堆積層でありながら、水分などの原因から色調が異なったものと考えられる。問題とすべきは、北壁断面における西側の堆積を切ったような黒色系粘質土の堆積状況であり、南壁の暗褐色系粘質土とともに再掘削溝の堆積土となる可能性も考えられる。本溝がテラスをもち、2段掘り状を呈するのも、再掘削の可能性を示すものといえよう。北壁において、下層から完形の短頸壺が出土した。外面に縦位ケズリを施した特徴から、大和第V様式と考えられる。また、弥生時代後期初頭の S K - 102が掘削される段階には、肩部は埋没を始めていたと考えられる。

S D - 101はその掘削位置から、S D - 101 Bの再掘削溝あるいは最終埋没層と考えられるが、その機能が同じものであったとは考えられない。S D - 101 Bが環濠としてある程度の幅と深さをもち居住域を区画していたのに対し、本溝は狭く浅い。さらには、本溝を居住域の区画とした場合、その外側となる西側にも同時期の S K - 102や S K - 104、あるいは柱穴が掘削されていることになる。おそらく、S D - 101は、弥生時代後期前葉には居住域を区画した溝としての機能は失われ、くぼ地の排水溝程度の機能であったと考えられる。



第331図 弥生時代後期初頭の遺構 (2) (S=1/50)



第332図 弥生時代後期前葉～後期後葉の遺構 (1) (S = 1/40)

(5) 弥生時代後期前葉～後期後葉の遺構 (第304図)

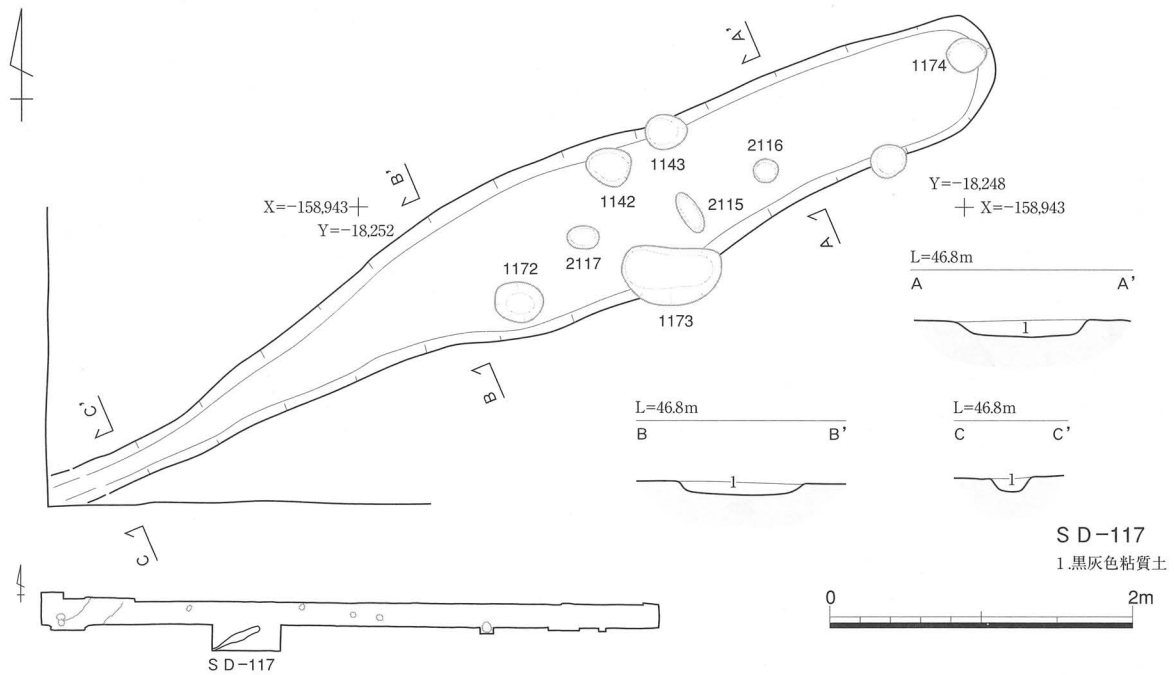
弥生時代後期前葉～後期後葉の遺構は、調査区の中央付近で検出した。SK-120は弥生時代後期前葉、SK-105は弥生時代後期後葉の井戸である。

土坑

SK-105 (第332図、写真図版201)

本坑は、調査区西半のSD-102の西側で検出した。弥生時代中期後葉の井戸であるSK-101の西側に隣接する。平面は長軸0.80m、短軸0.50mの長楕円形であるが、ベースが非常にもろく、本来は円形であったのが壁の崩落によって長楕円形となった可能性がある。断面は円筒状であったと考えられるが、坑下部のベースは灰色シルトであり、側壁が崩落し袋状となる。その深さは、1.70m以上あったが、ベースである灰色シルトからの湧水が激しく、底面は未確認である。

堆積土は、大きく3層に分かれる。上層は、下位に周囲崩壊によるベースブロック土が、その中央のくぼみに炭灰を含んだ黒色系粘質土が堆積する。中層は暗灰色系粘土であり、この層中より自然木とともに小型長頸壺やミニチュア土器が出土した。下層は灰色系粘砂で、間に黒色粘土を挟む。時期は、大和第VI-4様式である。機能は、底面の灰色シルトが激しく湧水し、



第333図 弥生時代後期前葉～後期後葉の遺構（2）（S=1/50）

井戸であろう。なお、井戸としての機能廃絶後、上層は廃棄坑になっていたと考えられる。

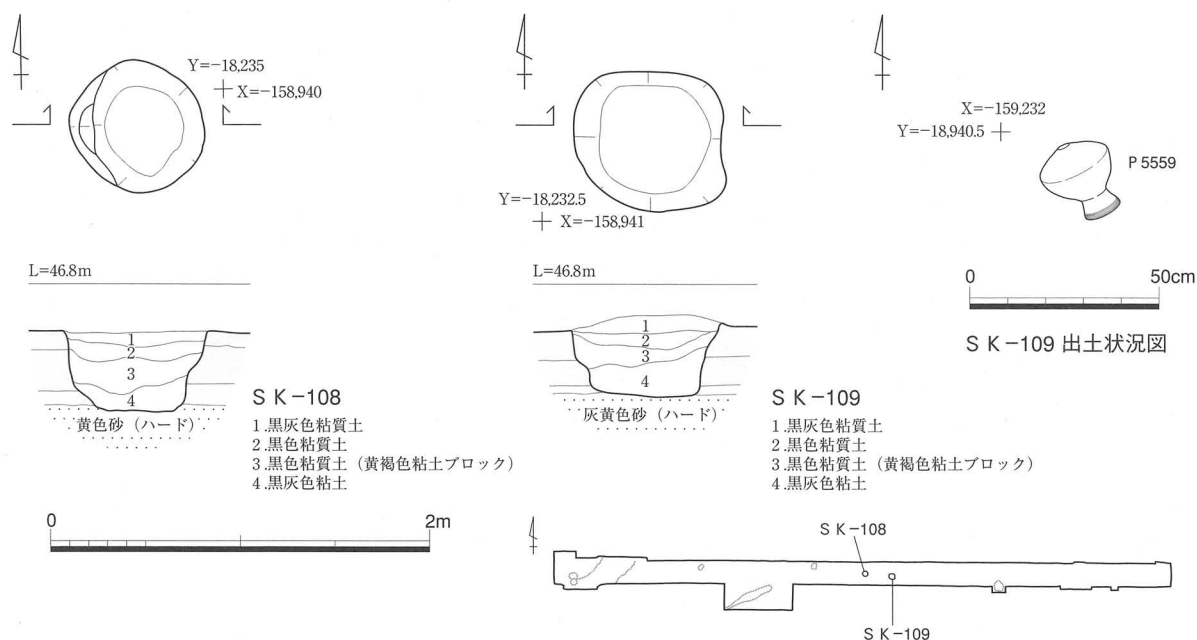
SK-120（第332図、写真図版199・200）

本坑は、調査区東半で検出した。小溝のSD-116の西側を切る。平面は不整形円形を呈し、長軸1.40m、短軸1.15mである。断面は円筒状であるが、上部は崩落し広がっている。なお、下部の崩落は、発掘によるものである。深さは1.96mを測る。底面は灰色微砂に達し、激しい湧水がある。堆積土は大きく上・下2層に分かれる。上層は黒色系粘質土であり、その下位から完形の小型長頸壺1個体とともに破片及び半完形土器、木材がまとまって出土した。下層は黒色系粘土であり、このうち第5層と第6層から3個体ずつ、長頸壺（大和第VI-2様式）が計6個体（PP3002～3007）出土した。機能は井戸であろう。なお、井戸としての機能廃絶後、上層は廃棄坑になっていたと考えられる。

溝

SD-117（第333図、写真図版202）

本溝は、調査区中央のSD-102E上面で検出した。位置的には、SD-102Eの再掘削溝あるいは最終埋没層とも呼ぶべきではあるが、両者の時期は弥生時代中期前葉と弥生時代後期後葉であり大きく開いている。本溝は西南西-東北東に走行し、溝幅は0.24～1.10mである。西南西側は細くなっており、収束する可能性もある。断面は皿状であり、深さは0.10～0.15mを測る。堆積土は、黒灰色粘質土の単層である。本溝は、弥生時代後期後葉までの土器を含むことや、銅鏃（M5407）が1点出土したことから、本時期と判断した。



第334図 古墳時代初頭の遺構（平・断面図：S = 1/40、出土状況図：S = 1/20）

（6）古墳時代初頭の遺構（第304図）

古墳時代初頭の遺構としては、SK-108・109の2基の土坑がある。SK-108とSK-109は、調査区の中央で約2.8mの距離をもって近接し、規模等が類似する性格不明の土坑である。時期は庄内期と考えられ、これを弥生時代終末とするか古墳時代初頭とするかは意見のわかれるところではあろうが、本文は古墳時代初頭として記述した。また、調査区中央の弥生時代中期中葉SD-103の最上層の出土土器には、布留0式が含まれている。本調査区周辺は、古墳時代初頭まで居住域としての機能が継続していたと考えられる。

土坑

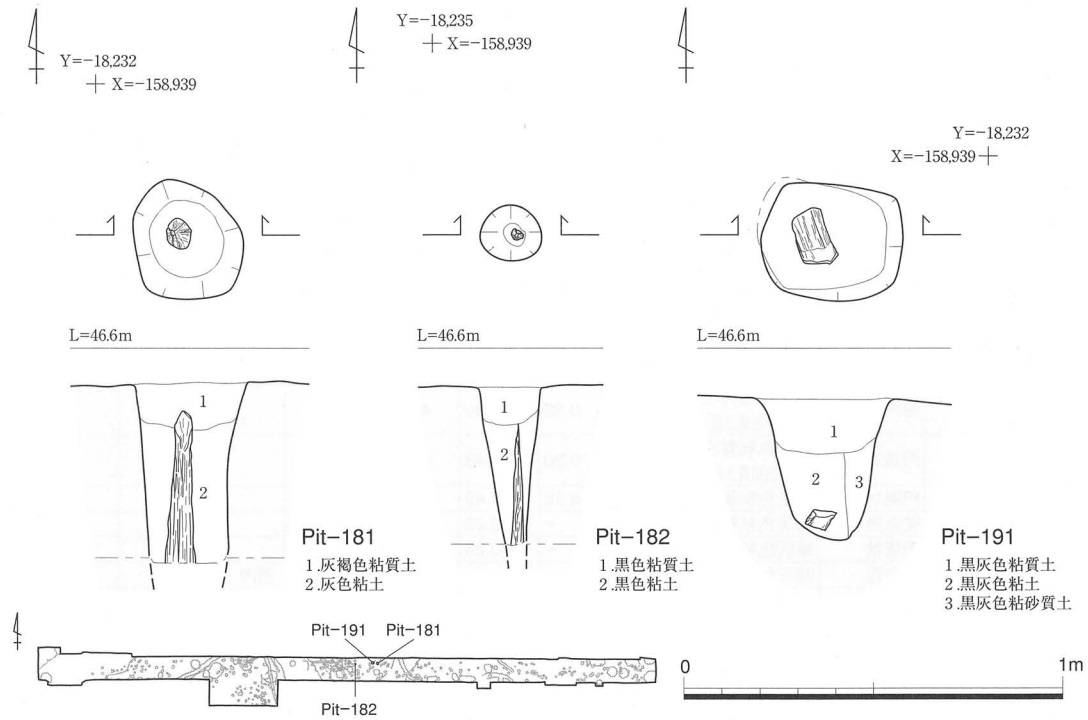
SK-108（第334図、写真図版201）

本坑は、調査区中央のSD-103とSD-104に挟まれたSB-103を構成するPit群中で検出した。平面は円形を呈し、径0.70mである。断面は方形で、深さは0.42mを測る。

堆積土は4層からなり、第1層：黒灰色粘質土、第2層：黒色粘質土、第3層：黒色粘質土（黄褐色粘土ブロック）、第4層：黒灰色粘土である。下層より、東海系の有文広口壺（P 5505）が出土した。時期は、庄内期と考えられる。本土坑の機能は不明である。約2.8m東側に、本坑と同じ規模で同じ埋土のSK-109がある。

SK-109（第334図、写真図版202）

本坑は、調査区中央のSD-103とSD-104に挟まれたPit群中で検出した。先のSK-108からは、東側に約2.8mの距離にある。平面は円形を呈し、径0.80mである。断面は方形で、深さは0.43mを測る。



第335図 第V層上面の柱穴（1）（S = 1/20）

堆積土は4層からなり、第1層：黒灰色粘質土、第2層：黒色粘質土、第3層：黒色粘質土（黄褐色粘土ブロック）、第4層：黒灰色粘土である。中層からは、完形の東海系ヒサゴ壺（P5559）と鉢片が出土した。時期は、庄内期である。本土坑の機能は不明である。本坑は、先のSK-108と同じ堆積土で、ほぼ同規模である。両者は何らかの関連性をもつのであろう。

（7）第V層上面の柱穴（第335・336図、第52表）

本調査区は、第V層：黄褐色粘質土（ハード）上面が弥生時代中期中葉～中世の遺構検出面となっている。部分的には弥生時代中期前葉遺構検出面の露出も想定されている。このため、出土土器の少ない柱穴については年代を決定することができない。また、柱穴からの出土土器は、混入の可能性もあり年代決定の確実な手掛かりとはなり得ないのである。このため、柱穴については、各時期に分離するのではなく、本節においてまとめて報告する。

柱穴のうちその多くは、弥生時代中期中葉でも説明したように、竪穴住居跡に伴うものと考えられる。ただし、調査区西端において、SD-101の堆積土上面で検出した柱穴は、確実に弥生時代後期初頭以降のものといえる。大環濠であるSD-101の埋没と、それに伴い弥生時代後期に居住域が外側へと広がる状況を示すものといえよう。

また、柱穴のなかには、柱根や礎板を残すものがある。Pit-181・182は柱根を残すが、掘形が小さく杭状のものである。Pit-191は礎板を残していた。

第52表 第V層上面柱穴一覧表

柱穴番号	平面形態	断面形態	上面土層	規模 (m)			坑底 標高 (m)	時期 (大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
Pit-101	円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.22	—	0.28	46.23	IV		
Pit-102	不整形円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.30	0.26	0.32	46.21	中期		
Pit-103	不整形円形	逆台形	黒灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.32	0.28	0.20	46.28	IV?		
Pit-104	不整形円形	逆台形	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.28	0.24	0.28	46.24	III?		
Pit-105	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.42	0.31	0.20	46.35	IV?		
Pit-106	円形	円筒状	暗灰色粘質土	0.16	—	0.32	46.18	中期		
Pit-107	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.26	0.20	0.50	46.03	—		
Pit-108	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.32	0.26	0.22	46.29	IV		
Pit-109	円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.20	—	0.14	46.39	—		
Pit-110	楕円形	逆円錐状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.42	0.30	0.30	46.14	—		
Pit-111	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.42	0.30	0.43	46.08	中期?		
Pit-112	不整形円形	円筒状	暗灰色粘質土	0.33	0.28	0.49	46.00	—		
Pit-113	円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.24	—	0.23	46.24	—		
Pit-114	円形	円筒状	暗灰色粘質土	0.24	—	0.26	46.04	中期?		
Pit-115	円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.24	—	0.24	46.06	中期?	河内	
Pit-116	楕円形	逆円錐状	黒灰色粘質土	0.26	0.20	0.14	46.30	IV?		
Pit-117	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土 (炭灰混)	0.38	0.32	0.12	46.30	III-2	被熱土器 記号文(後刻)	
Pit-118	楕円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.28	0.20	0.37	46.09	III-3	被熱土器 土器片円板	
Pit-119	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.40	0.38	0.28	46.20	IV?		
Pit-120	楕円形	皿状	黒灰色粘質土	0.38	0.32	0.10	46.28	—		
Pit-121	円形	円筒状	黒灰色粘質土 (黄斑)	0.36	—	0.36	46.14	中期		
Pit-122	楕円形	皿状	黒灰色粘質土	0.32	0.27	0.11	46.33	—		
Pit-123	円形	皿状	黒灰色粘質土	0.40	—	0.07	46.37	III-3		
Pit-124	不整形	逆円錐状	黒灰色粘質土	0.34	—	0.26	46.19	V		
Pit-125	円形	円筒状	暗灰色粘質土	0.18	—	0.18	46.26	—		
Pit-126	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.24	0.21	0.14	46.37	—		
Pit-127	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黒灰色粘質土混)	0.22	0.16	0.42	45.82	中期		
Pit-128	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土	0.34	0.20	0.24	46.05	IV		
Pit-129	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黒灰色粘質土混)	0.26	0.20	0.22	46.06	IV?		
Pit-130	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黒灰色粘質土混)	0.24	0.18	0.33	46.00	中期		
Pit-131	円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黒灰色粘質土混)	0.26	—	0.30	46.01	中期		
Pit-132										図面なし・欠番か
Pit-133										図面なし・欠番か
Pit-134	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.42	0.24	0.31	46.22	中期		
Pit-135	円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.20	—	0.18	46.25	中期		
Pit-136	円形	逆台形	黒灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.20	—	0.21	46.28	中期		
Pit-137	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.18	0.10	0.30	46.20	—		
Pit-138	円形	円筒状	暗灰色粘質土	0.20	—	0.25	46.25	—		
Pit-139	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.44	0.34	0.27	46.07	IV		
Pit-140	楕円形	—	暗灰色粘質土 (鉄分)	0.28	0.22	0.15	46.14	中期?		
Pit-141	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土 (鉄分)	0.44	0.26	0.18	46.10	IV		
Pit-142	円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.34	—	0.08	46.37	中期?		
Pit-143										SK-107に変更 欠番
Pit-144										図面なし・欠番か
Pit-145										図面なし・欠番か

柱穴番号	平面形態	断面形態	上面土層	規模(m)			坑底 標高(m)	時期 (大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
Pit-146										図面なし・欠番か
Pit-147										図面なし・欠番か
Pit-148										図面なし・欠番か
Pit-149										図面なし・欠番か
Pit-150	楕円形	皿状	黒色粘質土	0.54	0.42	0.14	46.37	Ⅱ		
Pit-151	円形	逆台形	黒色粘質土	0.24	—	0.17	46.32	中期?		
Pit-152	円形	円筒状	黒色粘質土	0.30	—	0.28	46.14	中期?		Pit-153に切られる
Pit-153	円形	半円形	黒色粘質土	0.28	—	0.14	46.28	中期?	礎板?被熱土器	Pit-152を切る
Pit-154	円形	半円形	黒色粘質土	0.26	—	0.18	46.29	後期		
Pit-155	楕円形	逆円錐状	黒色粘質土	0.24	0.20	0.28	46.16	中期		
Pit-156	円形	皿状	黒色粘質土	0.22	—	0.11	46.38	中期?		
Pit-157	円形	半円形	黒色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.24	—	0.17	46.32	中期?		
Pit-158	円形	円筒状	黒色粘質土	0.28	—	0.36	46.16	中期		
Pit-159	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.44	0.33	0.20	46.36	中期		
Pit-160	—	—	黒色粘質土	—	—	—	—	—		図面なし
Pit-161	不整円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.28	—	0.25	46.25	中期		
Pit-162	円形	円筒状	暗灰色粘質土	0.22	—	0.38	46.13	中期		
Pit-163	不整形	逆台形	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.36	0.29	0.20	46.28	中期		
Pit-164	楕円形	逆台形	黒色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.32	0.26	0.28	46.18	Ⅳ		
Pit-165	不整円形	半円形	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.28	—	0.14	46.36	Ⅱ		
Pit-166	楕円形	半円形	黒色粘質土	0.34	0.23	0.18	46.33	Ⅱ		
Pit-167	不整形	逆台形	灰褐色粘質土	0.34	0.26	0.14	46.36	Ⅳ?		
Pit-168	楕円形	半円形	黒灰色粘質土 (灰色粘質土混)	0.30	0.25	0.20	46.30	Ⅲ-3		
Pit-169	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土	※0.50	0.32	0.28	46.28	Ⅲ-3		
Pit-170	円形	逆台形二段	黒色粘質土	0.30	—	0.19	46.31	Ⅲ-3?		
Pit-171	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.54	0.44	0.25	46.24	Ⅲ?		
Pit-172	円形?	—	黒灰色粘土	0.14	—	—	—	中期		
Pit-173	楕円形	逆台形	黒色粘質土 (ハード)	0.34	0.25	0.22	46.20	後期		
Pit-174	楕円形	半円形	黒灰色粘質土	0.36	0.23	0.14	46.28	—	礎板?	
Pit-175	楕円形	浅い皿状	黒灰色粘質土	0.32	0.25	0.06	46.34	中期		
Pit-176	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.40	0.20	0.14	46.28	中期		
Pit-177	円形	逆円錐状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.26	—	0.22	46.33	後期		
Pit-178	円形	逆円錐状	暗灰色粘土 (炭混)	0.20	—	0.20	46.32	中期		
Pit-179	円形	円筒状	暗灰色粘土	0.24	—	0.25	46.28	Ⅲ?		
Pit-180	円形	逆台形	暗灰色粘砂	0.28	—	0.18	46.32	—		
Pit-181	楕円形	円筒状	灰褐色粘質土	0.32	0.24	※0.47	※46.04	—	柱根	
Pit-182	円形	円筒状	黒色粘質土	0.16	—	※0.41	※46.08	—	柱根	
Pit-183	楕円形	皿状	黒色粘質土	0.31	0.15	0.12	46.32	中期		
Pit-184	楕円形	逆円錐状	黒色粘質土	0.24	0.20	0.36	46.10	Ⅲ-4		
Pit-185	不整円形	逆台形	黒色粘質土	0.32	—	0.24	46.30	Ⅳ		
Pit-186	円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.28	—	0.24	46.26	—		
Pit-187	円形	円筒状	暗灰色粘質土	0.18	—	0.23	46.28	—		
Pit-188	不整円形	逆台形	褐灰色粘質土	0.50	0.46	0.22	46.28	—		
Pit-189	楕円形	皿状	暗灰色粘質土	※0.19	0.19	0.05	46.46	—		
Pit-190	円形?	皿状	黒灰色粘質土	0.26	—	0.10	46.37	—		
Pit-191	楕円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.38	0.30	0.37	46.08	—	礎板?	
Pit-192	不整形	逆台形	—	0.18	—	0.13	46.40	—		
Pit-193	円形	半円形	黒灰色粘土	0.32	—	0.10	46.05	—		
Pit-194	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.34	0.26	0.17	46.33	—		
Pit-195	円形	逆台形	黒色粘質土	※0.32	—	0.18	46.35	—		
Pit-196	楕円形	逆台形二段	黒灰色粘質土	※0.22	0.18	0.24	46.29	—		
Pit-197	楕円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.34	0.18	0.29	46.24	—		
Pit-198	円形	半円形	黒灰色粘質土	0.15	—	0.15	46.38	—		
Pit-199	楕円形	皿状	黒灰色粘質土	※0.44	0.40	0.12	46.39	—		
Pit-1101	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.20	—	0.13	46.39	—		
Pit-1102	円形	円筒状	黒褐色粘質土	0.22	—	0.29	46.21	後期		
Pit-1103	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.20	—	0.14	46.39	後期?		
Pit-1104	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.20	—	0.15	46.34	中期?		
Pit-1105	不整円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.32	0.28	0.20	46.30	—		

※は復原値

第IV章 西地区の調査

柱穴番号	平面形態	断面形態	上面土層	規模 (m)			坑底 標高 (m)	時期 (大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
Pit-1106	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.30	—	0.21	46.29	中期	搬入土器 (河内)	
Pit-1107	不整形円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.26	0.22	0.27	46.25	—		
Pit-1108	楕円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.28	0.22	0.20	46.32	—		
Pit-1109	楕円形	円筒状	黒褐色粘質土	0.32	0.20	0.32	46.24	IV		
Pit-1110	円形	半円形	黒色粘質土	0.30	—	0.29	46.25	中期		
Pit-1111	円形?	半円形	灰褐色粘質土 (黄褐色粘質土混)	※0.22	—	0.11	46.38	中期		
Pit-1112	楕円形	円筒状	黒色粘砂	0.16	0.11	0.28	46.14	中期		
Pit-1113	円形	逆円錐状	黒灰色粘質土 (黄灰色粘質土混)	0.24	—	0.36	46.12	中期?		
Pit-1114	円形?	皿状	黒灰色粘質土	0.64	—	0.07	46.36	中期		
Pit-1115	楕円形	皿状	黒灰色粘質土	※0.24	0.18	0.11	46.33	中期		
Pit-1116	円形	半円形	黒灰色粘質土	0.13	—	0.08	46.44	中期		
Pit-1117	楕円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.18	0.12	0.27	46.26	中期		
Pit-1118	円形	皿状	黒灰色粘質土	0.18	—	0.09	46.40	—		
Pit-1119	円形	—	黒灰色粘質土	0.18	—	—	—	中期?		
Pit-1120	円形	皿状	黒色粘質土	0.18	—	0.08	46.35	古墳前期		
Pit-1121	楕円形?	皿状	暗灰色粘質土	※0.20	0.18	0.11	46.33	中期?	搬入土器 (河内)	
Pit-1122	円形	皿状	黒灰色粘質土	0.26	—	0.07	46.43	中期		
Pit-1123	楕円形	皿状	暗灰色粘質土	※0.30	0.24	0.15	46.35	中期		
Pit-1124	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土	※0.16	0.10	0.15	46.38	中期		
Pit-1125	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.36	0.24	0.16	46.29	II		
Pit-1126	円形	—	暗灰色粘質土	0.12	—	—	—	—		
Pit-1127	円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.20	—	0.11	46.41	中期?		
Pit-1128	不整形円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.44	0.38	0.28	46.22	IV		
Pit-1129	不整形円形	皿状	黒褐色粘質土	0.22	—	0.09	46.41	—		
Pit-1130	楕円形	円筒状	黒褐色粘質土	0.50	0.36	0.21	46.28	中期		
Pit-1131	円形?	逆台形	黒褐色粘質土	0.40	—	0.26	46.24	—		
Pit-1132	円形?	円筒状	黒褐色粘質土 (黄斑)	※0.24	—	0.26	46.22	—		
Pit-1133	円形?	逆台形	黒褐色粘質土	0.40	—	0.28	46.22	—		
Pit-1134	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.34	—	0.25	46.24	中期		
Pit-1135	円形?	円筒状?	黒褐色粘質土	※0.28	—	0.20	※46.30	—		
Pit-1136										図面なし・欠番か
Pit-1137	円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.24	—	0.20	46.31	—		
Pit-1138	円形?	—	暗灰色粘質土	—	0.70	—	—	中期		
Pit-1139	楕円形	—	暗灰色粘質土	※0.16	0.15	—	—	中期		
Pit-1140	楕円形	逆円錐状	黒褐色粘質土	0.38	0.20	0.33	46.26	中期	柱根?	
Pit-1141	円形?	—	黒褐色粘質土	※0.10	—	—	—	中期		
Pit-1142	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.30	0.25	0.17	46.37	—		
Pit-1143	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.26	0.23	0.20	46.28	II-3?		
Pit-1144	円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.30	—	0.15	46.38	—		
Pit-1145	円形	半円形	黒灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.16	—	0.11	46.43	—		
Pit-1146	円形	逆台形	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.40	—	0.13	46.41	—		
Pit-1147	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.28	0.16	0.15	46.39	—		
Pit-1148	円形	円筒状	灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.32	—	0.11	46.41	—		
Pit-1149	楕円形	皿状	灰褐色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.46	0.32	0.10	46.43	—		
Pit-1150	楕円形	皿状	灰褐色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.44	0.22	0.06	46.48	—		
Pit-1151	円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.16	—	0.23	46.34	—		
Pit-1152	円形	逆台形	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.16	—	0.17	46.39	—		
Pit-1153	円形	逆台形	黒褐色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.28	—	0.13	46.40	—		
Pit-1154	円形	逆台形	黒灰色粘質土 (ハード)	0.32	—	0.17	46.20	中期		
Pit-1155	円形	半円形	黒灰色粘質土 (ハード)	0.15	—	0.09	46.29	—		
Pit-1156	円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.28	—	0.22	46.26	II-3		
Pit-1157	不整形円形	逆台形	黒灰色粘質土 (鉄分混)	0.62	—	0.34	46.16	IV?		
Pit-1158	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.30	0.24	0.13	46.27	—		
Pit-1159	円形	半円形	黒灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.10	—	0.11	46.29	—		
Pit-1160	不整形円形	半円形	黒灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.26	0.20	0.14	46.31	III?		
Pit-1161	円形?	—	黒灰色粘質土 (ハード)	※0.38	—	0.12	46.25	中期?		

※は復原値

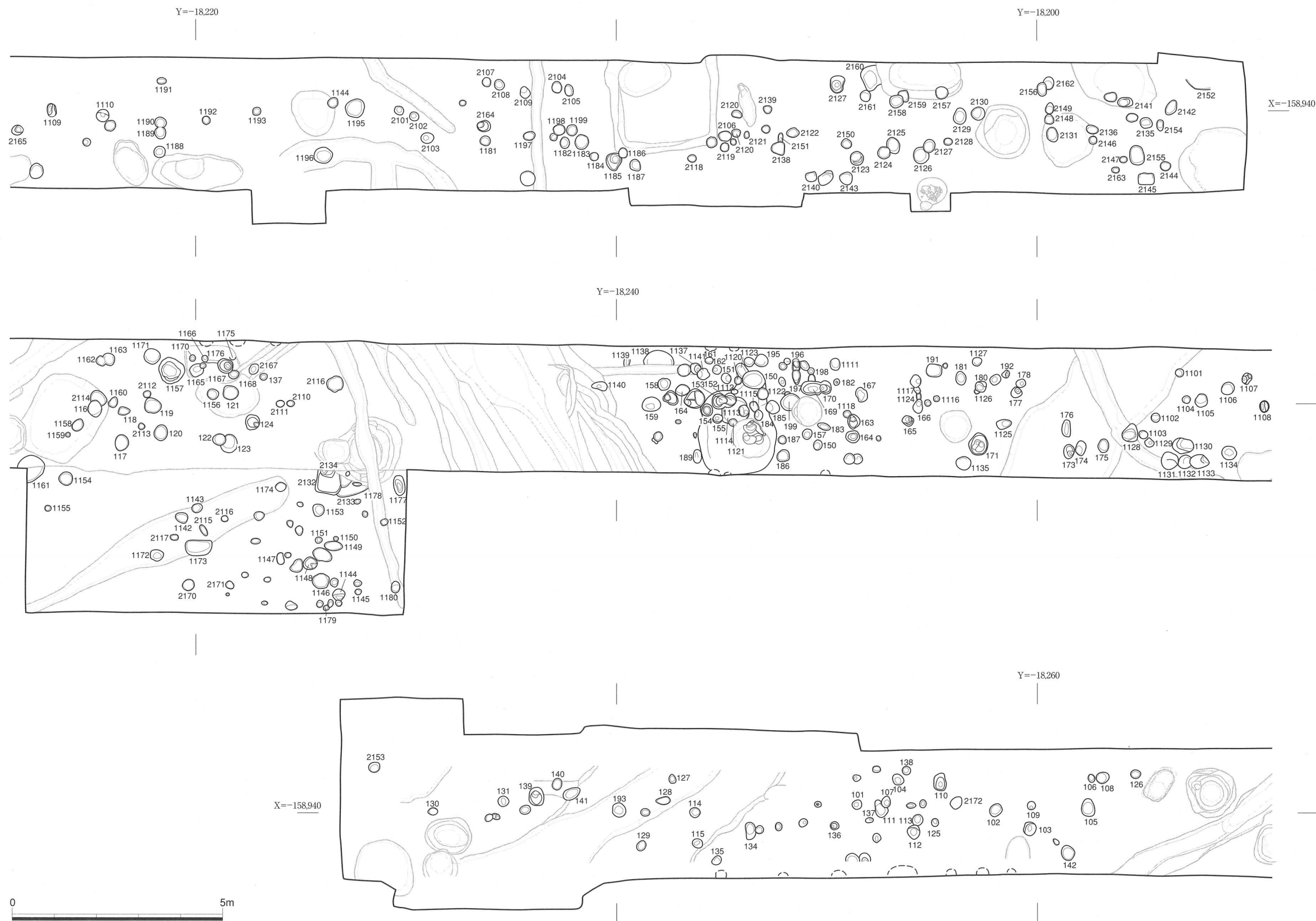
柱穴番号	平面形態	断面形態	上面土層	規模 (m)			坑底 標高 (m)	時期 (大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
Pit-1162	円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.24	—	0.14	46.31	—		
Pit-1163	円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.28	—	0.40	46.07	中期?		
Pit-1164	円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.14	—	0.20	46.16	—		
Pit-1165	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.34	0.28	0.34	46.16	中期		
Pit-1166	円形	逆円錐状	黒灰色粘質土	0.14	—	0.38	46.14	—		
Pit-1167	円形	半円形	黒灰色粘質土	0.36	—	0.22	46.18	中期?		
Pit-1168	楕円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.24	0.20	0.30	46.16	—		
Pit-1169	—	—	黒灰色粘質土	—	—	—	—	—		図面なし
Pit-1170	円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.14	—	0.16	46.24	—		
Pit-1171	円形?	逆台形	黒褐色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.38	—	0.12	46.37	—		
Pit-1172	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土 (炭混)	0.32	0.26	0.18	46.21	中期?		
Pit-1173	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土 (黄斑)	0.66	0.40	0.09	46.42	中期?		
Pit-1174	楕円形	皿状	灰褐色粘質土	0.26	0.22	0.11	46.40	中期?	搬入土器(河内)	
Pit-1175	円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.14	—	0.33	46.16	中期?		
Pit-1176	方形?	逆台形	黒褐色粘質土	※0.60	※0.16	0.34	46.14	V?		
Pit-1177	楕円形	逆円錐状	黒褐色粘質土	0.46	0.24	0.30	46.33	—		
Pit-1178	楕円形	皿状	暗灰色粘質土	0.16	0.12	0.07	46.46	—		
Pit-1179	円形	皿状	暗灰色粘質土	0.13	—	0.03	46.50	—		
Pit-1180	円形	皿状	黒褐色粘質土	0.26	—	0.04	46.51	—		
Pit-1181	円形	逆台形	黒色粘質土	0.24	—	0.14	46.53	—		
Pit-1182	楕円形	逆台形	灰色粘質土	0.26	0.21	0.19	46.46	前期?		
Pit-1183	円形	皿状	灰色粘質土	0.36	—	0.10	46.55	—		
Pit-1184	円形	円筒状	灰色粘質土	0.21	—	0.27	46.39	—	焼土塊	
Pit-1185	不整円形	円筒状	黒色粘質土	0.42	—	0.27	46.38	—		
Pit-1186	円形	皿状	黒色粘質土	0.24	0.21	0.05	46.61	中期?		
Pit-1187	楕円形	逆台形	黒色粘質土	0.28	0.25	0.19	46.47	中期?	焼土塊	
Pit-1188	円形	半円形	暗灰褐色粘質土	0.28	—	0.15	46.43	Ⅲ?		
Pit-1189	円形	円筒状	黒色粘質土	0.28	—	0.19	46.34	—		
Pit-1190	円形	逆台形	黒色粘質土	0.28	—	0.15	46.38	中期	被熱土器	
Pit-1191	楕円形	円筒状	黒色粘質土	0.22	0.16	0.22	46.33	—	搬入土器(河内)	
Pit-1192	円形	半円形	黒色粘質土	0.19	—	0.23	46.33	—		
Pit-1193	円形	円筒状	黒色粘質土	0.19	—	0.16	46.38	Ⅱ	焼土塊	
Pit-1194	円形	円筒状	黒色粘質土	0.24	—	0.22	46.31	中期?		
Pit-1195	不整円形	逆台形	黒色粘質土	0.48	0.42	0.14	46.40	—	焼土塊	
Pit-1196	楕円形	逆台形	黒色粘質土	0.44	0.38	0.12	46.47	—	焼土塊・被熱土器	
Pit-1197	楕円形	円筒状	灰色粘質土	0.28	0.21	0.29	46.34	中期?		
Pit-1198	円形	円筒状	灰色粘質土	0.28	—	0.28	46.32	—		
Pit-1199	円形	逆台形	灰色粘質土	0.26	—	0.18	46.40	—		
Pit-2101	円形	逆台形	黒色粘質土	0.22	—	0.19	46.37	Ⅱ?		
Pit-2102	円形	逆台形	黒色粘質土	0.22	—	0.15	46.41	Ⅱ-3?		
Pit-2103	楕円形	逆台形	黒色粘質土	0.30	0.24	0.17	46.49	中期?	被熱土器	
Pit-2104	円形	円筒状	灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.24	—	0.21	46.43	中期		
Pit-2105	楕円形	円筒状	灰色粘質土	0.28	0.20	0.31	46.34	前期?		
Pit-2106	楕円形	円筒状	灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.32	0.24	0.31	46.30	—		
Pit-2107	円形	逆台形	黒色粘質土	0.20	—	0.18	46.50	—	被熱土器	
Pit-2108	円形	皿状	黒色粘質土	0.24	—	0.13	46.54	—		
Pit-2109	円形	皿状	黒色粘質土	0.26	—	0.16	46.48	—		
Pit-2110	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.18	0.15	0.15	46.32	—		
Pit-2111	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.19	0.16	0.12	46.30	中期?		
Pit-2112	円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.16	—	0.16	46.28	—		
Pit-2113	不整円形	円筒状	黒灰色粘質土 (ハード)	0.15	—	0.28	46.14	—		
Pit-2114	楕円形	円筒状	黒灰色粘質土 (ベースブロック)	0.40	(0.34)	0.23	46.20	—		
Pit-2115	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土 (炭混)	0.30	0.13	0.15	46.23	—		
Pit-2116	円形	半円形	黒灰色粘質土 (炭混)	0.16	—	0.11	46.23	中期?		
Pit-2117	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.20	0.15	0.16	46.27	中期?		
Pit-2118	楕円形	逆台形	黒色粘質土	0.20	0.16	0.11	46.57	中期?		
Pit-2119	円形	円筒状	灰色粘質土	0.22	—	0.22	46.44	—		
Pit-2120	円形	円筒状	暗灰色粘質土	0.20	—	0.20	46.42	—		

※は復原値、() は残存値

第IV章 西地区の調査

柱穴番号	平面形態	断面形態	上面土層	規模(m)			坑底 標高(m)	時期 (大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
Pit-2121	楕円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.18	0.12	0.14	46.46	—		
Pit-2122	楕円形	皿状	暗灰色粘質土	0.30	0.22	0.11	46.49	—		
Pit-2123	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.31	—	0.20	46.47	—		
Pit-2124	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.30	—	0.19	46.48	—		
Pit-2125	楕円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.40	0.30	0.22	46.44	IV		
Pit-2126	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.38	—	0.26	46.43	後期		
Pit-2127	楕円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.32	0.27	0.25	46.43	—		
Pit-2128	楕円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.20	0.17	0.18	46.44	—		
Pit-2129	楕円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.38	0.30	0.22	46.36	IV		
Pit-2130	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.32	—	0.25	46.35	中期?		
Pit-2131	楕円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.36	0.26	0.29	46.35	—		
Pit-2132	方形	皿状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	※0.60	0.60	0.10	46.43	—		
Pit-2133	楕円形	逆台形二段	黒灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	※0.52	0.36	0.19	46.28	—		
Pit-2134	不整形	逆台形	暗灰色粘質土	0.34	※0.16	0.19	46.33	—		
Pit-2135	楕円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.28	0.22	0.17	46.46	—		
Pit-2136	楕円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.28	0.22	0.22	46.44	—		
Pit-2137	不整形	逆台形	黒褐色粘質土 (ハード)	※0.30	0.32	0.16	46.54	中期	被熱土器	
Pit-2138	不整形円形	皿状	暗灰色粘質土 (炭混)	0.34	—	0.09	46.57	—		
Pit-2139	円形	半円形	暗灰色粘質土	0.20	—	0.12	46.48	前期?		
Pit-2140	円形?	逆台形	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.24	—	0.15	46.47	IV?		
Pit-2141	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.36	0.22	0.35	46.27	—	搬入土器(紀伊)	
Pit-2142	楕円形	円筒状	黒褐色粘質土	0.40	0.24	0.19	46.48	—		
Pit-2143	円形?	皿状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.28	—	0.10	46.51	II		
Pit-2144	円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.24	—	0.19	46.47	—		
Pit-2145	不整形	浅い皿状	灰褐色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.40	※0.12	0.09	46.59	—		
Pit-2146	円形	逆台形	暗灰色粘質土	0.19	—	0.11	46.49	—		
Pit-2147	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.18	0.14	0.13	46.55	—		
Pit-2148	円形	逆台形	黒灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.22	—	0.16	46.44	V?		
Pit-2149	楕円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.26	0.19	0.20	46.41	—		
Pit-2150	不整形円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.24	—	0.33	46.31	II?		
Pit-2151	楕円形	円筒状	暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混)	(0.24)	0.11	0.22	46.39	—		
Pit-2152	楕円形	円筒状	灰褐色粘質土	※0.60	※0.24	0.16	46.53	—		
Pit-2153	円形	逆台形	黒色粘質土	0.26	—	0.13	46.19	古墳前期	搬入土器(山陰)	
Pit-2154	楕円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.26	0.16	0.23	46.44	II-3	搬入土器(河内)	
Pit-2155	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.46	0.34	0.15	46.52	—		
Pit-2156	楕円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.31	0.24	0.14	46.49	中期?		
Pit-2157	円形	逆台形	黒灰色粘質土 (ハード)	0.29	—	0.27	46.40	—		
Pit-2158	円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.30	—	0.21	46.47	—		
Pit-2159	円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.28	—	0.20	46.44	中期?		
Pit-2160	不整形	逆台形	—	※0.48	※0.30	0.20	46.48	—		
Pit-2161	円形	円筒状	黒灰色粘質土	0.26	—	0.33	46.35	中期?		
Pit-2162	円形	逆台形	黒灰色粘質土	0.28	—	0.14	46.47	中期?		
Pit-2163	楕円形	半円形	黒灰色粘質土	0.18	0.14	0.11	46.55	—		
Pit-2164	楕円形	半円形	暗灰色粘質土 (炭・黄褐色粘質土混)	0.32	0.28	0.18	46.33	—		
Pit-2165	楕円形	円筒状	黒褐色粘質土	0.28	0.22	0.23	46.28	—		
Pit-2166	不整形円形	皿状	黒褐色粘質土	0.38	—	0.07	46.34	—		
Pit-2167	楕円形	—	黒褐色粘質土	0.26	0.20	—	—	—		
Pit-2168	—	—	—	—	—	—	—	—	搬入土器(河内)	図面なし
Pit-2169	—	—	—	—	—	—	—	—	ミニチュア蓋	図面なし
Pit-2170	円形	逆台形	灰褐色粘質土	0.28	—	0.13	46.43	—		
Pit-2171	円形	逆台形	灰褐色粘質土 (黄褐色粘質土混)	0.20	—	0.13	46.42	—		
Pit-2172	楕円形	—	暗灰色粘質土	0.30	0.24	0.18	46.30	—		

※は復原値、()は残存値



第336図 第V層上面の柱穴（2）（S=1/100）

5. まとめ

今回の第79次調査で注目すべきは、環濠と居住域の関係であろう。調査区東側の微高地部からは、竪穴住居跡に関連すると考えられる柱穴や炭灰土坑を多数検出している。これに対し、調査区西側の微高地末端では、居住域から外部を区画したと考えられる環濠を検出した。また、遺構の変遷として、弥生時代中期前葉段階の環濠（SD-102）が弥生時代中期中葉の大環濠（SD-101）へと付け替えられ、さらに弥生時代後期初頭には大環濠も埋没し柱穴や井戸などの居住遺構がその外側へと拡がっていく状況が明らかとなった。

以下に今回の調査の成果をまとめる。

地形

本調査区における弥生時代中期中葉～中世の遺構検出面は、調査区東側が標高約46.70m、調査区西側が標高約46.50mである。これは、そのまま地形の傾斜状況を表し、東から西に向かって微高地は下がっている。本調査区は東西に長く、南と北の地形に関する情報は少ない。しかし、検出した遺構のうち、排水の役目を担っていたと考えられるSD-103・112・113の底面はいずれも南から北に向かって低くなっていた。このことから、本調査区の南側に微高地の最高所が想定され、そこから北側へ向かって地形の傾斜が予想されるのである。また、その北側の微高地末端は、本調査区からさほど遠くないものと想定される。これは、弥生時代中期前葉の環濠SD-102、弥生時代中期中葉の環濠SD-101Dが微高地末端を切って掘削されることから、今回の調査で得た環濠の方向からおおよその推測を可能としている。

遺構

弥生時代中期前葉 SD-102（幅約3.6m、深さ約1.4m）が、調査区中央やや西寄りに掘削される。本溝については、本調査区から南西の第19次SD-203・1203へと繋がり、弥生時代中期前葉において唐古・鍵遺跡の居住域と外部を区画した環濠と考えられる。また、本溝の西側に掘削されたSD-101Dの下層からは、人骨頭頂部片が出土している。これは、SD-102の外側にあった弥生時代中期前葉以前の土壙（木棺）墓が、弥生時代中期中葉の大環濠掘削によって破壊され、その中にあった人骨が混じり込んだものと考えられる。SD-102から東側では、SK-125・127、SD-118など同時期の遺構が検出されているが、基本的に弥生時代中期前葉の遺構については今回検出をおこなった第V層上面よりも検出面は一面下になると考えられ、居住域の詳細は不明である。

弥生時代中期中葉 先述した弥生時代中期前葉の環濠SD-102が埋没していく大和第Ⅲ-1様式の段階において、調査区西端ではSD-101D（幅8.00m以上、深さ約1.2m）が掘削される。これまでの遺跡西側の調査から、弥生時代中期中葉には幅100mにも及ぶ環濠帯のめぐることが判明しているが、このSD-101Dはその規模、位置、方向から、環濠帯のなかでも最も居住域に接した「大環濠」と考えられる。SD-101とSD-102の間からは、弥生時代中期中葉の井戸と考えられる土坑や竪穴住居跡と想定される炭灰土坑や柱穴を検出しており、居

住域がSD-102よりも西側へと広がったことを示すものといえよう。

このように、SD-101Dから東側が弥生時代中期中葉の居住域であり、住居に関連すると考えられる炭灰土坑、柱穴、小溝を多数検出している。遺構の切り合いが激しいため、1棟の単位をつかむのは難しいが、炭灰土坑を灰穴炉と推定するならば最低でも9棟の竪穴住居跡が想定される。本調査区周辺は竪穴住居跡のみで構成された地区の可能性が高い。これら住居からの汚水は、調査区中央で検出したSD-103へと集められ、その北西延長上にある環濠SD-101Dに排水されていたようである。SD-103は小溝の集合体で、弥生時代中期後葉まで幾度も掘削し直されている。おそらく、区画溝の性格もあわせていたのであろう。

弥生時代中期後葉 SD-101は、大和第Ⅲ-3様式(SD-101C)の再掘削の後、大和第Ⅳ様式(SD-101B)にも再掘削される。このSD-101B西肩には、大型土坑のSK-111・130が掘り込まれる。SK-111からはみかん割された原材、SK-130からは平鍬や丸鍬の未成品が出土しており、木器貯蔵穴と考えられる。弥生時代中期中葉にもSD-101の東肩に、木器貯蔵穴と考えられるSK-133が掘り込まれている。弥生時代前期から弥生時代中期前葉にかけて集落内部にあった木器貯蔵施設が、弥生時代中期中葉以降には環濠周辺へと移動している可能性も想定される。SD-101Bから東側においては、SD-103に並行して小溝のSD-112・113が掘り込まれており、依然として居住域であったことが伺える。

弥生時代後期初頭 SD-101は、小溝となっており、環濠の機能は有していなかったと考えられる。このSD-101より西側において、井戸と考えられるSK-102・104や、柱穴を検出した。弥生時代後期初頭には、居住域がさらに西側へと広がったことを示すものといえよう。弥生時代中期の環濠帯及び居住域が大環濠のSD-101に規定されていたことを考えるならば、それを越えた居住域の拡大は、集落構造の変質を示唆しているのかもしれない。

弥生時代後期前葉～後期後葉 弥生時代後期前葉の井戸SK-120、弥生時代後期後葉の井戸SK-105を検出した。SK-120からは、完形の長頸壺6点が出土している。周辺の柱穴についても、この時期に該当するものが含まれていると考えられる。

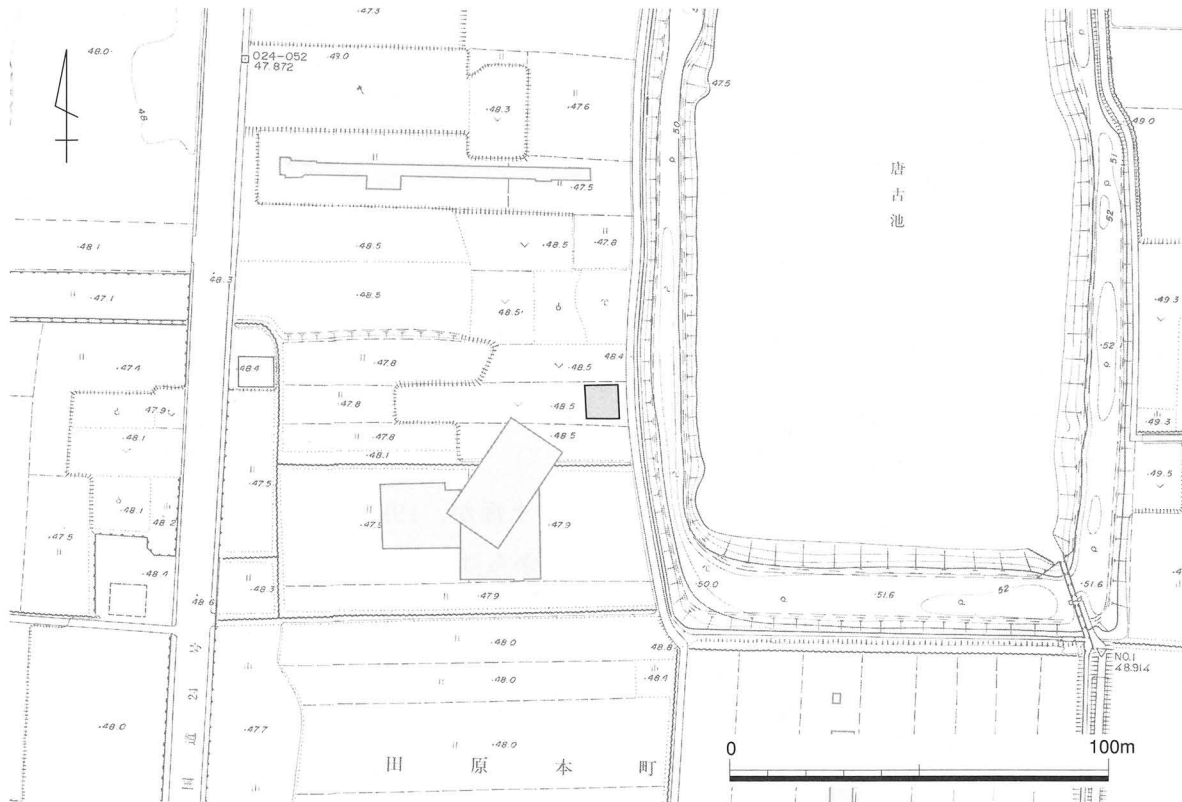
古墳時代初頭 庄内期と考えられるSK-108・109の2基を検出している。性格は不明であるが、両者は約2.8mの距離をもって近接し、形態・規模が類似する。SK-108からは東海地方の搬入と考えられる有文壺、SK-109からは東海地方の搬入と考えられるヒサゴ壺が出土した。その他、SD-103の最上層には、布留0式土器が含まれている。これらは、唐古・鍵遺跡の終焉を考える上で、重要な資料である。

第3節 第80次調査報告

1. 調査の経緯

第80次は、第79次とともに平成12年度におこなった範囲（内容）確認調査である。平成12年度の範囲（内容）確認調査は、6月におこなわれた唐古・鍵遺跡調査検討委員会での検討により、北地区（微高地）の構造把握という方針が立てられた。これを承けた第79次調査は、北地区（微高地）における居住域の把握を目的としたが、一方では北地区（微高地）がどこまで広がっているのか地形確認も必要であるように思われた。特に、北地区と西地区と呼ばれた両微高地の境がどこにあるのかは、集落の内部構造を把握するためにも重要な懸案事項であった。このため、調査検討委員会から現状変更許可申請の提出までの調査区選定段階で田原本町教育委員会は、第79次とともに地形把握のための小規模な調査をもう一件計画した。

これまでに第79次調査の東隣接地である唐古池西側堤防でおこなった第37次調査では、調査区南側で弥生時代中期の砂層が堆積する落ち込みを検出しており、ここに北地区（微高地）の南末端部を予想していた。そこで、唐古池西側堤防と通学路を挟んだその西側、周囲の田圃より一段高い造成地で、弥生時代の落ち込みが想定される位置に第80次調査区を設定した。



第337図 第80次調査区の位置（S = 1/2,000）

2. 調査の方法

第80次調査区は、田原本町大字唐古116番1、117番1、118番にあたる。現状は、周囲の田圃より一段高くなった造成地である。もともと高い島畑であったが、1980年代の後半に造成地となり、1mを超える客土がなされている。そこで、現地表からの掘削範囲を15×15mの正方形で設定し、勾配をつけて旧表土面まで掘削した。旧表土面の周囲には幅約1.5mの犬走りを設け、新たに正方形で10×10mの調査区を設定した（第337図）。この段階で、調査面積は約100㎡である。さらに旧表土面から遺物包含層までの深さが約1.2mあり、これに勾配をつけ周囲に排水溝をめぐるため、実質的な調査範囲は8×9mで、面積は72㎡となった。

本調査区は、弥生時代中期後葉から弥生時代後期までの遺構検出面が同一であった。範囲（内容）確認という調査の性格上、それより下層遺構の調査はおこなっていない。

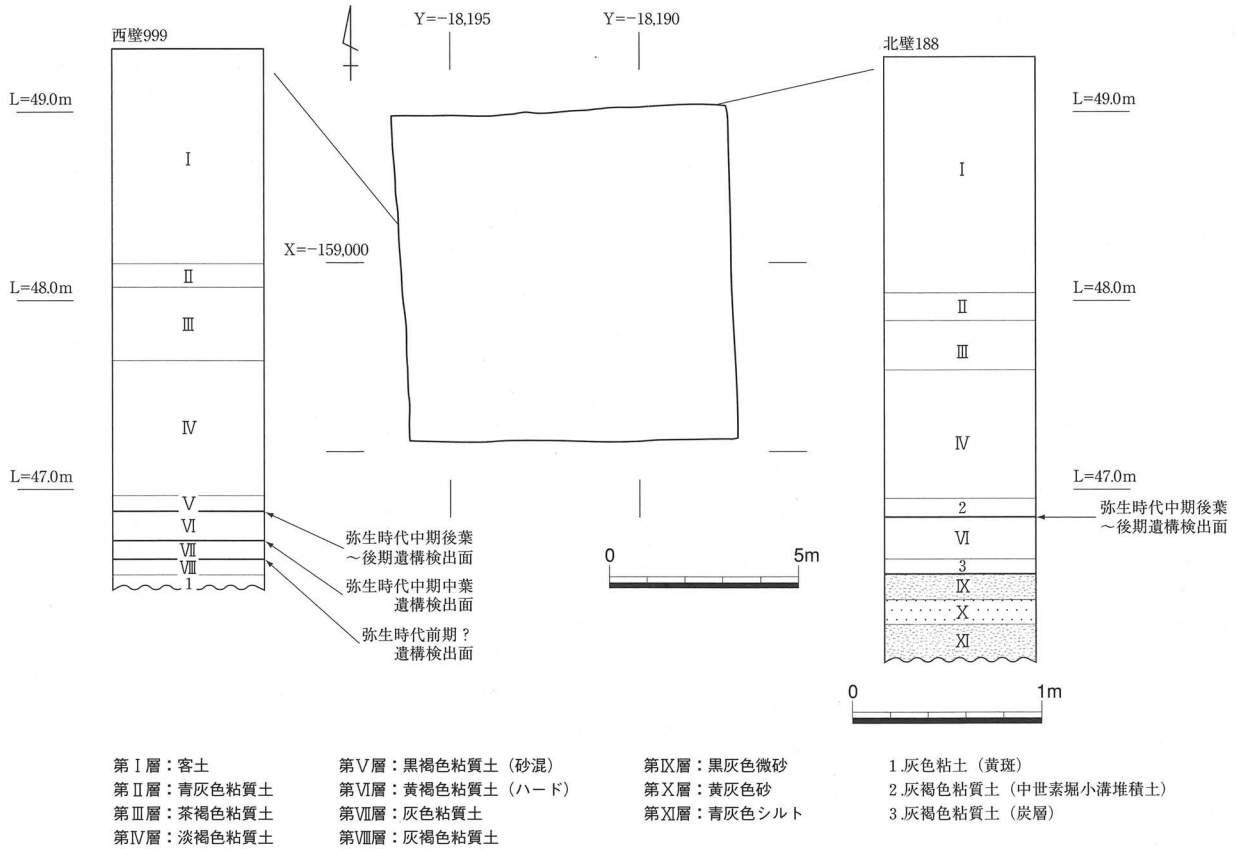
調査期間は、平成12（2000）年10月16日から平成13（2001）年1月24日までで、実働日数は53日間である。遺物総数はコンテナ215箱である。

3. 層序

本調査区の基本層序は、以下の通りである（第338図）。

第Ⅰ層：客土	〔	厚さ1.10～1.40m	：上面標高49.50m〕
第Ⅱ層：青灰色粘質土	〔耕作土、	厚さ0.10～0.40m	：上面標高48.10m〕
第Ⅲ層：茶褐色粘質土	〔畑土1、	厚さ0～0.40m	：上面標高47.80～48.00m〕
第Ⅳ層：淡褐色粘質土	〔畑土2、	厚さ約0.7m	：上面標高47.60～47.80m〕
第Ⅴ層：黒褐色粘質土（砂混）	〔弥生時代遺物包含層、	厚さ約0.1m	：上面標高47.10m〕
第Ⅵ層：黄褐色粘質土（ハード）	〔弥生時代中期後葉～後期遺構検出面、	厚さ約0.2m	：上面標高47.00m〕
第Ⅶ層：灰色粘質土	〔弥生時代中期中葉遺構検出面、	厚さ約0.2m	：上面標高46.80m〕
第Ⅷ層：灰褐色粘質土	〔弥生時代前期遺構検出面？	厚さ0.10～0.20m	：上面標高46.70m〕
第Ⅸ層：黒灰色微砂	〔ベース、	厚さ0.10～0.20m	：上面標高46.60m〕
第Ⅹ層：黄灰色砂	〔ベース、	厚さ0.10～0.20m	：上面標高46.50m〕
第Ⅺ層：青灰色シルト	〔ベース、	厚さ0.10～0.20m	：上面標高46.30m〕

第Ⅰ層は、前述したとおり客土である。第Ⅱ層の上面が、1980年代以前の旧地表面である。第Ⅲ層、第Ⅳ層は島畑に伴う畑土客土である。両層からは、染付碗が出土しており、島畑の形成は江戸時代以降と考えられる。その直下は、第Ⅴ層：黒褐色粘質土（砂混）で、弥生時代の遺物を包含している。この第Ⅴ層は、調査区南東部の弥生溝群上面には厚く堆積するが、調査区北西部では確認できない。北西部では、第Ⅳ層の直下で弥生時代中期後葉～後期遺構面となる第Ⅵ層：黄褐色粘質土（ハード）が露出する。なお、第Ⅴ層及び北西部の第Ⅵ層上面は、中世素掘小溝の検出面でもある。



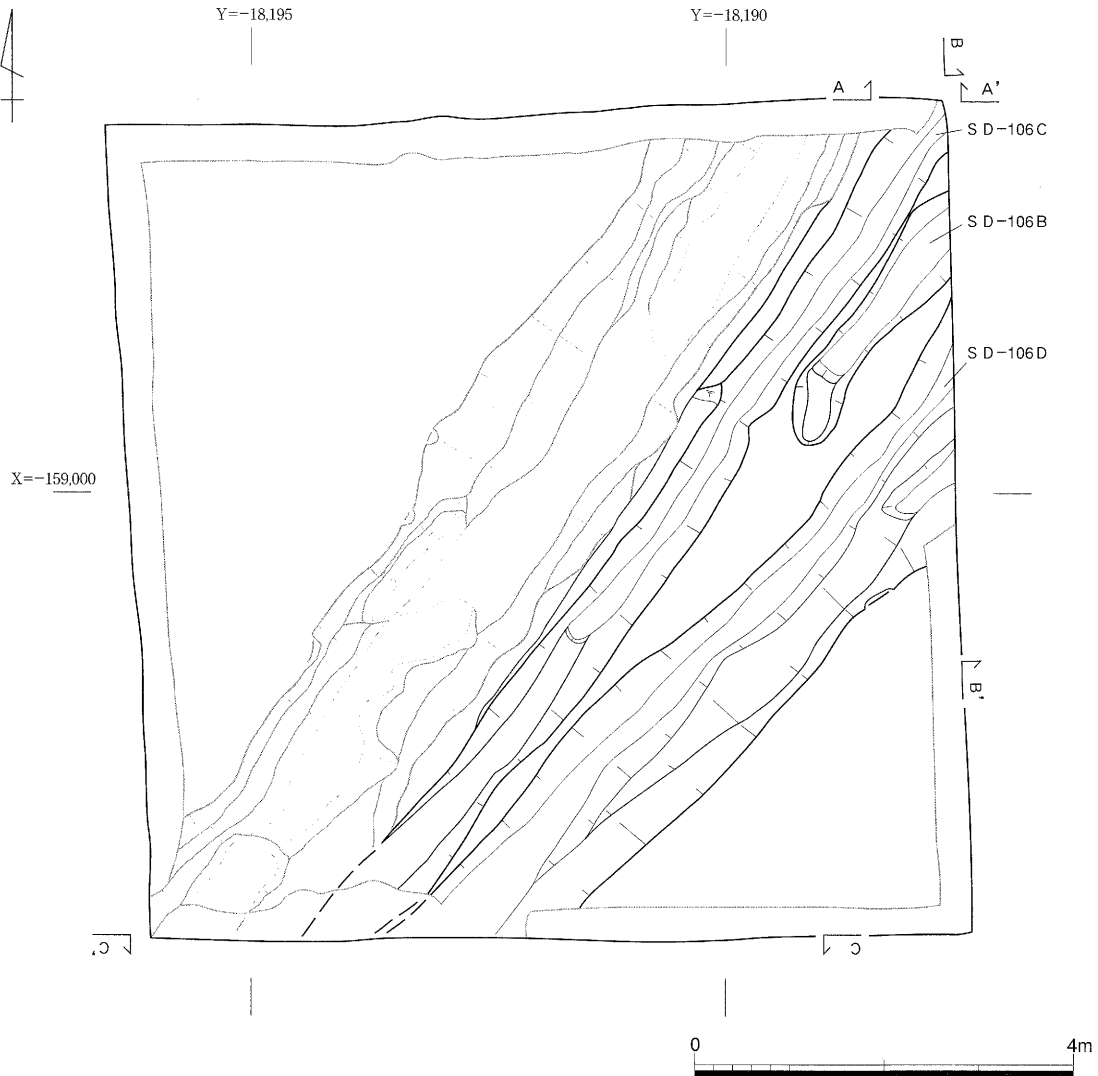
第338図 第80次調査区配置図と基本土層図（トレンチ枠：S = 1/200、柱状図：S = 1/40）

弥生時代中期後葉及び弥生時代後期の遺構は、第VI層：黄褐色粘質土（ハード）上面で検出した。その標高は、47.00mを前後する。範囲（内容）確認調査という性格上、平面的な調査はこの第VI層上面にとどまったが、排水溝によって下層堆積を確認している。それによれば、第VI層の直下、第VII層：灰色粘質土の上面が弥生時代中期中葉の遺構検出面になると考えられる。その標高は、46.80mを前後する。また、第VII層の直下、第VIII層：灰褐色粘質土は、弥生時代前期の遺構検出面と考えられるが、弥生溝を挟んだ調査区南東隅での確認である。弥生溝から西側は、灰色粘土（黄斑ブロック）の堆積が第VIII層に対応すると考えられる。

第IX層：黒灰色微砂以下はベースであるが、この第IX層及び第X層：黄灰色砂は調査区北東隅での検出であり、局所的な堆積の可能性はある。基本的には、第XI層：青灰色シルトが拡がっているであろう。

4. 遺構

第80次調査では、調査区の北東隅から南西隅への対角線上を通るような形で、弥生時代の溝群を検出した。溝群は、弥生時代中期中葉にSD-106が掘削され、度重なる再掘削及び弥生時代中期後葉におけるSD-101Bへの付け替えを経て弥生時代後期後葉のSD-101まで

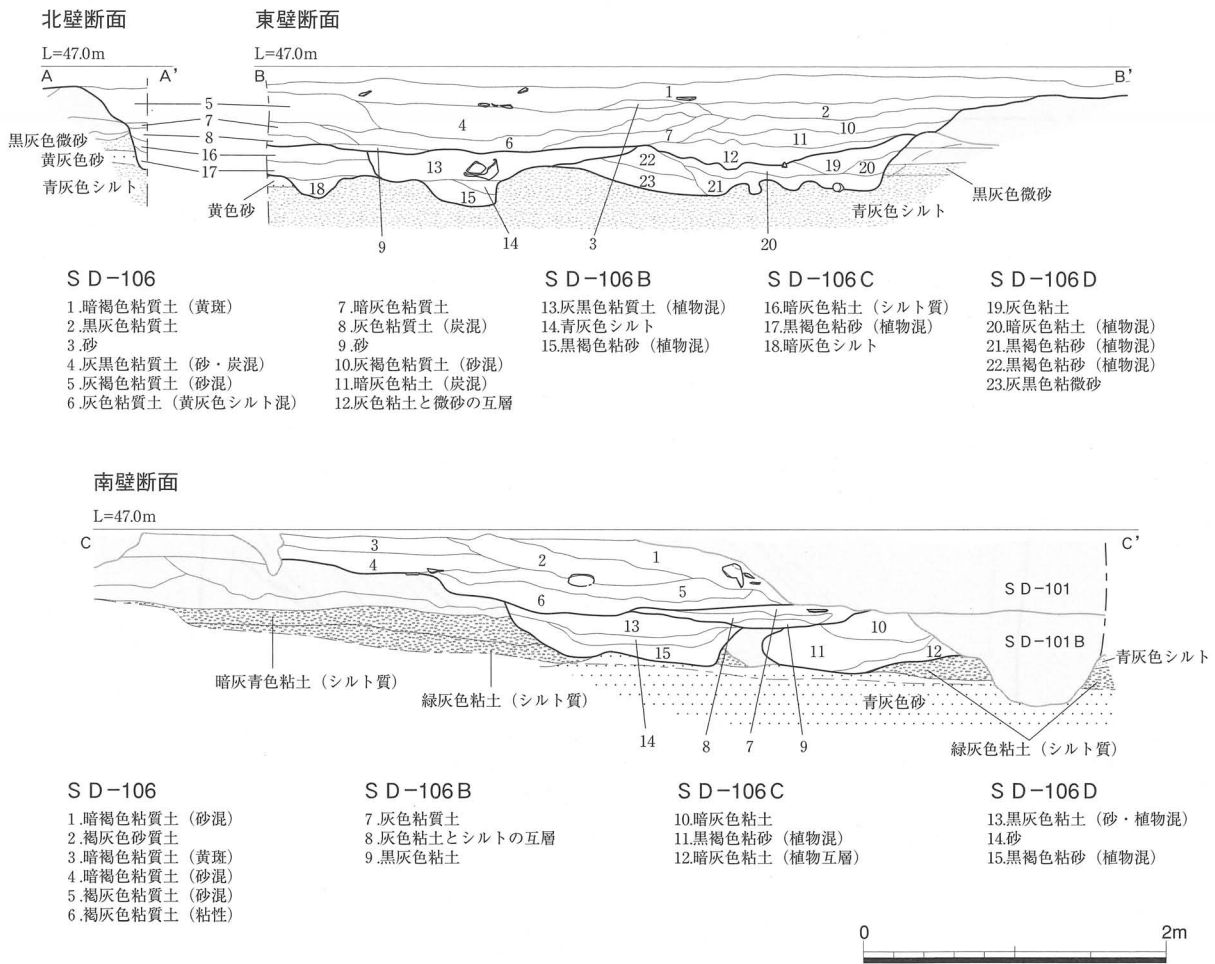


第339図 弥生時代中期中葉の遺構（1）（S = 1/80）

溝

SD-106・B・C・D（第339・340図、写真図版204・205）

本溝は、正方形の調査区に対角線上に沿って北東-南西に走行する溝の集合体である。付け替えられたSD-101Bに西肩を切られるが、中央から北半ではその削平を免れており、ほぼその上面幅を推定することができた。遺構検出面において上面幅は約3.0mの大溝状を呈していたが、掘り下げたところ底面ちかくにおいて複数の肩を検出し、少なくとも3条の小溝が切り合っていることが判明した。これらの溝は、機能が低下するとやや位置をずらして再掘削されることによって、上面の幅が広がっていったものと考えられる。土層断面においても、遺構検出面から深さ約0.5mの中層までは、一つの大きな溝としての堆積状況を示している。よって、中層から上層までの堆積をSD-106と呼び、下層の小溝についてはそれぞれSD-106B・C・Dと呼び分ける。なお、中層の暗灰色粘土層からは多量の大和第三様式後半の土器が出土し、下層は大和第三-1様式に遡るようである。

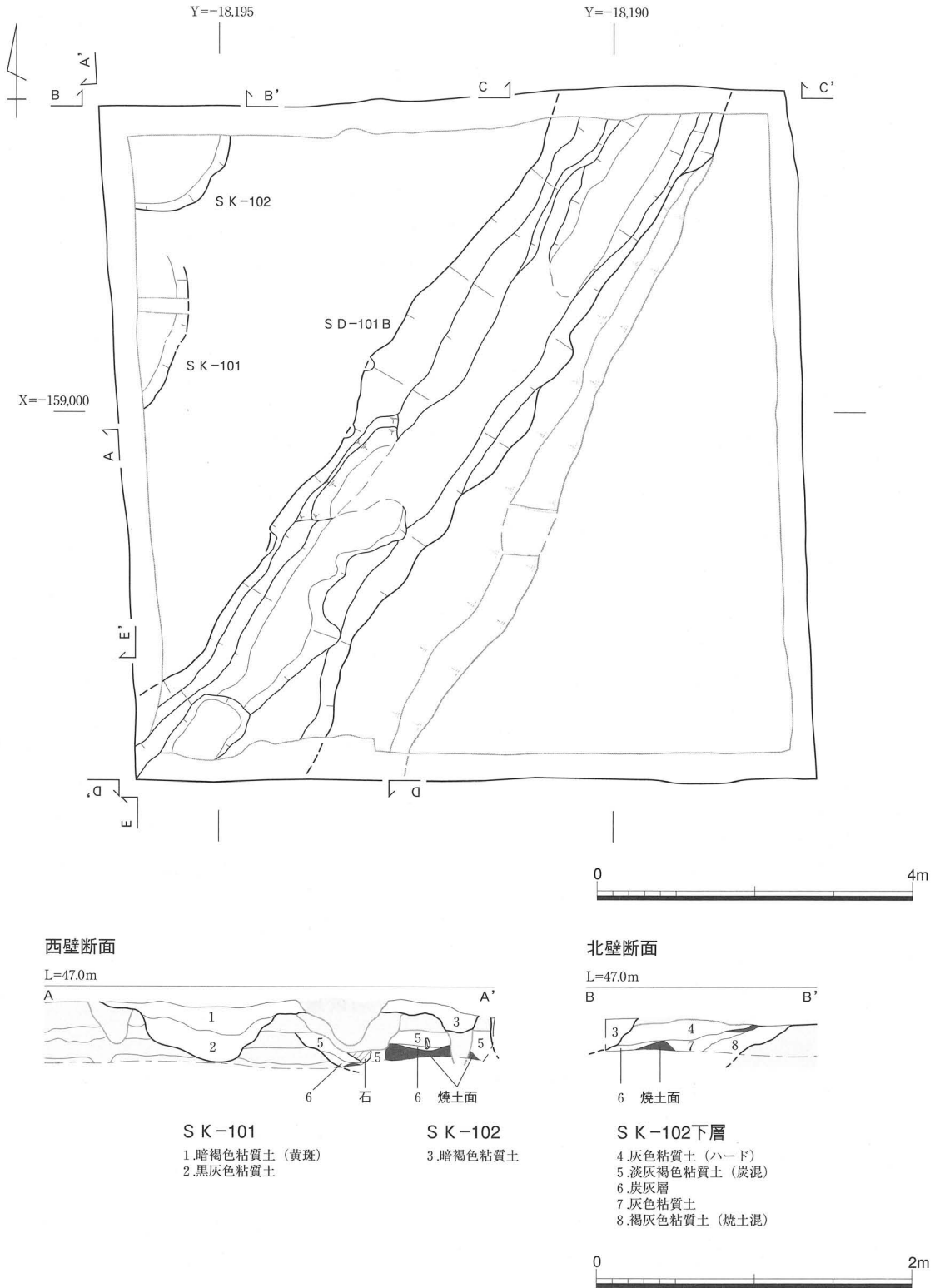


第340図 弥生時代中期中葉の遺構 (2) (S = 1/50)

SD-106Bは、集合大溝であるSD-106の中央に位置する溝である。調査区の北東側ではその落ち込みを確認できるが徐々に浅くなり、南西側ではSD-106CとSD-106Dの間の平坦面として痕跡を残すのみとなる。溝底面の落ち込みが確認できる北東側で、幅0.40~0.70m、深さ約0.8mを測る。東壁における底面標高は46.07mである。植物を含んだ黒褐色粘砂で埋没する。

SD-106Cは、集合大溝であるSD-106の西肩を形成する最も西側の溝である。その幅は、東肩が検出できる底面ちかくで0.58~0.72mである。深さは、集合大溝SD-106の検出面から約0.9mを測る。東壁における底面標高は46.12m、南壁における底面標高は46.06mである。植物を含んだ黒褐色粘質土で埋没する。

SD-106Dは、集合大溝であるSD-106の東肩を形成する最も東側の溝である。その幅は、西肩が検出できる底面ちかくで0.40~0.80mである。北東側の底面には凹凸があり、1条ではなく複数の小溝からなる可能性もある。深さは、集合大溝SD-106の検出面から約0.8mを測る。東壁における底面標高は46.14m、南壁における底面標高は46.10mである。植物を含んだ黒褐色粘質土で埋没する。



第341図 弥生時代中期後葉の遺構 (1) (平面図：S=1/80、断面図：S=1/40)

(2) 弥生時代中期後葉の遺構 (第341図、写真図版206)

本調査区において、弥生時代中期後葉の遺構として確認したのは、土坑2基 (SK-101・102) と溝1条 (SD-101B) である。このうち、土坑2基については、SD-101Bの西側

で検出したが、不定形で貧弱なものである。SD-101Bは、SD-106の西側に並行して掘削され一部はその西肩を切り込んでいる。このことから、SD-106の小溝群の一つとして捉えられなくもない。しかし、SD-101BはSD-106から位置をずらして掘削され、SD-106の小溝群よりもやや規模が大きくしっかりしている。また、後に掘削されるSD-101が、SD-101Bの位置を利用していることから、SD-106とは区分した。ただし、機能的には、SD-106と同様な排水を兼ねた区画溝といえよう。SD-101Bからは、翡翠製の大型勾玉2点を収めた鳴石容器が出土し、注目される。

土坑

SK-101 (第341図、写真図版211)

本坑は、調査区北西隅のSK-102の南側に接して検出した。その北側をSD-103、南側をSD-104に切られる。平面については、西半部が調査区外にあるため不明であるが、長軸2.20m以上、幅0.60m以上の濁りとして検出した。これに対し、調査区西壁における断面は、1.10mほどの上面幅をもった、深さ0.38mの逆台形であった。おそらく本坑は、先述の遺構同士の切り合いもあり、周辺が濁ることによって、平面的には拡がるように見えるが、断面が示すように1m前後の小規模なものと考えられる。堆積土は2層からなり、第1層：暗褐色粘質土（黄斑）、第2層：黒灰色粘質土である。時期は、弥生時代中期後葉である。

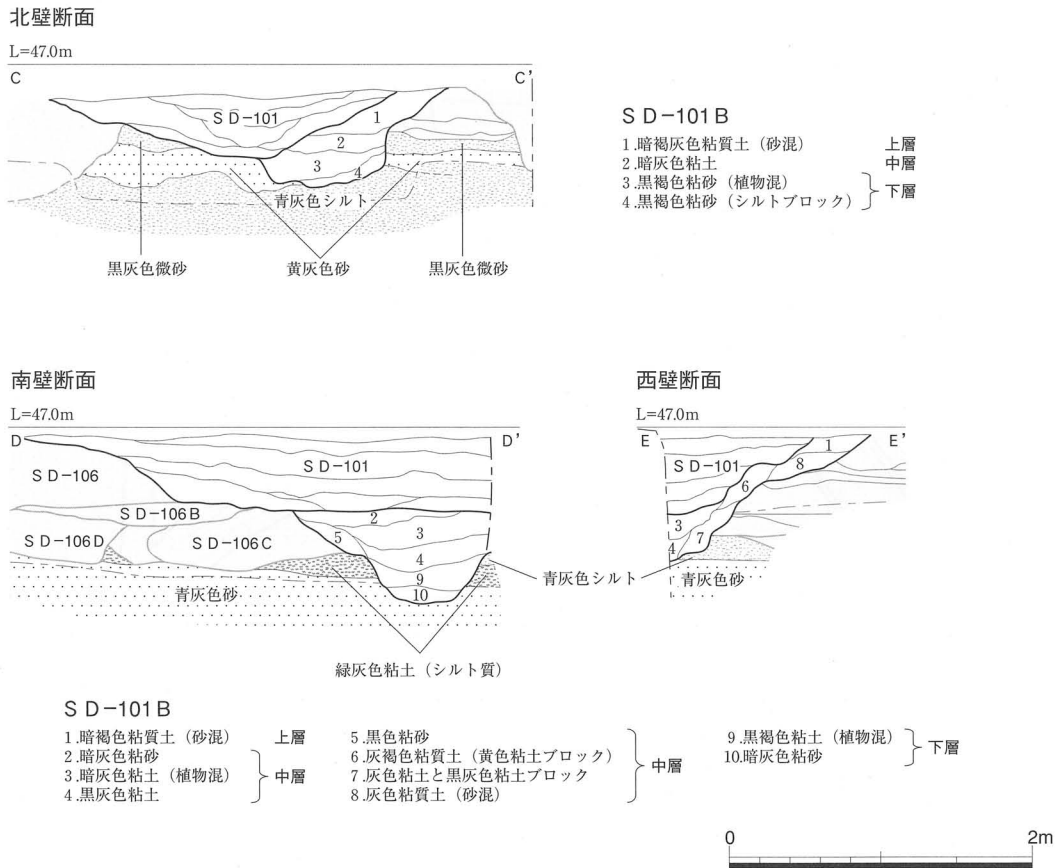
SK-102 (第341図、写真図版211)

本坑は、調査区北西隅で検出した。平面については、径1.2mほどの円形として検出した。断面は皿状で、深さは0.09mを測る。ただし、調査区西壁及び北壁の断面では、赤褐色に変色した焼土面をもつ土坑状の落ち込みがその下層にあることがうかがえる。この土坑状の落ち込みは、検出面が第Ⅵ層：黄褐色粘質土（ハード）ではなく第Ⅶ層：灰色粘質土にある。このことから、第Ⅵ層：黄褐色粘質土（ハード）において検出されるSK-102とは、下層遺構の上面に堆積した落ち込みにすぎない可能性もある。堆積土は暗褐色粘質土で、部分的に黒灰色粘質土のピット状の落ち込みがある。時期は、弥生時代中期後葉である。

溝

SD-101B (第341・342図、写真図版206・207)

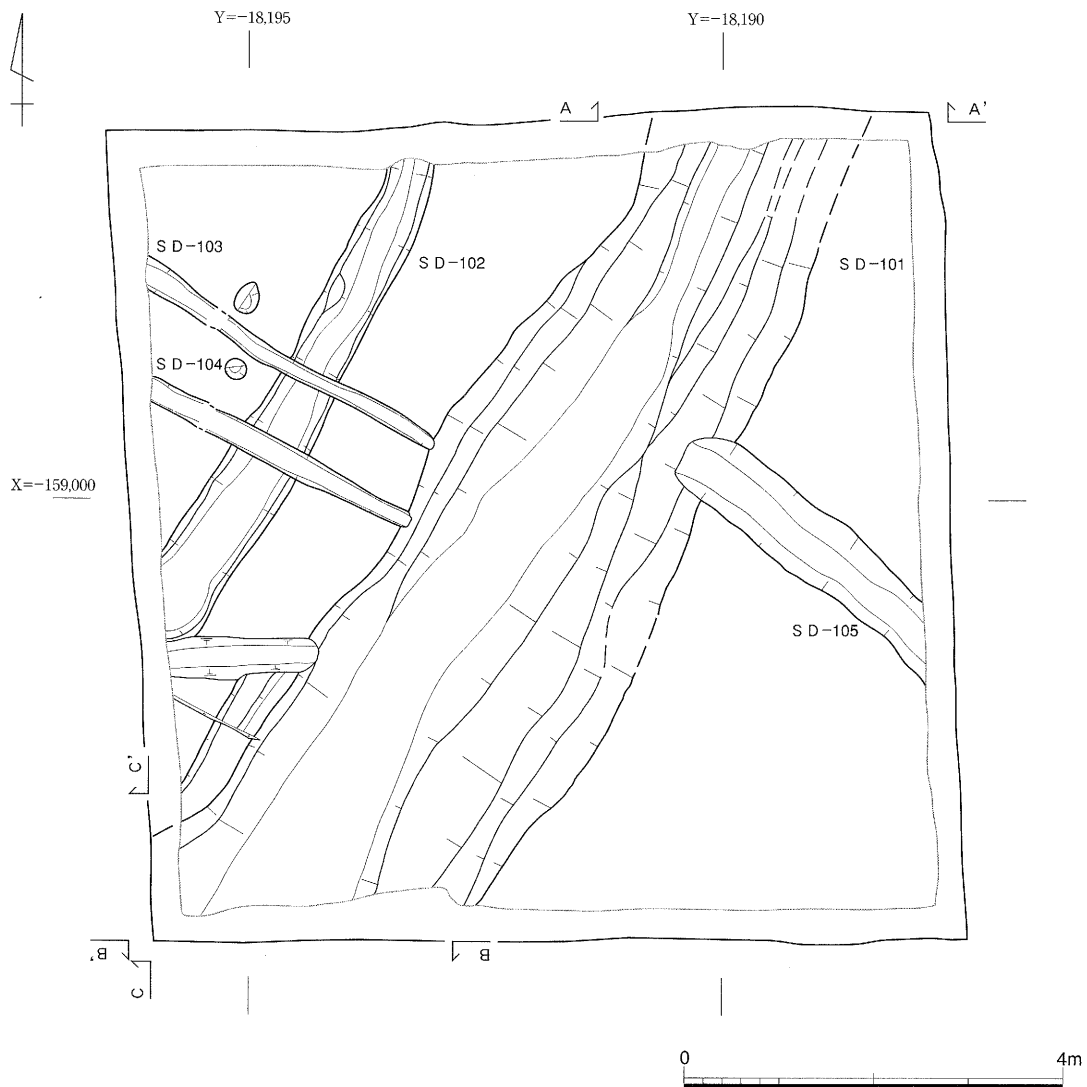
本溝は、SD-106の溝群が埋没していく過程において、位置を西側に平行移動して掘削され、北東-南西に走行する。この両溝は極めて近接し、調査区中央から南半はSD-101BがSD-106の西肩を切り込んでいる。SD-101Bの上面は、弥生時代後期初頭に再掘削されたSD-101の削平を受けるがやや軸がずれるため、北壁側では東肩、南壁側では西肩が残存する。本溝の幅はSD-101の再掘削を受けるため正確な数値は不明であるが、SD-101底面からの明確な屈曲を肩とすれば約1.7mである。断面は二段の逆台形を呈する。その深さは、北側と南側では著しく異なる。北壁側の底面標高は46.20mで深さ0.62m、南壁側の底面標高は45.84mで深さ1.12mを測る。このことより底面は、約0.4mの比高差をもって北から南に向かって傾斜していることになる。



第342図 弥生時代中期後葉の遺構 (2) (S = 1/50)

堆積土は、深い南壁側でより多くの分層が可能であるが、全体では大きく上・中・下の3層に分かれる。上層は暗褐色系粘質土、中層は暗灰色系粘土、下層は黒色系粘土である。上層については、S D-101の再掘削を受け、ほとんど残っていない。S D-101B中層が、S D-101の底面ベースとなる。このため、S D-101B中層とS D-101最下層との境は、極めて微妙なものであった。北東部の下層において、直立する完形の無文広口壺 (P 3011) が出土した。壺周辺の精査をおこなったが、S D-101B底面や堆積土への掘り込みは、確認できなかった。本溝から出土する土器は、先述の無文広口壺も含め大和第IV様式である。

注目すべき遺物として、中層の暗灰色粘砂から翡翠製の大型勾玉2点 (A 5018・5019) を収めた鳴石容器 (A 5016) が出土した。残念ながら、原位置での出土状況は確認できていない。問題となるのはこの点で、鳴石容器が出土した暗灰色粘砂は、S D-101Bの中層であるが、S D-101の底面ベースという微妙な層位でもある。調査時の遺物の取り上げに際しては、暗灰色粘砂はS D-101の最下層としていた。これが後の壁断面での観察では、暗灰色粘砂はS D-101Bの堆積と解釈し直している。また、暗灰色粘砂からの出土土器は、大和第IV様式の単純であった。このこと及び、鳴石容器内から出土した蓋と考えられる土器片 (A 5017) から、鳴石容器の埋納時期を大和第IV様式と判断している。ただし、S D-101の再掘削時にその溝底に坑を掘り、鳴石容器を埋設した可能性がないわけではない。



第343図 弥生時代後期の遺構 (1) (S=1/80)

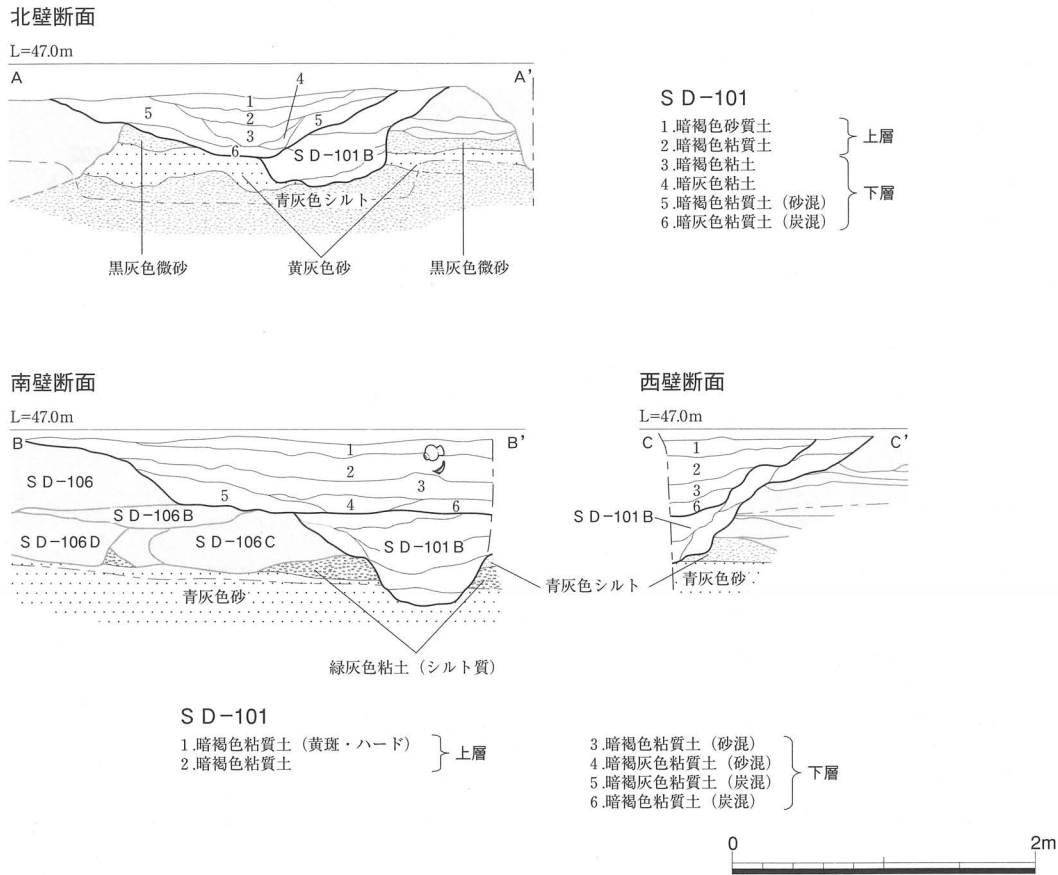
(3) 弥生時代後期の遺構 (第343図、写真図版208)

本調査区において検出した弥生時代後期の遺構は、溝3条 (SD-101・102・105)、小溝2条 (SD-103・104) である。このうち、SD-101は、弥生時代中期後葉SD-101Bの再掘削溝である。このSD-101を中心として、SD-102はその西側に並行し、SD-105はその東肩に垂直に取り付く。SD-103・104は並行する小溝で、SD-102の堆積土を切り、SD-101の西肩に取り付く。

溝

SD-101 (第343・344図、写真図版208~210)

本溝は、埋没したSD-101Bの上面から掘り込まれた再掘削溝である。その東肩には、SD-105が垂直に取り付く。また、西肩には小溝のSD-103・104が切り込んでいる。本溝の幅は北東部が約2.0m、南西部は約3.0mであり、南へ向かって広がる。断面は逆台形を呈し、底面標高は南北両壁とも46.40mを前後とする。堆積土は暗褐色系の粘質土であるが、溝肩や底面付近では多くの砂が含まれる。上層には多量の大和第VI-4様式の土器が廃棄されてい



第344図 弥生時代後期の遺構(2) (S = 1/50)

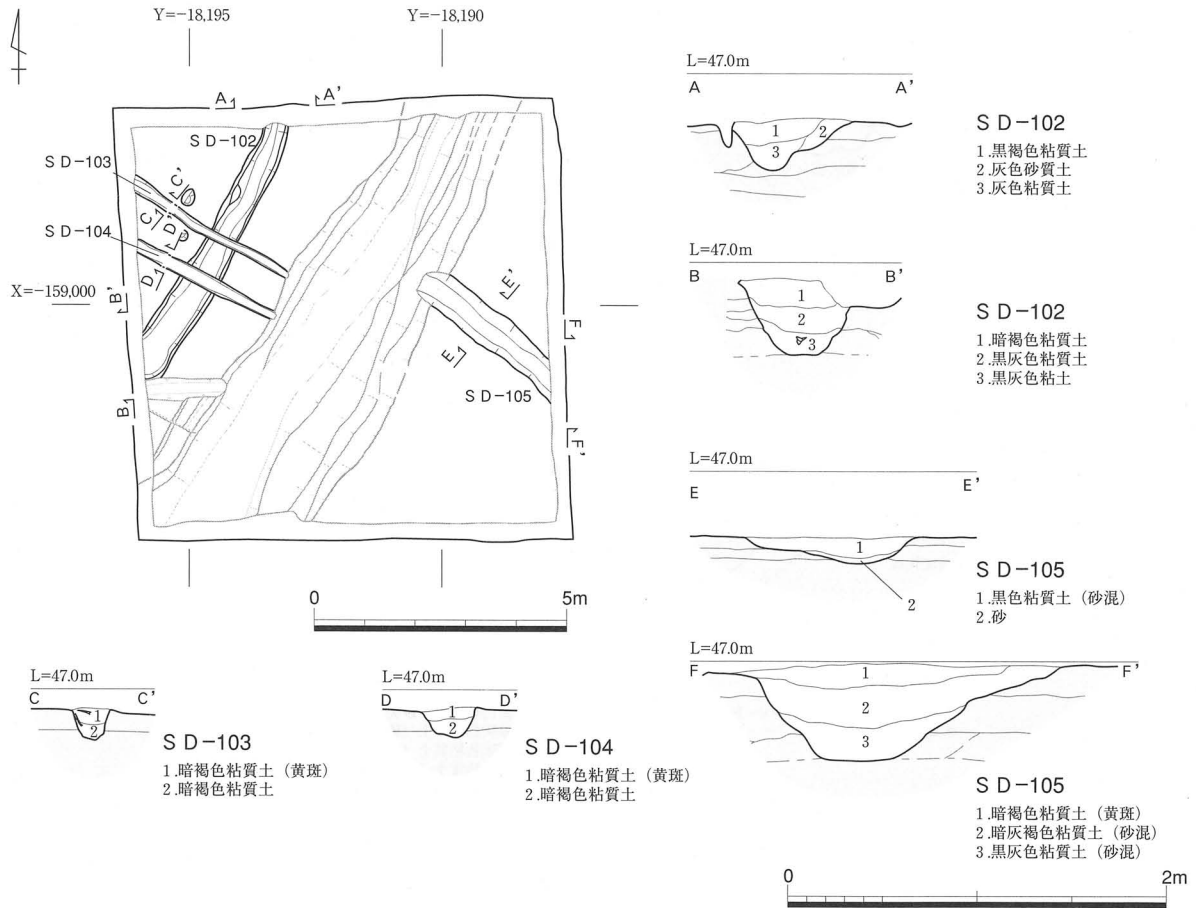
た。なかには、完形の長頸壺や甕も含まれている。下層からは、大和第V様式の土器とともに、翡翠製勾玉(A5021)1点とガラス製大玉2片(A5001-1・2)が出土した。S D-101は、S D-101Bが弥生時代中期後葉に埋没した後、弥生時代後期初頭に再掘削されたと考えられる。埋没は、庄内期を含まず弥生時代後期後葉である。

S D-102 (第343・345図、写真図版211)

本溝は、S D-101から西側に約1.2mの間隔をおいて並行する溝である。上面を、S D-103・104が切る。本溝の幅は北側が0.50m、南側は0.76mであり、南へ向かって広がる。断面は逆台形を呈する。深さは北壁側で0.27m、南壁側が0.40mを測るが、これは北壁側が中世素掘小溝によって削平を受けたためであり、底面標高は両側とも46.50mを前後とする。堆積土は3層からなるが、北側と南側では下層堆積が異なる。第1層：暗褐色粘質土(黄斑)、第2層：黒褐色粘質土は共通するが、第3層は北壁が灰色粘質土、西壁が黒灰色粘土である。上層からは、大和第V様式の土器が多数出土した。本溝は、S D-101Bが機能している段階あるいはS D-101が再掘削された段階に並行して掘削されたと考えられる。

S D-103 (第343・345図、写真図版212)

本溝は、S D-102の埋土を切って、S D-101の西肩に垂直に取り付く小溝である。本溝の幅は約0.2mで、深さは約0.3mである。S D-102の埋土を切ることから、弥生時代後期初頭以降に掘削され、S D-101に排水していたと考えられる。



第345図 弥生時代後期の遺構 (3) (平面図：S = 1/150、断面図：S = 1/40)

SD-104 (第343・345図、写真図版212)

本溝は、SD-103と同様にSD-102の堆積土を切って、SD-101の西肩に垂直に取り付け小溝である。SD-103とは、約0.7mの間隔をもって並行する。本溝の幅は約0.2mで、深さは0.25mである。SD-102の堆積土を切ることから、弥生時代後期初頭以降に掘削され、SD-101に排水していたと考えられる。

SD-105 (第343・345図、写真図版212)

本溝は、SD-101の東肩に垂直に取り付き、北西-南東に走行する。上面では検出できず、SD-106を掘り下げている途中で周囲の土層とは異なった砂質土を認識し、その段階での検出となった。このため、西半分は溝肩の大半を削ってしまっている。上面を削平した状況での幅は約0.7mである。断面は逆台形を呈し、東壁側の土層断面で確認した遺構検出面からの深さは約0.5mを測る。底面標高は46.48mである。堆積土は、東壁側断面では3層からなり、第1層：暗褐色粘質土 (黄斑)、第2層：暗灰褐色粘質土 (砂混)、第3層：黒灰色粘質土 (砂混) である。底面には薄く灰色粘砂を挟む。大和第V様式の土器とともに、ガラス製大玉1片 (A5001-3) が出土した。SD-101で出土したものと同一個体である。SD-105は、取り付けいたSD-101とは異なり、弥生時代後期初頭段階に埋没した後は、機能していなかったものと考えられる。

5. まとめ

今回の調査によって、第79・80次調査区が北地区ではなく、西地区に含まれる可能性が高くなった。これは、第80次調査での地形確認及び、区画溝SD-101・106を検出したことによる。SD-101・106は、その西側に予想される微高地の東縁辺に沿って北東-南西に走行する溝群で、弥生時代中期中葉に掘削が始まり、幾度も再掘削や付け替えを経て弥生時代後期後葉まで継続する。これらの溝は、集落内の排水施設の機能をもっていたと考えられるが、同時に区画溝としての役目も担っていたと考えられる。また、特筆すべき遺物として、SD-101Bから出土した翡翠製大型勾玉2個を収めた鳴石容器や、SD-101・105から出土したガラス製大玉片がある。

地形

今回の第80次調査区は、調査前には北地区（微高地）南端の落ち込みが検出できるものと予想していた。しかし、予想に反して弥生時代中期後葉～後期遺構検出面の標高47.00mは、北地区の微高地と考えていた第79次調査区と同遺構検出面の標高46.50mよりも0.50m高く、さらに高い場所であることが判明した。第80次調査区においては、北東-南西に走行する溝群（SD-101・106）を境として、地形は東側へと落ち込むようであり、これが唐古池西堤でおこなった第37次調査の南端で検出した落ち込みに繋がるものと考えられる。とすれば、この溝群は、その西側に想定される微高地の東縁辺に沿って掘削され、東側にある落ち込みとを区画していたことになる。微高地は、第80次調査における溝群の方向により、南西から北東方向への拡がりをもつことが予想される。第79次調査区は、この微高地の北縁辺部に位置することになるが、ここで検出したSD-103あるいはSD-112・113といった溝の底面標高が南に高く北に低いことも、そのことを示すものといえよう。第79・80次調査区は、第80次調査区で予想していた落ち込みが検出されなかったことによって、西地区からの微高地とは境がなくなり、逆に北地区の微高地からは分離させて考えることが必要となった。

遺構

弥生時代前期～中期前葉 本調査区において、弥生時代前期～中期前葉の遺構は未調査である。しかし、溝断面及び排水溝で、木器貯蔵穴と考えられる大型土坑の落ち込みを確認した。

弥生時代中期中葉 この段階において、微高地東縁辺を切って北東-南西に走行するSD-106が掘削される。小溝が幾度も掘削されることによって、上面は幅広い大溝となる。微高地からの排水と区画溝の役割をもっていたことが推定される。その掘削時期は、出土土器から大和第Ⅲ-1様式と考えられる。これは、唐古・鍵弥生集落の西側において最も居住域側をめぐる大環濠の掘削時期と一致する。また、第79次調査区のSD-103も同様な機能をもった小溝群で、大環濠に繋がっていたと想定されるが、その掘削時期も大和第Ⅲ-1様式である。大環濠が掘削された弥生時代中期中葉（大和第Ⅲ-1様式）の段階で、集落内部の機能に基づいて溝による地割りがなされていた可能性がある。

弥生時代中期後葉 この段階には、先の溝群SD-106の西側にSD-101Bが掘削される。本溝は、SD-106と同様の機能が考えられるが、それら再掘削の小溝群とは異なり、位置をずらし規模も若干大きい。溝底レベルにより、北から南に向かって走行していたと考えられる。このSD-101Bの中層（再掘削溝SD-101に切られて上層はない。ゆえにSD-101底面直下）からは、翡翠製大型勾玉2個を収めた鳴石容器が出土した。土器片による蓋を伴っていたことから埋納と考えられるが、その掘り込み面によっては、弥生時代後期にまで降る可能性がある。また、SD-101Bの下層からは直立した完形の無文広口壺が出土している。

弥生時代後期初頭 SD-101BがSD-101として再掘削されるとともに、その東肩には垂直に派生するSD-105が新たに掘削される。また、SD-101の西側に並行してSD-102も掘削されている。SD-102については、第93次調査区のSD-2101とSD-2103を一連の溝とするならば、弥生時代中期後葉に遡ることも想定される。なお、SD-101・105からは、弥生時代後期初頭の土器とともにガラス製大玉片が出土した。その他、SD-101からは翡翠製勾玉1点も出土している。

弥生時代後期後葉 SD-101は、弥生時代後期後葉の完形品を含む土器片の大量投棄によって埋没している。時期は大和第VI-4様式である。これは、唐古・鍵遺跡の周囲をめぐる環濠の埋没状況及び時期と類似している。弥生時代中期中葉に大環濠とともに掘削された集落内部の溝が、ほぼ同じ位置で弥生時代後期後葉まで再掘削され続け、環濠と同様に埋没していく背景として、溝によって区割りされた集落に対する意識の変化が読み取れよう。